玉句手控

2012 RENKU NENKAN

連句協会

連句年鑑

平成二十四年版

連句年鑑（平成二十四年版）目次

「第三十一回連句協会総会・全国大会の記」……7

「第二十六回国民文化祭京都２０１１連句の祭典を終えて」……8

評論エッセイ

相手業にて候―洒堂の才を惜しむ……谷地快一……12

一茶・鶴老のはみだし連句……高橋順子……22

芭蕉をめぐる謎―故碩学のお手紙など―……別所真紀子……31

回顧

平成二十三年の連句界……和田忠勝……41

〈表紙題字・今泉宇涯〉

〈カット・秋葉初枝〉

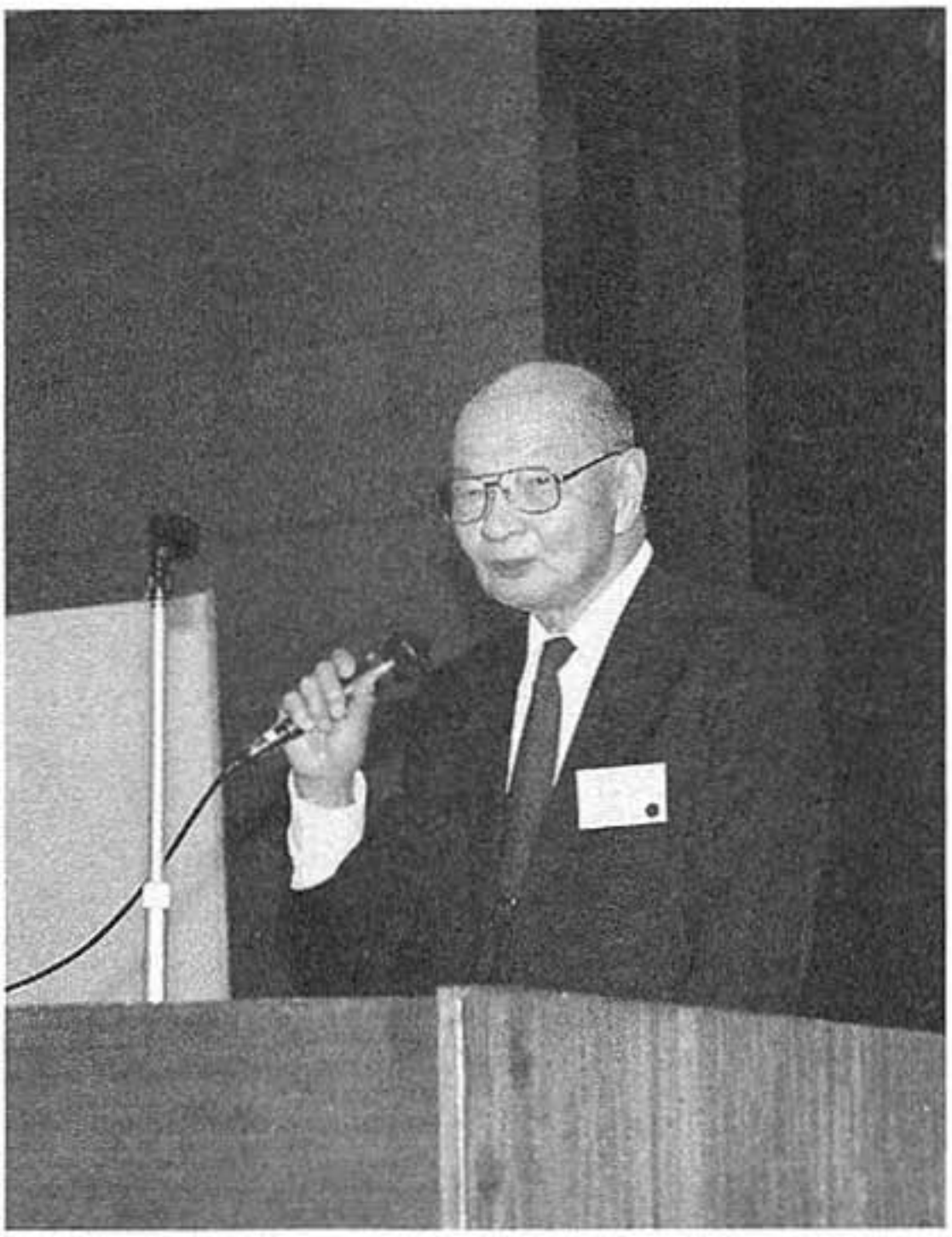
作品

赤のままの会
「菊の香や」……47
あした連句会
「モアイ像」……48
「桐雨忌や」……49
「秋刀魚船」……50
「冬枯れや」……51
「歌留多箱」……52
あした芭蕉記念館連句会
「尾越の鴨」……53
あした梶の葉連句会
「寒土用」……54
あした日比谷連句会
「冬紅葉」……55
天の川連句会
「校正紙」……56
「音無しの」……57
飯田連句会
「薄氷」……58
伊賀連句会
「城守り」……59
「築四百年上野城」……60
石手寺連句会
「天井絵」……61
伊豆芭蕉堂連句会
「師のこゑ」……62
「急転直下」……63
伊勢原連句会
「春の虹」……64
市川俳諧教室
「刻り舟」……65
「初霜の」……66
いなみ連句の会
「切れ字談義」……67
「枯尾花」……68
いわき文音連句会
「小さき掌」……69
WEBめぎつね座
「ことしの三句たち」……70
NHK文化センター青山
「壺に花野」……72
桜花学園大学連句研究会
「とりどりに」……73
丘の上連句会
「萬来舎」……74
岡山県連句協会昴連句会
「ふうてんの寅」……75
桶川連句会
「風の甘さ」……76
おたくさの会
「風の座」……78
「虹の橋」……79
海市の会
「遊戯論」……80
解纜
「撫子や」……81
蛙の会
「安芸さん・梨野さん」……82
河童連句会
「鳥獣戯画」……83
桂の会
「笑ひ栗」……85
「秋風に」……86
「即身仏」……87
かびれ
「草笛や」……88
「木轆轤」……89
「恪勤の道」……90
「過密都市」……91
其角座
「春うらら」……92
きさらぎ連句会
「ちぬの海」……93
くさくき
「寒紅梅」……94
「会津路の」……95
「鳰の湖の」……96
「暖かく」……97
「爽やかに」……98
「安達太良の」……99
「乾坤に」……100
「狛犬の」……101
くさくき川口 yomiuri
「男われ」……102
くさくき川口支部
「みどりの日」……103
くさくき北九州支部
「年逝かす」……104
「枯尾花」……105
「大根蒔く」……106
「凩の」……107
くさくき堺
「実むらさき」……108
興聖寺連句会
「命の詩」……109
神戸の風
「真白き味」……110
「奔る激震」……111
ころも連句会
「宝探し」……112
「玉ねぎ」……113
「夏に入る」……114
柴庵
「子規の掌の」……115
「鎮魂の」……116
栄連句サロン
「飛騨の工」……118
さくら草連句会
「秋の匂ひ」……119
「余震の街」……120

佐久良連句会
「十薬の花」……121
サザン
「セシューム検査」……122
「湘南の海」……123
慈眼舎
「流星恒月」……124
獅子門
「獅子門翁忌追善俳諧」……125
「素秋かな」……126
獅子門友楽社
「今朝の霜」……127
獅子門藜杖社
「百歳の」……128
「春立つや」……129
獅子門麗水社
「文台継承披露俳諧」……130
下町連句
「初懐紙」……131
「春節祭」……132
樹氷連句会
「江の島」……133
湘南吟社
「弓始め」……134
「笙の笛」……137
「金秋や」……138
泗楽連句会
「守武忌」……139
裾野連句会
「宗祇御文」……140
「雪解富士」……141
成城連句会
「利茶番」……142
「鯖雲の果て」……143
せんだい座
「萩の塵」……144
草門会
「ターナーの」……145
「おちさうな」……146
啐啄会
「山笑う」……147
「苦瓜を」……148
大智院連句会
「神の山」……149
武生連句の会
「ひとひらの」……150
遅刻坂連句会
「啓蟄や」……151
「残り雪」……152
「エチュードは」……153
「天下の鹸」……154
中央連句会
「七福神詣」……155
「葱坊主」……156
「やげん堀」……157
千代の会
「立秋や」……158
「鯉涼し」……159
「窓ぬくし」……160
筑波・東京連句会
「風の門」……161
「防災の日」……162
筑波・津幡連句会
「秋麗の」……163
つばさ連句会
「水打つや」……164
天神連句会
「春雨や」……165
桃雅会
「荒御魂」……166
「踏石の」……167
「この星の」……168
刀水の宴連句会
「新蕎麦や」……169
「霜降や」……170
稲門連句会俳諧西北の風
「キャンパスに」……171
「大八洲」……172
「千羽飛んで」……173
徳島連句協会
「耳目」……174
徳島連句懇話会
「石臼」……175
都心連句会
「着衣始」……176
「夏袴」……178
「明易し」……179
栃木県連句協会
「冬耕」……180
南草連句会
「蓮見」……181
拈華連句会
「鶏鳴」……182
「西にデモ」……183
巴世里連句会
「髪髪松」……184
花音連句会
「キスミー」……185
羽曳野連句会
「日に綺羅々」……186
浜風
「まほろしの召集令状」……187
「思ひ草」……188
美々っと連句会
「虫時雨」……189
「水の星」……190
B面
「蕊といふ狂言」……191
ひよどり連句会
「とんぼ撮る」……192
「すだく虫」……193
「水甘し」……194

「幕　　目」……195
「髭文字の帆」……196
「物　書　の」……197
ひょんの会
「初　山　河」……198
風狂連句会
「寒　晴　や」……200
「鈍　行　や」……201
北杜連句塾
「純なる音色」……202
「忘　れ　雪」……203
ほほほ連
「夕　立　ち」……204
「陸　前　の」……205
ほれぼれ座
「落　人　の」……206
勾玉連句会
「どくだみの」……207
「窓」連句会
「夕　顔　に」……208
水無月連句会
「幼　子　に」……209
美晴連句会
「冬　桴」……210
宮城県連句協会
「初　御　空」……211
メロウ連句塾
「宍　道　湖」……212
悠の会
「薔薇盛り」……213
瑤沙連句会
「料　　峭」……214
ヨーク連句会
「ぼたん雪」……215
横浜ベイサイド連句会
「生きてる証拠」……216
「初　　蛍」……217
ラピロス連句会
「小賀玉の実」……218
竜神連句会
「北　の　春」……219
連句ななの会
「紫陽花や」……220
連句会ひらめき
「隠　沼　は」……221
連句会未恋座
「神　無　月」……222
連句会「遊」
「鵙なくや」……223
連句会遊子座
「梅雨の雷」……224
「雁　渡　る」……225
「フクシマ」……226
「夜　深　む」……227
連句研究会
「君　子　蘭」……228
若笹連句会
「冬　構」……231
全国連句グループ概況……3
連句協会会員名簿……24
〈編集後記〉……大久保風子／今村　苗／白根順子

第三十一回連句協会総会・全国大会の記



平成二十四年三月十八日標記総会・全国大会は百十五名が参加して開催された。臼杵游児会長挨拶では前年度総会が東日本大地震のため中止となり、総会に於ける眼前での初めての挨拶であること、そして連句協会の経済事情、会員増と連句人口拡大をモットーに連句の絆で連句協会四十周年への一歩となるよう努力したい旨が述べられた。

議事に入り、二十三年度の事業、決算報告及び二十四年度の事業計画、予算が提案され承認された。ここで和田理事長から本年度は何でもやって見よう精神でとの指針あり。国文祭及び地方の連句活動について伊藤副会長の下、それぞれの担当者から説明紹介があった。徳島国文祭は文化庁と連句協会との連携で開催予定。甲州連句会や秋田県など連句の仲間を増すべく協会からの働きかけが続いており、その成果について報告された。えひめ俵口連句大会、浪速の芭蕉祭、さきたま連句会、次年度総会・全国大会等の案内がなされた。最後に協会三十周年記念事業『現代連句集Ⅲ』は五月に『連句年鑑』は九月に発行の運びとなりの購買・購入を促された。

総会終了後、立川志の輔氏の落語「雑俳」を楽しみ、昼食、実作へと経過。二十二席形式は自由、午後三時半第一部は和やかに閉会。第二部の懇親会は土屋顧問の乾杯で始まり会員相互の会話も弾み、震災一年目とて日本青年館で出会えたことを喜びあった。

二十五年度の総会・全国大会が大阪で開催される予定で、これは連句協会史上初めての試みである。（竹下昭子）

第二十六回　国民文化祭京都２０１１
連句の祭典を終えて

第二十六回　国民文化祭・２０１１「連句の祭典」では十月二十九日、三十日の両日に亙って四つのイベントを開催した。

二十九日に①吟行、②市民連句体験会、③交流会、そして三十日の④実作会である。今回の特徴は②の市民連句体験会で、これは連句人だけの閉ざされた連句大会でなく、一般市民も参加できるような開かれた連句大会にして欲しいという京都市の要請に応えて企画したものである。

十月二十九日

①吟行

参加者は十二時二十分、京都駅集合。嵯峨野コース七十人、宇治コース八十人に分かれて出発。嵯峨野コースは市民交流会のある北野天満宮に立ち寄った後、嵯峨野へ。清涼寺、落柿舎、去来墓、等。宇治コースは宇治へ直行、源氏物語ミュージアム、平等院をメインに散策、古人が愛した嵯峨野や宇治の晩秋の景を満喫した。

②市民連句大会　於　北野天満宮　12時30分～16時

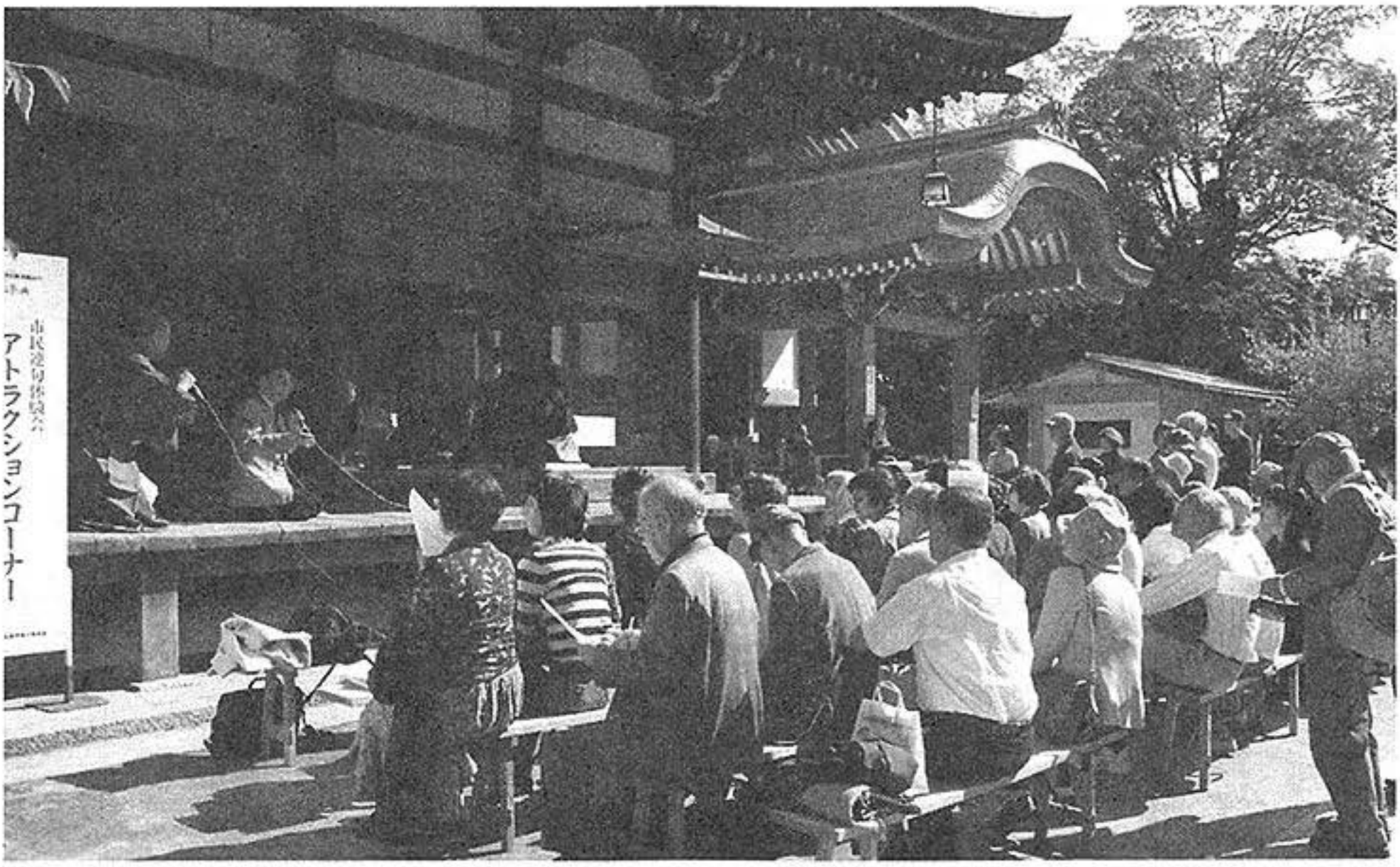
神楽殿では正式俳諧と白拍子舞のコラボレーション、絵馬堂では写真と連句のコラボレーション、お茶室「明月舎」では裏千家「桃夭会」賛助の薄茶席、境内では大テント二張りの中で、前句付、笠置連句、実作座の三つのコーナーが設けられ、延べ二千人の人出で、イベント終了まで人声が絶えなかった。

正式俳諧　和田忠勝宗匠以下、連句協会手練れのメンバーによる。

古式床しい正式俳諧は関西ではまだ珍しく、観客の心を捕らえ、又、目にも鮮やかな白の直垂、緋の袴、立烏帽子に太刀を帯びた白拍子舞は平家物語の世界を彷彿とさせ観客を魅了した。

写真、連句のコラボレーション　三ツ物のうちの一句を写真にした新三ツ物を三十七組展示。興味を持った人が多く、担当は説明に追われた。写真の世界にも連句の裾野を拡げられないかとの新しい試みである。

前句付　連句への取っ掛かりとして前句付が一番と考えて



10月29日　北野天満宮における正式俳諧の見学

いる。

「白壁映える晩秋の城」「年下の彼青い背広で」などの前句に、付句を募集した。付句の一部を短冊にして張り出したが、興味を持つ人多く四句の前句に二百八十の付句を得た。

笠着連句　「何をしてるんだろう」と様子見の市民にスタッフの説明で句を出した市民も沢山いて閑古鳥を危惧していた杞憂は吹っ飛び見事に歌仙「秀麗の巻」を満尾。

実作座　四席設けて初心者対象に十二調を指導。連句協会の臼杵游児会長以下六名のベテランが指導に当たり八作品を満尾。一般の人の他に大学生十六名の参加もあり、「面白かった。私たちでも十分馴染める文芸だ」と好評だった。

③交流会　ウエスティン都ホテル　18時～20時30分

ひょっとしたら国民文化祭交流会では初めてのコース料理と古都京都ならではの、連歌に題材を取った狂言の一つ「八句連歌」、そしてこれも初めての外国人パフォーマーによる、歌仙イメージの音楽と踊りであっという間に時間が過ぎた交流会。美味しかったけど、もっと仲間同士のお喋

り時間が欲しかったなどの声も聞かれたというのは難しい。

十月三十日　10時～16時　百萬遍知恩寺

実作会　恒例となっている主催者、来賓挨拶、募吟入賞者表彰の行事の後、今回は、募吟選者の選評に時間を割いた。

主催者の大元である文化庁からは、長官の近藤誠一氏が来場され、挨拶と長官賞の授与を行った。

作品を選ぶのは難しい。特に、一つの主題を追いかけるのではなく、複数人の合作で、一句一句が変化してゆく連句という文芸については、例えば、二十人の選者がそれぞれ違う作品を選ぶということだって珍しくない。今回も五百二十二巻もの応募作品から十四巻を選ぶのだから大変だったと思う。それだけに選ばれた作品はどういう点が選者の心を捕らえたのかを皆が知りたい。出来るだけその機会を与えたいというのがその理由だ。選者の方には大変だったろうが、とても好評だった。

もう一つは、百萬遍知恩寺名物の大念珠繰りである。これだけ大きい念珠繰りはここでしか経験出来ないだろう。何事も初めてとなると、みんな嬉しそうに神妙な顔で、或いは笑顔で大念珠を手から手へ回していた。

又、会場内に京都府連句協会の有志の俳画ならぬ連句画の展示もあり、参会者の興味を引いていた。

十一時から弁当を食べながらの実作。形式は問わず、半歌仙以上であれば捌きに任すと言う形でスタート。国際連句二座、初心者連句三座も交え七十三座が百萬遍知恩寺の四箇所の大広間での興行となった。

十五時半、実作終了。地元の奥村富久女捌きの半歌仙、北原春屏捌き初心者座の半歌仙の披露の後、連句協会旗を次年度開催県の徳島へ引き継いで解散、折から降り出した雨の中を帰路についた。

今回、国民文化祭の開催県として、行事のあれこれをやって感じたことをひと述べてみたい。

国民文化祭（連句部門）の意義

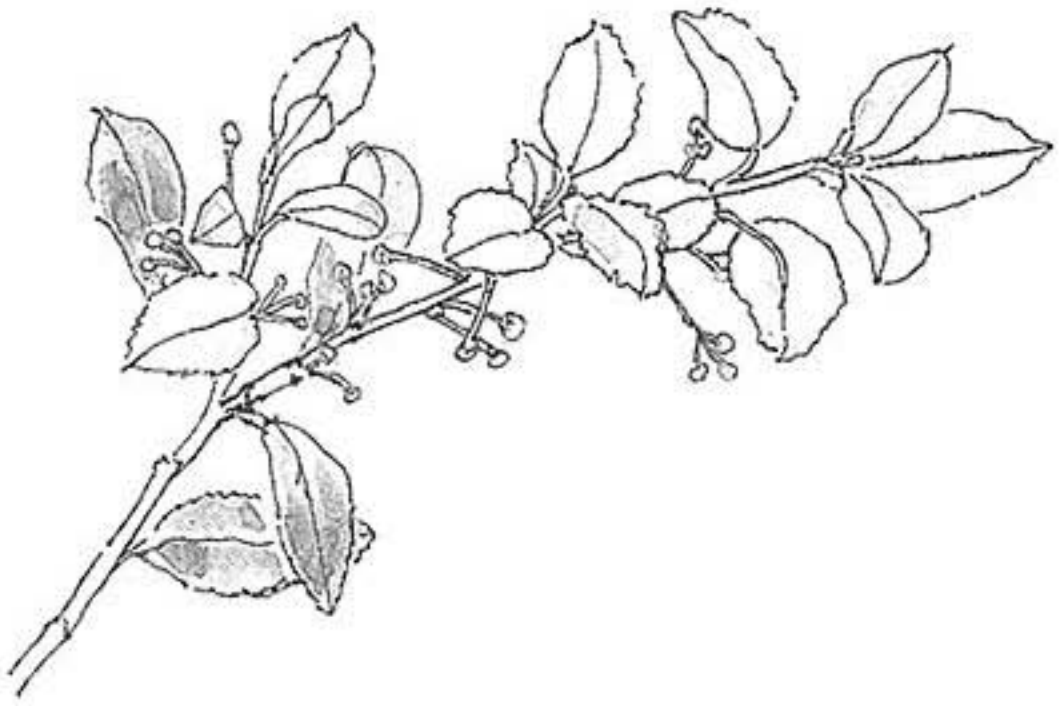
今までは連句人による連句人のための連句会の色彩が強かった。旅行者気分、今まで行ったことのない土地へ行け

る。地理不案内でも開催地の人達が宿の手配も、吟行という名の観光もやってくれる。交流会ではその土地の演芸なども見られる。

でもこれだけで良いのだろうか。連句のような未だマイナーな文芸ではこの機会にもっと連句人を増やすことに注目する必要があるのではないか。例えば今回、国民文化祭の募吟応募数全体で五百二十二巻の内、京都府内の応募数は僅かに十巻。近畿二府四県合わせても僅かに六十五巻である。千年の都を誇る京都市を抱える京都府の連句人としては恥ずかしい限りである。京都府連句協会も大いに頑張りたい。今年の四月から京都市と共催で実施した「はじめての連句講座」（月二回三カ月終了）には七十名の参加、そしてその卒業生のうち三十四名が新人の会を作り連句を楽しんでいる。

最後に国民文化祭の京都本番を迎える前に、昨年春のプレプレ大会（本来なら一昨年秋の開催予定が世界規模の流感で延期になったもの）を北野天満宮で、プレ大会を昨年秋に百萬遍知恩寺で開催し大会の予行演習をやったことを付記します。

（京都府連句協会　品部三酔）



相手業にて候―洒堂の才を惜しむ

谷地快一

元禄五年（一六九二）五月七日、四十九歳の芭蕉は江戸日本橋橘町の借宅にあって、京都の門人向井去来に宛てて全長四メートルに及ぶ長文の書簡を送っている。江東深川に建築工事が進む第三次芭蕉庵の竣工を待っていた時期にあたる。去来は前年に野沢凡兆とともに「猿蓑は新風の始め」（『去来抄』先師評）という、いわゆる「軽み」を自認する俳諧撰集『猿蓑』を編集して、文字通り芭蕉がもっとも信頼する門人の一人になっていた。

書簡の用件は、橘町に仮寓する芭蕉自身の近況を報じつつ、江戸俳壇に激化する点取俳諧、すなわち点者がくだす点数の多寡によって作品の優劣を決める、遊戯的な俳諧の流行を嘆き、一方で自分の門下の俳諧や近況に心を配り、とりわけ京都の仙洞御所に勤める中村史邦という門人が辞職に追い込まれた事態を憂慮し、その原因は史邦が俳諧に熱中し、芭蕉に傾倒したことにあるのではないかと心を痛めるものである。

本稿はその中から〈連句は相手次第の文芸である〉という一節を味読しつつ、芭蕉晩年に彗星の如くあらわれて、芭蕉に高い評価を得ながら、文字通り彗星のごとく消え去らねばならなかった浜田珍碩（珍夕）、すなわち改号して洒堂の足跡を偲ぶ。

＊

書簡の中から俳諧、つまり連句に直接言及する箇条書き部分を引く。

一、団水ことも、貴宅へ参り候よし、そのままになさるべく候。定めて是非の凡俗たるべく候。

この一条は〈団水が君の所に訪ねてきたとのことだが、彼は救いがたい俗物にちがいないので、相手にしてはいけない〉と言っている。団水は北条氏。彼は井原西鶴門下、つまり軽妙と滑稽をもって延宝・天和期（一六七三～一

六八四）に流行した談林俳諧のスタールで、好色本のジャンルで一時代を創造した作家の弟子として頭角をあらわし、このころ京都で著名な俳諧点者の一人であった（『白うるり』）。この団水評は芭蕉が談林俳諧の流行や点取俳諧という競技と訣別していたことを確認できる一文である。

では芭蕉が見限った俳壇とはどのようなものなのか。同書簡に紹介する江戸の様子で考えてみる。

一、この方俳諧の体、屋敷町・裏屋・背戸屋・辻番・寺かたまで、点取はやり候。もつとも点者どものためには、よろこびにて御座有るべく候へども、さてさて浅ましく成り下がり候。なかなか新しみなど「かろみ」の詮議思ひもよらず、随分耳に立つこと、むつかしき手帳をこしらへ、「磔」「獄門」巻々に言ひ散らし、或は古き姿に手重く、句作り一円きかれぬことにて御座候。愚案この節、巻きて、ふところにすべし。予が手筋かくのごとしなど顕し候はば、もつとも荷担の者少々一統致すべく、然らば却つて門人どもの害にもなり、沙汰もいかがに料簡致し候へば、余所に眼を眠り居り申し候。（下略）

芭蕉は言う、〈今の江戸は武家屋敷、裏長屋、通りの奥の家、辻番所や寺にいたるまで点取俳諧一色という浅ましさで、点者を儲けさせるだけの流行が続いている。その内容は「磔（はりつけ）」「獄門」などと、作為的で奇矯な言葉で人目を引き、古風で類型的なものばかり。だから、私が「軽み」という新しみを説こうものなら、それに賛同する少数の門人にまで迷惑をかけてしまうので、俳壇とは関わりを持たないようにしている〉と。

貞享元年（一六八四）八月半ば、草庵生活に一区切りをつけて、『野ざらし紀行』の行脚に出て以降、芭蕉は八年余りをかけて「重み」を捨てようともがき続けた。この一条はその「重み」の意味を想像できるとともに、点取俳諧の対極にあるものが「軽み」という目標であったことを教えてくれる。

「軽み」に関わって、次のように興味深い一節もある。

一、加賀句空上京、すなはち御会ひなされ候よしにて、半歌仙遣はされ候。別に悪しき所も見え申さず候。相手業にて候へば、この位もつともたるべ

く候。「雉子ほろろ」感心申し候。

かみ砕いて示すと、〈加賀から句空君が上洛して、早速あなたと半歌仙を巻いたのですね。いただいたその両吟を見ましたが、これといって悪い付合は見あたりません。とはいえ連句のできばえは相手の力量次第で異なるので、句空君が相手ではこの程度なのでしょう。あなたの「雉子ほろろ」の句には感心しました〉と言う。この句はのちの『続猿蓑』（元禄11）発句の部に収められる「瀧壺もひしげと雉（きじ）のほろろ哉」のことであろう。おそらく初めは句空との両吟半歌仙の発句だったのだろう。

露骨に「軽み」を説くものではないが、〈（連句は）相手業にて候〉という一節は点取俳諧横行の俳壇を見下す芭蕉の厳しい自己規制をうかがわせると同時に、「軽み」という新しさも、連衆次第で上手くいったりいかなかったりするという、連句をたしなむ私どもにとって、耳の痛い真実を伝えている。

句空は宇野氏。今の石川県金沢の人。卯辰山に柳陰庵を結んで隠栖した俳人で、『おくのほそ道』の旅の途次に芭蕉が金沢に立ち寄って以後は蕉門に転じた。本翰の内容から推しはかれば、句空は芭蕉からさほど高い評価は得ていなかったとみてまちがいない。

句空へのこうした評価にくらべて、浜田珍碩（洒堂）への信頼には絶大なものがある。

一、珍碩のぼり候とて、好春亭へ御同道、一順、これまた一覧を遂げ候。なにさま珍碩め作者にて御座候。随分に何事にても御知らせなさるべく候。面上談話の心にて、芳志・寸志、露命の楽しみ、過ぐるもの御座無く候。

ここで芭蕉は、〈上洛した珍碩君を、好春亭へ誘って巻いた一順の付合も拝見しました。いかにも珍碩の奴は優秀な俳人であります。このようなお話なら、どんなことでもお知らせください。まるで直接お目にかかって会話を交わしている心地で、手紙はあなたにとってわずかの厚意でも、私には老後の楽しみ、これ以上のものはありません〉と言う。

「好春亭」は芭蕉・去来と親しい貞門俳人坂上好春（こうしゅん）の屋敷。そこで巻かれた連句において、珍碩の素質はおそらく好春からもお墨付きを得たのであろう。芭蕉がことのほか

喜んでいるのはそのためであろう。

＊

芭蕉が称賛する珍碩の魅力を一瞥するために、著名な俳諧撰集『ひさご』の「木のもとに」歌仙を引いてみよう。「軽み」の実践として知られるそれを、付所（つけどころ）・付心（つけごころ）という必要最小限の視点で見直してみよう。

去来宛書簡をさかのぼること二年、すなわち元禄三年（一六九〇）の芭蕉は新春を近江の膳所（ぜぜ）で迎えている。だが、正月三日に膳所から郷里の伊賀上野に帰って逗留。三月二日に至り、藤堂藩士小川風麦邸で、八吟四十句の俳諧興行を催した。その際の発句が「木の本に汁も膾（なます）も桜哉」である。

この句があまりにも有名な理由は、芭蕉自身が〈花見の宴にひろげられた汁や膾に、折からの落花が散りかかる風情を描いて、やや「軽み」という新味を出すことができた〉（『三冊子』赤）と語ったからである。

だが、亭主役の風麦はその花見の風情を押し広げることができず、「明日来る人はくやしがる春」という理屈の脇句で応じてしまった。これは落花する発句の風情に共鳴できていない。打ち添えるという脇句の必要条件は満たしているが十分ではない。作者の関心は発句の時空の外にそれてしまっている。芭蕉はこの脇句が不満であった。それでこの連句を未発表とし、膳所に戻った三月下旬、あらためてこれを立句に、同地の珍碩と膳所藩士菅沼曲水（きょくすい）と、以下の三吟歌仙を興行した。その結果がいわゆる「木のもとに」歌仙である。

花見

1　木のもとに汁も鱠（なます）も桜かな　翁
2　西日のどかによき天気なり　珍碩

前句の花見の風情に着目し、それに呼応する空模様を添えた。何でもない俗語をあっさりと用いる点は「明日来る人はくやしがる春」に変わりないが、発句との相性は格段すぐれている。

3　旅人の虱（しらみ）かき行く春暮れて　曲水
4　佩（は）きも習はぬ太刀のひきはだ　翁
5　月待ちて仮の内裏の司召（つかさめし）　碩

差しなれない太刀と、鞘袋（ひきはだ）に着目し、その位に見合う人物を定めた。「司召」は官吏任命式で、秋に

おこなわれた。打越の粗末な旅姿からその儀式ばった「召」への転じもよい。「仮の内裏」は吉野・須磨などに置かれた乱世の御所。

6 籾臼つくる杣(そま)がはやわざ　水
7 鞍置ける三歳駒に秋の来て　翁
8 名はさまざまに降り替はる雨　碩

前句の「三歳駒」「秋の来て」に着目し、その移りゆく時を春雨・五月雨・夕立・時雨など雨の名でとらえた。打越の木樵の暮らしからも解放される景。

9 入り込みに諏訪の湧湯(いでゆ)の夕間暮れ　水
10 中にも背の高き山伏　翁
11 いふ事を唯一方へ落としけり　碩

前句の「山伏」の本性に着目し、その衆徒評定の場における物言いの頑固さを描き、おおどかな出湯の情趣からも離れた。

12 ほそき筋より恋つのりつつ　水
13 もの思ふ身にもの喰へとせつかれて　翁
14 月見る顔の袖おもき露　碩

食事も喉を通らない前句の女の恋情の強さに着目し、もは恋の句の展開がよい証拠。古歌の姿が垣間見える。

15 秋風の船をこはがる波の音　水
16 鴈(かり)ゆくかたや白子(しろこ)若松　翁
17 千部読む花の盛りの一身田(いっしんでん)　碩

前句の地名「白子」「若松」が伊勢路である点に着目し、同地域にあって著名な高田山専修寺(せんじゅじ)（三重県津市一身田町）の法会（千部読経）に転じた。専修寺は浄土真宗高田派本山。

18 巡礼死ぬる道のかげろふ　水
19 何よりも蝶の現(うつつ)ぞあはれなる　翁
20 文書くほどの力さへなき　碩

前句を蝶の舞い姿にさえ感じやすくなっている人と見て、恋にやつれてうつろな女性を出した。「文」は恋の詞。

21 羅(うすもの)に日をいとはるる御かたち　水
22 熊野見たきと泣き給ひけり　翁
23 手束弓(たづかゆみ)紀の関守(せきもり)が頑なに　碩

熊野にゆきたいと泣く前句の人を、出家して熊野参詣を目指した男を慕う女（通説では、平維盛を慕う北の方の面

影）と見て、関所を通させまいとする番人を向き合わせた。打越と前句の世界がしなやかなだけに、融通の利かない番人への転じが際だっている。「手束弓」は「紀の関守」とともに古歌に多い言葉。

24 酒で禿げたる頭なるらん　水
25 双六の目を覗くまで暮れかかり　翁
26 仮の持仏にむかふ念仏　碩

前句の夕暮れ時に着目して、その時分を念仏を唱えることろと受けとめた。「持仏」は守り本尊として持つ仏像。一時しのぎを意味する「仮」によって旅体への転じを果たす。

27 なかなかに土間に坐れば蚤もなし　碩
28 我が名は里のなぶり者なり　水
29 憎まれていらぬ躍（おど）りの肝を煎り　翁

前句の「なぶり者」に着目して、その者がからかわれ、うとまれる理由を〈余計な世話焼き〉とした。「踊り」に同じ。「肝を煎り」は世話を焼く。

30 月夜月夜に明け渡る月　碩
31 花薄あまりまねけば末枯れて　水
32 唯四方（よはう）なる草庵の露　翁

前句の晩秋の花薄（尾花）の末枯れた様子に着目して、それにふさわしい場所を定めた。「四方なる草庵」は方形造りの粗末な家。珍碩の草庵「洒落堂」を想起させる。ちなみに、続く曲水の「33 一貫の銭むつかしと返しけり」という句を含めて、この前後には珍碩、つまり芭蕉好みの脱俗の人の匂いがする。

34 医者のくすりは飲まぬ分別　翁
35 花咲けば芳野あたりを駆け廻り　水
36 虻にさされる春の山中　碩

前句の風狂の人に着目して、虫刺されという出来事で軽妙に結んだ。

右に見るように、この歌仙に芭蕉が嫌悪する奇抜な言葉や趣向はむろんない。連句がものづくりである以上、前句や打越を意識した作為は否定できないが、それは去来宛書簡で嘆いていた「磔（はりつけ）」「獄門」などの傍を驚かすものではなく、付味の多くは市井や物語の面影を大きくそれることのないものになっている。さりげない日常語を用いて、閑寂や超然を含む喜怒哀楽を、行間や表現の裏に閉じ込め

る。そこに「軽み」の一種の味わいがある。

元禄二年（一六八九）に芭蕉がたどった『おくのほそ道』の旅は、都市を中心に流行していた過剰な表現の重みや、和歌伝統に寄りかかった古びを鮮明に再認識させるものとなった。その反省から、飾りけのない自然観照と、平易な言葉による日常生活への回帰が志向され、現実を受け入れつつ美的想化を試みるという自覚が「軽み」という展開を生み出したのであろう。芭蕉はそれに直感的に反応する珍碩の機転を喜んだにちがいない。

＊

浜田珍碩（珍夕）、すなわち洒堂については、その出自も閲歴も明らかな点は少ない。はっきりしていることは、元禄二年（一六八九）冬、義仲寺に滞在する芭蕉に入門し、まだ日の浅い翌年の三月下旬に、洒落堂なる自邸に芭蕉をまねいて、俳文「洒落堂の記」を与えられていることである。よって今の滋賀県大津市にあたる近江国膳所の人の可能性が高い。

洒落堂の記

山は静かにして性を養ひ、水は動いて情を慰す。静動二つの間にして、住処を得る者あり。浜田珍夕といへり。目に佳境を尽くし、口に風雅を唱へて、濁りを澄まし、塵を洗ふがゆゑに、洒落堂といふ。門に戒幡を掛けて、分別の門内に入ることを許さずと書けり。かの宗鑑が客に教ゆる戯れ歌に一等加えてをかし。且つそれ簡にして方丈なるもの二間、休紹二氏の侘びを次ぎて、しかもその矩を見ず。木を植ゑ、石を並べて、かりのたはぶれとなす。そもそも、おものの浦は瀬田唐崎を左右の袖のごとくし、湖をいだきて三上山に向かふ。湖は琵琶の形に似たれば、松のひびき波を調ぶ。比叡の山、比良の高根をななめに見て、音羽石山の肩のあたりになむ置けり。長等の花を髪にかざして、鏡山は月を粧ふ。淡粧濃抹の日々に変れるがごとし。心匠の風雲もまたこれに習ふなるべし。

四方より花吹き入れて鳰の波

念のために大意を示せば、〈ゆるぎない山の姿は人の本性を養い、流れ行く水は人の心を慰める水という。この静動二つの間に住む人あり。名を浜田氏珍夕という。佳境と

俳諧とをほしいままにし、脱俗清閑に徹するゆえに洒落堂と名づけている。門に掲げる「分別の門内に入ることを許さず」という戒めの旗は山崎宗鑑が客の長居を警告したざれ歌よりおもしろい。一丈四方の茶室二つは千利休や武野紹鷗の侘びの心を受け継ぎ、かといってとらわれず、木を植え、石をならべる気ままな暮らし。そもそも御膳の浦と呼ばれるこの膳所は瀬田と唐崎の地を両袖に湖を抱き、対岸の三上山と向き合い、琵琶さながらの湖は松風も波音も音楽を聴くようだ。比叡山や比良山を斜め方向に仰ぎ、音羽山や石山の名所を肩のあたりに置く。春は長等山の花を髪に飾り、秋は鏡山の月を鏡にして装う。中国の西湖さながら、ある時は薄く、またある時は濃く化粧する美女のようだ。よって、これを眺めて詩を詠む珍夕の心も自在なのであろう〉となる。

このように出逢いから一年に満たないうちに、芭蕉から高く評価された珍碩は、その信頼を裏切ることなく、同年八月には、『猿蓑』（元禄4）のさきがけと評される『ひさご』（元禄3）の単独編者という大役を果たす。

その後も評価は揺らぐことなく、元禄四年（一六九一）十月、二年半ぶりに江戸に戻った芭蕉から〈（あなたの句は）まことに秀逸が多いので、今後も志を失うことなく自重されて、俳諧修行に専心してほしい〉（元禄五年二月十八日付珍碩宛芭蕉書簡）とか、〈あなたは私が新しく説いている「軽み」をよく理解し、自分のものにしていることを心底から喜んでいる〉（同）という手放しの賛辞を贈られている。

さらにおよそ半年後、珍碩は近江から江戸に下って深川の芭蕉庵を訪ね、翌年の一月まで滞在する。江戸では芭蕉に付き随って多くの俳席をこなし、俳号も珍碩から洒堂と改めた。帰郷後に出版した『深川集』（元禄6）はその江戸滞在記念集である。当時、まだ二十代半ばの若さであった。

こうしてみると、洒堂（珍碩）はまことに心ひかれる人物と言えるが、その後は一転して不行跡を伝える話ばかりが知られるのは傷ましいことである。

元禄六年（一六九三）、洒堂は芭蕉の高い評価を力にして近江を出て、大阪に俳諧の門戸を構えた。彼の若さでこの挙に出た背景には、大阪の地に「軽み」という新しい俳

風を唱道したいという野心が、芭蕉自身になかったとは言えないだろう。上方は芭蕉一門の手薄な都市で、洒堂の進出にはそうした芭蕉の思いがこめられていた。だがすでに同門の之道が一門を形成していたことも事実であった。そこに縄張り争いといわれる確執が生じる。

元禄七年（一六九四）五月、芭蕉は帰郷の旅に出る。名古屋では、芭蕉の影響から抜け出そうとしていた地元の俳人らと旧交をあたためて、やがて伊賀に到着。郷里では旅疲れと持病の用心とで休養し、洒堂のいない近江や去来の待つ京へ出ては俳席をこなす。その一方で、『猿蓑』に続く『続猿蓑』（元禄11）の編集にも専心した。ちなみに、この間に、若いころの芭蕉と内縁関係にあったと推定されている寿貞が、江戸の芭蕉庵で亡くなっている。

その後、彦根・伊勢・大阪などの門人から招請しきりなるものがあって芭蕉を悩ませるが、門戸を張り合っている洒堂と之道との仲裁を優先させて、芭蕉は大阪へ出ることにする。老衰に持病が加わるこの旅は、大阪に着いた翌日から悪寒や頭痛を引きおこし、やがて俳席もままならない状態に陥って、十月十二日の臨終を迎えることは周知の通りである。

之道は芭蕉の死の前後を通じて、看病や葬儀の世話を徹底して、同門から篤い信頼を得る一方、洒堂は病床の芭蕉にも遠ざかる関係になり、葬送や追悼の催しにも出席せず、周囲の非難の的となった。

多くはその原因を若さに求めるが、むしろまれに見る若さで見いだされたその才能を、十分に開花できなかった不運を惜しむ。その責任の一端が芭蕉自身にあることはまちがいないことであるからだ。

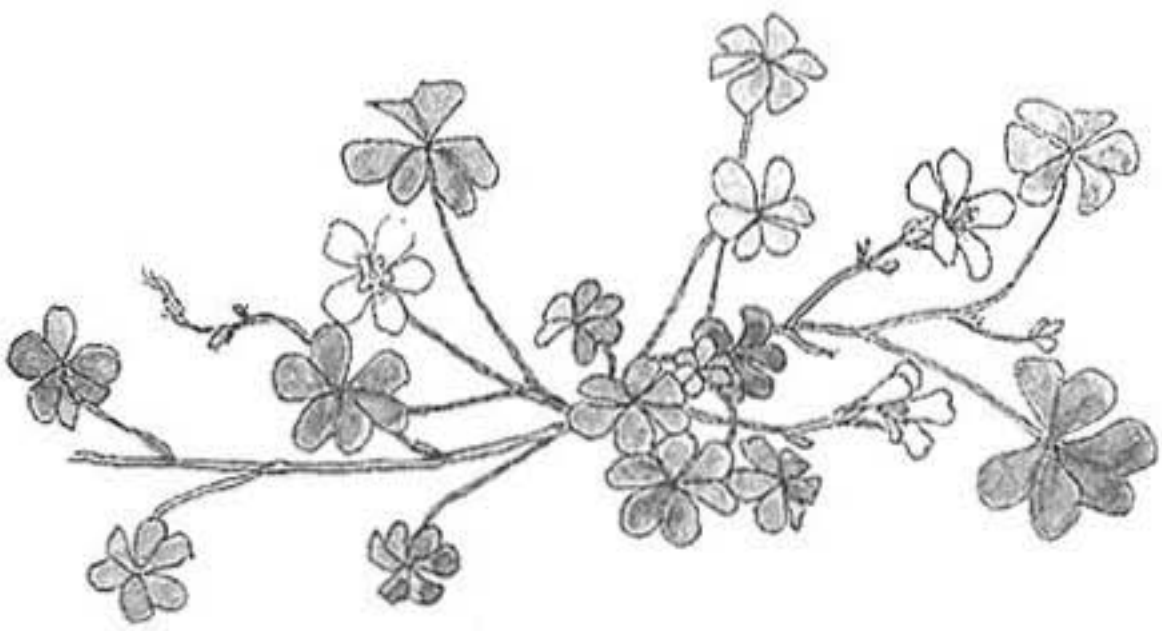
力はそれを見いだし、働かせる者とともにあって、はじめて発揮される。その意味で、芭蕉は洒堂（珍碩）を大阪に送るべきではなかった。洒堂もまた、芭蕉のもとを離れるべきではなかった。芭蕉はまだ独立を容認すべきではなかった。

芭蕉の「相手業にて候へば」という言葉には、連句は相手の力量次第で佳くも悪しくもなるという以上に、このような真実がこめられているように思われる。

「先師（芭蕉）常に語りて云はく、発句は同門の中、予に劣らぬ句する人多し。俳諧においては老翁が骨髄」（『宇

陀法師』）という芭蕉の自負には、付句当事者としての自信に加えて、前句を提供する指導者としての能力が含まれている。連句とはそのような文芸であると、あらためて思う。

（東洋大学教授）



一茶・鶴老のはみだし連句

高橋順子

連句は職場の仲間や友人たちと手さぐりで始め、勝手に面白がってきたので、いってみれば私たちのは勝手連句である。それでも疑問点が出るたびなんとか調べたりして三十年が経った。連句の西も東も、裏も表も分からなかったころのことは『連句のたのしみ』（新潮選書）に書いたので、ここではくり返さない。

実作はこのごろは年に二、三度しかしないが、そのうちの一つは東北方面の山仲間と登山した後の温泉で巻く。七年かけて三巻が成った。連衆は今年百歳の歌人の翁や小説家、詩人、俳人、哲学者など。もう一つは所属する同人詩誌「歴程」の夏の泊まりがけのセミナーで、夜学に巻く。

こちらは十八句の半歌仙や胡蝶という二十四句形式のものだが、五七五に不馴れな詩人ばかりだから、スピードは遅いが、へんな句が出てきて面白い。

きっと見る人が見たら、どちらも粗雑な連句なのだろうが、心がまえとしては、停滞しないでつねに新しいところに出ること、ポエジーがあること、この二点を大事にしている。いくら式目に合致していても陳腐な句だったら、ジグソーパズルまがいの言葉遊びでしかないと考える。

連句でもって精神の修養を積もうとするお人もいらっしゃらないだろうし、言葉遊びの一つにはちがいないが、そこには連衆とともに、新しいものを創っていこうという心のはずみがある。

連句のどこに人びとを取り込む魅力があるかといえば、差し出した手を受けとめてくれる誰かの手があるということだろう。私は現代詩の作者だが、詩を書いて差し出した手が、かっこうのつかなくなることもよくある。編集者も読者も何とも言ってくれないのだ。そういうときは、私の詩に魅力がなかったのかもしれない、とか、一人よがりだったのかもしれない、と思うほかはない。

俳句の人たちには句会、短歌の人たちには歌会がある
が、現代詩の人たちには詩会という制作・相互批評の場は
ない。したがって現代詩の人たちに連句愛好者がけっこう
多いのはうなずける。ふだん一人で書いているので、わい
わいがやがやの創作が楽しくてたまらないのである。

話は横道にそれるが、私は友人たちとこの五年、年に二
度ずつ連詩会をひらいて楽しんだ。六、七人が五時間くら
いかけて十二～十四連を制作するのである。長句短句を四
行・二行に置き換え、季節はゆるやかにめぐるものとし
た。月・花の定座は設けないが、連句同様豊かで、まった
りした小宇宙を目指した。一人一人の競争原理とチーム
ワークの精神が働き、刺戟的で幸福な時間を過ごせたと思
う。

連句の魅力をさらに挙げれば、フィクションの楽しさと
気楽さがあるということだろう。だがそうはいっても作者
の体験や人柄はにじみでるもので、フィクションかしら実
体験かしらと思わせるところも、恋の句などではスリリン
グで面白い。

私はあまり細かい去り嫌いや季戻りなどは気にしないの
だが、それでも花の定座はたがえたことはない。きちんと
折端の一つ手前に置く。月は引き上げたり、こぼしたりは
するが、極端なことはしたことがない。お行儀はいいほう
だと思うが、江戸時代の歌仙を見ると、月花一所の句以外
でも花の定座を動かしていることがある。現代になるほど
窮屈になってきているようだ。あまりに過失や瑕僅に目ク
ジラ立てて神経質になっては、連句の形骸化につながり、
せっかく愛好者が増えてきているのに、また衰退していっ
てしまうのではないかと、私はひそかに恐れている。みな
が芸術を目指さなくてもいいのではないかとさえ思う。

私たちの連句は江戸時代の連句の決まりごとを簡便にす
ることで、誰もが親しめるような形になってきていると思
うが、グループによってはかなり厳しい禁制を課している
ところもあるようだ。

私が聞いた中では、同じ漢字は一巻に一つしか使っては
いけないとする人たちがいた。これはかなり窮屈だし、反
論もできる。

歌仙は「二花三月」を含むが、文字通り「花」という字
が二つ、「月」という字が三つ出ているではないか。「花」

と「月」は特例と考えるのかもしれないが、それでは月花を大事に思う心から遠くなるのではないか。

月は「月」と端的に言う意外に、「有明」とか「十六夜」といったことばがあるが、「花」は「花」ということばにこだわるのである。「花は桜にあらず。桜にあらざるにもあらず」という正花論があるが、「花」一文字に「三春の艶」をまとわせるのである。

江戸時代に成立した『俳諧歳時記栞草』の「雑之部」には連句の式目などが載っているが、「三句去」（三句を隔てて使用）のところに「同字」と出ている。つまり三句をあければ、同じ字（漢字だろう）にこだわらない、ということである。印象の強くない字だったら、もっともなことである。同字を避けるために一方は漢字、一方は平仮名を使っている例もある。「三句去」には他に「神祇と神祇」「釈教と釈教」「木と木、草と草」「凩に木の字」「衣類と衣類」「食類と食類」などがあるが、江戸時代よりもきつい規則で自分たちを縛ることはないのではないだろうか。きついルールをクリアすることに快楽を感じるのは、ゲーム感覚に近いと思う。

私は千葉のカルチャーセンターで年に数日、連句教室の講師をつとめているが、講座名は「連句を読む・作る」とした。読むのは一茶の連句を一回に六句ずつ、三十分くらいで、六回で一巻読了ということになる。このときに読んだのは、定座をきちんと守った連句だったが、それでも現在の決まりごとを軽く破っている箇所があった。こういうことも、連句は規則を守るためにあるのではない、ということを分からせてくれる。

これからの連句のあるべきすがたを考える上でも、遡って江戸時代の連句をかじっておいたほうがいいと思うので、本書のエッセイとしては、これもはみだしになるかもしれないが、お付き合いいただきたい。

江戸の俳人では芭蕉や蕪村の連句は無論のこと研究が進んでいるが、一茶は手薄である。一茶は近代人といってもいいので、現代の私たちの心情に近いところにいる。先年『一茶の連句』（岩波書店）を書き下ろしてみて、実感した。一茶の連句の中では下総守谷（現茨城県）の西林寺住職・鶴老との両吟が、定座の配置にそれほどこだわりを見せておらず、他にも若干逸脱を好むことが、今度調べてみて分

かった。鶴老も信州の出であるので、気安かったということもあろう。彼らの場合は型を知った上で、崩してきているのだろうが、なんとなく心強くなって、座の末席に侍ってみたくなった。一茶の景気のいい、血の通った付句は無類である。

以下の歌仙は文化九（一八一二）年二月、丁度二百年前、西林寺で巻かれた。便宜上頭に1から36までの算用数字を付し、紙幅の許す範囲で簡単な解説を試み、この歌仙のはみだしぶりを見てみたい。

1 弥陀仏もゆるせし亀の齢哉　鶴老
2 和歌の流を染色の山　一茶
3 有明の初花守に補せられて　茶
4 大蛤に春は立けり　老
5 めり〳〵と霞の中をおし歩き　茶、
6 世はことぐ〵く更衣する　茶
7 ウ小筵の子ににぎらする芥子花　老
8 局の涙ほねをとくらん　茶
9 御灯を初瀬の御山につきつけて　茶
10 追儺の宵のあらし凩　老
11 酒くれて長尻どのを帰す也　茶
12 髻切ておくるふる郷　老
13 宗因の大事がられし月が今　茶
14 ぱつと立たる小雀山がら　老
15 お花茸くほ屋のばくちがざはぐ〳〵と　茶
16 児に放たれる狩人が妻　老
17 うつくしき年打暮れて仇火たく　茶
18 さの、渡りに馬を逃して　老
19 二竹垣も翌の御用に立かとよ　茶、
20 袖つ、張て空を詠る　茶
21 涼風の西も東も砧うつ　老
22 聖霊もまいれかまくらの米　茶
23 ひよろ〳〵と杓の先に月出て　老
24 山から見ゆる土間のへつゝい　茶
25 九十九の母をしばしと笹の上　老
26 足利様の御代の青雲　茶
27 草枕昆布かぶつて寝たりけり　老
28 赤鬼致せやよ太郎冠者　茶

29　大雪の夜に大鍋をかりかねて
30　弁才天をおくる川舟
31　ナ鶯のとしより声のなつかしく
32　志賀の堇に丸二年すむ
33　咲花に大小さしてまかり出
34　べそかく妹を駕にへし込
35　百年も思ひ切たる文書て
36　我名やなきそ奈良の小男鹿

老
茶
老
茶
老
茶
茶

2　和歌の流を染色の山　一茶

脇も発句に準じて雑の句となった。須弥山は蘇迷盧ともいうそうだ。一茶は生かじりのところもあるが、勉強家である。連句は俳諧之連歌であるので、和歌の流れにはちがいない。御仏も歌をよろこびたもう。

3　有明の初花守に補せられて　茶

月花一所の句。春。お客が、というより居候が月花を一遍に貰ってしまっていいのだろうか。鶴老は門人とも友人ともいえる人だが、一茶にはどうも遠慮というものがない。初花は咲いて間もない桜の花。山が桜の色に染まっている。明け方の月と花とに心を奪われて。

『七番日記』では文化九年一月二十三日に「守谷ニ入」とあるので、この間西林寺に滞在していたと見られる。

1　弥陀仏もゆるせし亀の齢哉　鶴老

この歌仙の多分直前に巻いた一茶の「松蔭や十よ州哉」を発句とする歌仙には「賀治世」とある。その気分が残っている。亀の齢万年を詠む齢千年の老鶴ならぬ鶴老。雑（無季）の発句とは珍しい。

4　大蛤に春は立けり　老

前句の「初」の一字から立春を付けたのだろうか。旧暦では元旦と立春は近い。初春を祝う膳の蛤汁か。季戻りだが、気にしない。

5　めり〳〵と霞の中をおし歩き　　老

「霞」で春。頑丈な体軀の一茶が、ともかく春になったので、春霞を踏み破って（？）行脚に出かけたさまだろうか。

6　世はことぐ〵く更衣（ころもがへ）する　　茶

「更衣」で夏。衣替えするのは人だけではない、植物もそう、動物もそう、と一茶は歩きながら観察している。

7　小筵（さむしろ）の子ににぎらする芥子花（けしのはな）　　老

「芥子花」で夏。子どもも一重の着物姿で、筵の上に。芥子は赤いヒナゲシだろう。

8　局（つぼね）の涙ほねをとくらん

9　御灯（みあかし）を初瀬の御山につきつけて

10　追儺（ついな）の宵のあらし凩

8いきなり場面は歴史物語の愁嘆場に。熊谷直実に討たれた美しい若武者・平敦盛の母・藤の局か。9初瀬の長谷観音は平安時代、女性の信仰を集めたそうだ。10「追儺」は節分の鬼やらい。冬。

11　酒くれて長尻（ながじり）どのを帰す也　　茶

こういう肉声が聞こえる句は面白い。「長尻どの」は豆の代わりに酒を与えられて追い払われたのか。一茶も滞留しすぎて、いやがられた経験があったろう。

12　髻（もとどり）切ておくるふる郷　　老

「髻」は武士などが頭頂部に束ねた髪。それを切り落とすのは出家するということである。来し方を反省しつつ、古里人に証拠として送る。

13　宗因の大事がられし月が今　　茶

月の座。秋。西山宗因は、肥後八代城主加藤正方の侍臣だったが、致仕して連歌師となり、のちに俳諧に転じ、談林派の祖となる。晩年豊前小倉で剃髪し、僧形に。宗因が殊の外めでた月がいま上っている。

14　ぱつと立(たち)たる小雀(こがら)山がら　老

「小雀」「山雀」で秋。月に雁では月並なので、小鳥にしたのだろう。

15　お花葺くほ(穂)屋のばくちがざはぐ〳〵と　茶

「お（尾）花」で秋。非正花。「尾花ふく穂屋のめぐりの一村にしばし里ある秋のみさやま」（金刺盛久）を引く。信州諏訪神社の祭礼・御射山(みさやま)祭りにスキで仮屋を造り、その中でバクチが行われている。一茶はこの祭りに行ったことがあるのだろう。

16　児に放たれる狩人が妻　老

御射山祭りでは幼児の疫病除けの祈願をするそうだが、山から下りてきた狩人の妻が、人込みで自分の子を見失ってしまった。一茶が鶴老にそんな話をしたのかもしれない。

17　うつくしき年打暮れて仇火(あだび)たく　茶

本来花の定座だが、すでに第三のところで花が出ているので、華々しいものとして「仇火」を置いたのだろう。『徒然草』に「つごもりの夜、いたう暗きに、松どももしたて、夜半過ぐるまで人の門たたき走りありきて」とある。

18　さの〳〵渡りに馬を逃(にが)して　老

19　竹垣も翌(あす)の御用に立(たつ)かとよ　老

20　袖つ〳〵張(ばつ)て空を詠(なが)る　茶

21　涼風の西も東も砧(きぬた)うつ　老

18佐野（現群馬県）は歌枕として有名。「駒とめて袖うち払ふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕暮」（藤原定家）。19また佐野は謡曲「鉢の木」でも知られる。佐野源左衛門常世が、北条時頼が雪道に難儀したとき、愛蔵の梅・松・桜の鉢の木を焚いて供したという話である。どちらも滑稽化している。21は「涼し」が夏、「砧」が秋の季語だが、初秋と考えたい。

22　聖霊(しやうりやう)もまいれかまくらの米　茶

「聖霊」は聖霊棚や聖霊とんぼ、魂祭りと同じく、秋と見ていいだろう。「まいれ」は、召し上がれ。「かまくら」

は鎌倉幕府だろう。年貢米を地頭に取られるだけ取られた百姓のみ魂よ、いまは米の香りなりともたらふく吸い込んでください、というのだろう。『俳諧類船集』という連句の付合集の「碪（キスク）」の項に「――きぬたの音の恨み声なる」という歌が引かれている。一茶の怨念と反骨が読める。

23　ひよろ〳〵と杣（あふご）の先に月出（いで）て　老

本来の月の座は29であるから、大分引き上げている。秋。「杣」は天秤棒。米の荷を運ぶ人だろう。天秤棒の先に月が出た。ひょろひょろと出るのはほそい月か。

24　山から見ゆる土間のへつゝい　茶

25　九十九の母をしばしと笹の上　老

26　足利様の御代の青雲　茶

27　草枕昆布かぶつて寝たりけり　老

24、25は姥捨山の情景のように読める。26は一転、長寿とともに室町の御代を寿ぐ。27は青雲の下にいる人か。

28　赤鬼致せやよ太郎冠者　茶

29　大雪の夜に大鍋をかりかねて　老

30　弁才天をおくる川舟　茶

31　鷲のとしより声のなつかしく　老

32　志賀の堇に丸二年すむ　茶

28は狂言「簸屑（ひくず）」から。茶の簸屑をひきながら眠ってしまった太郎冠者に次郎冠者が鬼の面をかぶせるというもの。30「弁才天」は弁天様だが、遊女や酌婦などを譬えたのではないだろうか。31「老鷲」は夏だが、そうすると32、33と春は二句続きで終わってしまうので、ここは「鷲」で春としたか。

33　咲（さく）花に大小さしてまかり出（いで）　老

34　べそかく妹（いも）を駕（かご）にへし込　茶

前句のお武家が狼藉をはたらいたのだろう。もう満尾が近いというのに、一事件起こしてしまっていいのだろうか。恋の句。

35　百年も思ひ切たる文書て

大げさな恋文を書いて。恋の句。

36　我名やなきそ奈良の小男鹿　　老

「小男鹿」は雌を求めて鳴く鹿。わたしです、わたしです、と哀れっぽく鳴かないでくれ、という意味だろうか。恋の句。後を引きそうな挙句である。

歌仙を巻いているときは気分が昂揚しているものだが、この歌仙は三十六句巻き上がってもなおほとぼりが冷めぬ感じだ。これでもか、と言わんばかりに目立つ語彙がしばしば現れる。弥陀仏、ほね、髻切る、ばくち、精霊、赤鬼、弁才天……多様というか、なんというか、連歌作者が見た。歌仙はやはり裏に入ってからのほうがら卒倒するだろう。この連句は俳諧師と住僧二人の哄笑で終わった感じだが、やはり挙句の前には句の花があって、めでたく、かつしみじみ巻き上がるのが、私たちにはうれしい。

この稿の最初のほうにカルチャーセンターのことを書いたが、六回＋飲み会の席で半年かかって三十六句巻き上げた。一茶の句「此の上の貧乏招くな花芒」を発句とする脇起し歌仙で（じっさいに一茶にはこの句を発句とする歌仙がある）、挙句はそれまで出句しなかった私が「一路平安鳥雲に入る」と付けた。これで散会しますが、ご無事で、という意味だが、「大震災の犠牲者への祈りの心が出ています」と言ってくださった方もいた。私の挙句もめでたくはいかなかったが、歌仙はやはり裏に入ってからのほうがみな打ち解けてきて、肩の力が抜け、面白くなる。三十六句巻きあげた後の満足感は半端なものではない。みなさまには半歌仙ばかりではなく、時に歌仙に挑戦されたら、と申し上げておきます。

（詩　人）

芭蕉をめぐる謎

―故碩学のお手紙など―

別所　真紀子

居（す）へられて七両二分の膳をくひ　（柳樽）
女房をにらんで亭主五両とり　（宮）
大胆な胸に合点の三百匁　（水加減）

これらの川柳にある、七両二分とか五両とか（銀三百匁は五両と同価）の値は、不義密通の示談金である。江戸では七両二分、大坂は五両だったそうで、なぜ大坂では安いのか判らないが、七両二分は結構な大金であるから実利的な大坂では取りはぐれのないよう五両にしたのでもあろうか。しかしこれは公定相場なわけで、個々の事例によって適当に額を決めたらしい。額を決めるのは大家とか町役とか五人組とかが、当事者の間に立って決めて事を納める。

連句年鑑の貴重な誌面を、いきなり下世話な川柳で始めて申し訳ないけれど、私は、田中善信著『芭蕉―二つの顔』によって一世を風靡した（？）感のある、寿貞桃印不義密通説にどうしても納得できないので、その理由を説く緒口として示談金の川柳をあげてみたのである。

田中説によれば、内妻といえども不義は死罪であるから、芭蕉は桃印が死んだことにして深川に隠棲した、というのであるが、後年俳聖とも崇められる芭蕉がコキュとなって逼塞したなんて余りにも情ないではないか。

仮に、不義があったとしてもこれは親告罪なのである。つまり訴え出なければお調べもお仕置きもない。その類の事例を集めた『江戸の色ごと仕置帳』（丹野顕著、集英社新書）でも、夫が当事者双方か片方を殺したとか（その場合夫は無罪）、傷けたとか駆落ちしたとか、怖れた女が首を縊ったとか、変事があって事が露われてお調べお仕置きとなった事例ばかりである。また同書に、『徳川禁令考』の引用があって、大岡越前守が「密通の訴訟は稀、訴えがあれば名主、家主らに取扱わせ、内済がつかぬ時だけ吟味

する」という意の言上をお定書掛にしている。吟味となると当事者の他、名主（町役）家主五人組が揃って出頭せねばならない。内済（示談）にした方が皆助かるのである。示談が調えば普通に暮せたのだ。

私には全くナンセンスと思える寿貞桃印不義説である が、田中説の根拠は、芭蕉が江戸下向して小田原町に住居を定めたからには、どうしても女手が必要で、寿貞を妾として入れて家事に当らせ、十六歳の桃印を連れてきたので密通したという。

しかし何の文献も記録もなく推測にすぎない。家を持ったから女手が必要、ということも当時の江戸では絶対ではないのである。先に挙げた『江戸の色ごと仕置帳』によれば、享保六年（一七二一年）、江戸の人口は、

男　三二万三二八五人（六四・五%）
女　一七万八一〇九人（三五・五%）

だった。これは町人だけのもので、武家、寺社、遊廊は含まれていない。その他に無宿者（人別帳に載っていない）も多かった。

圧倒的に女性が少なかったから男世帯はごく普通であった。飯と汁が炊けてときたま下着の洗濯をすれば男も暮せたのである。何しろ納豆、浅利蜆、豆腐は朝ごと売りに来るし、青物魚類は棒手振（ぼてふ）りが毎日廻った。御用聞きの小僧も走り廻る。谷口田女の句に

門淋し枡もて炭をはかる音

というのがあり、屑炭を売り歩く者もいたらしい。その他塩売薬売地紙売楊子売と、まるでコンビニが向うからやって来てくれたようなものである。

着る物の洗い張り、仕立直し、綿入れ綿抜きは長屋の女房たちの内職であった。『芭蕉書簡集』をつぶさに読むと、門人が「薪水の労」をとってくれているし、加兵衛という伊賀の者が飯炊きをしていたり、嵐蘭の妻が大根の煮物を重箱で届けていたり、近江でのことではあるが智月が洗濯する着物はないか、と芭蕉宛に文を出している。女手のない暮しに馴れているように思われる。

また住居のこともある。江戸の町は武家地が全体の六八・九%、寺社が一二・四%、町人地はわずか一〇・六%で、その中に五十万人もの町人が押しこめられていたのだった。（数字は高橋敏著『江戸の訴訟』岩波新書に拠る。）

当然一軒当りの面積は狭い。

小田原町の住居は一ト間だけの長屋ではないにしても、改築前の関口芭蕉庵のような規模だったのではないだろうか。私が初めて連句を学んだ林空花先生の座が開かれていた、あの風雅な物寂びた庵をなつかしく思い出す。六畳の座敷に四畳半の板の間、簡單な勝手が付いて奥に廊下と押入れがあった。江戸期の貸家なら立派なものと言えよう。

仮りに、あくまでも仮りにであるが、芭蕉が江戸下向してすぐ寿貞を内妻として入れたとして、そこへ十六歳（今なら中学卒業の子）の桃印を連れてきて一緒に住んだとして、大垣藩の家老に「尋常ならざる所あり」と言われた芭蕉、いわば人間としてオーラの感じられる芭蕉の膝下に養われる身で、いったい密通などする気になるものだろうか。芭蕉の猶子（甥であろうと言われている）で芭蕉を父親代りに頼る桃印が、芭蕉の書簡でその晩年いたわられ数ならぬ身ではないと悼まれた寿貞が、そんなひとだったろうか。

芭蕉の深川隠棲は、二十歳になった桃印が経済的に自立し養う義務から解放され、心に染まぬ点者を止めて此の道一筋の探究生活を選んだ、と私は思いたい。で、どう自立したかというと、公文書である町触れに水役として桃青の名があることから、やはり水役に入ったのではないか、桃印という号がありながら一句も作品がないのはそのためではないかと思ったのであるが、確かな文献がない以上推測の域を出ない。また別な推測ものちに知ったのだった。

近世文学・俳文学界に卓抜な成果と比類ない足跡を遺されて、平成二十一年に享年八十九歳をもって長逝された碩学、故尾形仂先生は田中説に与（くみ）していられなかった。公表されたものにはおそらく書かれていないであろう寸言が、私宛に頂いたお葉書に添えてあったのである。

私信ではあるがお葉書だし、歿後三年を経ていることでもあるので、泉下の先生にお許し願ってここに引用させて頂く。

寸言、というのは、葉書一枚に細い黒インクのペンできれいに書かれた文面の、行間に後から書き足された小字の三行ほど。

「田中氏の桃印不義説は、氏が涼袋伝で指摘した涼袋不

義出奔説のパターンを、桃印にも当てはめたものです」

とあった。これは、先生が当時不整脈に悩まされていらした頃のこと、私がお見舞かたがた次作に寿貞のことを書こうとしていること、不義密通説に納得できないことなどを書いた粗簡のお返事で、文面の後半に、

「寿貞を中心とした御作を御構想中とのこと、もし何かの御参考になればと、別便で旧稿を拝送させていただきました。旺盛な御創作意欲には、ただただ健羨にたえません」

とあり、同時に『俳句の周辺』のうち、「魔界からの脱出―閉関の説を読む」というタイトルの御論考のコピーも届いた。

私が尾形先生にお近付きに（といっても殆ど文通であったが）なったのは、昭和六十一年刊行された先生の『歌仙の世界』の巻末に、歌仙「満天星」の巻が掲載されたのを喜んだ、村野夏生（わだとしお）氏と相談して、当時共に発行していた『風信子』をお礼の言葉と共にお送りしてからである。頂けるとは思っていなかったご返事が来て、「阿片瓢郎氏に諒解を得て掲載しましたが、ご連衆には無断で申しわけありません」と丁寧なお言葉を頂いた。それに勇気を得て俳諧女性史の拙著もお送りし暖いお言葉と資料のコピーを多量に与えて頂いた。その当時は一介の好事家に過ぎなかった私に惜しみなくご教示下さったご厚意は身に余るものであった。嬉しかったのは平成七年刊行の『俳文学大事典』（角川書店）に、「浜藻」と「八重山吹」の項を立てて下さって私に書かせて頂いたことである。浜藻の名はそれまでどの辞典にも載っていなかったのだった。

先に引用した尾形先生のお葉書であるが、田中善信氏の『涼袋伝』は見ていないけれど、それにも不義説があるらしい。尾形先生の筆先に何となく苦味が感じられるのは当方の思いこみであろうか。また、葉書後半の文面をよく読んでほしいと思う。私ごときに、わざわざコピーをとって別便で送るという手数をいとわずに「拝送させて頂きました」とある。恐縮を通り越して恐懼したものだった。

比類ない碩学でいらっしゃりながら実に謙虚で温いお人柄の先生であった。岳父顕原退蔵博士の遺志を継がれて完成された『江戸時代語辞典』（角川学芸出版　平成二十年刊）もご恵与頂き、購入するつもりでいたので慌ててお礼に代えてお送りしたそのご返事に、「別所さんなら役立て

て下さると思って差し上げたのです」と数年に渉る先生との文通の最後になった。

数々のご厚意とご教示を頂きながら、私はご自宅へお礼に伺うこともせず、お目にかかったのは昔になるが『八重山吹』の版本を入手して解読に苦労している旨お手紙をさしあげたのだと思う。いらっしゃいとご指示があって会場の深川芭蕉記念館へ出かけた。渡辺勝教授の「リルケと俳句」というご講演だった。

尾形先生は閉会のあと何人もの俳文学者に紹介して下さり、渡辺教授や門下の中野沙恵さん、担当編集者の川口澄子さんなどと一緒に歩き出すと、川口さんが「先生が〝駒形どぜう〟に行こうとおっしゃってますが」と言って傍に来られたので、私はすぐ考えもしないで「私、ドジョウは駄目なんですけど他に食べるものあるでしょうか」と口にしてしまった。そのせいで〝駒形どぜう〟でなくカフェになったのである。帰宅してから、先生もご一緒の方もドジョウで酌み交したいと思っていらしたのであろう、何も食べなくとも黙って従ってゆけばよかったと思ったが後の祭りだった。芭蕉句蕪村句の解釈についてとか、持参した『八重山吹』の版本についてとかお話した帰途、電車で隣り合った中野さんに、「お優しい先生ですね」と言ったら、すぐさま「きびしいです、怖い先生ですよ」と返ってきた。直弟子の育成にはきびしく当られるのだ、指導者もなく何の伝手もなくただ面白くて江戸期女性俳諧に踏み入った私を、哀れにも思われて優しいのであろう。しかし拙著のミスなどにはきちんと指摘して頂いている。つまり一冊全体目を通して下さったということで、それらのご書簡ご芳葉資料コピーなどの束を前にすると涙がにじんでくる。

先生は、大部大冊の『蕪村全集』全校訂を終られ『江戸時代語辞典』を刊行されたのち、ご自身で遺稿集を編んでいられたそうで、三回忌の昨年（平成二十三年）ご子息と愛弟子の中野沙恵さん他門人の方々の手によって『尾形仂国文学論考』（角川学芸出版）の美しい大冊が出版された。その送付先に私の名も残しておいて下さったのである。もったいないことであった。

まるで尾形先生の後を追うように、平成二十二年あまりにも早過ぎる命終を迎えられた故雲英末雄先生も、桃印・

寿貞密通説には反対のご意見であった。お手紙を頂いた経緯は省くが、初めてのお便りに「別所真紀子先生　御侍史」と封筒にあって、吃驚して飛びあがったものだった。すぐ折返し先生も御侍史も平に御容赦願ったが、俳文学にすばらしい業績を刻まれている先生が何と謙虚なお人柄であることか、と感じ入ったり我が身を省みたりしたことである。

「―略―寿貞、桃印の駆落ち説は、当方反対です。心情的に考えても自分の内妻を寝取られた男が、その女性が逝去した折に「数ならぬ身となな思ひそ玉まつり」などといった哀切な句を作るものでしょうか。今の時代でもとてもそんな気持になりませんし、まして江戸時代の、しかも芭蕉のように倫理観の強い、かなり武士的な生き方をした人間が、かような作句をすることはないと存じます。―略」

雲英先生のお手紙の一部分である。そして故岡本勝中部大学教授の「芭蕉と桃印」という論考があることを教えて下さった。その上次便で、ご自身の研究室はあまりに資料が山積なので岡本氏のご遺族に抜刷をお願いした、とあった。日ならずして三重県にお住いの故岡本勝氏夫人から、岩波の『文学』二〇〇七年三・四月号掲載の「芭蕉と桃印」論文コピーが届いたのである。折しも雲英先生は早稲田大学別館で長年に渉って蒐められたコレクション展示会の準備でお忙しい時だったのに、である。ほんとうにありがたいことだった。

岡本氏の論考は、ほぼ田中説への反論で、不義説には雲英先生と同等の理由で賛成できない、桃印は独身であったろうと書かれている。桃印を江戸に連れて来るには、就職先をあらかじめ用意しておいたであろう、そしてその勤め先は越後屋ではないか、というのが前述した桃印についての別な推測である。

越後屋の祖は伊勢松阪出自の三井家であり、勤め人にも伊勢伊賀の者が多くいたようである。桃印十六歳で江戸に出たから丁稚としては年がいきすぎているが、岡本氏は綿密に三井家の記録を調べられて十五・六歳で勤め始めた者の名まで挙げられ、手代見習であろうか、と書かれている。『炭俵』で突然のように野坡、孤屋、利牛が活躍したのも越後屋との縁を表わしているとも。

その場合、二十歳になった桃印が給金も上って暮しが立つようになったから芭蕉は点者を止めたのだろうか。桃印は俳号で一句も遺らないのは資質がなかったということだろうか。その他の疑問についても「芭蕉と桃印」の論考は刺激的で学ぶ所多いものだった。

それにしても、岡本夫人にわざわざ連絡してこの論考を私が読めるようにお計らい下さった雲英先生のご厚意を何と言ったらよいだろう。早大での雲英コレクションの展示場ではかけ違ってお目にかかれなかったが、そのコレクションによって、件（くだん）の会「みなづき賞」を受賞され、記念講演に伺ってご挨拶するはずであった。ところがその直前、急性白血病で行かれぬというお手紙が届いたのである。

そうして薬石効なく有為の碩学は幽明境を異にされた。惜しんでも余りある痛恨事であった。

芭蕉の全作品とその生涯についての書物は汗牛充棟の感があるのに、未だ解き明かされない謎は多くある。

最大の謎は、藤堂新八郎家を致仕した二十三歳から、江戸下向する二十九歳までの六年間、どこでどうしていたかということであろう。二十代の六年間といえば人生の盛りの時であるし、生涯を決定する重要な期間でもある。兄の松尾半左衛門は裕福ではなかったから自ら口に糊する手だてを持たねばならなかったはず。

寛文十二年、芭蕉は久居藩の家老とも側用人ともいわれる向井八太夫と江戸へ同行した。八太夫は俳号を卜宅と称し、芭蕉がまず身を寄せた日本橋小田原町名主も小沢卜尺。ということは二人とも半井卜養の同門だったのであろうか。資料では両人とも季吟門である。

ところで久居藩はその前年、寛文十一年に藩として成立したばかりだった。津藩第二代藤堂高次が将来の継嗣問題に備えて分藩したのである。幕府の認可がおりたのが寛文九年。それ以前から下準備は始まっていたであろう。津からそう遠くない野辺野という見渡すかぎりの広野と松林の地が久居藩地に選ばれた。何もない土地に新たに城（築城は許されなかったから舘か）と町を造らねばならない。津藩下挙っての大がかりな工事だったことであろう。

芭蕉の消息不明の時期に久居藩建設はぴたりと当て嵌る

のである。上野城下からも次男三男の者は工事に出仕したであろうから、芭蕉も書記か何かの仕事に就いたのではなかろうか。そしてそれが水利工事の書記であったなら、俳諧つながりで卜宅が卜尺に依頼して江戸の水役にありついた、とすれば水路に水を通すように筋が通るのであるが、文献が何もないのだから私の推理に過ぎない。

久居藩建設工事の記録が万が一にも遺っていたとしても、その中に甚七郎とか宗房とかの名があるはしないか、と私は夢想するのであるが。

ここで私は、広島の風律が『小咄』に収めて「寿貞は翁の若き日の妾なり、とくに尼になりしなり」とあるのを考えてみたい。

芭蕉が江戸下向したのは二十九歳の晩秋、年が明ければ三十、江戸期において三十は立派な中年だった。四十で初老、五十で隠居が通り相場。だとすれば「若き日」は、消息不明の二十代六年間のことではないだろうか。人間の生理から見ても二十代に女性との関わりがなかったというのはおかしい。

寿貞は芭蕉の初恋のひとではなかったろうか。そして大志のために妻帯を断念した芭蕉と別れたのち、「理兵衛もうろたへ可レ申候」と寿貞が亡くなったときの猪兵衛宛書簡にある理兵衛の息子と夫婦になり、早く夫に死別して尼になったのではないか。そうであれば「疾く尼になりしなり」の、疾く、が納得できる。仮りに桃印と夫婦なら、桃印が亡くなったのは元禄六年で野坡はその頃やっと芭蕉門下に入っているので、桃印の死の折に尼になったとすれば「疾く」とは言わないはずである。野坡が相知ったとき寿貞はすでに尼姿だったに違いない。

猪兵衛は山城出身で、その実家に芭蕉は少なくとも二度訪ねて家族の消息を猪兵衛宛に書いている。書簡内容を見れば縁者だったようである。とすれば理兵衛も山城出身ではないだろうか。細工職人だったことも判っている。

藤堂高虎は築城の名手で、江戸城の修理、上野東照宮造営にも当った。藩が幕府に命ぜられた仕事なので職人も藩下から集めて連れてきたに違いない。江戸に定住した者も多いことであろう。

享保の頃およそ男性の半分だった女性は徐々に増えて幕末には男女同数になった。女児ばかり生まれるわけはない

ので、諸国から出て江戸に定住した男は、在所から嫁を迎えたのだと思われる。雇人も在所から呼んだのである。寿貞も理兵衛の息子の嫁として江戸に来たのではないか。理兵衛を寿貞の父と見る説もあるが私は舅であろうと思う。子を三人生せば婚家に止どまるのが普通である。

そう思うのは次郎兵衛が芭蕉や桃印の子としての扱いを受けていないからなのだ。

もし芭蕉の実子だとしたら葬儀の折には喪主のはず。桃印の実子か養子だとしても、桃印は芭蕉の猶子なのだから正統の遺族で、やはり喪主でなくてはならない。其角の『芭蕉翁終焉記』に、遺骸を乗せて淀川を遡行する舟の中に「次郎兵衛寿貞が子」とあるのみで、葬儀の記事にもそれ以後も全く名が見えない。芭蕉の遺族を庇護することは、信長亡き後三法師丸をかついだ秀吉ではないけれど、我こそは蕉翁第一の門人と名告る名目が立つであろうが、誰も気にしていないようで次郎兵衛もおまさおふうも文献から消えてしまう。『芭蕉書簡集』を丁寧に読むと、宛先の相手の家族に対する心遣いに胸を打たれる。去来の息子の病気を心配し正秀の娘たちに言葉をかけ凡兆、羽紅夫妻の娘にも気配りをみせている。お袋さまとかあねごさまとか、少しでも会ったことのある家族には必ず添え書しているのだ。初恋のひと寿貞の三人の子に対しては、格別の思いやりがあって当然であろう。

桃印の死の床の傍らに妻子のいた様子はない。大内初夫氏、雲英末雄氏、岡本勝氏の諸先学は、桃印独身説であった。

また田中説によれば、藤堂藩には他国に出た者は五年に一度帰国せねばならぬ、というお定めがあり、桃印は一度も帰国していないのが不義密通により死んだこととする説の根拠になっているが。岡本勝教授はそれにも疑義を提していられる。私も同感である。

五年に一度帰国という法度は、藩に籍のある士分の者に対してではないか。常識で考えても丁稚奉公や下男下女として出た者、他国に嫁入りした者など五年に一度の帰国は絶対に無理である。当時の戸籍は人別帳と言い、名主や菩提寺にあり、あまり厳密なものではなかった。幼児死亡率も高い時代のことで、子供はある年齢まで成長して勤め始めたときに人別帳に記載されたりもした（土地田畑を持つ

家は別）。桃印は久居の人別帳に載っていたかどうか。帰国せずとも咎められる立場ではないが何かの情報蒐集はしていたかと思う。

残る謎は巷間流布している芭蕉忍者説。私は芭蕉がいわゆる忍者隠密であったとは思わないして謎のままである。

芭蕉をめぐる謎を一ト通り探ってみたが、あれこれ推測しても奇蹟的に新しい文献の発見のない限り、謎は依然と

大切なことは、その生涯が如何に謎に包まれていようと、芭蕉の芸術には何の関わりもないということだろう。其角や蕪村ほかの俳諧師との比較もよく言挙げされるけれど、付合（連句）に於ては芭蕉がぬきん出ている。「発句は他の門人にも有、付合は老翁が骨髄」と自ら恃んだ通り、芭蕉の真価は連句作品にある。『七部集』『連句集』『去来抄』『三冊子』を幾たびも読み返して、その求めたるところを求めてゆきたいものである。

（了）

（詩人・作家・俳諧研究誌「解纜」主宰）

平成二十三年の連句界

和田忠勝

この年は、後世に長く語り継がれるに違いない。未曾有の大災害をもたらした東日本大震災と大津波の年であり、それから派生した原子力発電所の大事故が惹起したからである。

この大災害は、被災地のみならず、すべての日本人、加えて全世界に大変な災禍をもたらしたのである。勿論一短詩系の文芸である連句界固有の事象でも問題でもなく、人間の生の営みにとっての大変事であった。人々は呆然とし、次に復旧復興に取り組んだ。政治も経済もなく、人間が生きていくための方策に邁進したのである。

発生当時の神経では、「連句」なんて言葉は、不謹慎にして人前で言える事ではなかった。大げさな表現ではなく文字通り、そういう社会になっていた。連句協会は、直ちに予定していた年次総会及び全国連句大会を中止に踏み切り、特に総会については書面での略式審議で代行させた。又個々の連句会や連句大会も自主的に自粛した。他の文芸界も似たような状況であり、プロ野球は開幕を遅らせるという処置が取られた。（余談だが、相撲は八百長問題で休業する羽目にあった。）

連句協会の会員は、いろいろな被害に遭ったものの、死亡や家屋崩壊までにはいたらず、その点では不幸中の幸いであったといえよう。

日本中が、失意のどん底から這い上がろうとしている状況の中で、被災地東北にエールを贈り、物心両面での応援をすることが、社会現象として、大きな渦を作っていた。「絆」と言う言葉が流行し、「頑張ろう東北・頑張ろう日本」が合い言葉になっていた。

三月十一日の事故直後から、少しずつ日時が経つうちに、いろいろな部署でそれぞれが、何が出来るか、何をなすべきかを真剣に考え、徐々に平常に戻っていくようになった。我が連句界でも、連句の精神・座の精神こそ、かよ

うな状況下みんなに心の余裕と楽しさを届けることの出来る格好の文芸ではないか、引っ込んでいないで積極的に活動すべきではないか……という意見が大勢を占めるようになり、年の後半は充実した活動ができるようになったのである。

夏場を過ぎた頃から、各地での活動が活発になり、秋のメイン行事である国民文化祭京都の大成功や、甲州での連句会の立ち上げ、協会三十周年記念事業の現代連句集編集等充実した年になったと言えよう。

個別の活動状況は別表の通りであり、それらの記録ともなっている出版関係の資料は以下の通りである。

○「文芸祭連句実作会作品集」　岡山県連句協会刊行。前年一一月の国民文化祭おかやま二〇一一協賛の連句大会の記録集。四十席。

○「都心連句会湘南吟社二〇一〇年連句作品集」　一〇年連句作品集。

○「城沼」第十号　館林連句会機関誌　四一巻。

○「詩と連句　おたくさ」季刊　神戸市おたくさの会刊。

○「平成二三辛卯年歳旦帳」　名古屋市桃雅会刊。

○「平成二三年辛卯年歳旦帳」　北勢連句会刊。

○「とよた連句まつり　第八回全国高校生付け句コンクール作品集」豊田市文化振興財団刊。一万四千余句。

○「第四回宗祇白河紀行連句賞作品集」　同賞実行委員会刊。出題発句に対する三つ物募吟。一般の部の他、高校生の部、中学生の部もある。

○「早稲の香」　富山県連句協会刊。

○「猪苗代兼載五百年祭記念文集」　兼載忌記念連句会刊。

○「歌仙絵巻『市中』の巻」　三重県連句協会刊。同会二十周年記念で発句以下の句毎に絵であらわすもの。

○連句集「轣轆帖」　元理事鈴木漠氏著。

○「あしたの連句」第二号　あした連句会刊。

○「風」　京都府連句協会刊。国民文化祭プレ百万遍連句大会の全作品収録。

○「次世代の俳句と連句」　大畑健治氏著。

○「連句集　縁」　連句協会理事岡本眸氏著。国民文化祭等各入選作二百余巻の大著。

○「すみだの風」　連句協会直営の中央連句会刊。二百回記

念として、百一巻と思い出話等。

○合同句集「百千鳥」　くさくき北九州支部刊。支部設立四十五周年記念。俳句と連句で構成。

○「草門帖　5」　草門会刊。六年間の例会作品とグループ作品併せて九四巻。

○「宮城県連句協会会報」第十一号　同協会刊。

○「桃雅懐紙」桃雅会機関誌　季刊発行で第五十号。

○「西北の風」　稲門連句会刊。月刊。一年半経過。

○「連句集天の川」　天の川連句会刊。

○「連句大会作品集」　みえ県民文化祭文芸大会連句大会実行委員会刊。県内募吟入選作を収録、同時に当日の講演資料「三重県連句協会二十年のあゆみ」も配布。

○「解纜」二五号　解纜刊。定例会作品を収録。

○21世紀日本文学ガイドブック⑤「松尾芭蕉」　佐藤勝明氏編。芭蕉とその作品鑑賞の多角的ガイド。

○「連句しませんか　V」　やまぐち連句会刊。第五回山口県総合芸術文化祭「連句大会」の記録集。

○論文「旧派の連句における蕉風の継承」　常任理事二村文人氏発表。「日本文学」二〇一一・九

○「現代連句入門併せて俳諧新歳時記」　副会長中尾青宵氏著。

完全プライベイトなものと、行事の方で紹介した分の報告書は、割愛した。

平成二十三年　主要連句行事一覧表

月	日	協会行事	諸行事
1	29	常任理事会（日本青年館）	
2	1	連句協会報178号発行	2／13　連句を楽しむ会（浦和）
3	5 27	理事会（日本青年館） 総会・全国大会　中止	
4	1	連句協会報179号発行	4／21　亀戸天神奉納正式俳諧 4／29　えひめ俵口連句大会（松山）
5	21	理事会（日本青年館）	5／4　心敬忌（伊勢原） 5／22　花袋連句大会（館林）中止 5／29　大山阿夫利神社正式俳諧
6	1	連句協会報180号発行	6／4　猪苗代兼載五百年祭＋1（会津若松） 6／19　青時雨忌正式俳諧（東京浅草）
7	2	理事会（日本青年館）	7／18　連句フェスタ宗祇水（郡上八幡）
8	1	連句協会報181号発行	8／3～5　夏休み子ども連句教室（徳島） 8／10　子ども文化体験教室（愛媛） 8／27　連句協会千葉県支部連句会（市川） 8／28　宮城県連句大会（仙台）
9	3 15	常任理事会（日本青年館） 平成23年版「連句年鑑」発行	9／18　岡山連句協会「曲水の宴」 9／25　徳島県連句協会連句大会（徳島） 9／26　山口県総合芸術文化祭連句大会 9／30　岐阜県文芸祭連句部門募吟
10	1 29 30	連句協会報182号発行 市民連句体験会（京都） 国民文化祭京都連句大会	10／9　浪速の芭蕉祭（大阪） 10／10　さきたま連句大会（桶川） 10／11　芭蕉祭（伊賀） 10／11　みえ県民文化祭連句大会 10／22　平和祈願連句大会（松山） 10／19　俳諧芭蕉忌正式俳諧（東京深川）
11	12	理事会（日本青年館）	11／6　其角座襲号記念正式俳諧（千葉） 11／14　甲州連句を楽しむ会発足（勝沼） 11／15　とよた連句まつり（愛知） 11／16　大分県民芸術文化祭連句大会 11／27　福岡県連句協会総会・連句大会 11／28　百万遍連句大会（京都）
12	1	連句協会報183号発行	12／11　俳諧時雨忌連句会（東京王子） 12／11　宗祇白河連句賞募吟紀行（白川）

作品

—連句グループ五十音順

歌仙『菊の香や』

菊の香や太刀を佩きたる白拍子　本屋良子捌

雲居の雁に届く笙の音　本屋良子

大盆地今宵は月の器にて　服部秋扇

黙して歩むターバンの列　永禮未鬼

賑やかな人種の坩堝テント村　高澤貴々

苺のジャムのとろ味ほど良く　赤坂南天

石橋を渡りて深き夏木立　黒瀬琢葉

走り過ぎたる赤い自転車　内藤秀穂

アイドルを夢見る娘初デート　勝又丘女

妙に気になるスカートの丈　青山牛蟹

抱き寄せる破顔はやがて真顔へと　貴

個人情報まもり餓死する　天

繋がれて主待つ犬に寒の月　葉

昔語りに祖母の湯たんぽ　穂

豊かさは心にありと教へられ　女

網を繕ふあすは海明　蟹

三陸の丘にやうやう花便り　直

戯れてゐる蝌蚪と少年　古川直

春の風湯気の中から饅頭屋　古田もえ

聞き納めする談志毒舌　鬼

難しき現代アートの先を読む　貴

愛想笑ひでその場ごまかし　天

青蚊帳に守られふたり別世界　葉

薔薇のＴＡＴＴＯＯはいよよ妖しく　穂

裏路地のバーのマスターぬらりひよん　女

やつと慣れたる下町の水　蟹

売り出したスカイツリーの搭乗券　直

山並はるか帰心切々　え

月今宵旅立つ姫の暇乞ひ　鬼

落鮎焼きてゐる父のひと節　貴

バイロンの詩集にはさむ初紅葉　天

波瀾に満ちた後の人生　葉

サバンナに象の家族を追ひかけて　穂

たたら踏みつつ思ひ西へと　直

束の間の花を愛でをり退院日　え

御陵の濠を渡るてふてふ　女

蟹

平成二十三年十一月　五日首
平成二十三年十二月十四日尾　（文音）

『モアイ像』

順候式歌仙

宇咲冬男捌

(起)春秋や夏日負い継ぐモアイ像　宇咲冬男
(オ)少年の採るパパイアマンゴ　宮本艶子
高級な食品店の支店出て　田口晶子
集め始めし織コースター　冬男
復活の観月楼に人の列　艶子
やや寒となる終電ホーム　晶子
(ウ)(承)蓑虫のこんなところに揺れている　冬男
間違いました待合せ場所　艶子
赤い糸切れずにふたり旅仕度　晶子
そばとうどんをまちまちに取る　冬男
信濃路の辻々に立つ道祖神　艶子
遺跡あまたを廻りきれざり　晶子
雪月夜明けても光り雪と月　冬男
凍てを撥ねのけ割る吟醸酒　艶子
彩つくし東京タワーノーブルに　晶子
じゃんけんで決め乗る人力車　冬男
花おぼろ眠たきほどの波の音　艶子
雅やかなる佐保姫の舞　晶子
(オ)(転)牧場の虹縦横に飛び　冬男
アルプス駆けるハイジとペータ　艶子
綿菓子のように浮きたる雲一朵　晶子
煉瓦家並のおもちゃめきたり　冬男
林間に見えかくれする子鹿いて　艶子
弥陀三尊に灯し涼しき　晶子
AKB48組むバンド　冬男
恋の相手を選びかねたる　艶子
美しき顔より心根の良さが欲し　晶子
愛し続けて夜叉となるとは　冬男
月光に毒を吐きいる毒茸　晶子
雨さみどりに竹を伐るなり　艶子
(ナウ)(結)大気澄む鞍馬貴船を通り抜け　冬男
太極拳の近む競演　晶子
国々は橋の長さを自慢して　艶子
トイプードルといつもの散歩　晶子
天守閣登えほろほろ帰り花　冬男
初荷を飾るとりどりの旗　艶子

平成二十三年七月一日首
平成二十三年七月十五日尾
（於・上野・東京文化会館）

歌仙『桐雨忌や』

(起)桐雨忌や俳諧は酒飲めてこそ　白根順子捌
(オ)風の自在に育つ蘗　白根順子
知らぬ間に熊ん蜂の巣作られて　竹本いくこ
育ち盛りの子が気がかりに　矢倉澄子
月代の広がってゆく湖の面　順
首を垂れて稲穂きらめく　い
(ウ)承爽やかにアオザイの彩移る街　澄
緊急のメモ握る高官　順
政変に最後の夜を契るなり　順
本尊様は一尺二寸　い
しんしんと鍾乳洞に積る時　澄
はるか彼方を貨車の行くらん　い
夏の露静かに宿す月明かり　順
髭うっすらと階へ涼みに　順
元気だせ相撲に怪我はつきものだ　い
生みの親より頼る親方　澄
花片片こころの花の木はこの木　い
弥生の空に烟る山並　順
(ナオ)転若駒の蹄の音の窃して　澄
産土神に雨を乞う人　い
大地震の跡が地層に幾重にも　順
しかと刻める更生の夢　澄
雪女郎思いの丈を吐いてみる　い
純潔ゆえの冷えしからだよ　順
恍惚の時はこれまでケーキ食む　澄
連絡船はぎゅうぎゅう詰めで　い
中国の日本経済狙い撃ち　順
草食系は鳴かず飛ばずに　順
ゆっくりと更待月は雲を透き　い
無聊なぐさむ蟷螂の斧　順
(ナウ)結裏窓にワイン静かに醸されつ　澄
祖父の遺愛のイーゼルを立て　い
セピアとう色の豊かさおもしろさ　順
鯉の跳ねおり長閑なる午後　順
借景に遠富士を置く花の庭　い
光こぼれるレガッタの櫂　澄

平成二十三年四月二日首尾
（於・上野・東京文化会館）

歌仙『秋刀魚船』

(起)秋刀魚船吃水深く入港す　川岸冨貴捌
(オ)中天渡る今宵満月　川岸　冨　貴
新絹を奥の座敷に整えて　高橋たかえ
祖母の笑顔を送る写メール　江森京　香
紋入りの螺鈿の盆を気にいられ　冨
飛石に置く落葉ひと片　京
(ウ)承冬の灯に三味の音いろのしんみりと　冨
胸の扉を開けられいたり　冨
知らぬ間に盗み取られし何もかも　京
愛別離苦は生きいる証拠　京
拉致のこと何故かこの頃なおざりに　冨
漫画喫茶にニートたむろす　京
夏月へ救世観音の眉美しく　京
軒に吊るせるほうたるの篭　冨
プロジェクト組んで企業を立ち上げる　京
藻を燃料にするをもくろむ　冨
追いかけて蝦夷は万朶の花の旅　京
朧々に語り部の声　〃
(転)山を下り鹿の子は人に馴れ切って　京
(ナオ)漢方薬に頼る腰痛　冨
インドへと続くロードの果てしなく　京
手品のように早い掛算　京
惜しげなく吟醸を酌む掘炬燵　京
夢とは知らず雪女郎抱く　冨
絵草紙に宮居の朱の麗しき　京
竹刀を振る豆剣士達　京
ハンバーグ・カレー唐揚げスパゲッティ　〃
ぼくの新車は燃費優先　京
指笛を月に捧げる湖の精　冨
風に研がるる鵙の速贄　京
(ナウ)結蔦紅葉名残のいろを紡ぎおり　京
遺品整理はプロにおまかせ　京
お宝はエミール・ガレのガラス壷　冨
形いろいろ菓子舗のどやか　京
花一樹いのちの丈をときめかせ　冨
大路に香る春の糠雨　京

平成二十三年十月十五日首尾
（於・上野・東京文化会館）

歌仙『冬枯れや』

冬枯れや心の枯れは許されじ　中野稔子捌
(オ)起　凍える池にちぢこまる亀　稔子
巡り来し三彩の皿飾られて　渡部春水
数多の品はすべて名品　山田他美子
月清し留学生は学位受け　稔
秋の深さに聴きしビオロン　春
(ウ)承走り蕎麦力一杯捏ね上げる　水
国の進路に持論滔々　他
女子アナのニュースの出番まち焦がれ　美子
ファンレターの部屋にどっさり　他
手料理を味わいもせず求め合い　稔
遠ざかり行くディーゼル列車　春
病むひとに梅雨満月の見え隠れ　水
冷夏の露地に祝詞流るる　他
お土産に駱駝の乳のチョコレート　稔
小さきポケット膨らます夢　〃
ボンボリのゆらりゆらりと花の山　秀
春を惜しみて交わす盃　春
(ナオ)転新社員ビルの階段駆け上り　秀
(ナオ)忘れてならじ会議議事録　春
皇統を稗田阿礼語りだし　〃
大和島根の千代に八千代に　稔
四畳半炬燵に項赤く染め　春
雪をも溶かす背徳の情　他
ギャンブルに家産のすべて灰となり　春
弥勒菩薩の時間空間　他
編物の教室ひらき人気讃　春
縦と横とに絆深まる　稔
タンカーに日の丸靡く月の海　秀
文化使節の茶会爽やか　稔
(ナウ)結待ちわびし丹頂鶴の姿見え　〃
ぴたりと決まるカメラアングル　他
趣味高じプロの世界に入るとは　春
北窓開き幸を呼び込む　〃
花錦古城を守る刀自白寿　稔
スカーフ揺らす青陽の風　他

平成二十三年十二月二十三日首尾
（於・上野・東京文化会館）

歌仙『歌留多箱』

次山和子捌

歌留多箱朱房の紐のうやうやし　次山和子
(オ)起　初声渡る松生ふる庭　川上綾子
つれづれにパズルのピース合わせいて　佐々木彩女
科学する子の瞳聡明　綾
天心の月はあしたを約束し　和
高きヒールで街の爽やかふるワールドカップ　彩
(ウ)承新蕎麦のはためく幟際立てる　和
峠を越えるハイブリット車　綾
山頂の社に享ける守り札　彩
愛のザイルは君とがっしり　和
永遠契り胸の鼓動は足裏まで　綾
羊の群れの急ぎ牧舎へ　彩
耿耿と夏の霜置く湖の端　綾
青き林檎がテーブルの上　和
シングルのB面を聴くなつかしさ　彩
大盃で地酒味わう　綾
城址に花爛熳の見得を切り　和
遅日の苑に雀鴉と　彩
(ナオ)転東北の苦悩に揺るる苗代田　綾
杖を頼りに寺の階段　〃
公民館歴史講座の熱っぽく　和
背文字の金の辞典ずらりと　彩
駅前に待てばいつしか雪まじり　綾
闇に崩るる冬薔薇の紅　和
ホテルより南米行きを予約して　綾
ファンの昂ぶるワールドカップ　〃
Tシャツの胸にイニシャルくっきりと　彩
ゴッホも真似る浮世絵の技　和
糸杉の影も失せたる望の月　彩
みのむしの衣綴れ織りとも　和
(ナウ)結箱書の墨色褪せず後の雛　綾
座敷童の蔵に隠れる　彩
平泉世界遺産に蘇り　綾
憂さを捨て去る虫出しの雷　和
花見船街騒唄で押し戻す　彩
未来図しかと麗かな日日　綾

平成二十三年一月三十日首尾
（於・上野・東京文化会館）

十八韻順候式雪月花　『尾越の鴨』

後藤典雄捌

(起)(オ)沼光る尾越の鴨の消えし　後藤典雄
釣瓶落しに迫り来る　石井季康
歌乗せて回遊バスの過ぐるら　松澤晴美
背筋を伸ばし寒葵立　川上綾子
(承)(ウ)大雪の任地へ辞令携え　中野稔子
何くれとなく世話好きな　矢倉澄子
バーボンの酔いが言わせるプロポー　岸田芳雄
真赤なドレスひしと抱き寄　綾子
地平線その果てに見るあすの　澄子
磯巾着は珊瑚になれ　晴美
(転)(ナオ)病むひとへ春月の窓開け放　季康
エスプレッソの香り豊か　芳雄
お旅所に渡御待つ神輿夏　稔子
浮人形の走りまわれ　典雄
どよめきは鑑定団のサプライ　稔子
衆参院のねじれ許さ　芳雄
(結)(ナウ)花灯籠灯れば未来燦然　晴美
色なき風の過ぎ去りし　季康
黙とじズる祭にちぬ夢せズ女てつん闇後　稔子　典雄

平成二十三年十月二十六日首尾
（於・江東区芭蕉記念館）

十八韻順候式雪月花　『寒土用』

江森京香捌

(オ)起　静電気ぴりりと走り寒土用　宇咲冬男
　杜氏の唄のひびく酒蔵　江森京香
　書き溜めし原稿の嵩整いて　白根順子
　すぐに芽を出す庭の雑草　伊藤稜志
(ウ)承　斑雪天城越ゆれば海展け　角田双柿
　ためらいながら解く帯紐　関根雪子
　宿に入る睫毛の奥に妻の顔　高橋たかえ
　教育勅語図書館にあり　三澤律乃
　どうなるの金正恩の拉致と核　川岸富貴
　心太吸う門前の茶屋　山司英子
(ナオ)転　ほととぎす鳴くを待ちいる明けの月　京
　白内障の手術成功　稜
　終戦日遺影の父の年を越し　順
　忘れ扇にうすき筆あと　子
　デパートの歴史を語るライオン像　た
　スイス時計のしゃれたデザイン　律
(ナウ)結　雨風に濡れて艶めく返り花　富
　微動だにせぬ勝独楽の芯　双
　　雪

平成二十四年十二月十二日首尾

（於・熊谷市徳樹庵）

《東京・あした日比谷連句会》

十八韻順候式雪月花　『冬　紅　葉』

竹本いくこ捌

(起)(オ)冬紅葉旧街道を染め尽くす　竹本いくこ
　連れだって来る蔵入りの人　宇咲冬男
　レシピ本書店コーナー占めていて　次山和子
　気持よさそに子猫居眠り　渡部春水
(承)(ウ)春雪を積んで北より貨車の列　和子
　同窓会に顔見せぬ女　冬男
　胸痛む風の便りに俺似とは　い
　仏さまだけ知っていること　冬
　この国の十年先はいかならん　和
　海水浴にはしゃぐ腕白　春
(転)(ナオ)焼酎の酔いを醒ましに月仰ぐ　和
　西田敏行望郷の歌　〃
　とりどりの秋果籠から溢れ出て　冬
　ミレーの額に至る夕冷え　〃
　下駄飛ばし競技に鬱を晴らしたる　和
　丘の彼方にたなびける雲　〃
(結)(ナウ)帰り花目立たぬ様に生きて来し　春
　日にこぼれ落つ若水の綺麗　和

執筆　春　和　〃　冬　〃　和　〃　春　和　冬　い　冬　和

平成二十三年十一月九日首尾
（於・日本記者クラブラウンジ）

二十韻　『校正紙』

橘朱鷺子捌

残暑厳し赤ペン滲む校正紙　　橘　朱鷺子
　机辺に届くひぐらしの声　　浜口泰子
夕月を仰ぎてしばし憩ふらん　　篠原正行
　タクシー乗場長い行列　　田口光子
ウモネの庭四国にありと聞かされて　　清川みゆき
　待合せには睡蓮の池　　大谷似智子
御輿舁く粋で鯔背な佳い男　　酒匂道代
　なでしこジャパン世界一なり　　似
スカイツリー634に新技術　　泰
　震災復興宝籤買ふ　　道
ナオ将来は音楽家の夢果たさむ　　泰
　砂漠生れの猫は鼻ぺちゃ　　み
雪嶺にザイルでつなぐ君と僕　　行
　炬燵でじゃれる淡月の宿　　似
あでやかに微醺で結ぶ紗綾の帯　　行
　伊万里の小鉢蛸の酢の物　　光

ナウ嬰児は口をすぼめて乳求め　　道
　趣味は山ほど老いののどらか　　朱
長谷寺は観音様と花吹雪　　道
　香の流るる風光る廊　　似

平成二十三年八月九日首尾
（於・中央林間連合自治会館）

歌仙『音無しの』

大谷似智子捌

音無しの構への鴉冴返る　高木厚子
梅馥郁と穏やかな苑　大谷似智子
雛の客ジーパンの膝揃へゐて　橘朱鷺子
礼儀正しき男の子もてなす　古谷義次
空仰ぎ今宵は楽し月も輩　篠原正行
芸術祭の目立つポスター　浜口泰子
山粧ふ「ニーハオ」交すバスの中　酒匂道代
嬌声何と幼な馴染みで　厚子
さりげなく腰に回る手懐かしき　清川みゆき
凱旋門で知りし酒の名　朱
雑踏をすいすい抜けてキッシュ買ふ　田口光子
肥満の犬のひたに後追ひ　行
噴水のしぶきを浴びてはしゃぐ児等　泰次
涼しき月に覚めるうたた寝　道代
宝くじ黄袋に入れ神棚に　厚
縁起かつぐは専ら婆さま　みゆき
花が好き電車が好きでいつも留守　朱
凩合戦にピント合せる　大谷似智子
はらからと続く宴に春の雪　内山良子
皇室談義身振りおおげさ　良
こっそりと表参道のギャラリーへ　光
M9・0の地震に戦く　泰
三寒を耐へて避難に夢届け　次
脱サラを決め励む麦蒔　道
ラブレターならで婚儀のお知らせで　厚
熱き思ひに涙止まらず　みゆき
鮫小紋袿の裏に雅号染め　朱
大向うより芝居見物　よしみ
五重塔影堂々と月の窓　子
をちこちで鳴くえんま蟋蟀　良
好物の栗羊羹を頂きて　光
リハビリを兼ねゴルフスイング　泰
骨董の香炉求めて伽羅を薫く　道
怠けちゃ駄目と親父厳命　厚
自分史の余白を埋める花吹雪　似
雲は流れてのどかなる野辺　行

平成二十三年二月六日首
平成二十三年四月六日尾　（文音）

歌仙『薄氷』

古池保男捌

薄氷を透かせば遠く幼き日　古池保男
　長閑な空に遊ぶ浮雲　桜井浩嗣
蓬餅作る厨の賑やかに　山口光子
　糊のきいたる白きエプロン　渡部多勢子
橋いくつくぐり離宮へ月見船　山田宏
　宴盛り上げる酒にからすみ　多
菊ウの香に故郷偲ぶ歌低唱　浩
　床の間を背に仕舞一差　保
師匠への憧れやがて愛となり　光
　死語とはならぬ「老いらくの恋」　宏
被災地に希望の光孫誕生　宏
　山野に響く暁の鐘　多
町毎に祭囃子の稽古中　浩
　ガラスの鉢に月とひやむぎ　保
特選に輝く小さき抽象画　光
　芸術論で太郎爆発　多
振袖を競ふ乙女に落花霏霏　浩
千年の古都蝶の舞ひ立つ　保
亀ナオの鳴く池に影置く五重塔　光
　小径たどれば哲学の道　多
ベンチには誰が忘れしか「智恵子抄」　宏
　閲覧室はしんと静もり　浩
大寒の中ひた走る陸上部　保
　湯気あげて待つ地鶏寄せ鍋　光
衝立の向かうはすでによき機嫌　宏
　上手に酔うて口説かれしふり　多
歩めども又遠くなる君の家　浩
　いたづら好きの河童棲む沼　保
茅葺きの屋根にほんのり月にほふ　光
　旅の馳走は柚味噌栗飯　多
伸ナウびやかに一糸乱れぬ雁の列　宏
　手本は常に碑銘拓本　浩
中央に偉人像立つ憩ひの場　保
　遊具待つ子等軽く足踏み　光
陸奥の地よりうれしき花便り　多
　思ひ遣るなか弥生尽なり　宏

平成二十三年二月二十五日首
平成二十三年三月三十一日尾
（於・飯田市東野公民館）

歌仙『城守り』

涅槃(ねはん)西風(にし)築四百年の城守(しろも)りに　　山村としお捌

高石垣をめぐるつばくろ　　福井健二

長閑さをよそに窯入れいそがれて　　森田満枝

我等ふるさとUターン組　　山村としお

幹事殿準備おさおさ縁の月　　梅田　徹

黄葉(もみじ)紅葉(もみじ)の極む彩り　　町野正子

ウお勧めの新酒利酒酒付きの蔵　　恒岡弘二

嚔鑠(かくしゃく)としてオンステージへ　　峠　美晴

情感の韓流騒ぎさめやらず　　田中とし子

逢えぬ刻こそ深みゆく愛　　福森豊子

封筒と抜いた指輪の白い箱　　平島由季子

バギー車借りて走る草原　　満枝

月すずしゲルの集落訪ね来て　　正子

天地にわかに怒る雷神　　とし子

真之(さねゆき)の豆ぽりぽりと艦の上　　美晴

人の絆で守る太平　　豊子

里山の樹齢の花にあるみやび　　由季子

豊かな水を張りし蛙田　　徹

山村としお捌

ナオ内定の少し危うき万愚節　　徹

奮発をして舶来のペン　　満枝

自分史の上梓祝いの招待に　　正子

吊りしままなる背広ワイシャツ　　としお

一〇分の勝負でありし福袋　　満枝

ペアーで招待雪見名湯　　正子

此の思い出すチャンス窺いし　　徹

化粧念入りスノボースクール　　美晴

不動さん大願成就札納め　　豊子

タッチパネルでさっとページを　　とし子

子の描く月で餅つくドラえもん　　美晴

奥へ奥へと探す橡(とち)の実　　豊子

ナウやじろべえ夜なべの作は親父似に　　とし子

草食系の人増ゆる頃　　由季子

牛たちは被曝の山野さまよいし　　岡本敏子

豊漁報せに喜色満面　　弘二

咲き盛る花の声とも思われて　　としお

入学式の校歌高らか　　徹

平成二十三年三月　五日首
平成二十三年五月二十五日尾
（於・伊賀上野城他）

歌仙　『築四百年上野城』

梅田とほる

冴え返る築四百年上野城　梅田とほる
　北窓開き浮かぶ遺訓書　山村としお
山笑ふ市長忍者の衣装にて　森田満枝
　おまけするねと飴秤り売り　とほる
降りたちて駅前更けて月の宿　満枝
　そぞろに寒し出湯にぎわう　町野正子
ウ紅葉越え鹿も落ちるという渓間　としお
　ためらいながら傘に寄りそう　正子
文豪の熱き遠き日忍ぶ町　満枝
　引出物とてでかきおしもん　としお
陶工の伝統繋ぐ七度焼　とほる
　さんづけで呼ぶ翁の故郷　満枝
奥の院秘仏にひそと月涼し　正子
　蝉鳴く積殖の父子の対面　としお
地震鎮む要石あり指呼のうち　満枝
　相場旗振り見し遠眼鏡　とほる
守り継ぐ由緒の花の今盛り　としお
　兼好ゆかりの茶摘み唄聞く　正子
ナオ母子餅二十面相聞きながら　とほる
　さんしょううおの飼育観察　満枝
幾萬年埋もれて貝の夢は何　正子
　美味酒醸す湧き水の米　としお
門外の辻の仇討ち枯れすすき　満枝
　鳴塚の辺にもがり笛吹く　とほる
川上は乙女の里と聞きしより　としお
　茶屋の潜り戸手と手離さず　満枝
組台にネクタイ紡ぎ心燃ゆ　とほる
　与右衛門坂は隈路坂とや　正子
西へ発つ同母弟を送る望の月　とほる
　萱原続く火口稜線　としお
ナウはやされて鬼きおいづく在祭　正子
　思いぶつける熱血巡査　とほる
観世流演じ後世に伝えんと　としお
　庵の文書に揺れぬ蕉風　とほる
名にし負う高石垣の花万朶　満枝
　D51残す若芝の苑　正子

平成二十三年四月二十日首
平成二十三年六月十七日尾
（於・伊賀上野絵手紙いろはアトリエ）

歌仙『天井絵』

加藤祐子捌

涼気満つ山寺飾る天井絵　加藤祐子
曝書の縁に及ぶ鐘の音　道満光子
クルーズに夢を馳せつつ参加して　岡本眸
帽子さまざま羽根の華やか　祐
薄雲を脱ぎて明月黄を放ち　光
瓢ゆらりと広き庭園　眸
人(ウ)気呼ぶ龍と龍馬の菊細工　光
とび込みたいと思う彼の胸　祐
メールにて送り続ける愛の詩　眸
尖閣事件デモる中国　光
円高はあちら良けれどこちゃ悪い　祐
冬将軍の睨む繊月　眸
寒鮒の跳ねるばかりに焼き上げて　西本加代
じまん話に余念無き爺　祐
狂いたる体内時計処理できず　加
読めても書けぬ漢字あれこれ　眸
ハーレーの新車に舞える花吹雪　加
春天映し光る湖　祐
ベンチ(ナオ)にてこくりこくりと目借時　眸
不倒翁ちょう異称おかしき　加
諦めず研究すればノーベル賞　祐
こつこつ貯める箪笥へそくり　眸
アルコールゼロのビールで乾杯し　加
迷い込んだる夕立の墓地　祐
処女詩集「くじけないで」は百万部　光
次から次と励む婚活　眸
いつしかに愛する妻の膝枕　祐
夕べの池に鳥の動かず　光
病棟を包む月光(ゲ)澄み渡り　眸
子等を眠らせ冬支度する　祐
干柿(ナウ)のずらりと並ぶ見事さに　光
犬の散歩は足の向くまま　眸
合格を絵馬に托して宮詣　祐
手本にしたき人の数々　光
満開の花は裾野を染め尽くし　祐
雲の彼方へ伸びる連凧　眸

平成二十二年九月二十四日首
平成二十三年一月二十七日尾
（於・石手寺安養閣）

歌仙『師のこゑ』

石渡蒼水捌

九十九折辿り師のこゑ庵小春　石渡蒼水
　蒼空に円描く隼　宮澤次男
追懐の風土記さまざま繙きて　中根明美
　道行く人も足止めて居り　田中てつ
煌めきの寄せる甍に望の月　渡辺日出子
　影が遊ばむ吊し干柿　水次
ウ浦祭幼馴染の伊達姿　美て
　消えた手帳がまだ見つからぬ　日
優雅なる元禄絵巻胸熱く　水
　忍ぶ気持が又疼き出す　次
答弁の失言続く閣僚よ　美
　につちもさつちもいかぬ沖縄　て
月涼しダムの裏山孤独めく　水
　喉震はせて河鹿鳴きをり　次
訪ふ客に碑語るボランティア　日
　心の錆を磨くとき有り　日
故郷の自慢の地酒花の宴　水
　感動を呼ぶ入学の歌　次
桐ナオダンスをり目正しく胴着脱ぎ　日
　都会で肥るホームレス猫　水
展示するシーラカンスが泳ぐゆめ　次
　遺品となりし筆紙墨硯　美
塾帰り吐く息白し遠汽笛　日
　雪合戦は親が夢中に　て
碧眼も異国に習ひ高島田　水
　太腿露バラの刺青　次
そそくさと化粧すませて立つ鏡　日
　古伊万里の皿重文となり　て
飛び発ちしドクターヘリを月照らす　水
　うるか携へ釣り仲間来る　次
ちヨがみの奴振り向く紅葉宿　美
　ナビを頼りに探す名刹　日
老いの字で日付書かれしカレンダー　て
　修羅の巷は陽炎の中　水
花守に番号札を渡される　美
　おたまじやくしの群れる沼の端　次

平成二十三年十二月　五日首
平成二十三年十二月十八日尾
（於・伊東市宮澤庵）

半歌仙　『急転直下』

宮澤次男捌

鳶の輪の急転直下冬の風　石渡蒼水
うす紫に炭焼の烟　宮澤次男
幾歳の農日記読むつらつらに　中根明美
やっと見付けた棚のドーナツ　田中てつ
設えて縁の秋草月を待つ　渡辺日出子
筒に澄む水寝台の旅　水
四ウ次元の絵画に迷う美術展　次
パウル・クレーの魚日本に　美
合コンの彼の話に引き込まれ　て
はやる気持ちをぐっと押えて　日
訪いくれば無住の寺に潮騒ぐ　水
将軍様の遺言は何　次
のそりと月そしてそれから蛍吐く　美
山の別荘蛇の脱け殻　て
高速路第二東名歩く会　日
戦時の暮し今に活かさん　水
肩組んで寮歌謳わん花筵　次
遥かかなたに霞む思い出　美

平成二十三年十二月九日首
平成二十三年十二月三十日尾

（文音）

歌仙『春の虹』

東への架け橋となれ春の虹　　源　桃子
　枝垂れ柳の撫でるせせらぎ　　前田明水
蝶の影障子にゆらり映りいて　　林　ジョウ
　仮寝の耳にゆるき琴の音　　濱田光子
月の道遠回りしてダイエット　　千場ひで子
　にがうり料理おふくろの味　　明水
新(ウ)走り薄い絹目に包まれて　　桃子
　規制廃止で増える広告　　ジョウ
許されぬ仲と知りつつ恋に落ち　　光子
　モンマルトルはペアールックで　　ひで子
ちょび髭についい買わされた古い壺　　桃子
　急反落の株を検索　　ジョウ
濡れ縁に月の涼気の満ち満ちて　　ひで子
　将棋の駒はペンタゴンです　　光子
佑ちゃんの百戦錬磨スタートし　　明水
　相模の灘に騒ぐ黒潮　　ひで子
遊ぶ子に無心の花の降りそそぐ　　桃子
　猫の和毛を分けるこち風　　ジョウ
日射し受けお玉杓子の遠近に　　明水
　大道芸の手毬高々　　桃子
夢ならば覚めて欲しいと抓りつつ　　光子
　呪文忘れてできぬ変身　　明水
原発を想定外と言わせまじ　　ジョウ
　ビッグバンから宇宙始まる　　光子
筆とればすさび書きにも君いとし　　ひで子
　草の褥の甘いささやき　　桃子
艶福と知らずに契り素寒貧　　明水
　土器投げの深い渓谷　　桃子
カリスマの船頭の舵月冴える　　ジョウ
　冬の温みに迷う腹巻　　光子
職(ナウ)人の技と年季の桐箪笥　　明水
　押して駄目なら引いて解決　　桃子
みちのべの神に過分の願いごと　　ジョウ
　卒業名簿セピア色して　　光子
ふるさとの訛り飛び交う花の宴　　ひで子
　気合い揃って揚がる連凧　　千場ひで子

平成二十三年四月十七日首尾
（於・伊勢原シティプラザ）

歌仙『刳り舟』

伊藤貴子捌

刳り舟に乗せてやろうか亀の子　伊藤貴子
　キャンプ場から弾む歌声　沢木小雪
当番はじゃんけんぽんで決められて　大矢静江
　名人クラス囲碁の選手は　新井秋芳
黒き雲風が払いて月さやか　木暮佳右
　しきりに落ちる木の実いろいろ　相良知子
低音（ウ）の虫の音あらば聞かせてよ　松岡世喜女
　四面菩薩をめぐる二人で　静江
アオザイの魔性の赤にめくるめく　貴子
　惚れたはれたも今宵限りに　秋芳
携帯の電池が切れておりまする　貴子
　急いで帰る用もなけれど　知子
寒むざむと満月これが最後かと　秋芳
　かじけ猫待つあるじなき部屋　佳右
子規堂にランプ七輪置かれあり　世喜女
　健康法の箇条書して　知子
托鉢の僧に落花の降りそそぎ　世喜女
　正ちゃん帽に揺れる風船　秋芳
山間の雪解けぬかる鬼の道（ナオ）　貴子
　後三年駅あっと素通り　佳右
置屋から急ぐ木履だらり帯　静江
　おひさしおすなぁうちうれしゅうて　貴子
釣忍ひょっとしたらとときめける　知子
　ウエディングベル高らかに虹　静江
タンデムの銀輪軽く出雲路を　佳右
　どじょうどじょうと野田新総理　秋芳
公務員宿舎建設凍結に　〃
　箱物好きに土産大きく　貴子
月の宴テレビニュースでちらり見て　〃
　琴奨菊力士菊の香　佳右
着々（ナウ）と出航準備秋刀魚漁　秋芳
　佃煮作り大鍋を出し　静江
献饌の神のお下がり茶碗酒　貴子
　友の繰言まぜっかえして　佳右
満開の花の上行くモノレール　秋芳
　春彩を盛るショーウインドウ　静江

平成二十三年八月十一日首
平成二十三年十月十三日尾
（於・千葉市若松公民館）

二十韻　『初霜の』

新井秋芳捌

初霜の鳴弦的を射抜く音　新井秋芳
山茶花の散る学び舎の垣　伊藤貴子
野点傘お薄一服いただきて　大矢静江
記念に拾う小石うつくし　相良知子
有明（ウ）に出勤前の身支度を　木暮佳右
たしかに彼の気配爽やか　貴子
合コンはライトアップの紅葉ツアー　秋芳
悪い噂を聞きつけてくる　静江
TPP瑞穂の民はどうなるの　貴子
無関心派は成りゆきまかせ　佳右
蛸（ナオ）の足みんなで喰って食べ尽くす　静江
父の篠笛月も涼しく　知子
流れゆく水面に浮ぶ金モール　佳右
笑顔を乗せて回転木馬　静江
息熱くヘレン・パリスと闇に消え　知子
余韻引きずり劇場出でし　貴子
ナウ（ウ）ポイントに釣られついつい無駄遣い　知子
屋台並びて彼岸寺前　佳右
爛漫の花に酒宴の酣に　秋芳
筑波まじかに麗らかな里　知子

平成二十三年十一月十日首尾
（於・千葉市若松公民館）

歌仙『切れ字談義』

二村文人捌

果てしなき切れ字談義や日の永し　杉本　聰
ほつほつ開く庭の木蓮　宇野恭子
靴の中猫の子二匹たわむれて　大島朋子
厨仕事に落とすマニキュア　川井城子
宿題の微分積分月円か　いぬじま正一
宅配便にちちろ鳴きやむ　城
ウハロウィーンの仮装パーティー飛入りも　三谷貴志夫
忘れて帰る赤いスカーフ　長谷豊子
痩身に母の面影重ね見る　夫
庭下駄並ぶ沓脱の石　朋
吹上げのしぶきが濡らす繊き月　城
ピシャピシャ叩くステテコの膝　聰
チャンスにも点の入らぬもどかしさ　一
一人にふたつ配るおにぎり　夫
ひろがれる瓦礫のかなた海静か　朋
行方も知れぬ蒲公英の絮　聰
目隠しの鬼へ手を打つ花盛り　一
傘寿の遍路マイカーを駆る　夫
ナオ草食系の囀りて　城
前座修業の厳しさに耐え　聰
生涯を一陶工で悔いはなし　恭
スカイツリーの高き料金　同
豊作も掘らぬ大根雪深く　一
孫にそろいの襟巻を編む　豊
偏頭痛下呂の膏薬効きめあり　朋
同床同夢同級の仲　夫
添わざりし訳を誰もが知りたがり　一
批准待たるるハーグ条約　聰
月の弓ブランコ掛けて揺するリス　朋
思いがけなく太き間引菜　恭
ナウ宿坊のひと品うれし土瓶蒸し　豊
盃干せばすぐに注される　夫
節電の街は空巣が増えたとか　朋
サムライもよしなでしこもよし　夫
大辞典枕に仰ぐ花の枝　聰
空いっぱいに笑う山なみ　恭

平成二十三年二月十八日首
平成二十三年七月十五日尾
（於・南砺市井波総合文化センター）

二十韻　『枯尾花』

二村文人捌

寺院めく古き駅舎や枯尾花　　長谷豊子
　干菜の竿にかかる半月　　いぬじま正一
独り住むラジオの音を高くして　　川井城子
　セールスマンは誰もにこやか　　宇野恭子
新（ウ）作の水着浜辺に溢るらん　　杉本聰
　肌こんがりと裏表焼く　　大島朋子
七難を曝して迫る恋心　　聰
　躱せばぎいと軋む板の間　　豊
浮雲の重なりそうで相寄らず　　城
　孫の将来思う爺さま　　聰
門（ナオ）付の梵論師やたら首を振り　　朋
　放屁虫踏みあわてふためく　　城
医学書は書架の上段望の月　　二村文人
　ぬくめ酒酌み囲む雀卓　　雄上絹子
来し方の男遍歴語り合い　　朋
　就活よりも流行る婚活　　城
閉（ナウ）められた戸へ飼い猫は爪を研ぐ　　恭
　傘寿を期してお伊勢参りへ　　夫
豊かなる閨に座したり花の庭　　山本秀夫
　寝そべりしまま笑う山々　　絹

平成二十三年十一月十八日首
平成二十三年　一月二十日尾
（於・南砺市井波総合文化センター）

歌仙『小さき掌』

小さき掌（て）の指をこぼるる螢かな　林　宗海捌
籠の土産を放つ青蚊帳　荒井遊　糸
船の旅バッグに画材忍ばせて　野口笑女　女
羽付帽はあみだかぶりに　佐藤禿山　山
居待月ワルツ漏れ来るバルコニー　林宗海　海
歩み止むれば色葉散るなり　糸
ッもてなしは湯気の立ちたる湿地茸飯　女
失意の人と会ふ阿波の宿　海
ひそひそと寝物語は果てしなく　山
ちやん付けで呼ぶ仲の嬉しき　糸
あだ名聞き合点いつたる喫茶店　女
噂話に嘘（くさめ）する月　海
散髪を妻に任せる春隣　山
女性パワーが国を動かす　女
濡れ衣を晴らして出づる裁きの庭（ば）　糸
日本人客パリに溢れる　山
鈍色の空を見上ぐる花の冷え　海
雀の遊ぶ声は長閑に　糸
幼（ナオ）らの学校ごつこ春萌す　山
宅配ピザが届く路地奥　海
朝夕に馴染増えたる散歩道　女
疎遠の親にふみ認むる　糸
杉の葉の香り移してところてん　海
通勤ラッシュボタン千切れる　山
時を繰る定年といふその日まで　糸
閉ぢた眼で見るダリの絵心　女
映画館肩を抱かれて夢うつつ　山
ルージュを直す後朝の窓　海
満月に踊るピエロの泣き笑ひ　女
どんぐりひとつポケットにあり　糸
合併（ナウ）の余波はここにも崩れ築　海
ひらがな地名急に増えたる　山
ひそやかに思ひ出眠る蔵通り　糸
古民家茶房ジャズが流れる　女
見上げれば空を隠して花盛り　女
装ひまばゆき春のをみなご　海

平成二十三年六月二十四日首
平成二十三年九月　十七日尾　（文音）

KUSARI　『ことしの三句たち』

一月一日(土)

幸を願わん千代のこの春　(No. 95602)　あずき

花びらに陽を包むごと福寿草　ザリ

遊びせんとやこだまする声　藍

一月三日(月)　(No. 95638)

ファルーカ乗せてナイル滔々　風

風の色探しに旅に来たけれど　ザリ

詩集一冊ポケットの中　露

二月三日(木)　(No. 96252)

林檎を齧る君の白い歯　美句志

草紅葉言葉は何て薄っぺら　あずき

消去しますか保存しますか　あづさ

二月四日(金)　(No. 96261)

マックからウインドウズにする浮気　キリマンジャロ

侮るなかれ妻の六感　ゴ　ロ

玄関が今日はきちんとしすぎてる　たつみ

二月八日(火)　(No. 96339)

国技とは言えぬ姿に成り果てて　キリマンジャロ

美少女の目に星がいっぱい　麦

颯爽とリボンの騎士が現れる　兎

三月八日(火)　(No. 96868)

リンゴかじってパタと倒れて　天球

湾岸署捜査1課の逮捕状　のら

きみの虜になって幸せ　ひわ

三月十一日(金)　(No. 96942)

地震に続いて津波押し寄せ　キリマンジャロ

もう一度ガスの元栓確認を　ザリ

初めて握るこんなおにぎり　唯

三月十二日(土)　(No. 96949)

夜中まで阿鼻叫喚にうなされて　とけた

ロザリオを繰るシスターの影　たつみ

つながった携帯に言うありがとう　唯

三月二十三日(水)　(No. 97090)

氷の女王呪う長〜い物語　ふさ子

「めでたし」で終わるはずもなく　田中雅子

地震治まり原発も無し　ばらずし

三月二十九日(火)　(No. 97146)

蕾伝える春はもうそこ　天球

ゆうべ見た悲しい夢がまだ残り　藍

自分にできる事を問ふ日々　伊都

五月十日(火)　(No. 97823)

湧き上がる熱い想いをキャンバスに　おなすさん

才能という難を抱える
君は鷹それとも鳶どっちかな
五月二十八日(土)
レコードの針磨り減っていて
アナログの世界は狭くなりにけり
歩道を歩く赤い雨傘
五月二十九日(日)
心を決めてなせる告白
注水の中断などはしてません
まだ鳴りやまぬ警報機あり
八月三日(水)
去年聞いた蝉今年聞く蝉の声
生きているから連句するんだ
大空に思いきり書く好きの文字
九月四日(日)
悩んだ日々の重さ懐かし
友がみな微笑んでいる花の下
紡ぐKUSARIに10万の詩
九月八日(木)
月に浮んだ太陽の船
謎かけをする神獣がふりむいて
信じる事こそ真実の愛
九月二十一日(水)
うたた寝の覚めてもの哀しい日暮れ
することいっぱい後期高齢
ランチして脱原発のデモに行く
十月六日(木)
愛のかけらも光失くして
ニュートリノ誰とも衝突したくない
ニコヤカ仮面つけて一日
十一月二十六日(土)
追い風吹かぬ巨大帆船
海図なき旅をみちびく星ありて
淋しい吾が貰う冬バラ
十二月二十一日(水)
ダルビッシュ深呼吸して第一球
カレーライスかライスカレーか
炎昼のインドでわしも考えた
十二月十三日(火)
挨拶文に馴れぬ病名
出くわした幸も不幸も受けてたつ
漂流の果て見えた島影

タヌ公　あずき　(No. 98200)
ばらずし　和　R　(No. 98256)
ハナ　キリマンジャロ　桂　(No. 99597)
藍　ザリ　不用之助　(No. 99998)
唯　氷心　ザリ　(No. 100144)
氷心　雨乞小町　ひわ　(No. 100371)
鶫　ばらずし　露　(No. 100612)
ひわ　あづさ　唯　(No. 101454)
カンちゃん　いずみ　かよねこ　(No. 101903)
ふさ子　伊都　誠　(No. 101762)
天球　ちいばば　天球

平成二十三年一月一日～十二月三十一日
(9560～10210101より抜粋)
(於・矢崎藍の連句わーるど)

《東京・NHK文化センター青山》

歌仙『壷に花野』

和田忠勝捌

床の間の一壷に花野集めたり　柏　元　章
準備万端待てる名月　布田三保子
虫時雨ぬるい岩風呂出でかねて　河村章子
酒は吟醸珍味七品　和田忠勝
還暦の同窓会に寄り集い　田中英子
厚氷割り登校せしこと　金子富子
罪（ツミ）なきに枝に刺さるる鰯首　元
イエスキリスト慕う群衆　保
懺悔して新たな恋にまっしぐら　村井昭三
清浄無垢の乙女まぶしき　保
革命の思いを秘めて馬を駆る　昭
短夜の夢結ぶモンゴル　元
月涼し河童伝説鄙の宿　英
手打うどんの盛らる大笊　保
歯止めなき政治不信にデモの波　児
七十億の未来どうなる　元
花見みれば想いは故郷親や友　保
小学唱歌うたう遠足　昭
疎開（ソカイ）なる母への思い零余子飯　元
他人の介護に通う山道　英
修験者の目指す自在の境地なる　保
何といってもまず春は曙　游
都へと流れる水の花万朶　富
香焚き込めて霾天に耐ゆ　保
置物のごとき婆の居眠り　元
お針子の昔仕立し紬織　〃
チャリティバザー熱気溢れて　保
震災の松の延命願う日々　〃
庭師の娘梯子軽がる　英
名苑の雪吊り見上ぐ二人連れ　昭
聞くも羨しき鶴の妻問い　元
初春のセール思わず派手なシャツ　游
女子会楽し声かれるまで　勝
終電を迎えるように寝待月　保
木の実しぐれの落つる板屋根　富
疎開（ソカイ）なる母への思い零余子飯　元
他人の介護に通う山道　英
修験者の目指す自在の境地なる　保
何といってもまず春は曙　游
都へと流れる水の花万朶　富
香焚き込めて霾天に耐ゆ　保

平成二十三年十月三日首
平成二十四年二月六日尾
（於・NHK青山文化センター）

連句ＲＯＣＫデュオ　『とりどりに』

出原樹音捌

Ⅰ

とりどりに遊ぶ連歌の色葉かな　柴田彩火
南瓜提灯笑う窓越し　草笛奏
気まぐれに残して帰るキスマーク　〃
コーヒーカップお揃いにして　出原樹音
なでしこは世界狭しと活躍し　奏
猫がいりゃいい家の母さん　矢崎藍

Ⅱ

冬近し震え丸まるおばあかな　石川千夢
渋柿を剥く一家団欒　彩火
月まどかドアラのバク転成功し　南田桃里
バッテリーには夢が満タン　ドリー
初デート光る笑顔の花の下　千夢
みんなそろってみんな幸せ　執筆

平成二十三年十一月六日首尾
（於・とよた連句まつり）

連句三十韻　『萬来舎』

萬来舎銀杏新緑目に痛し　中尾青宵捌

風カラカラと矢車の音　中尾青宵

珈琲をサンドウィッチがつとに呼ぶに　塙於玉

スペードの王知らぬ顔する　坂田武彦

昔聴く人形時計のオルゴール　岡山朱藍

蛍戻れと種を里山　大久保風子

をのが影月に重ぬるささ流れ　宮哲太郎

悪女でありし二つ名を持ち　和田忠勝

老いたれば誰そも分かたぬ道行に　玉宵

押し戴くはコンドロイチン　竹崎梨野

家宝なる白磁の碗を金に継ぎ　彦

ほろほろほろと吾亦紅秋　玉

坊主らの踊り疲れの切れ鼻緒　風

海坂藩に冬は訪れ　風

大方は口のほらねど竹光で　子

餅ひのことはりえが遣り繰り　玉

蒼穹へ芭蕉玉巻くいつか春　藍

そぞろの神が粉蝶を肩　郎

雪ながらお山幾重の夕間暮　風

ちゃぐちゃぐ馬子鈴を苗代　玉

震災の此の頃余震収まりて　佳

うさぎ鬼門の株も根こそぎ　藍

瞬きもせず見守りの北斗星　勝

炭鉱の絵が世界遺産に　佳

絶え忘る三田派の意地の再興を　野

丘の上によ二重虹立て　玉

六月は合歓（がふかん）の花開かしめ　風

山椒魚にも番号を付け　玉

紡ぎ酒静かに傾ぐ内々に　彦

狸むささびバックコーラス　勝

平成二十三年六月四日

（於・三田山上萬来舎）

半歌仙　『ふうてんの寅』

大倉漣魚捌

ふうてんの寅なつかしき春霞　大倉漣　魚
　タンポポ挿して中折帽子　佐藤美　卯
囀りのまた字余りになってゐて　木村かりん
　登校の列傘のいろいろ　石原すみれ
山裾に水車の見ゆる八日月　前田　宏
　干し柿吊す牛飼の村　児玉　徹
ウ貴婦人の歌声高き花野なか　か
　チェロを爪弾くうぶな青年　す
指相撲指がすべって抱きしめて　美
　本気なのねと呷るテキーラ　宏
燻れる紅の吸殻もみ消して　魚
　羽根の輝く玉虫の厨子　か
月涼し南の島のレクイエム　魚
　父を待たせる駅の噴水　宏
軒先に洗濯物がはためける　〃
　馴染の店のブラック珈琲　徹
みちのくの時刻表ひく花の昼　か
車椅子より飛ばせ風船　す

平成二十三年二月二十四日首尾
（於・出石コミュニティハウス）

世吉『風の甘さ』

福田太ろを捌

新緑に濾されし風の甘さかな　伊東康之
山ホトトギス真日の一声　福田太ろを
やあやあとかんかん帽を持ち上げて　澤田佳久
知事の出迎え受ける先生　沢井三柳
手土産は道路を通す話など　〃
海から見える製菓工場　康三
濃く淡く影の吹かるる月の松　〃
しみじみ虫を聞いてちょうだい　太
飛び立つ蝶の右に左に　佳
今年酒升を傾けおっとっと　佳
玉章二つ垂るる荒壁　康
念願の八十八ヵ寺君連れて　次
女房奇麗ですいませんです　佳
湯気の中凝脂にしばし目を凝らし　三
呼び出しメール受けてあたふた　太
フクシマのかたかな哀し原発禍　眞
やっさもっさでＴＰＰは　佳
寒月に総理官邸照らされて　〃
雪折れの竹雪折れの松　三
金利ゼロ死語となりたる楽隠居　太
『下山の思想』五木寛之　三
花びらの舞いは込む猪口を吉兆と　康

高橋眞

ナオ
春の虹クレヨンポキリ折れちゃった　眞
余韻の長き教会の鐘　佳
だしぬけにボンソワールとパリジェンヌ　〃
日本びいきの歌手のたまごで　太
目の眩む恋のフェロモン撒き散らし　三
アドレス帳に彼氏七人　〃
胸厚き男に抱かれ決めました　太
生まれ出た児は我に似ていず　佳
千木の空片割れの虹すぐに消え　三
寝冷え夏痩せ水中りして　佳
なにやかや想定外のこと多く　康
いじめられてる烏白無垢　三
橿原はこちらこちらと峰の月　眞
添水の谺またも聞こえる　佳

ナウ
長旅の客をもてなす梨フラン　太
明日の天気図西高東低　康
趣味講座好きは上手の始めとか　三
いい仕事です古伊万里の皿　眞
高層のホテル間近に海見えて　佳
光のどかに時は過ぎゆき　康
まさおなる空いっぱいの花の精　太
瀬々のたぎりて躍る若鮎　眞

平成二十三年　八月　十六日首
平成二十三年十二月二十一日尾
（於・さいたま文学館）

歌仙『風の座』

萩活けて風の座となる句会かな　鈴木　漠捌
女連衆そろふ良夜に　中野百合子
竹串の木の葉やまめを頬ばらん　山名　才
水美しき里に誕れて　三神あすか
宇宙から見れば地球は青い点　在間洋子
障子閉めきり独り暖取る　森本多衣
人絶えて店漏るる灯に雪散りし　中林ちゑ子
小町住む門胸は高鳴り　辻　景
誤字なども交じり稚きラヴ・レター　毬　まち子
手筥の蓋に蒔絵きらきら　鈴木　漠
ものづくり発信をする分教場　あすか
冷奴にも添へる赤紫蘇　才
嫋やかに月の昇るも籬越し　百合子
下駄の音さへ何か懐し　ちゑ子
彩色褪せし吉祥天の在す寺　多衣
陶磁器市に行列をなす　あすか
花の旅駅弁などもお楽しみ　漠
茶摘娘の襷艶やかに　洋子
寝そびれて読書三昧影おぼろ　景
土間のあたりで猫の仔のこゑ　ちゑ子
藍甕の蓋しつかりと置き直し　才
名工として受ける表彰　百合子
子子はただ黙々と上り降り　漠
盆栽萎れ夕立を待つ　多衣
きみ笛をわれ琴を弾き相和さん　洋子
熱きライヴァルときに叱咤も　あすか
濁り酒呂律怪しき利き競べ　まち子
弊衣破帽で仰ぐ流星　景
湯けむりの郷月光に閑まれる　百合子
遠くで鐘がごんと響くよ　才
職退きし身には余裕の冬景色　多衣
毛筆をもて日記果てたり　ちゑ子
リヴィングは骨董品に埋もれゐて　漠
雛飾りをる押入れの隅　洋子
老犬の背に花びらはそつと載り　景
ふらここ垂るる昼時の苑　多衣
　　まち子

平成二十三年十月二十三日首
平成二十三年十一月　三日尾
（於・兵庫県私学会館）

テルツァ・リーマ　『虹の橋』

鈴木　漠捌

山名　才
三神あすか
鈴木　漠
辻　景
在間洋　子
服部恵美子
毬　まち子
中野百合子
中林ちゑ子
才
景
洋　子

虹の橋渡れば別の暮しあり　　才
　幸せ呼ばん鈴蘭の鉢　　あすか
裏山は鳥獣保護区サンクチュアリ　　圭　介
　添水に和して渋く尺八に　　百合子
月の門帰り来る父上機嫌に　　まち子
　翅痛めても飛ぶ秋の蜂　　恵美子
甘やかな蜜の香りを野に告げん　　漠
　また逢ふ日まで路は遥けし　　景
待ち兼ねしデートも果ててみな夢幻　　あすか
　風炉手前済み部屋の灯を消し　　ちゑ子
吹き靡き早苗さやぐ田月照らす　　圭　介
　〇の口して唄ふ道化師　　洋　子
十夜婆腰伸ばし聞く明烏　　あすか
　長寿言祝ぐ里の雪晴　　永田圭介
ウイ・ノンと恋の駆引き気を逸らす　　百合子
　内緒の契り家人にばれ　　まち子
頤の剃り跡清し初詣　　恵美子
　春著着飾り嬉しお招ばれ　　漠
強かに乾杯重ね死にさうで　　景
　朝寝谷むる愛猫の癖　　あすか
シェフとして花見弁当揮ふ腕　　ちゑ子
　陽はかぎろひて揺らぐ城壁　　圭　介

平成二十三年六月十二日首
平成二十三年六月二十日尾

（於・兵庫県私学会館）

注　Terza Rima（三韻詩）。中世イタリアに起源をもつ脚韻定型詩。三の倍数行プラス一行で構成される。十四世紀初頭のダンテ『神曲 La Divina Commedia』は、全一〇〇曲がこの形式で書かれている。
押韻形式は aba/bcb/cdc/ded/efe/fgf/ghg/h

歌仙『遊戯論』上

—鈴木漠詩集『遊戯論』より—

鈴木　漠捌

巫女の鈴起爆装置となる雪崩　　甘木可人
遊ぶ童子も遠くかぎろひ　　永田圭介
梅が香も巡航船に華添へて　　三木英治
愛唱歌集ガリ版で刷り　　梅村光明
噴水の穂先で弾む夕の月　　鈴木漠
仮寝の蜘蛛に樹樹のさざめき　　英治
悪知恵の成り立つ快楽夢に見る　　光明
課外授業はサドの翻訳　　圭介
社交界デビュー拒否して契る恋　　漠
野分の跡は何事もなく　　光明
月澄んで漫ろ歩きの道連れに　　圭介
村芝居跳ね落すドーラン　　漠
漸くにジグソー・パズル完結す　　英治
猫を相手に熱燗の猪口　　圭介
究極のエコは町家の掘炬燵　　英治
鴨居の上に火縄銃掛け　　光明
脈脈と花守の技受け継がる　　圭介
寺も社も霞む山里梓に寄せて　　英治

風に揺れ柳は未来語るかに　　光明
老舗の鮨屋先づは海胆から　　漠
智にとるめがねに叶ふ板前を　　英治
娘の惚れた三味に浄瑠璃　　圭介
俗世間雅に隔て青簾　　漠
扇に譬へ港にぎはふ　　光明
源平の生田の森は生き続け　　圭介
自然淘汰を照す望月　　英治
鶏頭のくれなゐに降る弥撒の曲　　英治
牧場の主痩せて馬肥ゆ　　光明
名代なる炭焼き窯が復活し　　漠
赤城颪も旅の恵みと　　英治
この寒さ今宵限りと告ぐ予報　　圭介
キャスターの笑み太陽のごと　　漠
弾初は仮寓なれども恒例に　　光明
淑気突く意気いまだ現役　　圭介
はからずも佳き花便り詩の宴　　英治
美しき言葉で貌鳥の鳴く　　光明

平成二十三年三月一日首
平成二十三年三月三十日尾（文音）

新宝塚

『撫子や』

宙
ひたむきに咲く撫子や青き風
宙をつないで虹の伝説
少年は水の匂ひを抱きしめて
戀の字画にとらはれてゐる
背を押されバンジージャンプえいやっと
鏡に映る普段着の顔
鬼やんま染色体のおもしろき

月
夕闇に泛く白き桔梗
オカリナを鳴らすはたれそ薄月夜
サスペンダーの粋な理髪師
わが化身ひらりと舞ひて君の窓
召されしゆゑに命絶ゑなむ
天上の酒は涙で醸すべし
小手指町の消防夫なり

雪
平仄を整へ七言絶句宜き
かみさんにする雪しまく夜
王宮に監視カメラと盗聴器
メルトダウンのあとの地球は？

渡辺祐子捌
渡辺祐子
別所真紀
伊藤哲子
澁谷八千代
小松知二
福永千晴
横山わこ
服部秋扇
瀧田遊耳
長田竹風
哲
紀
扇
耳
風
扇
祐
晴

待ちわびしノアの方舟到着す
石の僧院荊冠の像
穴を出し蛇の鱗の濡れ濡れと

花
フラクタルなる蛤の浜
骨壺に花燦爛と挿し入れて
春眠深く秘めし念友
恋や恋百夜通ひの切なかり
笑顔の幕落ちて苦虫
河童淵天人淵が売りの村
税関検査まず犬が嗅ぐ

吉岡雁

星
高卒の希望の星が最多勝
月を吊るして雁がねの竿
紅茸の血のとくとくと短調に
うそ寒に擁く姫達磨愛し
オリオンのベテルギウスが爆発す
勅題菓子はなんと雅に
初筑波祝ふ嬥歌ぞあなかしこ

知
代
紀
晴
耳
知
わ
羽
代
わ
紀
雁
耳
祐
扇
わ
晴

平成二十三年七月二十一日首尾
（於・セシオン杉並）

《横浜・蛙の会》

現代連句三十六韻　『安芸さん・梨野さん』

中尾青宵捌

安芸さんに貰った十薬八重に咲く　中尾青宵
塀から覗く角はでで虫　田中安芸
蟷螂は生まれて抜ける青い空　塙於玉
ちょっと楽だよ気球掴めば　大久保風子
荷造りに晒やれやれ入れました　竹崎梨野
腹減ったなあ　猫とペリカン　玉
開車去南欧菜館不遠啊（車で遠くないよ）　東浦佳子
（カイチョチィ　ナンファンツァイグァン　ブユァンア）
笑う人には何かいい事　宵
母校出の歯医者マスクで愛らしく　風
美は掌中に骨の標本　玉
頃は梅雨緑陰圧す海紅豆　野
原発避難の村は人消え　佳
憎みても現代彫刻一号機　芸
月山臥牛残る遅雪　風
チェロ弾くや低き谺の又谺　玉
ふりかえり見るねずみ一匹　風
広葉樹針葉樹林の境い目に　野
伏流水の儚きの夢　芸
梨野さんの寝酒へ木瓜の実が熟す　宵
鳩吹く風も香り嬉しき　野
浮世絵は古本市で探すべし　玉
石畳路　響く足音　風
父からは早う帰れと怒りの字　野
身重の人と示す辻褄　風
駅前の名曲喫茶の奥二席　玉
どろどろ暮れる窓の黄昏　宵
野良たちは解体される家を見し　野
壊れた時計　踏めばポと鳴る　風
食べ切れぬほど柳葉魚寿司持たされて　野
婚礼帰り　狭い畦道　宵
狐火と二つ名の付く大泥棒　玉
お銀さまには顎で使われ　宵
深川の庵主の動き昼夜と　〃
橋で大声　振り売りの鴈　風
遠山の暮れなずむ頃雪催い　玉
風に紅濃き櫨を映しつ　風

平成二十三年　六月二十八日首
平成二十三年十一月　三十日尾

（於・柴庵）

Wスワンスワン　『生物尽くし鳥獣戯画』

矢崎硯水捌

『一折』

壱面

長き夜の鳥獣戯画の愉しけれ　矢崎硯水
下弦の月を削る大嘴(おおはし)れ　三神あすか
隊商の駱駝は砂漠越ゆるらん　吉本芳香
蛇行しながら河は拡がり　佐藤ふさ子
法螺貝を合図に人が集まりて　八尾暁吉女
耳欹てて啼兎鳴き　久我妙子

弐面

パリ祭は聖者も食ぶるトド料理　硯水
猩猩蠅がビードロに堕ち　あすか
またしても浮気の虫が蠢ける　芳香
お亀十八恋に小躍り　ふさ子
水かきで顔を隠せる河童殿　暁吉女
勉斗雲よび悟空勇んで　妙子
アイアイを生け捕る旅の月も冴え　硯水
フェリーボートで隼を追ひ　あすか
腰痛に狸伝膏(ばけものかう)をしかと貼り　芳香
燕尾服着て上がる階段　ふさ子

参面

勲章は玉虫色の扇形　暁吉女
鼠算にて殖えるマスコミ　妙子
PCと猫を抱へるビル・ゲイツ　硯水
龍昇天の魔法しかける　あすか
花筵しらべ優しき馬頭琴　芳香
粉蝶(ふんてふ)休む狛犬の背ナ　ふさ子

『二折』

壱面

盗み喰ひばれて猿公(えてこう)愚痴こぼす　妙子
牛の涎は未来永劫　暁吉女
ソンブレロいかすだらうと口説く鰐　あすか
蟹は横逃げストーカーには　硯水
焼酎に焼き鶏もよし月に酔ひ　ふさ子
篠崎狐仕返しの巻　芳香

弐面

年老いた髭の語り部寅年で　妙子
尾鰭たっぷり中身少なし　暁吉女
初夢は鷹羽紋付大臣(おとど)なり　あすか
糞転がしもこける若菜野　硯水
断層はアンモナイトに彩られ　ふさ子
ネッシーの棲む湖は涛立ち　芳香

向つ嶺に妖精見えつ隠れつつ　妙子
絃ふるはせる蜩の声　あすか
鳳凰座月捕らへんと飛ぶかまへ　暁吉女
万鬼祭とて羽目を外して　硯水

参面

蹄鉄がドアノッカーの古邸(ふるやしき)　ふさ子
シープに似たる執事迎へる　芳香
木鼠があらはれ遊ぶ町の苑　妙子
象牙の撥と琵琶を渡され　暁吉女
俳諧は花見(はなみ)虱(じらみ)をひねり出す　あすか
侘(わび)・寂(さび)・撓(しをり)・さより獲る衆　執筆

平成二十三年八月　十一日首
平成二十三年十月三十一日尾　（文音）

★形式「スワンスワン」について。
アラビア数字22(句数)を二羽の白鳥に見立てる。春秋二句から三句。夏冬一句から二句。二月一花一鳥(鳥は非定座)。恋二句から三句(弐面か参面)。三つの面による序破急。「Wスワンスワン」は「スワンスワン」のダブル。矢崎硯水考案。この「生物尽くし」の巻は特殊作品。

歌仙『笑ひ栗』

渡辺祐子捌

青空と向き合うてゐる笑ひ栗　長田竹風
碁盤囲みつ待つは月の出　柏元章
選り抜きの新酒を提げて家苞に　原田安恵
特許事務所は書類山積み　渡辺祐子
音立てて歴史を刻む古時計　古川柴子
先祖代々勇魚（いさな）獲る浜　小松知二
寒暁（ウ）に高校球児ひた走り　祐知
弊衣破帽は遠き昔に　柴恵
瓦笥（かわらけ）に君の名前を書いて投げ　恵元
メールの絵文字ハート連なる　元恵
ひつそりとペリカン憩ふ遊園地　恵知
氷いちごが一の売れ筋　知竹
月涼し草履突つかけ銭湯へ　竹澄
任せきりなる掃除ロボット　澄水
豪邸の勝手口まで大理石　水直
庵の主の広き心根　直澄
みちのくの花から花へひとり旅　澄と
八十八夜雨のやさしく　と柴
何となく水面ふくらむ蝌蚪の池　柴知
托鉢の僧駅頭に立つ　知直
優勝の監督の脱ぐユニフォーム　直祐
覚えた言葉ありがたうだけ　祐種川とみ子
復興の街へ迎へし王と妃（ナオ）と　種川とみ子矢倉澄子
吐く息白く熱き抱擁　矢倉澄子恵
燃えさかるペチカの火照り我忘れ　恵北川稔
歌声喫茶ロシア民謡　北川稔柴
急ぎ足出勤の群リュック背に　柴元
アルパカの目をふと思ひ出す　元直
雲厚し待ちし月蝕見えぬまま　直水
草紅葉せる渡し場のあと　水知
ざわざわ（ナウ）と左右に揺れる稲の波　知竹
富札買うて神に祈らむ　竹澄
ご満悦左ハンドル得意気に　澄水
銀座のビルに育つ蜜蜂　水澄
花遊行西郷像の大目玉　澄と
春帽子舞ふいたづらな風　と

平成二十三年九月三十日首
平成二十三年十一月三十日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

歌仙『秋風に』

秋風にふと筆を措く写経かな　臼杵游児
　出窓開けば映ゆる月影　佐々木允明
学園に榲桲の香のたゆたひて　原田安恵
　地酒などありバザーにぎやか　〃
黙々と走り続けるアスリート　游児
　雲をめがけて上る噴水　恵
ウ玉葱の白い肌割く泣きながら　允明
　本音はいつも隠したるまま　恵
起請文遊女は客の言ふ通り　游児
　呉服屋さんにたまる借金　恵
ニュータウンショッピングビル林立し　豊二
　バスセンターにボンネットバス　恵
凍月に父の帰りを児等の待ち　游児
　噂話を丸め寒餅　游児
鼠見て後ずさりする甘え猫　恵
　人口減少なす術もなく　恵
三味の音に粋な唄声花の宴　豊
　半年ぶりに雪囲ひとる　游児
ナオ初虹の立ちて慶事の予感あり　恵
　王子婚約英国の沸き　〃
ハネムーン二人でのぞく水鏡　豊
　ウエルダウンのステーキが好き　游児
旗並び地産地消の道の駅　恵
　蝦墓の油に拍手喝采　豊
軽くみた熱中症の長びきて　恵
　またも増殖天井の染み　渡辺祐子
誘ひ出しいつもの自慢聞く破目に　長田竹風
　野良着のままで嘆く作柄　豊
穴惑ひ月の横切るを待つ気配　恵
　山々威儀を正す蛇笏忌　游
ナウ初猟に埃を払ふ火縄銃　小松知二
　跡継ぎはまだ幼な顔して　祐子
動かない鈍行列車小糠雨　竹風
　あたたか過ぎて入歯忘れる　知二
末娘見合ひの席は花莚　〃
　春濤越えて鵜戸のかはらけ　祐子

平成二十三年十月二十六日首
平成二十三年十二月二十六日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

歌仙『即身仏』

即身仏の深き眠りや雪催ひ
風おさまりて落葉焚く庭
鮮やかな馬刺白磁に盛りつけて
結果よければ万事目出度し
一湾を巨船のよぎる月今宵
古酒呷る番屋若衆
福(ウ)耳のじっと見てゐる破芭蕉
会ったばかりですぐメールする
止り木の以心伝心席を立ち
俄におこるピストルの音
不吉なる鴉の群れる古戦場
パラソルの人じっと佇む
月の翳夜能(よのう)の夜叉は微笑みて
女にもあり七人の敵
ティータイムパテカナッペでおもてなし
さをりの唄のもるる窓の辺
花に酔ひ人に酔ひたる隅田川
空を見上げてしばし春眠

臼杵游児捌
臼杵游児
鈴木豊二
種川とみ子
河田水尾
二
と
水
二
と
佐々木允明
北川稔
二
と
水
と
渡部葉月
長田竹風
と

耕(ナオ)しの翁媼の影遠く　游
臍の緒入れし小さき桐箱　葉
大地震四年のうちに来るといふ　水
ヘリコプターの低く飛びゆき　二
蓮根掘る落ちしことばを拾ふごと　竹
熱さましにはがばり氷嚢　と
蝋燭をともしマリアの浮かびくる　葉
いと淋しきは外つ国の旅　游
匿名で泰西名画せりおとす　二
上手な嘘に乗せられたふり　水
月に暈不義の重さを引きずりて　游
泣いてばかりの地芝居の君　葉
赤(ナウ)蜻蛉指にはさんで得意顔　と
夢中で駆けて時の過ぎゆく　竹
戦中派賞味期限は気にもせず　水
宅配便で母の草餅　二
しつけ糸するりと抜いて花衣　葉
お蔭参りも今は昔に　執筆

平成二十三年十二月二十六日首
平成二十四年　一月三十一日尾
（於・藤ヶ丘地区センター）

歌仙『草笛や』

草笛や懐郷の耳火照りたる　大竹多可志
　ふと思ひ出す今日は母の日　小出民子
スカートに古き着物を縫ひ返へて　早田維紀子
　自転車とばす通勤の道　大山とし子
下町の屋並の上に望の月　井上千代子
　糸瓜水取る角のご隠居　維志
秋刀魚焼く煙がいよよ濃くなりて　民と
　絵手紙に描く赤き太陽　維千
切っ掛けはスクランブルの交差点　志と
　ハグされている胸の熱さよ　民維
主夫となるエプロン姿よく似合ふ　千志
　塵収集は市歌を流して　と民
冬月に塒を得たる鳥の群れ　維と
　雪下ろしにと男衆来る　千維
政治家となる夢いつか有耶無耶に　志千
　稀勢の里関つひに大関　民志
金髪もマッコリを呑む花の宴　維民
子猫三匹そっと寄り来る　と維
大竹多可志捌

山門の物の怪姫に春の闇　志
　琵琶寂寂と聞こえくるなり　民
何時の間に失せし家宝と見紛へぬ　と
　鑑定価格あやふやなまま　維
筍の煮染誠に良き加減　千
　お旅所に待つ児等は賑やか　志
約束の秘密の部室に急ぐらん　維
　目隠しされて止まぬドキドキ　志
気が付けばどっしり構へる古女房　民
　今は珍し盲腸を病む　志
エジプトの大きな月を誉め合ひて　と
　歴史を偲ぶ炉火欲しき頃　千
あらあらと芒の中に山の神　志
　ボランティアへと駆せる若きら　維
手作りの焼きたてパンをどっさりと　と
　絆深める合唱の輪よ　維
晴天に大路の花のきらやかに　民
　風嫋やかに曲水の苑　維

執筆

平成二十三年六月二十五日首
平成二十四年一月二十九日尾

（於・墨堤庵）

歌仙『木轆轤』

羽場桂子捌

木轆轤に木の香り立つ爽気かな　大竹多可志
そぞろにめぐる満月の池　羽場桂子
先達の鍋鶴渡る頃ならん　木崎節子
かるかん求む駅の売店　小出民子
潮騒の涼しき窓を開け放ち　水野公子
日輪草は画布をはみ出す　早田維紀子
ウ「はやぶさ」の帰還に夢がふくらみて　永井千代子
婚約指輪そっとわたされ　桂子
見かけより肉食系が好きな彼　節子
何を囃すか雀かしまし　民子
スクープをすっぱ抜かれし永田町　公子
火縄銃にて敵を制せよ　維紀子
城壁に月凍りつき静かなり　千代子
風邪に効きたる父の燗酒　桂子
染付けの壺本物と信じをり　節子
双体道祖まろやかに古る　民子
招かれて花の盛りの園遊会　公子
優先席に蝶がひらひら　千代子
段畑の賑やかとなる茶摘唄　維紀子
ナオ
支援広がる地震列島　節子
節電の続く不安の高まり来　民子
衝動買ひの缶詰幾つ　公子
日盛りへ市民マラソン列なして　桂子
歳には勝てずビールひかえる　千代子
先輩と後輩の域いまだでず　維紀子
役者名利の熱い抱擁　節子
おしらすの金さん振りに一目惚れ　民子
武士の情けと法度見逃す　公子
月の夜のアドリア海を豪華船　節子
踊りあかして果てるパーティー　千代子
ナウ
芒野の狸にうかと化かされて　桂子
帽子真深にルパン三世　維紀子
捨てかけて又立ち読みす漫画本　公子
スローライフの広い縁側　節子
花吹雪浴びて校歌を斉唱す　民子
スカイツリーは陽炎の中　千代子

平成二十二年十月　日首
平成二十三年八月　日尾　（文音）

歌仙『恪勤の道』

早田維紀子捌

靴紐の絡み合ひたる溽暑かな　大竹多可志
　向日葵の咲く恪勤の道　坂本たみ
青年は農業継ぐと決めもして　井上千代子
　パンこんがりと匂ふ食卓　早田維紀子
山荘の支度整ふ月今宵　たみ
　秋の扇に一句したため　千代子
ウ朝寒の後尾に並ぶ遺作展　維紀子
　忘れかねたる人の電話に　たみ
向き合へば胸の高なり聞えさう　千代子
　恋慕の噂いづくともなく　維紀子
吾が身にも風評被害及ぶとは　たみ
　漢方薬に頼るこの頃　千代子
冬月に身を翻す白鼻心　維紀子
　オセロゲームで過ごす年の夜　たみ
またしてもボタンひとつを掛け違ひ　千代子
　すとんと落す古伊万里の壷　維紀子
城跡の花のとんねる潜り抜け　たみ
　酒もほど良き曲水の宴　千代子
ナオ若鮎の影に声あぐ女学生　維紀子
　梢を渡る風のゆるやか　たみ
地球儀をぐるぐる回し夢を見て　千代子
　カサブランカの路地に迷へり　維紀子
不意打ちの水鉄砲が命中し　たみ
　お化け屋敷にもののけ姫が　千代子
尼様の肌朱に染まる腕の中　維紀子
　枝折戸を押すピザの宅配　たみ
機音の止みて静寂のもどりたる　千代子
　感想文は「夕鶴」と決め　維紀子
芝居はね円かなる月仰ぐなり　たみ
　橋のたもとを芒梳く風　千代子
ナウ酢の香立つもってのほかの供へられ　維紀子
　猟生活の子への荷造り　たみ
雑貨屋のはかりは今も棒秤　千代子
　ちんどんのこゑ遠ざかり行く　維紀子
ふた駅を歩いて帰る花の昼　たみ
　わか駒跳ねる牧を近くに　千代子

平成二十三年八月二日首
平成二十三年十二月五日尾（文音）

歌仙『過密都市』

冷房の低きうなりや過密都市　佐々木リサ捌
　焼鮎を食ぶ粋な料亭　大竹多可志
気に入りのペンで手紙を綴るらん　渡辺紗綾
　棚の小芥子の愛らしき眉　紗
山の端の松影くきと月のぼる　佐々木リサ
　家族揃うて障子貼り替へ　西幾多
言ひ出して思ひは同じ秋遍路　リ
　白いズボンの似合ふあの人　幾
偶然をよそほひ街の交差点　〃
　少女のごとき胸の高鳴り　紗
風にのり落葉くるくる輪を描き　坂本たみ
　凍月あをく濡るる大屋根　リ
勤行に混りて高き童声　紗
　今日のおやつにクッキーを焼く　幾
居眠りの猫が時折り髭立つる　紗
　流れの清き背戸の洗ひ場　リ
ふるさとを偲びて見上ぐ花の雲　幾
　ふらここ揺るるのどかなる午後　た
春日傘坂の途中に話し込み　紗
　玉三郎の嫋やかな舞ひ　〃
飲む度に視線ちらりと送られて　紗
　なぜかふたりとなりし帰り路　幾
許されぬ身とは知りつつ恋に落ち　リ
　ボランティアする震災の夏　幾
放射能怖れたる地に蛍飛び　リ
　産地確かめ野菜買ひをり　紗
どこからか聞こゆ笛の音ドレミファソ　紗
　遠い昔の友の面影　幾
クルーズの甲板に月洸々と　リ
　北京の秋に印鑑を彫る　紗
母子像の辺り木の実の降り止まず　た
　筆太に書く「絆」一文字　リ
師の家の手作りの龍動くがに　た
　お抹茶たててゆるり頂く　リ
大祭のお岩神社の花万朶　幾
　雲雀さへずりのぼる青空　た

平成二十三年　六月二十五日首
平成二十三年十二月二十三日尾

（於・墨堤庵）

歌仙『春うらら』

春うらら人生注油怠らず　土屋実郎捌
遊鵙獨運東風の大空　土屋実郎
潮干舟ゆったりゆれる波もなし　中根明美
心はいつもニュートラルにて　横山わこ
裏木戸を勝手に開けて月の容　中尾美琳
隠居が咲かすコスモスの庭　斎藤一燈
ウ進む稿一段落に温め酒　萩原浅風
株買ひどきと誘ひかしまし　小谷参木
やさしさについほだされる今日の君　前田明水
プロポーションはサイズ抜群　梅津半七
慣性の法則でゆく恋の道　鈴木善春
コツコツ歩くショール巻きつつ　竹村左京
凍てし月寺の大屋根刺すごとく　中沢柚香
若き阿修羅の高き太眉　浅井碧子
マラソンのとどと一団胸とどろ　清水水娥
石原都政なるか四期目　林瑞泉
枝垂れつつ花の散りこむ鯉の池　大下登姿
影絵の蝶のひらひらと舞ふ　小林静司
ナオ蓬餅まだ追ひつけぬ母の味　近藤千恵
ちゃんちゃん坊のにぎやかなこと　原志げ
音もなく閨に迫り来放射能　二上貴夫
普通口座に謎の大金　美琳
デッサンの鼻欠けてゐるソクラテス　左京
ギリシャ語をまた学び直して　明美
止まり木に俄か仕込みの評論家　善春
友は持つべき妻も持つべき　明水
人愛すことなく米寿迎へける　わこ
いつそ果てまで尽きぬ快楽　一燈
六道の輪廻を月にみそなはす　わこ
浮舟の塗汲めば鳴く虫　参木
ナウ今年絹粋にブラウス仕立て上げ　明美
百日詣初孫を抱き　碧子
犬猫はペット流行(はやり)の只中に　一燈
たまのコンペは春の淡雪　登姿
花の滝浴びつつ志士の家郷出づ　美琳
一息あまたシャボン玉飛ぶ　実郎
影絵の蝶のひらひらと舞ふ　半七

平成二十三年四月二日首尾
（於・伊勢原　上行寺）

歌仙『ちぬの海』

小池正博捌

小池正博　ちぬの海錨をあげて宝船
杉田宏子　帆布ふくらむ初風の中
品部三酔　競り声も弾みて市場にぎやかに
渡辺廣之　テレフォンカード五年使わず
伊藤馨　月かげの雲の切れ間にあらわれて
上西紀代美　すすき野にふと立ち止まる人
外山安龍　山裾（ヤマスソ）の軒を連ねて柿すだれ
廣之　ここにも平家落武者の里
松永直子　告白の言葉を探す夕まぐれ
吉澤久良　遺伝子操作で若紫を
三酔　舞台袖ステージママの瞳あり
馨　夏やせもする着ぐるみのなか
安龍　キャンプして月の光に皿洗い
廣之　牛馬童子の首あたらしく
三酔　内閣の顔触れ話ちらほらと
安龍　マクドナルドでねばる半日
宏子　緋毛氈野立ての席は花曇り
三酔　雲雀の声の遠くかすかに

ナオシャボン玉こわれないのもツマラナイ　馨
タイガーマスクは隣の親父　廣之
故郷の仲よし小道どこの道　正博
かの山川に住むひともなく　紀代美
マティーニの苦さを好む年になる　久良
付いては離れ浮雲の恋　馨
アナログのテレビの似合う隠れ宿　廣之
炬燵にミカン昭和香れり　宏子
凍蝶のかすかな息をきいている　久良
文学館も沙汰やみになり　直子
月よ来い不死の薬は要らないが　〃
夜食もりもり食べて徘徊　三酔
ナウ間引菜の根にからみつく砂の粒　直子
野球少年レギュラーになる　正博
ネタ尽きて旅番組をプロデュース　直子
陸奥薩摩一直線に　宏子
花びらの落ちるところに居を定め　正博
猫の背中が伸びるのどかさ　馨

平成二十三年一月十日首尾
（於・たかつガーデン）

歌仙『寒紅梅』

磯　直道捌

耐えてきし気魂凜たり寒紅梅　佐野とし子
鴛鴦遊ぶ池は愉しき　宮崎宏一
にぎやかに登校をする子供達　清きくえ
イチゴの飴が口にひろがり　渡辺美於
磨かれた窓に輝く望の月　瀧麻里
瓶の鈴虫急に鳴きだし　磯直道
ウ大和なる薬師寺訪えばこぼれ萩　と
グループホームあそこにも建ち　宏
父が来て母が来ている夢の中　き
旅のアルバムくりかえし見て　美
ふうわりと連山を行く飛行船　麻
茂れる上に淡き昼月　直
くちなわに出会いて彼に縋りつき　と
幼馴染みが今の女房　宏
絶対に基地にさせぬとデモにゆき　き
もの言うたびに下がる支持率　美
花いまだ静まりかえる雨余の園　麻
其角の句碑に啓蟄の音　直

ナオ開きたるメモ帳の上光る風　直
凪たる湖に浮かぶ釣り舟　と
子も親もふるさと自慢味自慢　宏
産地直販人だかりして　き
お年寄頼りにしてる知恵袋　美
暖色系の手編みマフラー　麻
しんしんと雪降る中にたちつくし　直
胸高鳴らせ待ちわびる刻　と
新婚の部屋に飾りしスケッチ画　宏
モンマルトルの白き街並　き
星ひとつ従えて月煌々と　美
頭痛よ去れと菊枕縫い　麻
ナウ蓑虫の糸が祠の軒に揺れ　直
潮の香ほのと漂える路地　と
村あげて健康づくり高齢者　宏
種蒔のあとヨーガ教室　き
離れても又寄りてゆく花筏　美
野点の席はまこと麗らか　麻

平成二十三年一月十三日首
平成二十三年五月十日尾（文音）

歌仙『会津路の』

会津路の花の遅きを旅情とす　磯　直道捌
　朧の月のかかる山の端　〃　直道
にこにこと雛に扮した児等ならび　東浦佳子
　壁に貼られしパパの似顔絵　〃　佳
聞き慣れし靴音に耳澄ます猫　岩垂道子
　川面に映る葉柳の影　〃　佳
ウ夏場所を前に賭博の騒ぎ起き　廣田節子
　イケメン落すお局の技　〃　道
なまめきし下着の色に目が眩み　〃　〃
　奪衣婆にらむ薄暗き刻　〃　〃
反省と道化の猿は頭下げ　〃　〃
　一と日終りて芙蓉閉じたる　〃　〃
名月は団地の狭き庭に射し　舟木美代子　佳
　思い出したる糸瓜忌のこと　小谷伸子　伸
手術してはっきり見える本の文字　〃　佳
　達磨落しの輪をポンと抜き　小川廣男　〃
幻に薄墨桜散りかかり　〃　道
　蜂は迷わず虻は気ままに　〃　節
ナオ目刺焼く匂い漂うこの辺り　〃　佳
　出戻りの娘はそっと庇われ　〃　〃
微笑めば頬に可愛い片窪　〃　〃
　棚のワインはヴィンテージもの　〃　美
聖樹とて小さき樅の飾られて　〃　佳
　初雪だよと踊る妖精　〃　〃
D51は煙吐きつつ行く荒野　〃　美
　青雲の志も闇米の値も　〃　廣
しみじみと昭和回顧の美術館　〃　伸
　濠にせり出す松の大枝　〃　廣
村雲に漂うている月の舟　〃　道
　後手後手となる猪の対策　〃　佳
ナウ買い替えし電子辞書ひく文化の日　〃　道
　ドレミの歌を口ずさみつつ　〃　美
キッチンの戸棚スパイスぎっしりと　〃　伸
　異国への夢誘う海原　〃　佳
故里に守り継がれる花万朶　〃　〃
　句碑ひっそりと陽炎の中　〃　〃

平成二十三年三月二十二日首
平成二十三年六月二十一日尾
（於・下北沢タウンホール）

歌仙『鳰の湖の』

磯　直道捌

鳰の湖の旅情は花の色をもつ　　磯　直道
　寄り添いながら残りいる鴨　　仁杉とよ
朧月匂うばかりに窓近く　　永見徳代
　拙稿集め出版の沙汰　　徳
つつがなく生きて卒寿を迎えたる　　渡辺ハツヱ
　冬帽いつか顔の一部に　　佐藤澄江
雪(ウ)起し妖怪達の気配して　　永雄瑞子
　与野党競う参議院選　　瑞
せめてもの体力作り妻と我　　と
　田舎暮らしのふたり悔いなく　　ハ
この山に巣のあるらしく鳶(とんび)舞い　　瑞
　天高くして月は清かに　　〃
めでたくも不老長寿の菊の酒　　徳
　錦まといて龍田姫笑み　　〃
オークション大正ロマン漂う絵　　〃
　試歩を延ばせる暖かき町　　と
咲き満ちし枝垂桜に見とれたる　　ハ
なお健やかに田を打てる父　　澄
また友の鬼籍に入るという便り　　澄
　行方不明の猫の戻りて　　瑞
大好きなショパンの曲の流れつつ　　と
　淑やかなれど道ならぬ恋　　瑞
結婚をあきらめてよりさばさばと　　ハ
　香り豊かなジャスミンの鉢　　瑞
ハンモック揺れて幼子夢の中　　徳
　世継となる身何も知らざり　　ハ
今こそと千手観音あらわれて　　瑞
　静けさ破る庭園の虫　　〃
名月に浮かび出でたる城美しく　　ハ
　句会のあとの麦とろの膳　　瑞
風(ナウ)見鶏いつでも風に身を任せ　　瑞
　毀誉褒貶は相半ばせる　　徳
雨降ればテレビのゴルフ楽しみて　　瑞
　ひきこもりいて家長失格　　ハ
初花の便りきかれる昨日今日　　喜
　光のどけき故里の空　　澄

平成二十三年三月二十二日首
平成二十三年六月二十一日尾
（於・下北沢タウンホール）

長濱喜代子

歌仙『暖かく』

磯　直道捌

暖かく逢うて酌みあう銘酒かな　磯　直道
　おほろおほろの真丸の月　岩垂道子
幼な児の吹くシャボン玉つぎつぎに　廣渡雪路
　時間気にして駅に駆け出し　濱崎琴代
七夕の笹飾られて鮮やかに　村上孝枝
　芋煮煮え立つ大鍋の中　土師満智子
笛（ウ）太鼓血も騒ぎたる在祭　守口薫
　指をからめてふっとはにかみ　渡邊常子
愛人となりて不倫の罪深く　永見徳代
　窓暗うして続く長雨　東浦佳子
行き過ぎる坊ちゃん列車満員で　松永由紀
　開票前に決まる当落　小川廣男
被災地へ善意届けと月寒く　岡本眸
　凍傷の手で祈る彌陀佛　井上雨道
耳うとく縋るものなき身を嘆き　吉金白水
　すやすや眠る母と娘と　下田宮松
花吹雪棚田に小さき耕耘機　大内善一
これは賑やか蛙合戦　鎌田清隆
行（ナオ）く春の海の景色に手をかざし　松永勝政
　フルスピードで馳けるプリウス　武智紀美
弁当に名産品を盛り付けて　戒能多喜
　何はともあれ宴楽しみ　田村外男
空蟬の声なき声を聞かんとし　松永勝政
　惚れたふりして短夜のキス　武智紀美
後家ながくついと魅かれて玉の輿　戒能多喜
　座敷わらしがひょいと現れ　田村外男
いたずらもジョークも好きで人気者　松永勝政
　将来知事に打って出るかも　武智紀美
道の駅お国訛りに月笑い　戒能多喜
　尻尾ふる犬草虱つけ（ナウ）　田村外男
たたずめば無住の寺のひやびやと　松永勝政
　お天気まかせこれからのこと　武智紀美
凪わたり大小の島あちこちに　戒能多喜
　二十二人の揃う歌声　田村外男
連句碑に想いそれぞれ花万朶　松永勝政
　ぶらんこ重く漕ぎ上げる空　武智紀美

平成二十三年四月三十日首尾
（於・今治国際ホテル）

歌仙『爽やかに』

爽やかにスカイツリーを眺めけり　磯　直道捌
　月に濡れつつ露地の角石　磯　マサ子
捨て団扇浮世話の埒もなく　小谷　伸子
　晴耕雨読独居自炊よ　永見　徳代
天球儀積もりし埃そのままに　小川　廣男
　みんみん蝉のかしましきこと　磯　直道
帰省子を甘やかしいる昼下り　マ
　ガールフレンド連れてきました　伸
あなたより言語の違うパパが好き　徳
　大河ドラマの出鱈目な筋　廣
面白くするにはそれも一手段　直
　マスクを顎にずらしお食事　マ
山間の老人ホーム北風強く　弘
　議員は元気総理替え時　ゆ
泡沫は神よ仏よ札束よ　弘
　旅行鞄は何かふくれて　笑
上げ潮にゆらりゆらりと花筏　三笑亭笑三
　朝寝をしたる蒸気機関車　東浦佳子
蝶二つもつれもつれて去りやらず　笑
　幻のごと震災の跡　佳
放射能まかせろ吾等七十代　伸
　お灸もよいが鍼もまたよく　徳
掻き氷すくい幼き日を想い　廣
　ベランダに這う苦瓜の蔓　直
雑巾で拭いたそのあと縞模様　マ
　湯上り懈怠風に吹かれて　ゆ
惚れてるとお好み焼屋カモとなり　弘
　厚き化粧で隠されし皺　三笑亭笑三
杵を手に玉兎黙ってついてこい　東浦佳子
　芒の招く原は広々　笑
どぶろくの酔いか足元おぼつかな　佳
　さげたる折の汁がぽたぽた　伸
水底に沈みし記憶鎮魂歌　マ
　仔猫生まれて口笛を吹き　弘
月仰ぎ花に浮かれて日を過ごし　ゆ
　其角の系を継ぎて麗らか　純
蝶二つもつれもつれて去りやらず　佳

平成二十三年八月二十七日首尾

（於・永見邸）

歌仙『安達太良の』

磯　直道捌

安達太良の嶺を隠せる霧の濃し　　磯　直道
　句の背に子龍潜みたる池　　岩垂道子
月の客うからやからの歌たのし　　田村昌江
　裾ひらひらと犬のまつわり　　佐藤治子
違い棚年代もののこけし置き　　長瀬光江
　寒九の水を飲みて翌鎌　　東浦佳子
菩提寺の臘梅の香に誘われて　　渡辺ハツヱ
　案内板は英語・ハングル　　永見徳代
宗祇とは誰？と彼氏に寄りかかり　　小谷伸子
　いま女の魔法恋の遍歴　　佐渡谷ふみ子
日米の初外交に期待せる　　安藤君子
　お百度参り願う快復　　新相節子
日焼けの子運動場を駆け回り　　岡村和可
　夕月ほのと染める縁側　　渡邉常子
お財布の根付の鬼が口を開け　　山澤カツ子
　そっと披露の料亭の味　　倉澤以世子
花の下酒仙同窓集い来て　　柏村誠子
　道を外れてはまる春泥　　濱崎琴代
苗木市金の成る木が売られたる　　村上孝枝
　新築祝い床の間に置き　　上師満智子
再婚の妻をいたわり共白髪　　廣渡雪路
　過ぎた修羅場も今は懐かし　　井上雨道
眼鏡して「金色夜叉」を読み返す　　鎌田清隆
　津波に残る松に積む雪　　戒能多喜
紙漉の技術誇れる町工場　　松永由紀
　スカイツリーの完成を待ち　　武智紀美
観光を楽しみにするバスツアー　　松田千佐代
　湯呑み茶碗に立ちし茶柱　　守口薫
硫気濃き山の温泉の望の月　　大内善一
　可憐に咲ける竜胆はひそ　　田村外男
手に載せし蟋蟀何かいとおしく　　直道
　一期一会の旅の静寂　　小川廣男
送り来し写真の出来に満足し　　孝枝
　風船揺れるありなしの風　　満智子
はらはらと散り始めたる花大樹　　琴代
　思い出ばかり浮かぶ永き日　　千佐代

平成二十三年九月二十五日首尾
（於・岳温泉・あづま館）

歌仙『乾坤に』

乾坤にひびくすだまや神無月　磯　直道捌
　由々しき苑に雪吊りの松　永見徳代
ひとときを茶筅捌きもしずやかに　小谷伸子
　久し振りねと話はずみて　中村幸子
望下(もちくだ)りはやすやすやと子の寝息　岩垂道子
　忘れ団扇が本の陰から　道
入(ウ)院の友を見舞えばやや寒く　廣田節子
　彦左衛門の邸址とか　徳
魚屋に並ぶ切り身に焼き魚　小川廣男
　草食系の彼は優しく　道
敷き上手敷かれ上手を知らぬ妻　道
　ブルームーンの涼気浴びつつ　徳
絵の如く壁の守宮は動かざる　〃
　渚の果の白き灯台　〃
戦跡を訪ねる旅の胸さわぎ　節
　父母の写真と黄砂降る中　〃
濃く淡くうつし世の花さまざまに　〃
　うららうららと酌み交す宵　節
聖(ナオ)人も賢人も否凡夫のみ　徳
　金婚迎う日も間近なる　節
バツイチと誰にも知れず惚れました　幸
　閻魔手にする大き釘抜き　道
東北の震災いまだつづきつつ　節
　けんちん汁の牛蒡人参　伸
年の瀬の飾りに楽の渡りたる　節
　降り出した雨いつか本降り　森田英子
縦縞の着物心に突っ交い棒　道
　レトロ時計の長き秒針　〃
名月の家々照らす光ゲ美しく　節
　紅葉且つ散る幽玄の里　徳
弾(ナウ)き終えし琵琶行の曲秋気澄み　伸
　見返りながら帰る客人　〃
時刻表通りにバスが来る田舎　廣
　雲に撫でられ笑う山々　道
連句碑は盛りの花を被きいて　〃
　宙を蹴る児ら囃りの中　廣

平成二十三年十一月二日首
平成二十三年十二月二十日尾
（於・下北沢タウンホール）

歌仙『狛犬の』

磯　直道捌

狛犬の貌呆けおり神無月　　磯　直道
　散りしままなる垣の山茶花　　渡辺ハツヱ
投票所つぎつぎ人がやってきて　　東浦佳子
　ＢＧＭは好きな音楽　　佐藤澄江
待宵の珈琲の香の芳しく　　佳
　水澄む池に魚紋広がり　　〃
法師蝉鳴き止みそぞろ旅ごころ　　澄
　ナップザックの画帳取り出し　　佳
古き帽脱げば農婦はまだ少女　　〃
　足入れ婚のなくなりし村　　〃
唐破風の銭湯今は文化財　　〃
　月の雫に濡るる葉柳　　〃
初孫の端午の節句近づきて　　ハ
　後継者あり老舗安泰　　長濱喜代子
日本の外交内治案じおり　　美
　一寸先は陽炎の中　　〃
パンダ来て動物園は花盛り　　〃
おむすびころり暖かき午後　　尾上智子
　伸びてゆくスカイツリーを仰ぎつつ　　〃
青い空よりり見守りし父　　佳
　ウエディングマーチに妻は涙ぐみ　　澄
三歩さがって私むっつり　　瑞子
　冬薔薇枝に残りて美しく　　永雄瑞
停電続き暮れ早き街　　美
　自然とは恐しきもの南無阿弥陀　　瑞
しとしとと降る細き雨脚　　美
　やや冷えて今さらながら五十肩　　〃
海の男の呷るどぶろく　　佳
　被災地をあまねく照らす夜半の月　　美
ふと流れくるふるさとの唄　　佳
　訪れる平山郁夫美術館　　〃
シルクロードに夢をつのらせ　　ハ
　ペン立てに象牙細工の紙ナイフ　　美
真向いにある残雪の嶺　　佳
　待ち兼ねし初花愛でる卒寿翁　　〃
宴の席に高き嘩り　　瑞

平成二十三年十一月二十二日首
平成二十三年十二月　二十日尾
（於・下北沢タウンホール）

歌仙『男われ』

磯　直道捌

男(おのこ)われ雛(ひいな)の客となりしかな　　磯　直道
　目にもうるわし投入れの桃　　服部早苗
軒下の燕すいすい飛び翔ちて　　佐藤治子
　ゲームに夢中子等の集まり　　新相節子
思い出す半年前の今日の月　　桜庭康夫
　すだく虫の音平安の御代　　岡村和可
手(ウ)にとれば形見の品の秋袷　　安藤君子
　不倫関係誰も知らない　　拍村誠子
願わくば朝のコーヒー二人して　　笠原悦子
　スカイツリーが真向いの部屋　　直道
郊外へ帰宅難民徒歩の列　　早苗
　寒月光る道は冷たく　　治子
熱燗をきゅっと一杯ひっかけて　　節子
　ふと思いたる故里の友　　康夫
立ち上がれ日本よ心ひとつにし　　和可
　祈りを籠めしオカリナの音　　君子
悠久の大地に根付き花万朶　　誠子
　地蔵菩薩と笑いたる山　　悦子
開(ナオ)きおく句帳に蜂のとまりたる　　直道
　泣き出しそうな顔もセクシー　　早苗
「もう一度やり直そうよ」君と僕　　治子
　我等覆水盆に返らず　　節子
川の面は陽ざしを受けて美しく　　康夫
　羽衣草も色どりを添え　　和可
サングラス気取ってかけて転(こ)けてみし　　君子
　軽いつもりが骨折の危惧　　誠子
風吹きて鳥居ゆさぶる北の町　　悦子
　マイクロバスで観光の旅　　直道
西行の歌碑に昼月うすうすと　　早苗
　一面に咲く蕎麦の花畑　　治子
雨(ナウ)に濡れ口をへの字に案山子立ち　　節子
　イメージ大事芸の材料　　康夫
「いろは」より始めましょうか何事も　　和可
　百歳の爺尚も健在　　君子
散りしきる枝垂れ桜を座敷より　　誠子
　猫が寝そべる暖かき日々　　悦子

平成二十三年十一月十八日首尾
（於・読売文化センター）

歌仙『みどりの日』

胸ぬちを緑に染めぬみどりの日　磯　直道捌

青く伸びたる葱坊主達　磯　直道

散策のいつもの土手の遠蛙　磯　喜代子

川の流れはゆったりとして　稲川久見子

雲流れ現われ隠れつ今日の月　新相節子

ありなしの風糸瓜ゆらして　三井佐恵

子規庵は根岸にありて獺祭忌　田村昌江

顔のお手入れ美顔クリイム　直道

熟年の恋の噂があちこちに　喜代子

遊び心がいつか本気と　久見子

伝統の老舗看板色も褪せ　節子

月よさに行く今宵二の酉　佐恵

地下鉄を出てマフラーをしめ直し　昌江

予報あたって雨が降り出す　直道

放映に酔いて一人で乾杯し　喜代子

わが家の犬はメタボ短足　久見子

爛漫の花の間に間に藍い空　節子

北窓開き深呼吸して　佐恵

彼岸入り望郷の念つのりくる　昌江

宅配便でなつかしき味　直道

おもむろにお茶の用意をととのえん　喜代子

荒れる政界話題もちきり　久見子

町医者の待合室が談話室　節子

煉瓦の塀にからむ青蔦　佐恵

ラムネ飲む若い二人の一気のみ　昌江

揃いの柄のユニクロのシャツ　直道

あちこちに猿出現しおどけ顔　喜代子

電光ニュース記者団の群　久見子

旅の宿露天風呂から月眺め　節子

ヴィオロンのごと鈴虫が鳴き　佐恵

風の盆妖怪もいる踊りの輪　昌江

ビデオカメラに写らない人　直道

最近は心の痛むこと多く　喜代子

子供迎えに走るママチャリ　久見子

紅ほのと花の太樹はゆるぎなく　節子

おぼろおぼろに聞こゆ鐘の音　佐恵

北窓開き深呼吸して　昌江

平成二十二年七月
平成二十三年七月　（文音）

歌仙『年逝かす』

梁井和子捌

石仏は静かに笑みて年逝かす　梁井和子
稜線連らね眠る山並　村上孝枝
身繕いするシャム猫は気どりいて　山口安子
リボンで飾るブランドの品　佐藤ゑつ子
月よさに胡弓の調べ流るらん　安
宅配便で届く新蕎麦　ゑ
民宿(ウ)の辛口に酔い菊に酔い　〃
若大将に送るアイコン　孝
婚活を重ねて乗りし玉の輿　守口薫
円高チャンス企業進出　和
英会話練習の声流されて　孝
涼しき風に月のまばたき　〃
庭先に友の形見の吊忍　ゑ
鬱の日続き閉ざすガラス戸　安
宝くじ締切りせまるコマーシャル　安
老眼鏡をいつも手元に　和
地に還る花の生命のいとおしく　ゑ
いずくともなく高き囀り　ゑ
暖(ナオ)かく指さす方に福祉バス　薫
支え合いにと迫る増税　孝
降り出した雨に駈け込むレストラン　ゑ
モネの絵画に想いだす女　安
着ぶくれの異国の夫は元貴族　薫
暖炉見下ろす写真セピアに　和
発掘の土器に残りし「いろは文字」　孝
平安文化期待深まり　安
七重八重白浪たちし磯にいて　ゑ
曲がりしなやか名人の竿　薫
煌々と万象照らす今日の月　和
鬼灯鳴らし童心に　孝
秋(ナウ)うららディズニーランド賑わえる　安
スピーカーより迷子お知らせ　ゑ
見つけ出す書棚の奥の参考書　薫
自分史綴る朧夜の夢　和
爛漫の花に昭和は遠くなり　孝
蜃気楼たつ遥かなる沖　安

平成二十三年　十月二十七日首
平成二十三年十二月二日尾
（於・北九州市立三郎丸市民センター）

歌仙『枯尾花』

渡邉常子捌

飄飄と山動かしぬ枯尾花　渡邉常子
遠く近くに笹鳴の声　橋本美智子
窯出しの碧の釉薬期待して　馬場美穂
さらり忘れしメール打つこと　常
月今宵五七五と句を綴り　智
忘れ扇に「忍」のひと文字　穂
ウマイカーで巡る飛鳥路爽やかに　常
顎線すらりイケメンの彼　穂
何処までも追っかけしたしイ・ビョンホ　〃
賭事はまり企業倒産　智
筆耕の固きペンだこさすりつつ　穂
夕立の雲かかる月光ヶ　常
爼に西瓜一玉切り分けて　素
子等は競いて狙う大物　穂
契約の額は何億メジャーへと　節
風に誘われ土手沿いの道　素
宝燈に枝垂れ桜の咲き匂い　穂
全快祝う肩に囀り　節
旅発ちは少し派手目の春の服　素
強き視線に見詰められたる　穂
あなただけラストダンスをとっておき　節
ビンテージ物開けて乾杯　素
うらめしや三途の川も金次第　常
勉強せよと着ぶくれの母　〃
円くなりうつらうつらと穴の熊　節
夢は大きく世界はばたき　智
井戸を掘るタクラマカンの砂丘の地　素
NG出さずロケは快調　常
満月にピアノ連弾夜想曲　素
程よく熟れし柿にいちじく　智
秋うらら詩文入賞内示うけ　節
灯を点けて墓前報告　素
登り来て木の間隠れに見えし湖　節
行きつ戻りつ初蝶の舞　智
稜線をつつみて花の散りしきり　素
雨も上がりて清明の頃　筆

執筆　井生素子
稲田節子

平成二十三年　十月二十七日首
平成二十三年十二月二十二日尾
（於・北九州市立三郎丸市民センター）

歌仙『大根蒔く』

大江加代子捌

ままならぬ余後をいといて大根蒔く　大江加代子
夕月淡く清き故郷（ウ）　松田千佐代
虫すだきみんな仲良く塾帰り　廣渡雪路
久方ぶりに囲む手料理　佐藤鈴子
それぞれに好きな番組話し合い　千
葭戸を過ぎる心地良き風　加
道の駅地産地消のわたり蟹　雪
一目惚れしたいかすイケメン　千
恋仇あの手この手で振り払い　加
蔵出し銘酒お気に召す程　鈴
国会の質疑応答意味有りげ　雪
復興未だ震災の跡　雪
冬眠の熊は爆睡穴の中　加
月光ヶ蒼く山頂の雪　鈴
はらからと鈍行の旅リュック背に　雪
携帯電話それぞれに持ち　雪
花万朶千古鎮まる多宝塔　千
どこからとなく蝶の舞いたち　雪
永き日を漁船操り父元気（ナオ）　鈴
絵手紙ながら託す願事　鈴
再婚をしてみる気持ちありますか　千
墓に額ずく茶飲み友達　雪
西空鴉がわがわ群をなし　鈴
ラベンダーの香ふっと流れる　千
英彦山の高き石段登り来て　雪
面影残す雪舟の庭　加
宵越しの鯉こくなれば舌鼓　千
思い出たどる幼少の頃　鈴
院展を終えておろがむ望の月（ウ）　千
夜目にもしるき梢の木守り　加
ハイウエー外車を飛ばすそぞろ寒（ナウ）　千
魑魅魍魎の影に追われつ　加
堂どうとレンジャーズ入りダルビッシュ　雪
鏡のごとく凪ぎし湖　千
行き行けど花の隧道抜けきれず　雪
深呼吸して仰ぐ初虹　執筆

平成二十三年　十月二十七日首
平成二十三年十二月二十二日尾
（於・北九州市立三郎丸市民センター）

歌仙『凩の』

凩のかけらとなりぬ子等の声　　満
　窓越しに見る眠る山々　　玲
納得の一句にやっと腰をあげ　　琴
　ブロック塀を走り去る猫　　満
雲合いに煌煌と澄む望の月　　玲
　黄菊白菊活けし床の間　　琴
火祭に焼(く)べて消したや使い込み　　満
　あんたとならば行くは地の果　　雅
大袈裟な身振りで話す色模様　　琴
　田舎芝居の派手な広告　　玲
股のぞき天の橋立よろけたる　　満
　どんでん返し狙う総裁　　玲
震災の復興念じ汗しずく　　雅
　ビヤガーデンで月に乾杯　　〃
定刻に観光船の着く港　　琴
　ピィーヒョロヒョロと鳶は舞い来て　　満
古里の小流れに沿う花万朶　　雅

三喜玲子捌

三喜玲子
土師満智子
濱崎琴代
城戸雅康

八十八夜茶壺献上(ナオ)遍路杖並べて和む宿明り　　満
　遠き汐騒うつつなに聞き　　玲
失恋をいやすつもりがいや増して　　琴
　やけ酒飲んでくだ(ひと)をまく女　　満
ひらひらと初雪かかる五葉松　　雅
　軒の下まで積みあげし椙　　琴
地場産の鶏でもてなす鍋料理　　玲
　祖父の遺影はにこにこと笑み　　満
鉱害を説く「正造」を顕彰し　　雅
　芝生の上でシュット快調　　琴
月よさに座敷童の見え隠れ　　満
　木の実音なく窪に落ちゆき　　玲
冬支(ナウ)度小康得てはのろのろと　　雅
　防火訓練ひびくサイレン　　〃
池の鯉ぐらりと揺れて水の底　　琴
　民芸村でひさぐ草餅　　満
散り頻る花浴びて通る異国人　　琴
　ペタルも軽き陽炎の中　　満

執筆　雅

平成二十三年十月二十七日首
平成二十三年十二月二十二日尾
（於・北九州市立三郎丸市民センター）

歌仙『実むらさき』

杉　美鶴捌

宇治訪うや小径に揺るる実むらさき　　杉　美鶴
　池に三つ四つ初鴨の影　　北濱祥子
月射して琴の音流る奥座敷　　佐藤允子
　塗りの膳には酒も肴も　　真伏晴美
にこやかに家苞持ちて祖父帰宅　　加藤貞子
　見ゆる山畑みかんたわわに　　田端幸子
ウ冬灯結露の伝う旅の宿　　大谷信恵
　出船の汽笛遠く響きて　　岩本朝二
さびしさにゲーム操り午前二時　　中沢昌重
　脈取る指が少し震える　　美美
惚れ込みて薬石よりも良き効き　　祥祥
　絵馬に成就の感謝書き入れ　　允允
輪唱の雨蛙鳴く森の方　　朝朝
　植田にうつる丸き昼月　　貞貞
モトクロス野原突っ切り疾走し　　信信
　引きずられつつ犬とお散歩　　晴晴
侘び住まいなれど借景花万朶　　幸幸
春障子開け眺む朝空　　昌昌
ナオ復興の願いも込めて雛飾り　　昌昌
　元気を貰う子供らの声　　祥祥
韓流のドラマ話題のクラス会　　允允
　筆立てにある耳かきの棒　　晴晴
手編みするマフラーの丈長くなる　　貞貞
　寒念仏の僧が過ぎ行き　　幸幸
赤い糸こんがらがって見えぬ彼　　信信
　恋患いに臥せるこいさん　　朝朝
夢を追い絆結びて幸溢れ　　昌昌
　ふっと消えたる壁の妖怪　　美美
望の夜の風に靡ける叢芒　　祥祥
　鳴く虫を聴き独りうつらと　　允允
ナウ維茂を偲びつつ行く紅葉狩　　朝朝
　しじまの中にシャッターを押し　　貞貞
太古より水の地球は碧くして　　幸幸
　未来へつなぐ長閑なる日々　　信信
組み合うて大海原へ花筏　　晴晴
　百囀りに笑顔いっぱい　　昌昌

平成二十三年十一月　五日首
平成二十三年十二月二十七日尾
（於・マーガレットハウス）

『命の詩』

犬ふぐり小さき命の詩(うた)奏づ　岡本　眸捌
棚田棚田に舞へる蝶々　岡本　眸
雛の家おとなふ人の着飾りて　大川西　女
軸の隷書は祖父の筆跡　紀伊郁　子
アーケード抜けて湯の町望月夜　眸
髪を素早く束ねさやけし　西
ゥはんなりと時代祭りの列続く　西
ハングル文字も添へし看板　眸
交番を覗けどいつも留守ばかり　郁
来ぬ人待てば募る苛々　西
手鏡で化粧直しもそそくさと　西
後に戻れぬアラフォーの恋　〃
昼月を掴むかに舞ふ尾白鷲　郁
地震につけこむ詐欺に凍てつく　眸
からつきし見えぬ政府の主導権　眸
靴脱石を自慢する父　西
酒蔵を巡る小舟に花吹雪　西
はるか望めば笑ふ山々　郁
乗ナォってみし風船売りの口車　西
3Dテレビ子等に大受け　郁
中国の賑はひ続く似非(えせ)パーク　七
迂闊に喰つちやアカン生肉　井ノ口カ子
据ゑ膳を眺めてばかり優男　七
胸をはだけて甘き香水　眸
逢ひ会うて余韻の窓に蝉時雨　郁
犬の散歩に犬を抱きをり　西
なだらかな古墳の丘の埴輪達　カ
一反もめんふはり消え行く　七
タクシーを呼べど停まらず残暑なほ　西
魁夷の描く絵のやうな月　眸
ナゥ婆さまは先づ仏間から障子貼る　郁
柱時計の針は正確　七
福耳で人望もあり金もあり　西
出合ひ様々旅の楽しさ　眸
記念樹の花は満開空を占め　カ
夢ふんはりと乗せる春風　執筆

平成二十三年四月　八日首
平成二十三年五月十三日尾

（於・岡本宅）

横書新連句　『真白き味』

内田美子捌

Ⅰ

新米のこれぞ真白き味なるや　武枝幸子
　塩引食めばちゝは〳〵の声　内田美子
木洩れ日の庭の巣箱に小鳥来て　幸子
　見上げる空を飛行船ゆく　中川妙子
ぴいぷうと豆腐屋の桶人を呼び　美子
　体験学習リポート発表　幸子

Ⅱ

ちんまりと奇麗に剪れた松の枝　妙子
　二十歳の屠蘇に娘はおちよぼ口　美子
末代に師は尊きの書を遺し　幸子
　白髪独活など酢水に放つ　妙子
民主化をブログが拓く新時代　美子
　何処に向かふゲノムの明日は　幸子

Ⅲ

ひと粒のひまはりの種芽吹きたる　妙子
　この島国に聖母マリアは　美子
水鏡やまなみ湖にさかしまに　幸子
　蛇の命を宿す老木　妙子
渡来の血しづかに秘めて風炉名残　美子
　月にふくろふ好みの根付　幸子

Ⅳ

下手人の目星ついたか金四郎　妙子
　もはや通らぬ国会答弁　美子
掴めないボールの行方菫咲く　幸子
　弟もゐた野馬たつ野辺に　妙子
マ・タ・キ・テ・ネ手旗信号舳へと　美子
　色恋なくも旅はたのしき　幸子

平成二十三年十月十日首尾
（於・海岸通エレガーノ神戸）

横書新連句　『奔る激震』

独吟　内田美子

Ⅰ

ふるさとに奔る激震鳥雲に
火山列島冴返るなり
山茱萸の黄に太陽を眩しみて
体重計の針は健やか
校庭のバケツに蟹の五、六匹
白いパラソル理科の先生
傭兵隊長戦車に背伸び
洋燈の灯恋は束の間酔ふて候
ジタンだんだんカスタネットだ
核の火は引返せない蟻地獄
木下闇を覗く牛頭馬頭

Ⅱ

開国の貴人の墓所に香くゆる
漁り火のぞむ洋館の卓
ご亭どんめ手に饅頭ゆん手に新酒
とんだ釣書天心に月
穴惑ひ姐さん被りの幼な妻
あばらや隠し薮枯らし生ふ

Ⅲ

混乱の市街地覆ふデモの波
窓越しの野辺に初雪見る夜は
毛糸編し昔話も
優しさの匠の技を海外に
カーテンコールに深き答礼
うるはしき日本の山河四季の風
咲けば万朶の花を植ゑなむ

Ⅳ

平成二十三月十五日首尾
（於・海岸通エレガーノ神戸）

歌仙『宝探し』

石川　葵捌

更衣宝探しの御蔵かな　　伊藤良　重
　飛び込んできた青いかなぶん　　矢崎　藍
道の駅ラムネ片手に足湯して　　〃　重
　子供がはしゃぐ大観覧車　　近藤とみ子　〃
夕月に区画整理の三反田　　〃　重
　炉火が恋しと寄って来る猫　　〃　藍
ウ食べ頃の浅漬大根さくさくと　　〃　重
　古女房の呼吸阿吽で　　〃　藍
あら惜しや実は好みのいい男　　〃　重
　とてちりしゃんと前座出てくる　　〃　藍
辛うじて耐震設計クリアーし　　石川　葵
　産土神の嘆く寒月　　〃　重
褞袍着て烏賊の戦い始まりぬ　　〃　藍
　もう口出しはしない約束　　〃　重
風評にさらされているブランド米　　〃　藍
　形変えつつ流れゆく雲　　〃　葵
花の寺曼荼羅の軸ありがたく　　〃　重
　草摘む人の籠のにぎわい　　〃　藍
ナオハローワーク略しハロワの弥生尽　　〃　葵
　知恵をしぼって頭からから　　〃　重
お干菓子は心の栄養目の保養　　〃　藍
　オール電化のシステムキッチン　　〃　重
ディープキスすればドアホン鳴る社宅　　〃　藍
　罪の匂いと百合の匂いと　　〃　葵
土砂降りの雨は舗道を川と化し　　〃　重
　ネクタイ緩め漫画喫茶へ　　〃　藍
駿さん色鉛筆をさっと刷く　　〃　重
　白の豆柴寝息柔らか　　〃　藍
真夜の月相続問題ややこしく　　〃　重
　梨むいている指がすべって　　〃　藍
ナウエレベーター地下七階の秋の底　　〃　重
　B4サイズ探すコピー機　　〃　藍
江戸文字を読みくだす術身につけて　　〃　重
　護美当番は木と金曜　　〃　藍
フルートはやすらかに吹く花の雲　　〃　葵
　シャンパングラス春の煌めき　　〃　藍

平成二十三年五月二十四日首尾
（於・桜花学園大学）

歌仙『玉ねぎ』

玉ねぎに甘味の違いありにけり　　芙
　厨の窓に映る新緑　　守
箒目の五線譜のごと流れいて　　合
　デッサンのまま終える自画像　　〃
始発待つプラットホームに残る月　　渥
　稲架を立てたる田んぼ広がる　　守
新ヲ走り「女城主」の美しき　　芙
　配下に選ぶイケメンの彼　　〃
オイコラが阿吽の呼吸に変る仲　　渥
　ご飯の後はいつもほうじ茶　　芙
収束の見えぬ原発人の罪　　渥
　海沿いの町建屋ならんで　　合
冬の月彼方に浮ぶ富士の山　　守
　おニューのコートAラインなの　　渥
肩パットはずして妻の丸くなり　　芙
　落語のオチに歓声が沸く　　〃
千仞の谷に散りゆく花嵐　　守
七堂伽藍時はおぼろに

殿（ナオ）さま蛙今は蟄居に在します　　守
　愚図と寡黙は裏と表と　　合
メモ帳の僕であっても僕じゃない　　〃
　シリコン詰めた胸の柔らか　　渥
肌見せて三社祭にかつぐ恋　　芙
　猫といっしょに夏風邪をひく　　〃
蓄音機同じところで静止して　　守
　鍬のなじんだ手すさびの畑　　渥
生きているだけでいいから露天風呂　　芙
　研究テーマいまだ決まらず　　〃
ふり返る故郷の川月皓々　　渥
　鮭の銀鱗夢の続きを　　合
切（ナウ）り張りの千代紙の鶴古障子　　守
　ギャラリー蔵の主翁づら　　合
ヒーローをめざしバットの素振りする　　渥
　皿の草餅じゃんけんがいい　　芙
花咲けばお国訛の電話口　　〃
　風に乗りくる春蝉の声　　守

平成二十三年五月二十四日首尾

（於・桜花学園大学）

歌仙『夏に入る』

長坂節子捌

チューバ吹く子の横顔や夏に入る　長坂節子
ノーアイロンの半袖のシャツ　由川慶子
点ほどのジェット機飛べり西空に　繁原敏女
歩きながらの電話声高　〃　節
残業の月に送られひとり部屋　石川桃里
旅行かばんのひんやりとある　〃　節
家出した女房の匂いある柚餅子（ウ）　〃　慶
シングルパパの決意ぐらぐら　〃　敏
合コンのイベントやたら誘われる　〃　敏
骨だけ残る鰈の煮付け　〃　節
月氷るそぞろ歩きの黒い猫　〃　桃
浪人生活すでに三年　〃　桃
門前の小僧習わぬ酒覚え　〃　節
にわか高座に座る真打ち　〃　慶
総裁は安全神話強調し　〃　敏
塀の落書きへのへのもへじ　〃　節
過去未来その真ん中の花万朶　〃　桃
卒寿を迎え逃げ水を追う　〃　敏
百千鳥（ナオ）ビルの谷間にこだまして　〃　節
ヨガのポーズのままでうとうと　〃　慶
夢はるか釈迦牟尼仏の膝の上　〃　敏
バックパックで世界一周　〃　桃
海に向き愛をささやく人魚姫　〃　慶
白夜の恋の占いは吉　〃　〃
玉葱の畑どこまで赤い屋根　〃　〃
電子レンジがピピと鳴りだし　〃　桃
夕飯の前に父親晩酌す　〃　女
友の訪れ鮭を提げ来る　〃　〃
名月に一歩先行く師の言葉　宇井美和子　節
かそけき風に吾亦紅揺れ　〃　和
大（ナウ）はしゃぎディズニーランドファミリーで　〃　和
写真うつりの悪い私　〃　桃
少年の「ワンピース」読むバスの中　〃　節
紋白蝶が迷い込む昼　〃　和
咲く花に心なき雨降り止まず　〃　〃
深川辺りに菜飯田楽　〃　〃

平成二十三年五月二十四日首
平成二十三年六月二十八日尾

（於・桜花学園大学）

二十四韻　『子規の掌の』

中尾青宵捌

子規の掌の先ず伸びさうな柏餅　小林節子
松の根っこも見飽き食欲の　中尾青宵
いもうとの白き横がほ浮く窓に　渡辺柚
守宮を阻む積み本の山　加藤亀女
青春の日々や空しく波浚へ　水野禾甫
今誰れ云はん亜米利加夢（アメリカンドリーム）　鈴木圭子
戻り来よ大草原の牛たちよ　鵜沢八千代
塔なす風車建てよ此の丘　柚

鍼に灸メンテナンスをしっかりと　亀
予報どおりに湿る梅雨空　節
日本の昔噺をぽつぽつと　甫
息の継ぎ間に入る獅子吼え　圭
泊りたる宿の後ろの小暗がり　代
双体神は耳遠くない　宵
試し獲る氷魚まだまだ稚かり　柚
茎菜洗ひに垂らす雪代　亀
大笊も皮籠も祖父の手作りで　節
かすかに残る家号焼印　柚
ペルシャよりマダガスカルへと瑠璃の道　亀
はるか岬に乙女手を振る　節
未確認飛行物体空過（よ）ぎり　甫
太陽は輪に虹はひれ伏し　圭
文芸の復興せむの意気は秘め　代
玉解く芭蕉美しき今日なり　宵
　　柚

平成二十三年五月二十三日

（於・柴庵）

二十二韻　『鎮　魂　の』

中尾青宵捌

鎮魂の幣となりけり花辛夷　加藤亀女
雲を散らせる風の冷たさ　中尾青宵
火を焚けど頬つく泥の乾かざる　閑歳恵子
見分けぬ顔の写真切れ端　鵜沢八千代
舟山に赤い靴の子何処に行きし　水野禾甫
無情の海神唯に畏れる　渡辺柚
今昔琴柱は影を遊ばせし　小林節子
カナリヤしばし歌を忘るる　恵
遣欧使月の浦より船出せし　亀
貝うち捨つる人の憎さよ　代

追韻

何もかも壊滅　汝は処なし　青宵
燕来て巣造る軒の何底　亀女
八日快晴空しき釈迦の誕生日　淳子
結界の杭を抜き去る大地震　節子
わたつみの万の風鈴鳴りやまず　禾甫
春潮や魚の葬式海の底　八千代
春禽の歌ふにあらじレクイエム　仁子
一つ杓は災禍の人へ花御堂
絆てふ一語がむすぶ春列島
春の季語いくら繰りてもみつからぬ
みちのくへ空はつづけりさくらの芽
わらび飯3・11忘るまじ
鳥帰る放射線禍の山野越え
ひっそりと原発の村水芭蕉
津波禍を耐えし一樹や緑たち
薄氷の上ゆくごとし地震果てず
避難所やなすすべもなき春の闇
入学式ハイと答へる母の声
被災者が被災の人に膳作る
被災地に一時の花人和む
想定外東電いつまで振りかざす

嗅ぎ煙草迷路迷路は訪ひあぐね　　耕子

王の墓まで添ひし小牡鹿　　

奥山のことに今年や翠濃く　　めだか

独活採る媼惣の芽も刈りて　　

休みゐし粉挽き車に差す油　　和子

出初めの蚊は追ふまでもなし　　

喜寿祝ひ奈良の都に小旅楽　　恵子

鑑真さまの御目拭はむ　　

ついでとてCTスキャンで看る仁王　　柚

栄養剤は賽銭で買ひ　　

仕掛けしてあちらこちらに猪威し　　

知らぬ顔してつまむ牡丹餅　　甫

電球は二つ減っても同じだよ　　甫

大地震花は知らずに果てにけり　　柚

絆とは分かち合ふこと続くこと　　宵

避難所の故郷のうた春遠し　　節

分かち合ふこころの芽ぶき日本中　　亀

菜畑に風評といふ風の吹く　　柚

山残し春の大地震村さらふ　　代

奪はれし団欒あまた春おぼろ　　宵

花の下三々五々と募金かな　　恵

みちのくに遅き春の日辿りつく　　節

嘆く世も人もあらざる花の咲く　　宵

大地ゆれ小心われも春ゆれる　　甫

三陸のことしも届かぬ新若布　　

地震の地にあどけなく立つこけしかな　　柚

幾度目の震災ですか亡父よ亡母よ　　甫

平成二十二年四月十八日

（於・柴庵）

『飛騨の工』

脇起　森岡しげる　捌
半歌仙

涼しさを飛騨の工の指図かな　翁
　白絣着て客をもてなす　洋子　渡辺
突然の雨に野良猫駆け出して　〃　田中絢子
　てるてる坊主あちらむいてる　〃
楽屋より素顔の役者仰ぐ月　〃
　抱えきれないコスモスの花　〃
ゥわずかずつ彩深まりぬ鵙日和　洋子　森岡しげる
　写生の後に筆を洗って　〃
立ちどまる乙女の瞳に魅せられる　絢子　〃
　早や暁か熱愛の仲　〃
覆水は盆にかえらず民主党　敏女　繁原
　瓦礫の山となりしふるさと　〃
月青しペチカを囲みバライカ　〃
　眠りを誘うホットドリンク　〃
子供らは五輪選手の夢語る　〃
　風吹く土手につくし出そろう　〃
花の宿百年を経て人新た　〃
　春を惜しみて記念撮影　洋子　森岡しげる

平成二十三年七月十二日首尾
（於・桜花学園本部三〇一教室）

歌仙『秋の匂ひ』

澁谷盛興捌

風少し秋の匂ひのありにけり　仁村俊子
　鳶口ふるふ木場に浮く月　田中安芸
語部に地場の枝豆馳走して　木之下みなみ
　米寿の祖父の詩吟朗々　青山満子
毎朝のテレビ体操お気に召し　澁谷盛興
　跣の跡をたどる砂浜　俊
ウでで虫の葉裏に揺れて苫の小屋　芸
　夢に誘ふ君のオカリナ　みみ
胸ぬちの熱き炎を抑へかね　満満
　何度かけても出ないｉＰｈｏｎｅ　興興
気がつけば阿弥陀如来の前にをり　俊
　かりりと食みし冬の林檎よ　俊
遠ざかる船の汽笛に月凍てて　興興
　メルトダウンが現実となる　満満
アンニュイを引きずる日々のケアハウス　みみ
　小犬三匹置かれたる庭　芸芸
雨上がり綻びそむる花蕾　満満
　丘の裾まで桑摘みの唄　俊俊
ナオ遠足の子らスケッチに精出して　芸芸
　度胸試しに渡る鉄橋　興興
告知する外科医の声の淡々と　俊俊
　点線なぞり運針の布　芸芸
貰うなら片道切符なんていや　みみ
　行こか戻ろか恋のかけひき　満満
いけめんのダイバー遂に攻め落し　興興
　ザバザバ洗ふ破れジーンズ　俊俊
町内を「たけやさをだけ」ひとまはり　芸芸
　古酒かはす遠来の友　みみ
時忘れ来しと方語る十三夜　俊俊
　矢の字矢の雁の道行　興興
ナウ中古車にメモリーナビを付けさせて　満満
　焼き場の骨の小さく嵩なく　芸芸
思い出を捲るアルバムセピア色　みみ
　着付講師の免許皆伝　満満
大盃を翳せば花のはらと散り　興興
　遠く近くの蛙合戦　俊俊

平成二十三年八月十七日首尾
（於・浦和コミュニティセンター）

歌仙『余震の街』

彩りや余震の街のさくら草　小野シズ捌
　巣立ちの鳥の鳴ける枝先と　小林しげと
菜飯茶屋客引く声の麗らかに　小野シズ
　緋の敷物にやおら腰掛け　大久保風子
月の道賑生肩を組みながら　松原昭
　案山子は尾根をはるか見渡す　池田耕治
ツやかに炊き上がりたる今年米　と
　厄除け札をふたり授かる　ズ
同穴を固く誓いし仲となり　風
　銚子を振って中味たしかめ　昭
浅草で産湯つかったとか自慢　治
　新車初乗り心うきうき　と
風凪いで寒三日月の落つる海　ズ
　吹雪体験ツアー大受け　風
頼りなき政権なれど打つ手なく　昭
　高血圧の避ける塩分　と
雪洞が点れば城の花おぼろ　ズ
春蟬生れてしがみつく幹　風

ナオ永き日の手綱ゆるみて曳かれ馬　昭
　Ｊ１リーグスタート間近　治
深刻な原発事故の記事ばかり　と
　招福の猫棚にちょこんと　ズ
ドーランはお化け屋敷の下準備　風
　円朝供養落語家の汗　昭
よべの夢ささやく声はあの人か　治
　あきらめきれぬ雨のひとり寝　と
定年で畑仕事も板につき　ズ
　エレキフォークとギター並べて　風
ほんのりと昼の外苑十三夜　昭
　地下鉄出れば銀杏散り敷く　治
ナウ馬肥ゆるマクドナルドでハンバーガー　と
　眠気を誘う塾の勉強　ズ
糸からむマリオネットは反抗期　風
　母の手紙は今も筆書き　昭
連休にローカル線の花の旅　と
　来春期してまたも留年　治

平成二十三年四月二十日
（於・浦和コミュニティセンター）

歌仙『十薬の花』

夕暮や十薬の花白く咲き　井門可奈女捌
　皐月波寄す散歩する浜　井門可奈女
古里の山頂タクシー登り来て　上野千艸
　四十Kのマラソン参加　奈千
野点する茶会の席を照す月　奈千
　秋撫子を古壷に活ける　奈千
ウからくと鳴子鳴る音一面に　奈千
　はなの付け瓜気になるあの娘　奈千
恋多き乙女の胸の彼の顔　奈千
　心静かにラブの絵手紙　奈千
胸の中に小石まどろむ夕餉時　〃
　被災復興次第に進み　奈千
月冴ゆるシャンパンはじけ酔まわり　奈千
　訃報に急ぐ車窓に虹が　奈千
村の子と街の子集ふ祖母の家　奈千
　なでしこジャパン話題広がり　奈千
声自慢祝宴会の花万朶　奈千
潮干狩行き蛤大漁　奈千
畦塗に並ぶ日除けの赤帽子　奈千
　世界にとどく愛媛柔道　奈千
節電に家族揃ってトランプし　千
　名菓とゞきてお茶で頂く　奈千
簪をゆらし舞子は出勤す　千
　柏手の音ちゞむ神無月　奈千
寒風の吹きすさぶ道帰り来る　千
　彼のメールでほっと暖か　奈千
返信は絵文字入りにて愛百倍　千
　紺地着物に白地帯しめ　奈千
名月は雲一つなき地を照らす　千
　ハローウイーンの飾りととのへ　〃
ナウ堀の木の瑠璃鳥の数匹飛び立ちて　奈千
　非常持出し点検をする　千
娘より果物届き先づ供へ　奈千
　手押車の宅配便よ　千
公園の雪洞照らす花の宴　奈千
くるくる廻し春日傘ゆく　千

平成二十三年八月　九日首
平成二十三年九月十三日尾
（於・生活文化センター）

歌仙　『セシューム検査』

豊の秋セシューム検査無事に済み　　岡村糸子捌

虫の音を聞き食前に酒　　大村さち

十三夜そぞろ歩きを誘われて　　杉山俊子

潮寄せてくる弓形の浜　　中村恵風

新築の招待状は絵地図入り　　和田ひろ子

しばし微睡む青芝の上　　岡村糸子

宵ウ涼し自由気ままにツイッター　　岡村耿

ペアのカップは一つ残され　　小野里子

放蕩を尽くした夫戻り来て　　ちち

尻尾を振って小犬駆け寄り　　俊子

再三の入退院に萎える足　　恵風

留守番電話保険案内　　ろ

数日で閣僚辞任月寒し　　糸子

からくり時計年の瀬の街　　耿

バルト海アンデルセンを巡る旅　　里子

安全祈り握るロザリオ　　ちち

代々の家を守りし花大樹　　糸子

巣立ちの鳥の声はつたなく　　耿

よもぎ摘む子供の影は長くなり（ナオ）　　西元百合子

短縮言葉耳慣れもして　　島茄田

売上を大きく変えるネイミング　　糸子

買い物弱者頼る通販　　耿

汗だくで資源ごみ出す老婦人　　里子

水着姿の写真悩まし　　ちち

ぽっちゃりなタイプが好きと言ったのに　　恵子

うらない信じ決める行き先　　俊子

契約の所属団体傾いて　　ろ

停電となる深い地下鉄　　百合子

月光にあまたの人は導かれ　　茄田

ハロウィンパーティー今がたけなわ　　糸子

具（ナウ）沢山松茸飯に舌鼓　　耿

匠の技の蒔絵重箱　　里子

賑わえる八坂神社の大通り　　ちち

辞書を片手に巧い日本語　　恵子

キャンパスに花借景のカフェテラス　　ろ

合唱響く麗らかな午後　　俊子

平成二十三年九月十六日期首
平成二十三年十月　五日満尾　（文音）

歌仙『湘南の海』

冬ざれの湘南の海うつろなり　和田ひろ子捌

寒九の浜に竹刀打つ音　中村恵風

見本市駆けるロボット人気にて　杉山俊子

ネットで探す手話の教室　西元百合子

ゆったりと雲の乱れを払う月　大村さち

駐輪場にえんま蟋蟀　小野里子

今年酒落語の落ちに苦笑い　岡村耿

艶聞もなき糟糠の妻　岡村糸子

秘めてこそまぶしき想い炎にも　和田ひろ子

ロンドンまでも彼を追いかけ　俊

教会のステンドグラス十二使徒　恵

歴史をこえて変る街並み　ち

月暑しＴＰＰを決めかねて　百

神経痛に障る湿風　耿

手を添えて人々癒す寂聴尼　里

迷いし犬を拾い育てる　ろ

スカートの裾軽やかに花の道　糸

和菓子の店は春の彩り　恵

美容院待つ子に吹かすシャボン玉　俊

演奏会へエナメルの靴　ち

交流の首脳夫人等にぎやかに　百

献身的な奉仕活動　耿

私より祖父は筋肉隆々と　里

山鳥歩く雪の鎖場　ろ

手作りの生姜湯ですと差し出され　糸

とろりと甘い夢のひととき　恵

新婚の家のカーテンバラ色に　俊

壷屋大皿掛けられし壁　苅

月今宵観音過ぎる島に生き　ち

リズム正しく砧打つ音　百

広野原自由きままに赤とんぼ　耿

夢中で読める平家全集　里

早逝の師の声今も胸底に　ろ

都踊りのいよいよ始まり　恵

連れ立ちて花のトンネル通り抜け　糸

夕日を受けて霞む段畑　俊

平成二十三年十一月十一日期首
平成二十四年一月六日満尾　（文音）

漢和行歌仙

『流星恒月』

○標支韻

赤田玖實子捌

流星陋巷潜　赤田玖實子
恒月海峡窺○　〃
松手入よろしき姿眺めいて　臼杵游児
声をはり上げ吟ず五言詩○　鵜飼佐知子
抑揚をつけて飛び交うしじみ蝶　浅沼小葦
苫舟若鮎炊○　澁谷八千代
ウ
御忌八百載　游
中国服美麗○　佐
色白き乙女は耳で羞じらいぬ　葦
猛き男の子の知らぬ衰○　游
高額の保険たっぷり匙加減　葦
温暖化でも凍てる地球儀○　佐
雪蹴獅咆哮　葦
野踏象奔走○　〃
旧友贈絵画　游
故園毀石碑○　〃
月涼し北に南に遠花火　桜田野老
のこぎり屋根に止まる大瑠璃○　佐

ナオ
悠悠読棋譜　佐
急急聴苦思○　〃
君主従亀ト　〃
元へ戻さん縺れたる糸○　游
悴け猫置き物の如老いてあり　老
書家の指には固い筆胼胝○　游
薙刀極奥義　佐
異神不順夷○　老
おにぎりの筍飯はママサイズ　佐
筑波望菊籬○　老
月そこにスカイツリーは世界一　佐
迷うことなく穴に入る蛇○　游
ナウ
赤外線警備システム作動せず　佐
ストラップには陶製の干支○　〃
鐘楼刻歴史　游
早蕨摘めば搖るる小帷○　老
東庭落花酌　游
西方送春辞○　〃

桃夭樹唫聚作品

平成二十三年九月十三日首
平成二十三年十月　四日尾
（於・相模原・桃夭樹）

遺吟脇起歌仙『獅子門翁忌追善俳諧』

大野鵠士捌

翁

人々をしぐれよやどは寒くとも　大野鵠士
忘れずに咲く緋なる山茶花　大野鵠士
習ひたるピアノの音色軽やかに　早野さと子
揃ひの服の姉と妹　後藤キヌヱ
たたなづく青垣くきと小望月　清水青瓢
使ひ古せる籠納むる　藤塚旦子
茹(ゥ)で上げて玉蜀黍に湯気の立ち　矢橋初美
ポニーテールの若き女房　宮本輝子
トラックのハンドルさばき巧みなり　蒼井遙
白波寄せる岬への道　名和よちゑ
約束の手紙鞄の中に入れ　伴野加代子
母に内緒の事の多くて　小栗知柚
麦秋の畑広々と夕月夜　武仲登志春
礫のように飛べる蝙蝠　青瓢
吊したるてるてる坊主誰に似る　藤井和郎
稲荷の寿司は甘さ控へめ　新町恵子
鐘五つ鳴って花見の闌に　初美
頬をやさしく撫でる軟東風　村瀬仁子
寝(ナォ)ころんで見上げる空にしゃぼん玉　知柚
心焦りて職さがす日々　樋口かほる
ゴミ箱に缶コーヒーの缶あふれ　大山功
十分ごとに快速が来る　鵠士
口紅の色をそろそろ変へようか　キヌヱ
アイコンタクト以心伝心　登志春
羽衣に似たれど非なる恋衣　鹿島美千代
七味たっぷりちり鍋に入れ　和郎
ギリシャより始まる世界通貨危機　加代子
いづこへ向かふノアの方舟　奥山ゆい
新月に亀の産卵そっと見る　よちゑ
故郷の親を思ふやや寒　輝子
病(ナウ)室の窓を過ぎれる雁渡し　かほる
環状線の少し渋滞　早崎美弥子
特売の折込チラシ広げゐる　村井枝葉
ペットボトルの水を一口　松橋五笑
記念樹のかくも育てる花吹雪　青瓢
けふ打上げの弥生狂言　執筆

平成二十三年十二月四日首尾

（於・笠松町杉山邸）

短歌行　『素秋かな』

後藤キヌヱ捌

掌に水掬ひける素秋かな　後藤キヌヱ
風の音にも揺るるコスモスや　瀬尾千　草
和やかにうからやからの月待ちて　岡本満智子
赤葡萄酒のかをり芳し　宇野久　恵
旧ウ市街凍つる小道の石畳　キ
回転扉映す冬枯れ　草
銀行の為替レートを確かめむ　〃
真珠のピアス似合ふ銀髪　キ
十歳も年上の妻魅惑的　満
番の鳩の餌を分け合ふ　恵
花並木隣村まで真直ぐに　満
出開帳にて拝む御仏　草

ふんはりと春のショールを肩に掛くニオ　草
出航の銅鑼テープ投げらる　満
大帝の騎馬像かつと天睨む　〃
午後の紅茶に添へる焼菓子　キ
甘言にすぐ乗つてくる女子学生　恵
理想高くて今は独身　満
月光の木の間にゆれるハンモック　草
陶器の鉢に金魚飼はれる　満
胃薬ニウを食後に飲むをまた忘れ　草
ねぢ巻き時計未だ健在　満
花満ちて薄墨色の天　キ
野に遊ぶ児の声のうらら　恵

平成二十三年九月十六日首尾
（於・岐阜鋳物会館）

短歌行　『今朝の霜』

矢橋初美捌

翁

葛の葉の表見せけり今朝の霜　矢橋初　美
外套の襟立てて行く人口喧嘩して　早野さと子
園児バスママの迎へは定刻に　杉野ちゑ子
着信音がポケットの中は悲しくて　河合勝　子
皎々と湖上を照らす望の月　高木初　枝
匂ひあふれる青蜜柑剥く　寺井淑　子
文化の日父の書斎は本の山　富田美佐子
沓脱石に蹤る猫　村岡美智江
特急が通過してゆく村の駅　西田み　さ
風にさゆるる首のスカーフ　一柳国　子
車座の上戸も下戸も花まみれ　中井万里子
殿様蛙ぴよんと飛び出す　初　美
ふらここ揺らす親子賑やか　さと子
ナオ遠足のリュックサックのとりどりに　初　枝
強がりばかり口喧嘩して　宮本輝　子
知らぬ者同志の意気の投合す　美佐子
赤きカクテルハートストロー　淑　子
わかれ道今日のシネマは悲しくて　市橋みち
ハンカチーフの柄は水玉　美智江
修復の伽藍仰げば月涼し　ちゑ子
みやげに貰ふ堅いせんべい　国　子
ナウCMは偽の警察弁護士で　浄泉亭百　雲
うつかり乗つて沈む泥舟　執　筆
御下降の続く行列花大樹
ふらここ揺らす親子賑やか

平成二十三年十一月　七日首
平成二十三年十一月十四日尾
（於・中山道赤坂港会館）

遺吟脇起歌仙『百歳の』

瀬尾千草捌

翁　瀬尾千草

百歳の気色を庭の落葉かな　船渡文子

耳すまし聞く冬鳥の声　河合はつ江

南へゆつくり進む船見えて　岡本満智子

キャッチボールの兄と弟　竹内昭子

夕月にピザ焼く匂ひ漂へる　松尾博雄

草虱つけ戻る飼ひ猫　伊藤弥生

そぞろ寒門口に立つ修業僧　富田美佐子

あとひと針で終る縫物　江

ラジオより軽ポップスの流れをり　後藤キヌエ

エンジン止めて見つめ合ふのみ　昭

胸元にわたしと違ふ髪の毛が　雄

泡の消えたる麦酒残れる　満

夜の更けてテントに白き月涼し　田中啓子

マリア・テレサのやうな看護師　宇野久恵

易々と数か国語を使ひ分け　成瀬貞子

古都の町屋はいつも賑やか　江

花浴びて並ぶ傘寿にはいチーズ　青木久美

絵筆取り出す長閑なる午後　佐

初虹の空にヘリコプターの飛ぶ　草

積み上げてある救援の品　美

滑り台砂場鉄棒うんていも　佐

新しき靴履き慣れぬまま　嶺子

七五三祝あちらこちらに顔見知り　満

脊山のふもと南天の赤　初子

発掘の泥にまみれる許嫁　雄

育メンになる堅き決心　遙

連休のあつといふ間にすぎてゆく　文

からの財布に頭からつぽ　凉子

月光の遍く照らす交叉点　昭

ゆく秋惜しむメール母より　五百子

稽田にＴＰＯを論じゐて　良子

皆で渡れば恐くない橋　淳子

ふはふはのパンダに似たる雲浮かぶ　江

立読みといふ小さき楽しみ　文

美少年擾はれさうな飛花落花　草

若鮎の群れ上りくる頃　弥生

執筆伊藤

平成二十三年十一月二十一日首尾

（於・岐阜鋳物会館）

歌仙『春立つや』

竹内昭子捌

春立つや水耀へる長良川　竹内昭子
　えのころ柳目を覚ます頃　後藤嶺子
一輪車すいすいと蝶追ひて　瀬尾千草
　野球帽子を斜めかぶりに　田中啓子
城のある町に似合ひの小望月　大橋龍宇
　そぞろに寒き玻璃の裏窓　嶺
ハロウイン（ウ）のポスターの魔女微笑める　〃
　アップルひらく指のしなやか　嶺
最愛の夫の任地は宇宙基地　宇
　たまに我儘いってみたいな　昭
円相の墨蹟の軸掛かりをり　昭
　近づいてくる豆腐屋の笛　草
母がりに夏月仰ぎ針仕事　草
　金魚玉には出目金二匹　嶺
街の中連節バスの走るとか　啓
　レストランにと蔵を改装　啓
花びらを誘ふ弦楽四重奏　昭
　眠くなりたるのどかなる午後　草
軟（ナオ）東風に白きカーテン戯るる　嶺
　ティータイムにはみんな集合　昭
石鹸の泡を飛ばして犬洗ふ　草
　腕のＴＡＴＴＯＯ見えるちらりと　宇
取材するたび熱くなる恋心　昭
　似たもの同士うはばみとなる　草
細雪日がないちにち降り続く　啓
　辺りにひびく教会の鐘　草
丸木橋渡れば青き海開け　宇
　盆景の石探す爺さん　昭
夕月に塒鴉の過ぎる影　啓
　ニュース刻々秋の大地震　嶺
宿（ナウ）題の糸瓜の水を採り忘れ　宇
　からりと乾くシャツとジーンズ　昭
平凡が何よりだよが口癖で　〃
　時に耕し時に書を読む　草
合戦の昔は知らず花の山　昭
　幔幕を張り弥生狂言　啓

平成二十三年三月十八日首尾
（於・岐阜鋳物会館）

獅子門麗水社詞宗第十三世名和よちゑ

歌仙『文台継承披露俳諧』

田辺桂月捌

去る水も来たれる水も澄みにけり　大野鵠士
こほろぎの声つつむ草庵　名和よちゑ
文机に玉兎はるかに仰ぎゐて　田辺桂月
朋より届く地酒地魚　沢井国造
がんばらな七月場所に気合入れ　五十川直靖
ゆらゆら揺るる氷屋の旗　宮本輝子
若者が徹夜で並ぶコンサート　大堀武直
交換し合ふメールアドレス　寺井淑子
深煎りの苦き珈琲飲み残す　杉野ちゑ子
フォトコンテスト応募しようか　大橋正子
形には虚実ありける塔の先　佐々木嘉代
衛兵凛々し捧げ銃する　市橋みち
ジャンボ機の翼かすめる寒の月　瀬尾千草
似合ふと思ふ赤きジャケット　白石利江
芸術はまこと幅あり深みあり　矢橋初美
狂言役者たたら踏みつつ　一柳国子
花大樹傘に宴を盛り上げむ　伊藤百雲
蝶が羽化して村の明るき　加藤渓草
親(ナオ)につく仔馬の速歩軽やかに　竹内昭子
視野の限りに望むアルプス　高松正水
イベントの弁当はやも売りきれて　蒼井遙
青春切符日付確かむ　久世竹水
潮風に吹かるる浜の簡単着　田中青志
焙烙炎で無病息災　戸田華笙
金髪にちらちら光るイヤリング　名和伸夫
此見よがしにしかと抱き合ふ　伊藤錦石
恋恋と活字のでかい週刊誌　大山功
アナログテレビつひに終了　北浦典子
薩摩義士松に偲ばむ月渉る　清水青瓢
美濃の里山柿のたわわに　広瀬雅女
秋(ナウ)まつり俄を担ぐ子供連　松岡裕子
清掃奉仕けふも出席　早野さと子
鉛筆はHBだと嬉しいね　早崎美弥子
老人クラブいつもかがやき　福永常子
振り返り振り返り観る花の城　名和茂樹
小びとがをどる夢の麗か　執筆新町恵子

平成二十三年九月十八日首尾
（於・奥の細道むすびの地記念館）

二十韻　『初懐紙』

伊藤哲子捌

初懐紙むかしの品格とどめ置き　伊藤哲子
親子の飾る床の交譲葉　櫻田野老
伝承の老舗味噌屋は賑いて　鈴木ちかひ
歌うレッスン語学教室　森釈子
満月（ウ）を目指しこぎゆく坂の道　高山英子
二頭の犬はひつじ田の畔　白石一有
稲番に都会育ちの美青年　哲子
慕い慕われ婚約の盃　野老
宝石は欲しくないわと浴衣縫い　ちかひ
杖を頼りに参る富士垢離り　一有
さりげ（ナオ）なく肩の糸くず払いおれる　英子
天才的な園児工作　哲子
解析の研究学者にひとめ惚れ　釈子
風呂敷だけでＪＡＬにとび乗り　野老
大平原銀狐の罠月と見る　一有
札幌ドーム選手激励　英子
黄蝶白蝶清らかに舞い　釈子
花の片モーツアルトと語り合う　英子
岩噛む早瀬上る若鮎　哲子
十能でちゃんちゃん焼きを裏返す（ナウ）　一有

平成二十三年一月　十二日首
平成二十三年一月二十六日尾
（於・亀戸アンフェリシオン）

二十韻　『春節祭』

伊藤哲子捌

春節祭人の行き交う中華街　白石一有
　香りほのかに廟の紅梅　櫻田野老
潮干船櫂を繰る手を休ませて　源桃子
　母親結ぶ俵おむすび　伊藤哲子
ウ丸い月だるまストーブ鍋を置き　高山英子
　熱燗勧め恋の始まり　野老
暗記するハイネ詩集の一頁　一有
　ジムで鍛えて参る氏神　桃子
政治家よ田中正造学ぶべし　桃子
　渓谷鉄道つづく叢　英子
ナオ遠花火対岸の山赫々と　哲子
　薩摩上布の若き御家さん　野老
前だれの丁稚小僧の胸の中　一有
　ひとり密かに虫になりたい　桃子
琵琶打ちの胴にきわめる蛾眉の月　野老
　水の初めて涸れる用水　哲子
ナウ山羊の乳双子兄弟がぶがぶと　一有
　マトリョーシカの並ぶ本棚　英子
遥かなる不毛の大地花捧ぐ　哲子
　巣立の鳥はそよ風の中　英子

平成二十三年二月九日首尾
（於・亀戸アンフェリシオン）

短歌行　『江の島』

江の島の翁の句碑や小春凪　いぬじま正一
　西に望むは雪の秀峰　是行修吉
今日ありて明日の絆に続くらん　紺野　愛
　松一本の立ちすくむ丘　紺野笙治
ウ数へ歌孫に教へる十三夜　久我妙子
　勉強部屋に放す蟷螂　正
道の駅好みの蕎麦と栗ご飯　修
　流れる星に恋の行く末　愛
封印の熾火が胸をこじ開けて　正
　捨てられしまま錆びたママチャリ　修
花盛る有志寄進の大鳥居　正
　趣向凝らした絵凧高々　妙

ナオすれ違ふ髪の童の愛らしく　愛
　愛の無明に迷ふ青年　笙
逢ひたくて逢へば寡黙になる二人　妙
　空のカップを運ぶ口元　正
祭笛お岩木山にかかる月　修
　祖父の河童の民話なつかし　愛
歓声にルーキー放つ逆転打　笙
　名代大喜利視聴率よく　妙
ナウ飴細工鳩の形の食べられず　正
　小さきお手々でおすそわけする　修
蒼空に吸はれて消ゆる花吹雪　愛
　お玉杓子の棚田のどけし　笙

平成二十三年十一月二十二日首
平成二十四年二月十七日尾　（文音）

百韻『弓始め』

小林静司捌

鎌倉や坂東ぶりの弓始め　小林静司
由緒正しき男正月　和田忠勝
薄氷の今朝はひとしお煌めきて　今村苗
仔猫四匹組んずほぐれつ　秋山よう子
バスを待つ塀のぬくみに背をもたせ　高島幸子
学びに通う児等の足早や　横山わこ
連れ立って十六夜団子狙い撃　土屋実郎
髭が自慢のすいっちょんちょん　澁谷八千代
ゥなかまど峠の茶屋は婆が守る　和久井八重
手伝いの娘に似合う銘仙　速藤井希子
そっけなく別れし日より哀しくて　和田ひろ子
誰にともなく宛てる恋文　鈴木善春
思い出は箪笥の奥にしまおうか　松田憲明
アニメ映画の豚は紅(くれない)　白井映子
潮鳴りをララバイにして寝かしつけ　藤沼和ヱ
海鼠肴に吟醸酒酌む　廣崎龍哉
月の蝉雌伏七年殻を脱ぐ　久良木憲
ピンコロ叶う佐久のお地蔵　坂田武彦
長者ほど金には始末財残し　こ
納税申告助言者が居り　司
花の下コペルニクスを信じたい　こ
尺八吹いて一ト日長閑らか　苗
ニォ大それた奸計うずく鳴門にて　勝
駄賃を弾む小さきポケット　幸
法の山阿吽の仁王鎮座まし　尹
どうせ駄目だよユーホーキャッチャー　う
願うことまた間に合わぬ流れ星　憲
予報たがわず終わる月蝕　苗
捨て団扇太助の顔のゆがみいて　代
結婚式は彦左邸跡　郎
お姫様抱っこ私の秘めた夢　う
愛称交すバスとソプラノ　憲
一陣の風に乗り来るはたた神　尹
銀座の柳二世三世　龍
白黒は裁判官の御ん前で　春
ニアミス事故の多き日航　幸
ニゥ古物市古着選びも混み合うて　彦
遺言書いて元気益々　重
信号の設置を願うボランティア　映
新幹線は青森へ延び　龍
川べりのグリコ看板両手挙げ　代

経済鍋の底をいつまで　司
初ヒット打ちて笑顔のあたたかし　重
雲雀巣作る原っぱの隅　う
ほんのりとワインに酔った朧月　代
貴方のことは全て教えて　龍
立方体必ず解ける帯の如　こ
炬燵の中でそっと握る手　憙
何時咲くと祷るでもなし返り花　苗
雪達磨にはピザを供える　暎
二オ世の中はなべてネットに左右され　勝
ケータイいじる人もさまざま　春
ビールスはどんなバリアも潜り抜け　う
牛舎に近き道に亡霊　憲
昨夜（よべ）聞きし時鳥又今朝も鳴き　勝
遊動円木乗れば炎帝　こ
耳遠き母へ手振りのメロン切る　幸
あまねきものにみ仏の慈悲　郎
印度洋小さき島へフルムーン　司
そろそろ孫も初恋の頃　龍
想う人港大路のカーニバル　代
あとを慕えば匂い麗かに　こ
月花を愛でて帝劇百年に　春
夢の如しや明治大正　尹

二ウ欸乃（あいだい）の沖より高く響き来て　郎
老人ホーム山の夕映　苗
森を買う主は中国富有層　彦
パンダの笹の枯渇憂うる　憲
温暖化どこまで続くこの地球　憙
$の紙幣は泥にまみれて　代
落鮎の影ひらひらと舞うを見し　尹
下駄で歩けば音の爽やか　暎
月の舟卑弥呼の月もかくあらん　勝
ペテンザペテン振込めの詐欺　重
三ツ指をついて立ち去る雪女　龍
虎落笛には情絆されこ
紫のガードルは早や色褪せぬ　苗
地下七〇〇の坑道はいや　暎
ナオ轆轤蹴る日頃うっぷん数多溜め　春
暑しと僧侶筆を一気に　彦
広重の版画車軸の大夕立　幸
青葉の山はエコの水甕　郎
原発に反対のデモ五万人　憙
産土神に旗上げの鬨　う
寒鴉ハングル語かや漢語かや　代
白き息してゴールさせまい　春
あちこちに監視カメラのある時代　重

親しき仲をはばむ家
オフェーリア流るる水の澄み通
野菊束ねて君に捧げ
宇宙船月への旅もほど近
漫才師逝くギャグを残し
スカイツリーは向日葵のご
江戸前の仕上げ涼しき粋な
切子でぐっと冷酒を乾
救急車止まれば皆んな飛び出し
頼りなげなる蝶渡る
神南備を囲みて花の十重二十
知恵詣にも親が付き添

こ尹苗勝憙彦憲龍郎暎う司幸

平成二十三年一月四日首尾
（於・生涯学習センター玉縄分室）

歌仙『笙の笛』

第三一回大山阿夫利神社奉納
正式俳諧興行俳諧之連歌

万緑に絢爛たるや笙の笛　　小林静司捌
　舞台八方抜ける涼風　　小林静司
継続は力と云う語かみしめて　　目黒雨峰
　鯨尺とり背中掻く人　　土屋実郎
川底の小石を照らす月丸し　　宮澤次男
　酒有ればこそやや寒の宴　　赤田玖實子
ウ両の手に茸を提げて来たる友　　青木秀樹
　世が世なりせば隊長と兵　　根津忠史
逃げてゆく男を追えば恋敵　　上田真而子
　アンドロイドの泪なに色　　今村苗
震災の瓦礫の上に雲の影　　浅沼小葦
　月下に猛ける練炭の炎の　　永田吉文
毛氈を敷けば心も優しげに　　澁谷八千代
　滑り出したら止まらない舌　　玖
大き夢若さに託すボランティア　　源桃子
　エコで暮らせば子孫安泰　　千場ひで子
花しまく名刹の堂通り抜け　　速藤尹希子
船点々と霞む大島　　和田忠勝
ナオあほう鳥翼ひろげてうららかに　　和田ひろ子
　ビックマウスは誰のことやら　　廣野順子
サッチモのあのだみ声がなつかしく　　島崎市誠
　A面B面CDになし　　鈴木千恵子
如才なくこの世を渡る吾が笑顔　　秋山よう子
　云われて久しあげまんの妻　　高柳慶子
ほんとうに貴方のことが好きなのよ　　小林富子
　少しはずれてちょいワルもよし　　高島幸子
お囃子に魅せられ御輿後をつけ　　鈴木善春
　スクランブルで夏燕行く　　坂田武彦
ディーラーの狂奔しきり蒼き月　　坂井啓児
　生身魂こそコラーゲン摑れ　　苗
ナウ杉丸太積まれし山家虫しぐれ　　蛭海停雲子
　岩根を分けて探す薬草　　幸
みちのくの細道たどる淵深く　　池田佳子
　遠足の子等掬う湧水　　松田三枝
天守閣囲める花の七重八重　　川上智永
　春の匂いをつつむ振袖　　宗匠
　　執筆

平成二十三年五月二十九日
（於・大山阿夫利神社能舞台）

老宗匠　松濱亭実郎　　花司　千場ひで子
脇宗匠　松濤軒静司　　配配　澁谷八千代
執筆　抱虚庵忠勝　　硯　源桃子
座配　大津博山　　奏楽　鈴木権禰宜
　横山わこ　　巫女　高柳慶子
　前田明水

歌仙『金秋や』

金秋や女神の遊ぶ竹生島　土屋実郎捌
　真葛の原に偲ぶ疇昔　久良木　憲
城山の月のむしろにほろ酔うて　土屋実郎
　鍵を手にして守衛来る頃　小林静司
中央の名画静かに微笑める　今村　苗
　獅子の口から間なき噴水　和田忠勝
ッ「舞姫」は読みさしにして鴎外忌　憲
　候文の祖父の恋文　郎
逢いみての後のつらさの薄なさけ　郎
　安定剤の処方箋うけ　勝
生垣に紙飛行機が不時着す　勝
　行儀作法に厳し母刀自　憲
新聞の株式欄に目を通し　苗
　アラブ諸国にドミノ激震　苗
青白き葦切鮫は月の海　憲
　因幡の兎救う大黒　憲
花追いて無何有の郷に迷い込み　勝
　寡黙の人の深き春愁　勝
風光る地震に倒れし地蔵尊　郎
　元軍去りし浜近き塁　郎
金印を見つけし農夫いぶかしみ　憲
　家宝がいつか国宝となり　憲
風格の老犬に道譲りたる　苗
　母のスカート掴む幼な子　苗
注射針ずらりと並ぶ保健室　勝
　邯鄲の音の集く枕辺　勝
ひとり寝の徒に更け月明り　司
　ああマグダラのマリア露けし　司
娼婦には娼婦の意気地紅を掃く　郎
　遠近に鳴る百八の鐘　郎
ナヲ舟桶に遊ばせておく海松・海鼠　憲
　見様見真似で継いだ二代目　憲
停年も余生も知らず宮大工　勝
　好きなことだけやった人生　勝
故郷の花満開ねらい帰省せん　郎
　覚り顔して穴を出る蟇　郎

平成二十三年七月二十三日満尾　（文音）

歌仙『守武忌』

平成二十三年九月十三日首
平成二十三年十月十八日尾
（於・四日市市文化会館）

西田青沙捌

神楽舞ふ随身若し守武忌　西田青　沙
御裳濯川に遊ぶ月影　岡本耕　史
杜渡る風もいつしか秋闌けて　西尾泰　一
友の誘ひに旅心わく　沙
明け暮れの通勤電車汗しとど　一
児ら炎天に白球を追ふ　〃
行列の出来る焼きたて麺麭の店（ウ）　史
やきもきさせる彼の食ひつけ　〃
腕によりかけてはみたが朴念仁　一
鯉悠々と泳ぐ名園　〃
老衛士の先祖殿様なりといふ　沙
地吹雪しまく北国の産　一
生き延びし一本松に月寒し　史
回想録が注目を浴び　沙
這ひ出して上総の泥鰌天下取る　〃
人の世にある照る日陰る日　一
白壁に花散りかかる蔵の町　〃
鞠を玩具に仔猫遊ばす　史
高僧描く天井の龍　一
訳知りが得々語るしたりがほ　沙
何はともあれ弁当にする　〃
紺碧の海背景に梯梧咲き　史
日除連ねて土師器掘りゐる　一
和顔施を語る寂聴ひとだかり　〃
浮気心と煙草やまらぬ　沙
小娘の手玉にとられ臍を噛む　〃
嘴太鴉あほうあほうと　史
夕月に駄菓子屋の灯の懐かしく　沙
祖母丹精の鈴虫の籠　史
常（ナウ）連の尻を並べて新走り　〃
さぐり合ひする選挙情勢　〃
トンネルが出来て若者村を去り　沙
ＴＰＰは誰のためやら　一
善男子善女人乗せ花見船　〃
朝寝の夢の覚めて儚し　筆

（オカリナ（ナオ）の眠りを誘ふ春の午後）

歌仙『宗祇御文』

大庭初江捌

ほととぎす宗祇御文や詩の誉　　小林静司
涼しき風に仰ぐ霊峯　　中村雄爾
みどり児のこぶしに力あるやらん　　大橋俊二
展示洛中洛外図あり　　鳥沢由克
実家より月に供える栗が着く　　名波秀夫
見る間にあきつ湧くように増え　　田村吉章
役所説く有機農法鴇の為　　加藤豊
草刈る夫婦背丈かくして　　井上輝夫
人生を苦楽を伴の五十年　　袴田稔
たまの歌舞伎に衿少し抜く　　中西基
提灯は勘亭流で賑やかに　　横手陵山
街場展けて遠き瞬き　　久保田松幸
駱駝隊砂漠を渡る冬の月　　藤岡武雄
ロマンを抱く凍てし経典　　竹井英夫
溜め息をつくガソリンの値上げにて　　升田雪子
露天の風呂に眺む残照　　小林春野
この山の宮を隠して花古木　　水野森雄
めかぶとろろに多き長寿者　　花月乙千寿
モーツアルトビオロン復習う麗らかに　　望月康男
川沿いに建つビルの林立　　稲吉節子
防災のグッズ点検欠かすまじ　　田中久子
不自由なれど不幸ではなし　　佐藤安子
摘み棄てた野蒜の花をいとおしむ　　金澤明美
マラソン合宿夏の高原　　久保圭子
擦れ違う後姿が気にかかり　　大石昭江
恋愛論ず年頃の孫　　溝口喜代子
勉学を青春と言う目標に　　高木千代子
セーヌ河往くディナー・クルーズ　　尾上桂子
酔芙蓉月に親しく匂い立ち　　小林富子
映画語りつ新走り酌む　　鈴木玲子
小遣を丸ごとはずみ赤い羽根　　大庭初江
郷土の誇り護る重責　　宮原うた子
稽古あと堂の隅々磨く子等　　田口明子
無垢な心の奉仕あたたか　　長田友子
天領へ向う道なり花の雲　　宗匠
杖を納めて遍路終えたり　　中村雄介

平成二十三年四月十七日首
平成二十三年五月　八日尾　（文音）

歌仙『雪解富士』

高木千代子捌

頂もすでに雪解や富士仰ぐ　小林静司
色を濃くして紫陽花の花　中村雄爾
激流を競いし影は鮎ならん　水野森雄
園外保育児等のはしゃぎて　小林春野
卯の年のまんまる月を待つ今宵　升田雪子
新酒土産に碁敵が来る　久保田松幸
ウ匂い立つ金木犀の神の庭　竹井英夫
文読みかえすなつかしき日々　井上輝夫
校門の前を噂の彼通る　金窪明美
津波のあとの原発の是非　久保圭子
協業を水産省も乗る気にて　田口明子
ヘリコプターが頭上旋回　稲吉節子
露天湯に落ち葉が沈み月の光ヶ　大庭初江
炬燵を囲み民話楽しむ　宮原うた子
十歳かけ世界遺産に中尊寺　大石昭江
寄せ木細工の巧みなる技　高木千代子
花大樹枝垂れ桜の仄とゆれ　溝口喜代子
そこはかとなき春愁の窓　鈴木玲子
ナオ充電をすると云う子のまだ朝寝　長田友子
清々しくも市歌の流るる　春野
年金に生きているかと念押され　うた子
日替り弁当首相発言　英夫
骨のまま恐竜走る不思議さよ　千代子
ジュラ紀白亜紀地球覗き見　横手陵山
勇み打つ祭り太鼓に汗しとど　輝夫
貴方の眸わたし棲みたい　昭江
好きですと恥じらいながら頬を染め　圭子
不惑の伊達はセンターコート　明美
月ゆがむテームズ川畔時計塔　中村雄介
身に沁みており生の循環　明子
ナウのびやかな胡弓聞こゆる風の盆　節子
一期一会の連句座の席　友子
アイバンクドナーカードを支給され　玲子
予想を超えた奉仕うららか　佐藤安子
突き出した土筆の出たる花の宴　宗匠
隈取り凛々し武者絵大凧　小林富子

平成二十三年七月二日首尾

（於・定輪寺）

歌仙『利茶番』

歌舞伎座の見えぬ銀座よ春惜しむ　大森道生捌
大蛤をひさぐ魚屋ウ省等をじっと見つめる案山子翁　原田安恵
利茶番老いも若きも車座に美酒もて晴らす流離の憂さ　佐島和人
ふふふふふと含み笑ひす十八歳ウインナワルツ初々し　割田容子
月今宵和紙にしたたむ師の名句諸人の寿ぐ王室の恋　大森道生
尾花のこゑは風生るる声古戦場ゴム園続くどこ迄も　容子
芳一の琵琶の音月に拡ごりぬ寂寞として蟻地獄待つ　和人
菊人形の黄菊白菊山容の突兀として夏の月　道生
籠までもみやびな鶉合せにて久し振りなり父と語らふ　安恵
宇治の川面の静かなる見ゆバイブルを肌身離さず生き抜きて　荒井慈
次々と世界遺産をめぐる旅悔いも勢も流水のごと　長田竹風
古文書の謎少し解けたるためらひつ花の筏のくぐる橋　安恵
駒止めて若武者手折る花一枝古地図にはなき暮遅き町　慈
空高くあり手づくりの凧　片山茂樹

平成二十三年四月三十日首
平成二十三年六月三十日尾

（於・成城クラブ）

歌仙　『鯖雲の果て』

鯖雲の果て嶋山の泛びけり　和
　月のほるらし光りそむ濤　慈
猪罠を見廻る男足早に　容
　欠けた茶碗に渋茶たつぷり　道
自販機は二十四時間休みなく　安
　銀杏並木の枯るる街角　典
ウ伽羅炷きて太古の冬に遊びたる　和
　和服の決まる金髪の美女　慈
愛の巣はモンマルトルの屋根の裏　慈
　夢の中では合はぬ合鍵　道
何故かしら円高だけが続き居り　道
　外れ馬券の舞へるダービー　安
蟻地獄風は無情に吹きゆきて　安
　刺客の殺気塀に張りつく　容
芳崖の悲母観音の慈悲の御手　游
　ハローワークは此処にあります　游
仮装して月に浮かれる花の宴　和
　団扇を張るが武士の内職　典
ナオ耐へ抜いて上目遣ひの春の蠅　典
　悠々ゴールトライアスロン　和
人生は合縁奇縁頼り合ひ　慈
　いざや歌はん愛の讃歌を　容
傷舐める猫蹲る夜の路地　道
　モカの苦さを暫し楽しむ　安
問診の名医の見立てただの風邪　慈
　障子の穴に偲ぶ故郷　和
轍屋と名付けし友の自転車屋　和
　カリヨン流る公園の道　典
杉の秀のさざす名月清々し　游
　ゑのころぐさを家苞にする　容
ナウ角伐られきよとんとしたる神の鹿　安
　話し下手でも聞き上手なり　安
贈られし誕生祝たからくじ　道
　ほろ酔ひ気分危の鳴く声　道
遠景はまだ白きまま花万朶　慈
　帰国の子女のしやぼん玉吹く　慈

臼杵游児捌

原田安恵
荒井慈
臼杵游児
割田容子
大森道生
佐島和人
坂口典子

平成二十三年　十月二十二日首
平成二十三年十一月　三十日尾
（於・成城クラブ）

歌仙『萩の塵』

萱場双魚尾捌

この星に生まれし奇跡萩の塵　伊藤　鈍
　部屋から眺む月一人占め　三上秋桜
曲り家に先祖代々馬肥えて　若生芥子
　キャッツ喫茶があると知りたり　佐藤阿房
街中を日陰伝ひにさまよへる　萱場双魚尾
「お暑いですね」聞き慣れた声　佐藤無風
ゥ無人駅降り立ちしとき余震また　伊藤南三

朝靄の中我を待つ君　鈍
影ふたつひとつになりし橋の上　秋桜
　マリオネットに拍手喝采　芥子
よい事が明日はあると信じやう　阿房
　いくつハシゴかまた二日酔ひ　双魚尾
女房の仏頂面に冬の月　無風
　遠野の雪の見えてくる夜　南三

かきかけの原稿やっとかきあげて　鈍
　コーヒーの香を深く吸ひ込み　秋桜
笙の音の清らに流る花の寺　芥子
　ふはりと風にのるしゃぼん玉　阿房
ナオふりあふぐ弟を待つ春夕日　双魚尾
　やさしい姉は幸田文さん　無風
全集は買ってくれない古本屋　南三

背中で泣いてる青き唐獅子　鈍
まちぼうけひと回りする牡丹園　芥子
　見慣れし日傘近づいて来る　秋桜
若師匠差手引手にきびしくて　阿房
　おちゃっぴいの初めての恋　双魚尾
抱いた子に言はせてゐるは「お茶しましょ」　無風
　雨のあがった町のはずれに　芥子
すばらしい満月を見て気が変った　無風
　夕刊配るやや寒の路地　南三

ナウ衛菊棚紫の房三つ四つ　鈍
　手つき鮮やか折紙名人　秋桜
ばあちゃんのブレスレットは輪ゴムです　阿房
　ゆたかに唄ふ知床岬　南三
さいはての旅のをはりのおそき花　双魚尾
　平成の世に春のほほゑみ　無風

平成二十三年　九月　六日首
平成二十三年十一月二十二日尾
（於・エルパーク仙台）

〈東京・草門会―その一〉

歌仙　『ターナーの雲』

大橋俊彦捌

ターナーの雲を見てゐる梅二月　俊彦
シャボン玉にも映る飛行機　浜崎浩
入学児制服のやや大きくて　春眠子
塩煎餅をはりはりと噛む　村松定史
上弦のまなざし杜へ降りそそぐ　宏子
たまごみたいになつて紅鶸　真史
神代（ウ）から蓑虫と吾れ孤独なり　定史
ながーく生きてすこし愛して　春眠子
オカモトもサガミもみんな薄つぺら　真史
さうですここは地獄への角　詠美
迷ひ犬曳綱つけて雑踏へ　定史
スイングドアを押さば潮騒　定史
カクテルに月の欠片（かけら）の涼しさを　宏子
俄か作りのお化け屋敷さ　真史
鉄株をＩＴ株に乗り換へむ　浩
ネット通話で英語流暢　定史
花びらの軌跡は　ワイイコール・エックスさんじょう　y = x³　俊彦
うふふふふふと亀鳴いてます　舞

遠足（ナオ）の列やゆよんと蛇行して　俊彦
かすかに兆す火山爆発　浜崎浩
お釈迦様ケータイが壊れつちまつた！　春眠子
抜くに抜けない腰の鈍刀（なまくら）　村松定史
竹馬の片脚走り自慢して　宏子
回天ののち雪晴のキス　真史
煩悩の螺旋階段這ひのぼり　定史
痒いところに手が届かない　春眠子
頭からＤＤＴをかけられて　真史
ビタミン摂つて恢復を待つ　詠美
水軍の波割つて行く月の灘　定史
草茎を挿す芋のひと盛　定史
皇帝（ナウ）の気晴しとして茸狩　宏子
闇の底にて嗤ふジョーカー　真史
旦那さま三つ違いつてそれほんと？　浩
種痘の跡を愛（いと）しがらせる　定史
花の香を密に纏ひて抱き合ふ　俊彦
サッカーボールに触るる淡雪　舞

平成二十三年二月十九日首尾

（於・北とぴあ）

歌仙『おちさうな凧』

老鶯（らうう）や谷の深さを吊橋に　穴澤とこ捌
振舞水に甦る喉　上野遊馬
藍染めの藍のきはやか絞りゐて　穴澤とこ
電車プシューといひて停まりぬ　山下宏子
だるまさんがころんだうしろ月明り　高岡粗濫
笑栗（えみぐり）ひとつ窓におきやる　村松定史
蔵（ウ）を整理初版本売る虫の頃　西川なほ
何か抜くのが江戸の粋だよ　進藤土竜
父方の遺伝疱瘡蓋（かさぶた）はがす癖　坂根慶子
うちもそうよと仲人までも　宏子
白ささげ煮豆の自在柚の宿　土竜
罠を仕掛けて帰る近道　なほ
寒月が苦沙彌の猫を愛撫して　粗濫
フラスコにひび十字架にひび　遊馬
石段の行列の先英知あり　粗濫
旅の扉を押せば海原　慶子
誰ぞ知る花の荘厳島の昼　定史
畦となるべき淡雪の土　なほ
落（ナオ）ちさうな凧落ちないよああ落ちた　粗濫
徳俵踏みぐつとこらへる　宏子
無礼講放歌乱舞の太鼓樽　慶子
くりやごとの間まつりごとする　定史
正解は辰巳の方位赤き富士　粗濫
愛され過ぎて髪を洗ひぬ　遊馬
ふたりには小さき卓も大きくて　慶子
沈黙破るその時は来ず　定史
異人墓地アルファベットを縦書に　土竜
マルゲリータをチンと解凍　なほ
トロンボーン伸び三日月に届きをり　粗濫
母の項の溢蚊を打つ　土竜
秋（ナウ）ぞ隔たると眠るによき姿勢　宏子
天地垂直大地水平　定史
凝りにこり建てたる家の住みにくく　宏子
ゐの字なんともくねくねが好き　粗濫
花百樹くぐればそこは浄土なる　とこ
浜飛魚をどつと漁る　土竜

平成二十三年七月十六日首尾

（於・赤羽会館）

歌仙『山笑う』

石川光男捌

秩父路や右も左も山笑う　光男
　雪解け水の流れ行く先　草笠
木連華木橋の擬宝珠傾きて　知子
　自問自答の独り言(ごと)いう　節子
喘ぎつつ月見る為に登る坂　隆昭
　露の重さに撓む草の葉　草笠
指(ウ)折って父母偲ぶ秋彼岸　信夫
　書棚に残る町史三冊　節子
愛を詠む詩人孤独に苛まれ　和宏
　金も底つきネットカフェ出る　美代子
鮫鰊の大口の上月下弦　隆昭
　燗熱くしてぐいっと引き呑む　草笠
ままならぬ心に嘘はつけぬまま　知子
　乳歯の欠けし少女にっこり　草笠
肩書きが人を育てて裏表　節子
　のこのこ虫も動き出します　隆昭
花の里穏し湯ありと教えられ　光男
　光り長閑かにそそぐ城山　和宏
木漏れ日は楓若葉に滲み透る　和宏
　親の意見の分かる歳月　草笠
もういいかい小さな声でまあだだよ　知子
　一瞥をして猫通り過ぐ　節子
風評の千里を駆けて行く怖さ　草笠
　汗びっしょりの資源回収　節子
ちんどん屋傘寿の母が夏の門　辨一郎
　夜這いのことを問わず語りに　草笠
設(しつら)えよ殺し文句の二つ三つ　隆昭
　見ようで変わる天井の染み　美代子
釣人の去りて落ち鮎月に跳ね　節子
　諸行無常と澄める鐘の音　信夫
毬栗(ナウ)の自嘲の口を地に向ける　和宏
　痴呆遅らす薬効きめは　知子
世の中は想定外と言い逃れ　草笠
　畑の中に氏神のあり　節子
爛漫の大樹の花に夢託つ　隆昭
　不弁の愛に揺らぐ陽炎　光男

平成二十三年四月二十八日首
平成二十三年五月　十九日尾
（於・寄居町よりい会館）

歌仙『苦瓜を』

表・　裏　石川光男捌
名残り表・裏　眞下草笠捌

苦瓜を数えて朝の始まりぬ　市川美代子
　風に揺れてる鬼の子の衣　町田節子
爺婆の月の差しくる縁に出て　眞下草笠
　一瞥くれて猫の出ていく　柏原和宏
謡曲をうたい老医師往診に　柏原知子
　解けては凍る防火用水　杉野辨一郎
ウ着膨れを叩きライター探しおり　和宏
　頬骨こけて変る人相　節子
師の語録心に刻み世を渡る　辨一郎
　癖をば眞似て託つ悲しみ　美代子
結局は女房の尻に敷かれいて　光男
　夏蝶止まる操りの木偶　知子
明日出来ることは明日に月赤し　和宏
　五六八茶腕盆蔓薙の褒　〃
ようやくに話のついて幕開く　節子
　青光りして昇る若鮎　和宏
花曇りナースルージュを濃く引いて　美代子
　春の日傘のいそいそと行く　節子
ナオ藤の房揺れにつかまる団子蜂　和宏
　ワンフレーズで選挙戦う　草笠
オカリナの途切れ途ぎれに流れきて　美代子
　一喜一憂さまざまのこと　辨一郎
撓みつつ雪撥ねこぼす実南天　知子
　裏返し干す白足袋の影　美代子
復元の縄文の壺夢紡ぎ　赤坂信夫
　傾く心千々に乱れて　知子
恋は闇ぐいっとコップに酒ついで　和宏
　付句に迷い髯を撫ぜてる　草笠
月仰ぐ秘湯に独り浸りつつ　知子
　遠く近くに虫の音を聞く　美代子
ナウ残り火に楯木焼べ足す白き風　辨一郎
　三峰講の札の配らる　美代子
細々と栄枯を語る物語り　信夫
　絡繰時計告ぐる曙　知子
爛漫の花をバックに一家族　辨一郎
　微温みし水の流れゆく先　草笠

平成二十三年　十月二十八日首
平成二十三年十一月二十八日尾
（於・寄居町よりい会館）

《桑名・大智院連句会》

歌仙『神の山』

岡本耕史捌

初景色大河を統べて神の山　　み
　予報のままに晴れし元日　　寿
古稀祝小高き噂聞こえきて　　耕
　摘むにためらふ土筆一本　　み
街騒の遠くひびきて月おぼろ　　耕
　文芸欄に友の力作　　み
招福ウの猫にも頼る宝籤　　耕
　君が為にと習ふ手料理　　み
口喧嘩甘い痛みを分ち合ひ　　耕
　針孔を通して下手の長糸　　み
浜木綿は無人の駅に咲き盛り　　耕
　思ひもかけぬニュースつぎつぎ　　耕
月良しと秘蔵の酒の封を切り　　み
　からんころんと鳥威し鳴る　　寿
爽やかに枯山水をわたる風　　耕
　特効薬は肌身離さず　　み
花便り追ひ北上の気まま旅　　寿
民話の里に春は深まる　　静
流觴ナオは寄り道しつつ水まかせ　　み
　ドラフト一位期待ふくらみ　　寿
覚えなき噂話も立ち消えに　　耕
　紙面いっぱいドコモ携帯　　み
千歳飴かんざし揺らし拝殿へ　　寿
　小春の庭に雀むらがり　　耕
失せ物は露座観音に預けられ　　み
　不惑の年に艶聞の立ち　　寿
土壇場でやきもきさせる生返事　　耕
　歩み確かな瞽女を見送る　　み
満月をめざし飛び立つチャーター機　　寿
　ずしりと重き苞の新蕎麦　　耕
公園ナウは老いの社交場名の木散る　　寿
　道をきはめし人はおごらず　　耕
友禅の下絵思案にひと日終へ　　み
　古き調度のかもす床しさ　　寿
花の下てっぱんダンスひろがる輪　　耕
　手紙をつけて放つ風船　　み

平成二十三年一月　六日首
平成二十三年三月二十三日尾　（文音）

歌仙『ひとひらの落花』

二村文人捌

ひとひらの落花ひらりとお薄浮く　石本志明
　袂ゆらして吹きぬける東風　清水季扇
春田打つ世間ばなしのきりもなし　和田てる子
　回覧板のお知らせの嵩　水上潤子
月見酒家族の顔をながめつつ　斉藤越二
　こっそりと飼う犬もやや寒　二村文人
雁（ウ）渡る太平洋の高き波　越
　短歌一首を添える絵葉書　志
なかなかに読めぬ心のもどかしく　潤
　人には負けぬ失恋の数　文
胸叩くキングコングの力瘤　越
　火星まで行く切符購入　潤
西瓜割りいつしか終わり月の浜　季
　井桁における干梅の笊　志
六十の手習いピアノ弾いており　志
　投稿マニア爺のたわ言　季
大災の無事を喜ぶ金鳳華　越
　由緒ありげな猫の子の貌　潤
ぶらんこの行きて帰りて髪遊ぶ（ナオ）　季
　工場跡に作る菜園　越
見上げても見上げてもなお塔伸びる　潤
　難問ばかり図形問題　季
闇汁を食べる順番あみだくじ　越
　つくり笑いの掛乞の来る　季
忍び足彼が出て行く勝手口　季
　闇の乱れを隠す半双　石原淳子
職人の技の冴えたる貝細工　淳
　未来夢見て故郷を発つ　由
たちまちに雲の切れたる月拝む　山口由紀子
　七堂伽藍潜む邯鄲　〃
言いにくきこと言いやりぬ秋扇（ナウ）　潤
　子供歌舞伎の見得はりりしく　て
コスプレの行き交う街に踏み迷い　志
　節電グッズ並ぶ店先　越
山々を遠くに据えて花霞　淳
　小川のほとり茶摘み唄聴く　由
　　平成二十三年四月十六日首
　　平成二十三年七月十六日尾
　　（於・越前市生涯学習センター）　季

歌仙『啓蟄や』

田中安芸捌

啓蟄や言の葉紡ぐ糸車　青柳祥風
少年野球の春は直球　田中安芸
貝櫓おごれる街に我はゐて　山中主水
鳶の声のやがて輪となる　今富千辺
月の夜は古き瓢に薄き盃　小野酔陶
大地が匂ふ茹でた摘み菜　秀島一生
ひつぢ穂はわずかな重みを頷きぬ　安芸
内緒にしとこあのひ見たこと　祥風
揺れる日々揺れぬ夕べも揺れ合って　千辺
鏡に恥じる満ち足りし肌　主水
一瞬に命賭けたる蒼き海　一生
煉瓦を積んでバーベキューの炉　酔陶
教会の鐘は夏野に鳴りわたり　祥風
寝転ぶ縁に月の涼しく　主水
入手せり名画座手描きのポスター集　千辺
白髪ばかりのジャムセッションで　酔陶
ありなしの波にまかせる花の渦　主水
春愁さえも生きてゐればこそ　一生
てふてふも撫でてゆきたるおびんずる（ナオ）　祥風
自転車でゆく山の辺の道　安芸
二十四の瞳の島に着任す　主水
削りとられし石切場跡　千辺
壺朱くギリシャの神は奔放に　酔陶
胸から潮の香夢の残りを　一生
その先は青女ふはりと抱かれたる　安芸
爆ぜるほだ木の燃え尽きるまで　祥風
折り紙の端を掴めばだまし舟　千辺
鰊御殿の梁は黒々　酔陶
薄雲の輝いてゐる良夜なり　主水
横断歩道を渡る瓜坊　安芸
あれ（ナウ）捨てよこれ捨てよとて秋の風　千辺
炊きたて飯のそれだけでよし　一生
物産展東京に出て早十年　祥風
猫が目で追ふ枝のコジュケイ　酔陶
千年を滝と枝垂るる三春花　一生
手を差し伸べよ佐保の姫君　主水

平成二十三年四月八日首
平成二十三年十一月七日尾（文音）

歌仙『残り雪』

平成二十三年四月七日起首
平成二十三年五月二十日満尾　（文音）

塙　於玉捌

戦乱を耐えし離宮よ残り雪　　武井蛙女
　松の並木に初蝶の影　　塙　於玉
シャボン玉児らの笑ひの響くらん　　仲本お池
　サイズ大きな片方の靴　　山中土筆
月光と風を肴に一人酒　　小林喜一
　湯上りの宿そぞろ寒くて　　横田思案人
蛤（ウ）になるや波間に雀消え　　高井辛六
　割り切れぬまま送るひとあり　　蛙女
恋って何？少女の瞳濡れ濡れと　　於玉
　恩納岳（おんなだけ）には今日も黒雲　　お池
右足をそっと出したる猫のひげ　　土筆
　名曲喫茶に染みる昭和史　　喜一
昼の月カンカン帽を放り投げ　　思案人
　真上の黄道影をつくらず　　辛六
正座して写経のまねをしてみれば　　蛙女
　ほとほと鳴るは裏の枝折戸　　於玉
新幹線いくつ数へし花の土手　　お池
　茶をつむ笠のをちこちに見ゆ（ノオ）　　土筆
いかなごの釘煮香ばし浜の町　　喜一
　電子ブックを拾ひ読みして　　思案人
逢ひ見ての昔の思ひ甘く酸く　　辛六
　手にあまりしは熱き乳房よ　　蛙女
雌が雄喰らふあはれさ枯蟷螂　　於玉
　氷橋より望む故郷　　お池
杉木立神仏合祀の跡たどり　　土筆
　何度でも見るジャイアンツの勝ち　　喜一
払ふても払ふても付くぬらりひょん　　於玉
　目を伏せながら小判差し出し　　辛六
音もなく櫂のしづくに望の月　　蛙女
　いい日旅立ち秋は爽やか　　思案人
冬（ナウ）近し鉈豆煙管磨きつつ　　お池
　かんなけづりは薄くまるまり　　土筆
みちくさは五年にもなり待ちぼうけ　　喜一
　磯巾着の触手ざはめく　　思案人
一村を覆ひ尽せし花万朶　　辛六
　巣立ちの鳥の誇らしき声　　執筆

歌仙　『エチュードは』

大久保風子捌

エチュードは一ページより風光る　谷口螺々子
　菜の花化して黄蝶白蝶　大久保風子
春の波沖の小舟は眠たげに　新田透舟
　もういいかいとたはむれる子ら　山縣敬二
まんまるな猫を抱きて月を待つ　半田有杜
　飛びゆく雁の山裾に融け　稲葉和平
ゥ潜るとも浮くとも知らず散るモミヂ　横田童子
　水占みくじ大吉と出る　螺々子
薄紙を心の奥で剥がしゆく　風子
　煙草に残る冷めた紅(くれなゐ)　透舟
リセットのボタンひとつをそつと押し　敬二
　槌音ひびく三伏の街　有杜
真夜中のニッコウキスゲ月仰ぎ　和平
　山門のさるとぼけ顔して　童子
フーテンのふらりと戻る上り端　螺々子
　はうたうの膳婆が差し出す　風子
花の雲纏ひて閑か井の頭　透舟
　秘密基地には蝌蚪の大国　敬二
ナォ弥生尽身のすみずみに酒の滲み　有杜
　若者だけか穴あきズボン　和平
マックイーンの映画でも見る休診日　童子
　電波時計は針の音なく　螺々子
雪晴を埴輪のひとり微笑んで　風子
　悴む素手で轆轤くるくる　敬二
常ならず女礼者の匂ひ立ち　有杜
　胸の谷間に涙あふれる　和平
眠りから覚めたつもりが夢の中　透舟
　ベンガラ格子に犬の遠吠え　童子
煌々と瓦礫無情に照らす月　敬二
　倒れてなほも咲きし浜菊　螺々子
ナゥ古民家の三和土ひんやり宅配便　風子
　トンネルの中曲がりくねつて　和平
煎餅は他と違うぜたれと鰭(ひび)　透舟
　残る氷に空ひとつずつ　有杜
岩を割り花咲き誇る命こそ　童子
　吊し雛に鶴亀もあり　執筆

平成二十三年四月七日首
平成二十三年八月三日尾　（文音）

歌仙『天下の嶮』

前田圭衛子捌

蜻蛉は天下の嶮を背負ひたり　風子
　ケーブル上る八朔の線　千辺
こどもらの星空教室月待ちて　安芸
　噂話は伏字だらけで　螺々子
大岩を右に左に真帆片帆　風子
　氷柱解ける裏の鶏小屋　喜一
ウ田に畑にシュガーの如きこごめ雪　安芸
　洋行帰りの髭をたくはへ　有杜
みちのくの一夜契りの峠越え　千辺
　感電しさうな奴のイニシャル　風子
水底の魚はくるりと転がされ　和平
　麦湯の汗に映る三日月　お池
ほととぎす産土神の鼻は欠け　螺々子
　揺れて眠れぬ肘枕なり　喜一
わが町の一番といふ歯科医院　〃
　スカイツリーは展望台へ　お池
満開の花からのぞく過ぎこしを　風子
　明日はハレルヤ憲法記念日　千辺
ナオ居開帳千手に運ぶ算盤を　安芸
　タクト一閃！さてどうしませう　螺々子
地下道の秘密扉を聖少女　風子
　噂話は伏字だらけで　喜一
鎌鼬いまだに傷はしくしくと　安芸
　姫始めとは先づ掌を合せ　有杜
いの坂にろの坂はの坂九十九坂　千辺
　クルーズ船は岸壁を去る　風子
あるだけの包丁研ぎて時待てど　和平
　残る暑さにおろす看板　お池
稲妻の走る音せり月歪む　螺々子
　籾すり唄を口ずさむ婆　千辺
ナウ襷がけ新酒ふるまふ蔵通り　螺々子
　塩辛煎餅家苞にせむ　千辺
孔子廟とりどりの香絶えまなく　螺々子
　仕事探しの絵馬に霾る　喜一
軍書より花の吉野はみじろがず　〃
　かぎらふ野辺に二重なる虹　お池

平成二十三年八月七日首尾
（於・リソーピア箱根）

十八公　『七福神詣』

今村　苗捌

七福神詣でいささか千鳥足　今村　苗
春着の裾をつまむ細指　式田恭子
デザートのフォーテューンクッキー真二つに　廣野順子
かっと目をあけ寄ってくる犬　苗
新幹線乗り継いでゆく北の旅　恭子
仔細ありげに閉じる宿帳　順
乱れたる皺のベッドに人もなく　苗
消えては現るる空蟬の恋　恭
伝えてよ月に思いを唄う風　苗
石榴の熟れるスペインの庭　順
色ウ鳥の止まらぬほどの細き枝　恭
母のへそくり壺にいっぱい　苗
鼻先で笑う赤鬼有為の山　順
冬眠の熊何の夢見る　恭
読みさしの絵本そのまま年経りて　苗
エリック・サティ聴きてのどけし　順
降りそそぐ花びら乗せた舟を漕ぎ　恭
スカイツリーに融ける淡雪　苗

平成二十三年一月十八日首尾
（於・中央区立産業会館）

歌仙『葱坊主』

一列は殊に首振る葱坊主　中林あや捌

シャッターチャンスねらふ軟東風　中林あや

春ショール流行りのパターン編みあげて　今村苗

誰か聴いてる野球中継　横山わこ

黒雲に月隠れたり出てきたり　生田目常義

残る燕のための高窓　苗

猿笛(ウ)を吹いてクラスの人気者　や

すぐにも解ける微分積分　わ

見た目まで優しさうってむづかしい　や

兵士にっこり笑ふ髭面　義

汗が浮く隣の部屋の睦言は　苗

レースカーテン透かし弦月　や

シャンパンの黄金の泡が騒ぎたち　わ

ためらひながら神を裏切り　義

父の背の少し曲がりて鍬洗ふ　義

やっと広がる登校の道　わ

贅沢はわたくしひとり浴びる花　や

犬に鶯餅を食べさせ　苗

永(ナオ)き日も姥の手と口よく動き　義

アイロン掛ける障子戸の中　苗

ラの音がどうも狂ったハーモニカ　や

納得してる肩書の価値　苗

困に襟元しかと合せゐて　義

今は珍しだるまストーヴ　わ

アッチッチさはると君は危険物　や

ほなら行かうか夫婦善哉　苗

新幹線日本列島みな繋ぎ　わ

あまり当らぬ気象予報士　義

送り盆月の門辺に母を呼び　苗

いつかひしひし秋の潮満つ　や

初鮭(ナウ)をさっくり捌く腕の冴え　義

店の奥には仕舞ふ算盤　苗

またやった回転椅子を回す癖　や

バンカーからも取れるバーディ　義

花の幕まごと遊びをちょっとだけ　わ

蝶ゆるやかに渡る山峡　苗

執筆

平成二十三年四月十九日首尾
（於・中央区立産業会館）

歌仙『やげん堀』

坂田武彦捌

秋惜しむ句莚続きしやげん堀　坂田武彦
　ビルの合間に仰ぐ半月　臼杵游児
今年酒分ける暖簾に顔現れて　鈴木美奈子
　野球の結果すぐに聞く癖　登坂かりん
番台の親父の声のよく通り　今村苗
　びくりともせず眠る灰猫　彦
取り出すは昨日買ひたる懸想文　游
　触れそで触れぬ意地悪な距離　奈
間違へし座席が縁でゴールイン　ん
　グレンミラーのリズムうきうき　苗
打ち掛けの鬼手は何と王手飛車　彦
　しとどの汗を拭ふハンカチ　游
月見れば国を憂ひてどじゃう鍋　奈
　長屋住まひの抜けぬ武士　ん
大型の画面二枚目強い髭　苗
　夜の盛り場静寂不気味に　彦
御慈悲の阿弥陀如来よ花の舞ふ　游
　紅貝一つ握りしめたる　奈
砂浜にくるりと廻す春日傘　ん
　ソーラーカーのレーススタート　苗
エコの家新案特許あちこちに　彦
　小判を探す庭の片隅　游
梟に智恵をお貸しとにらめっこ　奈
　雪女でも子宮ふるへて　ん
思ひ切ることもならずに毒を盛り　苗
　骨董市にまた碁筒を買ふ　彦
古文書に活断層を学ぶ人　游
　日本海今翡翠色せる　奈
迢空忌甍の波に月の濡れ　ん
　後の雛を飾る母と子　苗
年経りて昔嫌ひな芋好きに　彦
　出湯の町に祝ふ全快　游
SLの技術をつなぐ心意気　奈
　ロボットアーム油揚げする　ん
爛漫の花の鎮守に鈴を振り　苗
　甘茶を注ぐ茶寿の長老　彦

執筆　苗

平成二十三年十月十八日首尾
（於・中央区立産業会館）

歌仙『立冬や』

奥村富久女捌

立冬や舞妓と遇ひし橋の上　長尾信子
久方ぶりにけふは小春日　奥村富久女
幼児は猫のしつぽを手遊びに　出来千恵
鴉はかあと鳴いて横向く　北原春屏
山間の村をしづめて昇る月　高岡裕子
芒の原にしろがねの風　信子
天高し衛星のゴミ何処にか　千恵
ゆらぎの理論恋のかけひき　〃
あの頃の不実を詫びるすべもなく　春屏
地獄見てこそ極楽もあれ　富久女
遺言は開けてたのしみ子沢山　裕子
涼しさを賞づ噴水の宮　千恵
月の膳ベジタリアンに冷奴　信子
ＴＰＰの賛否にぎやか　裕子
グローバルやめて自給の里づくり　富久女
槍が降つても行く時は行く　春屏
泥道を避くる額にしだれ花　裕子
ともしびおぼろ酔つた勢ひ　真而子
袖まくりすればすぐひく春の汗　春屏
幟振りふりサッカー応援　信子
マネージャー尽し尽してゴールイン　裕子
寝ぐせではねる髪も可愛く　富久女
尖塔に沿うて旭の昇りゆき　春屏
ステンドグラス輝きを増す　上田真而子
探偵はフロックコートひるがへし　千恵
ぶつかりさうに雪女くる　信子
お話は土の匂ひの東北弁　真而子
猪口と徳利と濡縁の月　富久女
栗の毬集めて並べ防犯に　千恵
露を結ぶか峡の草々　春屏
道祖神誰が供へしやお饅頭　真而子
ひと日短く一生を長く　千恵
今どきはエコだとエゴ通し　〃
透明人間さへづりを聞き　裕子
花吹雪く風なき昼の公園に　品部三酔
遊動円木ゆれる陽炎　〃

平成二十三年十一月五日首
平成二十三年十二月三日尾

（於・京都・京新山）

歌仙『鯉涼し』

奥村富久女捌

川底を掘りつつ上る鯉涼し　北原春屏
　床のうたげの今やたけなは　高岡裕子
夏帯の露草の柄光りゐて　出来千恵
　三十一文字をすらすらと書く　長尾信子
高層にいつか住み慣れ月今宵　奥村富久女
　雁も来るかと彼方みつめる　丸山景子
船ヲ旅の予約を済ませ爽やかに　信子
　うれしいときは濃き睫毛伏せ　富久女
婿殿は母の選びし美青年　信子
　ハワイ島にも味噌醤油あり　千恵
うつくしき嘘といふとも嘘は嘘　〃
　押売り人は猫におあいそ　富久女
世渡りにお手本はなく月冴ゆる　信子
　音疎かせ冬の涛寄す　景子
避難所に暮らして早も半年余　裕子
　鼻毛が障る思案投首　春屏
数校も合格通知花盛り　品部三酔
春雨傘を借りてそのまま　富久女
ナオのんびりと母娘いつしよに朝寝して　裕子
　鬼の居ぬ間の洗濯の宿　三酔
退治するつもりがいつも追はれる身　千恵
　夕べの水面魚紋いつまで　春屏
ひとことが言へずに石を投げつづけ　三酔
　まづ蛍見へ誘ひ誘はれ　富久女
抱き寄せる肩の震へもいとほしく　三酔
　パリの街路樹わたるそよ風　裕子
月欠くる美は衰残にこそあれと　春屏
　平仄ふみてうたふ虫の音　真而子
木道に紅葉はらはら野分あと　信子
　無常迅速人の世もまた　真而子
ナウ琵琶法師法師と言へどまだ若く　春屏
　螺鈿細工の映ゆる夕陽　裕子
太柱碁を打つ音のひびきゐて　景子
　やまあひの里けふもうららか　信子
花ごころこの千代の座ぞたぐひなき　富久女
　永久に幸あれ霞む天空　真而子

平成二十三年八月六日首
平成二十三年十月一日尾

（於・京新山）

歌仙『窓ぬくし』

窓ぬくし談笑絶えぬ句莚かな　品部三酔
　春の光りのそそぐ草垣　北原春屏
何告げん紋白吾にまつはりて　竹内茂翁
　それかあらぬが心浮き立つ　上田真而子
街角のパフォーマンスに月渡る　出来千恵
　能舞台にも爽やかな風　長尾信子
ウ虫の音のはたと止みたるしじまなり　高岡裕子
　しどけなく落つそら解けの帯　奥村富久女
家族風呂そのてぜまさが嬉しくて　奥村富久女
　福助ゆらり頭傾げる　真而子
どこからを額と言はむ翁顔　茂翁
　国境線の由来怪しき　春屏
月涼しいたづらを見て見ぬふりの　真而子
　ビールの泡はやがて消えゆく　富久女
尉三人いづれおとらぬいなせにて　信子
　くれぐれ頼む弟のこと　茂翁
おだやかに余命を知りて花の旅　裕子
亀鳴く池にゆらぐ塔影　三酔

奥村富久女捌

平成二十三年三月五日首
平成二十三年四月二日尾

（於・京新山）

ナオシャボン玉スカイツリーを超えよかし　真而子
　乳のむ吾子のなにを夢見る　茂翁
就職の出来る日本に早くして　裕子
　神に恋することが信心　富久女
五分前別れた君にまたメール　春屏
　授かり婚で円く治まり　富久女
目覚むれば雪はま白に明るみて　裕子
　玄界灘に鯨潮吹く　春屏
竹柄の郡上紬の島男　茂翁
　大災害に大活躍す　信子
月光を頼りに歩む道しるく　裕子
　カシオペイアは正にW　真而子
ナウ錆鮎と言へばいかにも美味しそう　〃
　生きて甲斐ある世と思ふとき　富久女
しばらくは身まま気ままの鄙住居　信子
　朝寝の床にひびく鐘の音　三酔
花の蜜吸つては散らす群雀　裕子
　覆たなびく遠の山々　富久女

歌仙『風の門』

赤田玖實子捌

三月といえども寒き風の門　赤田玖實子
　貴き香放つ沈丁の庭　三浦康子
山笑うかに噴煙の昇りいて　安楽明郎
　お茶とお菓子とお喋りな友　澤田知子
かなかなの声に誘われ灯をともす　林茂夫
　玉兎の影を仰ぐ荒磯　鈴木壽子
ウ秋の野路五重の塔の遠く在り　知
　紅緒の草履里の乙女子　壽
同棲に食の好みもいつか似る　康
　安心の果てするり逃げられ　玖
気おくれを整えている深呼吸　康
　今も繋ける掛け捨て保険　茂
鞘走る居合の剣士夏の月　壽
　頂天眼を愛づる好きもの　明
浮き世にはかかる憂きめもあるそうな　明
　神のみぞ知る明日の吉凶　壽
餅花のゆたかに揺れる百姓家　茂
　歌舞伎役者が年豆を撒く　玖
ナオ伝説の人にはなれず市井の身　茂
　女とみればすぐに粉かけ　壽
式場で見事に丸い嫁の腹　康
　満漢全席お互いに意地を張り合う土用灸　玖
納戸の奥にしまう洋服　茂
　これからは眠れる資源ほりおこし　〃
獲物追いかけ猟犬ダッシュ　明
　住職が母を悼みて枕経　壽
再会の酒時は過ぎゆく　茂
　青月の清に照りたる城趾に　和
不知火消ゆるあかときの沖　康
ナウおどけてるマリオネットにばったんこ　和
　陣取りの児が領土拡張　明
暗証の番号忘れ我は誰　佐
　穴を出てくる蛇のときめき　〃
花吹雪まといて夫婦輝きぬ　和
　春は終らむ一炊の夢　明

鵜飼佐知子

平成二十三年三月十日首
平成二十三年五月五日尾
（於・ハイライフプラザいたばし）

《東京・筑波東京連句会―その二》

半歌仙

『防災の日』

赤田玖實子捌

防災の日のサイレン高く鳴り　鈴木壽子
雲を掻き分け覗く晝月　鵜飼佐知子
線路際葛の葉あらし渦巻きて　朝倉和子
お伽噺の絵本聞かせつ　三浦康子
児を連れて駄菓子屋で買うかりんとう　澤田知子
熱燗飲んで弱気追いやり　安楽明郎
ウフェイクファーコート中身で勝負する　赤田玖實子
口説いてみればアラフォーの女　和
強力な接着剤で繋ぐ縁　佐
赤縄を捨て駆込み寺へ　康
伝わりし江戸のトランプ角が擦れ　明
駱駝の列が炎ゆる沙漠を　和
おしゃべりに何時か溶け出すかき氷　佐
母の愛せし市松人形　壽
球場のスコアボードに零並ぶ　佐
春一番が野越え山越え　壽
月光に押されて流る花筏　佐
棚の胡弓も更けて朧に　知

平成二十三年九月一日首尾

（於・板橋九曜会館）

半歌仙　『秋麗の』

秋麗の水切つて飛ぶ小石かな　　密田妖子
　葡萄畑の村の中程　　瀧澤尚子
月の光ゲ眠る子の息安らかに　　北野眞知子
　謡を復習ふ聞きなれし声　　宮村千鶴子
ジーパンのもてあましたる長き脚　　谷本綾子
　麦茶がぶがぶボランティアたち　　妖子
ウ産卵は涙ながらに正覚坊　　尚子
　今宵こそはと渡す恋文　　眞知子
怖いほど君の想ひのまつしぐら　　千鶴子
　道あやまるも物の怪のせい　　綾子
大いなる存在ありと生悟り　　妖子
　微酔ひ機嫌仰ぐ凍て月　　尚子
板葺きの納屋に寒味噌仕込まれて　　眞知子
　腰痛も無く祝ふ黄髪　　千鶴子
二代目にまだまだ譲る気はなくて　　妖子
　もどかしいのは国会中継　　綾子
爛漫の花に未来の夢託す　　尚子
峰から町へ渡る初虹　　眞知子

膝送り

平成二十三年十月十日首
平成二十三年十一月三十日尾

（文音）

歌仙『水打つや』

水打つや遥けきものの来る方も　八尾暁吉女
きのうの色に重ね散る沙羅　宇野恭子
絵筆とる少女の指のしなやかに　岡部七兵衛
籠のインコに話しかけられ　橘文子
十六夜の浮き立たせたる沖つ船　矢崎硯水
細波ゆれる秋の四阿　齊藤桂
そそくさと旅支度するそぞろ寒　矢崎妙子
アバンチュールに胸がときめく　城依子
お互いに騙し騙され狐狸の仲　飯沼三千古
愛は劇薬飲み過ぎぬよう　暁吉女
育苗舎モーツアルトの曲流れ　恭子
炉あかりで聞く月の伝説　七兵衛
焼薯をふうふうと吹き子は無心　文子
屁のお化け出番窺い　硯水
宇宙まで一っ飛びした夢の中　依子
城の櫓を遠眺めして　妙子
花めぐり母と腕組み歩をゆるめ　桂
茶屋の近くに鳥の巣のあり　三千古

八尾暁吉女捌

平成二十三年七月十三日首
平成二十三年八月三十日尾　（文音）

春疾風からんと鳴らす神の鈴　恭子
かぐわしきまで香にいつも癒され　暁吉女
恋成就誓いし地図に載らぬ宿　文子
夕べの窓に寄り添える影　七兵衛
占いは星もカードもハッピーに　桂
現の証拠よりハビリの効　硯水
好々爺酒はほどほど泥鰌鍋　依子
上がり框に猫が寝そべり　妙子
塔頭は塵ひとつなく清められ　暁吉女
読経の声の低く洩れくる　三千古
名山を従え昇る望の月　桂
夜長楽しむ推理小説　七兵衛
牧閉ざし瓦礫撤去のボランティア　依子
ダイダラ坊が助っ人にきて　硯水
いい湯だなきょうは別府にあす箱根　恭子
目借時とて振り子ゆうらり　三千古
播磨屋の国宝祝ぎて花の舞　文子
望みも高くかかる初虹　妙子

歌仙『春雨や』

春雨やけぶる港の白い船　　洋
　あっといふ間に消ゆるつばくろ　　穂
弥生尽読みかけの書を積みおきて　　風
　窓を開ければ心地よき風　　暁
月見団子何処ともなくコーラスが　　洋
　家族総出で棚田稲刈り　　穂
ウデッサンに美術の秋の筆揮ふ　　風
　か細きうなじ後れ毛を撫で　　暁
自転車を連ね逢瀬は例の場所　　洋
　見つめあふときあがる噴水　　穂
肝試し騒いだ寮の月の夜　　暁
　犯人逮捕スイッチを消す　　風
あちこちに黒板吊すメモ魔くん　　穂
　アルツハイマー介護にも慣れ　　暁
温顔の阿弥陀如来の薄明かり　　洋
　竹や笹竹引き売りの声　　暁
花吹雪振り向く子にも降りかかる　　風
　博多練酒とろりうららか　　穂

膝送り衆議判

福武　光　風
浅野　秀　穂
八木　紫　暁
河端　洋　穂

ナオ蒼天に絵凧の竜の睨むらん　　洋
　賑やかに過ぐジョギングの列　　穂
漁夫三年温泉宿を継ぐ決意　　風
　万人対応和洋折衷　　暁
鎮もれる社の森に灯の点る　　洋
　ほろいけほうぜ梟の呼ぶ　　暁
ストーブが消えて終了資料読み　　風
　水道橋に寄るランデブー　　穂
尾鰭つきぱっと広まる艶話　　洋
　原発風評売れぬ作物　　暁
叢雲に照っては翳る今日の月　　洋
　メタボとなりて穴惑ひをり　　穂
ナウ豊年で体育祭も盛り上がる　　風
　猫蹲る駐在の椅子　　暁
ゼロ戦のキット数多を買ひ揃へ　　穂
　襲名披露述べる口上　　洋
咲き初むる花の山里遍路ゆく　　暁
　やはらかき陽にとける終霜　　洋

執筆

平成二十三年三月二十日首
平成二十三年四月十七日尾
（於・福岡・行動医学研究所）

歌仙『荒御魂』

大口元通捌

荒御魂しづまる海や暮の秋　大口元通
　蜻蛉のとぶ古里の村　宮川尚子
月の出にあの子もこの子も声出して　杉山壽子
　母手づくりの弁当を持ち　田中初子
トロッコで若葉の森をぬけてゆく　尚通
　ハンモックにて眠るひねもす　尚
紋ッ章のついた襯衣着て大得意　壽
　馬のあつかひむつかしい彼　通
いつのまにブラジャーの紐するり抜く　初
　マークシートはきつく塗り込む　壽
休講の報せ張りだす掲示板　尚
　時給あがらず疲れ倍増　初
日だまりの押しくらまんじゆう楽しげに　通
　凍月しるく仰ぎ見る富士　通
街中がまたたきもなく更けてゆく　尚
　偶然といふチャンス逃がすな　初
宰相と農相が来る花の道　壽
うららの国を戦闘機飛ぶ　通
この星は土匂ひ立ち不安なり（ナオ）　尚
　野球終つてさあバーゲンに　初
節税のためと禁煙誓ふ父　尚
　竜魚退散阿耨観音　通
すれ違ふ夏帯絽襟豪華船　初
　けふの果報は昼寝して待つ　壽
ささやかに文具雑貨を商つて　通
　肌の温度がちようどよい人　尚
やはらかい枕いぢめるつねつてる　初
　写真の中の笑顔輝く　壽
先にたち後になりしてゆく月を　尚
　木のうろにある猴酒など　通
大げさにハロウィーン祝ふ蓮葉者（ナウ）　初
　午後の授業はあくびとろとろ　壽
貝塚の発掘作業よろこんで　通
　雲追ひかけて丘のてつぺん　尚
軽やかに舞ひ踊る花空に溶け　初
　松風の立つ茶室春昼　壽

平成二十三年十一月九日首
平成二十三年十二月九日尾
（於・熱田神宮文化殿）

短歌行　『踏石の』

中森美保子捌

踏石の足裏におぼゆ涼新た　中森美保子
扇をおけば近づける山　青島ゆみを
有明の水面に映る風ありて　古賀寛哉
牛乳配る自転車の音　保
ップードルを追ひ立ててゐる佳き女　を
モヘアのコートやんはりと抱き　哉
眼前に凍てた唇迫り来て　保
鉄製椅子の軸が壊れた　を
暴かれた交信履歴引退へ　哉
ボランティアなど余生悠悠　保
花降れば座禅三昧して過し　を
思ひがけなく蜂の巣のあり　哉

かぎろひの丘に写生の学童ら（ナオ）
道行くひとを呼べば応へる
本命をはづし大穴狙ふ癖　保を
オペラグラスの中にウインク　哉を
カルメンに惑はされゆくホセばりに　保を
運動会の仮装競争　哉を
重箱に美酒ひとしづく月の客　保を
烏瓜にてオブジェしつらへ　哉を
海岸（ナウ）に打上げられた魚網浮き　保を
住吉様に祈るかか様　哉を
翁の碑訪ねめぐりて花の時　保を
閑所の奥を春日傘ゆく　哉

平成二十三年八月二十四日首
平成二十三年九月七日尾
（於・愛知芸術文化センター）

短歌行　『この星の』

島田裕子捌

この星の恨みごとあり冬隣　　青島ゆみを
宵月ほのととほけ顔なる　　島田裕子
復興へ秋の祭を賑やかに　　古賀幹子
小学生のコーラスがあり　　を
放課後の校舎つぶさに巡回中　　裕
今川焼をそつとわたされ　　幹
早鐘のやうにハートが凍てる儘　　を
はみ出すDMレターボックス　　裕
忘れずにごみ収集日印つけ　　幹
三合の飯けふも仕掛けて　　を
逃げて来た猫うづくまる花の下　　裕
春を惜しめる人のそぞろに　　幹
お遍路の土佐修行路をたゆみなく　　を
スケッチ並ぶ駅の待合　　裕
上達はひたすら練習あるばかり　　幹
ひらめきだけで万馬券取り　　を
喧嘩してまた仲直り嫌な奴　　裕
あばたもゑくぼ麦酒飲み干す　　幹
半天に孤独妬まず夏の月　　を
あつけらかんと笑ふばあちやん　　裕
お土産の風呂敷包み携へて　　幹
ほくの故郷君のふるさと　　を
花の山カメラサークル撮影会　　幹
小さな巣箱庭に取り付け　　裕

平成二十三年十月二十六日首
平成二十三年十一月二十三日尾
（於・熱田神宮宝物館文化殿）

『新蕎麦や』

八吟歌仙（東回り）

新蕎麦や恩師通いし三朝庵
　大学町に秋の夕暮れ
月愛でつ心の内を吠えたてて
　埴輪のまなこ何を見つめる
知の果ては宇宙のゴミに消えて去り
　毛皮のコート厚い手袋
厳冬にきつねたぬきの遊ぶ庭
　垣根のふたり息を殺して
駆落ちのプランなかなかまとまらず
　体重計に一喜一憂
表札に蜘蛛の巣かかる侘び住い
　峠の月に拭いたる汗
目算のなきまま手にす旅鞄
　海辺の宿で地酒くらべつ
栄螺焼く幼き漁婦の白き肌
　四囲春色にそまるあけぼの
花あればいずこにあるやわが浄土
　相馬御風の里に遊びて

付け回し

生方孝坊
磯なお
秋山柿生
利根川たらう
田島呑空
矢野徳三郎
尾形弥生
太田里空
な

詩を詠むその詩人の卑しき目
　童の寝顔睡り誘いい
寺々の鐘の音わたる須磨の浜
　行方知れずいずこ足袋職
雪山に対峙する人冬の月
　森の奥なる木霊の声
離れ家に難聴の耳かこちつつ
　しっかとたてる羽衣の松
ひそやかに恋の噂の涯しなく
　ビル乱立のラヴホテル街
月蒼く万延元年庚申塚
　萩の群落風に騒いで
村々は残る暑さに過疎となり
　運河にゆれる燈りしずかに
さよふけてブルースをきくただ一人
　声かけながら帰りゆく鳥
雨催い人波の退く花堤
　揺の女の山王祭

柿
た
呑
徳
柿
た
な
孝
弥
里
呑
徳
柿
た

平成二十三年十月二十三日首尾

（於・早稲田きむらハウス）

八吟歌仙（西回り）

『霜　降　や』

霜降や露地の野菜も味太し　弥生
　たそがれゆけば淡き夕月　里
とつぜんに山の稜線粧いて　孝
　塔の時計はあの刻を指し　な
冷気きてとにもかくにもマフラーを　お
　柊の香のただよえる中　磯
玉（ウ）砂利をしめやかに行く老い一人　生
　反古となりたる約束の酒　柿
あの紙上君の評論よかったよ　生
　仏の顔は二度も三度も　里
夏の月隣の客の騒がしさ　空
　葛の花散る野辺の細道　孝
見おろせば被災の海のひらけたる　た
　魚ずしりと今日の献立　柿
マーラーの「復活」の鳴る奏楽堂　吞
　ユーロの安く連れもすぐ乗り　徳
露天風呂花をまといて染まる膚　里
　鐘の音近く霞たつ空　弥

付け回し

田島吞空
矢野徳三郎
尾形弥生
太田里空
生方孝坊
磯なお
秋山柿生
利根川たらう

消（ナオ）しゴムで消したき日あり雛の宵　徳
　東京電力閣に葬る　吞
この絆あらぶる神のみそなわす　里
　砂漠の道は砂埃して　孝
冬の月B級グルメ舌つづみ　な
　燗の温みで競う陰口　柿
新しき自転車で行く知らぬ街　た
　子どもの夢は宇宙旅する　徳
「はやぶさ」は鳥にはあらじ神馳ける　吞
　終の棲家はアマゾンの奥　里
望月にオーパと叫ぶ刻を得て　弥
　垣根を越えて白萩の咲く　な
たあい（ナウ）なく笑いころげて文化祭　孝
　スター女優の瞳忘れじ　た
唇を合わせて君は下手くそね　柿
　こころ静かに三月の尽く　吞
夕暮れの桜（おう）花（か）の道を歩みつつ　徳
　一座揃いて雪囲い解く　弥

平成二十三年十月二十三日首尾

（於・早稲田きむらハウス）

《東京・稲門連句会俳諧「西北の風」―その二》

箙　『キャンパスに』

佛渕雀羅捌

キャンパスに夢のふくらむ四月かな　渡部春水
酒の甘さを知り初むる春　佛渕雀羅
苗代田水の匂いのうれしくて　松原邦博
ちゃんちゃんこ着た人の口笛　諸江昭旦
ガラス戸に有明の彩寒々と　渡辺さやか
静かに煮ゆる鍋のものあり　太田武志
ウ津軽弁抜けぬあの娘はいまいずこ　博
気のないふりの二丁目の猫　羅
風評の只中にある赤き爪　水
線香花火よろめいて落ち　旦
稲門の一酒徒たりし破れ靴　〃
ディベートに勝つ杜の妖怪　か

ナオうそっぱち行程表のトリックは　志
人災に泣く美しき福島　水
とおちゃんの画集が消えた日の記憶　羅
寒稽古にはならぬ暖冬　志
先達の帽子を月の覗き見る　水
秋雲に乗るゴビの砂漠は　博
ナウさんま焼く煙の先に双子いて　旦
雪隠詰めになりかける玉　博
管公も枝を掴むも堕つる沢　中村哲三
ピエロの涙てのひらに受け　か
花見には恋歌もある青葉城　三
蝶の翅着て風の回廊　羅

平成二十三年四月二八日首尾
（於・大隈記念タワー校友サロン）

短歌行　『大八洲』

澁谷盛興捌

やい田鳰に化けよ大八洲　渋谷盛興
瓔珞牡丹揺れる淡紅　伊藤哲子
一炊の夢醒めぬまま朝寝して　松澤龍一
自転車押しつ豆腐屋の笛　鈴木ちかひ
ウ週明けの先物相場視野に据え　白石一有
底冷えのする時代生き抜き　安楽明郎
月冴えてニコライ堂の碧き屋根　ちかひ
坂の「穂高」が事のなれそめ　哲子
仏文の少女は真珠身ごもって　龍一
恋の道行馬耳塞（マルセーユ）とか　哲子
引越の荷物を出して花人に　ちかひ
猫の仔膝にコップ酒酌む　一有
ナオ長き日の照明落とすターミナル　龍一
国難よそに与党内紛　明郎
ほほえみを返しスーちゃん雲の峰　龍一
浴衣姿も忘れられずに　ちかひ
同病を哀れむ胸にリボン着け　哲子
数独解けば並ぶ者なき　盛興
湖心へと細波越えて月の径　一有
市の名残の山盛りの茄子　哲子
ナウ裏町にコオロギの鳴く映画館　龍一
じゃんけんぽんよまた来て四角　哲子
幾山河丈高く咲け陸奥の花　明郎
話尽きせぬ春寒の宵　小太刀昌雄

平成二十三年四月二十八日首尾
（於・大隈記念タワー校友サロン）

半歌仙　『千粁飛んで』

伊藤哲子捌

爽やかに千粁飛んで連句会　涂青春
対面謝々月の鮮明　伊藤哲子
秋桜丘に園児の声のして　松澤龍一
のっそり歩く巨き黒牛　高山鄭和
うす塩の干物一尾に舌づつみ　白石一有
雪が斜めに映る丸窓　安楽明郎
仏ゥ壇の香を燻らす隙間風　青春
演歌みちづれ泪あふれる　赤澤水魚
重ね襟かくし切れないキスマーク　鄭和
燃えるあなたは年がいもなく　龍一
信長の赤蒟蒻は毒々し　明郎
難破船底眠る古九谷　一有
月静かニースの海の夏始　青春
円高忘れ台湾ビール　水魚
外堀を競歩倶楽部の老人ら　鄭和
黄砂を押して写生会良し　哲子
身延山花のしだれのたおやかに　龍一
頬白の棲む坂の曲家　一有

平成二十三年十一月二十一日首尾
（於・「東京会館」喫茶室）

歌仙『耳目』

春光や耳目に触(ふ)るるもの風に　梅村光明捌
　自転車列(つら)ね向かふ野遊　赤坂恒子
香しき八朔柑に爪を立て　梅村光明
　ギターの音色心惹かれる　竹内菊
砂浜に孤高を気取る月昇り　三輪和
　望遠鏡を過ぎるかりがね　大野穣一
旗(ウ)牌く運動会も闌に　恒
　それ見たことか足を捻挫し　光
脈拍の昂(たかま)る白きナース帽　和
　夫婦揃つて語学留学　穣
受講料返らぬままに泣き寝入り　恒
　江戸を偲んで辿る切絵図　光
凍月のしんと鎮まる御霊廟　和
　迷ひ出た熊餌を求めて　菊
金塊を掘り当てんとて山奥へ　穣
　詐欺の手口の進化限(きり)無く　穣
成りすまし仮装楽しむ花の宴　菊
　大の字並ぶ苑(その)の若芝　和
ガンマ線ブレンド(ナオ)されて黄沙降る　恒
　珈琲豆は既に値上がり　光
転職も仕方ないかと思ふ古稀　菊
　お荷物などになるなげじげじ　恒
ベランダでふうと一服至福どき　穣
　祇園囃子の遠く近くに　菊
すれ違ふ幼馴染みの艶姿　光
　共に潜(くぐ)らんタイムトンネル　穣
王位捨て世紀の恋を成就する　和
　亡命の地に骨を埋(うづ)むむ　和
猿酒をほどよく醸す幹の洞(うろ)　恒
　下駄からころと月の客来る　恒
碁盤(ナウ)へと棋譜を配して冬隣　光
　けんけんぱあの声の聞(きこ)えて　和
外国の児も混じりゐる紙芝居　菊
　いつまで続く避難生活　穣
人知超え心細(うらぐは)しくも花の咲く　和
　我流を通す茶の湯のどらか　光

執筆

平成二十三年五月二十二日首
平成二十三年五月二十五日尾
（於・渭東コンミュニティセンター&文音）

歌仙『石臼』

さみだれや石臼ひとつ庭にあり　鈴木　漠捌
　麦茶を飲んで聞くサラサーテ　高田保二
手回しの蓄音器売る糶市にて　高田芙美
　飛行機雲が描く絵と文字　鈴木　漠
ゴム毬を猫と子供が追ふ月夜　芙美
　草も露けく壺の火だすき　〃
真葛なす孤島が終のすみかとは　保二
　秋の渚に遠き人想ふ　芙美
ひらひらと千代紙ちぎる幼な恋　保二
　そののち行方知れずなりける　保二
らふそくの聖樹浄らか月は黄に　漠
　素麺を干す農家点在　〃
宿借れば潮騒近し海女の村　漠
　ヒトデに化つた星の淋しさ　芙美
あの頃のままで時間が止りをり　保二
　稀覯本には栞挟まれ　芙美
世をすねていぶせき庵の花を浴ぶ　保二
　いのち限りと鳥は囀り　漠
ナオ琴の音ね瀬音やさしも故国の春　芙美
　渦なす紺の光琳の川　〃
肩書きは某芸大の教授とか　漠
　市井にありて遊び戯れ　芙美
過ぎてゆくヨットの帆影絵日記に　保二
　祭太鼓もいつか途絶える　芙美
嫁ぐ身の泉にひたす白き指　保二
　きみの吐息のさざなみとなり　漠
祈りこめ燈籠流す静けさに　芙美
　肥えたる馬の群れ走る牧　保二
矩形なす窓に内接月の円　漠
　期末テストの成績は良し　〃
ナウ喝采は銀盤上の妖精に　芙美
　雪の結晶いとも不可思議　漠
外つ国の酔ひどれ船の詩*に眩る　保二
　インクの瓶と鵞ペン遺され　漠
思ひ出は数多よぎりて花明り　芙美
　木彫雛の純な面差　漠

＊酔ひどれ船…A・ランボーの詩。

平成二十三年六月一日首
平成二十三年六月二十日尾　（文音）

世吉『着衣始』

今村　苗捌

着衣始空の青さもまといけり　苗
　繭玉揺れる店の軒先　憲
独楽回しこつを息子に伝授して　秋山よう子
　話の弾む弓なりの浜　和田ひろ子
奥座敷濃茶の香りただよわせ　澁谷八千代
　一筆書きがどうも読めない　苗
月明にサックスを吹くバンドマン　憲
　菊人形も踊り出しそう　苗
博物館に夢は暮れかね　憲

ウ濁り酒そろそろ醸す頃ならん　代
　缶切り要らぬコンビーフ缶　憲
合コンでに悄気た男がもてている　ろ
　抜き差しならぬ同性の閨　苗
コクトーの金の指輪が身を焦がす　う
　ティファニー流行る表参道　代
川近き古城にワイン眠らされ　ろ
　頭上にぬらり光るくちなわ　う
山開き神官の背に残り月　う
　真っ向疵を受けぬ大物　憲
けらけらと座敷童子は笑いこけ　苗
　金言集に老は鼓舞さる　代
誰が為に武器を納める花鞍　ろ
　博物館に夢は暮れかね　う

ナオ容鳥の暁にしば鳴く春日山　憲

修二会の僧の猛き沓音に　苗

人は棲む常に砂上の楼閣か　代

バランス微妙やじろべえくり　う

政治家としては大事な資金繰　苗

雪しまく駅ひたすらに待つ　ろ

野兎を土産にせんと株守る　憲

六三四の塔の伸びる浅ちみ　苗

自転車で素早く逃げる掏摸を追　代

声弾ませて好きという時い　う

かたくなに暑き血潮を抑え込　ろ

嫉妬の虫に展翅針打る　憲

ヘラクレス月に弓矢を番えた　苗

蒼きエーゲに碇星落つ　憲

ナウうそ寒し放蕩息子待てばなお　ろ

今更ながら死出の繰り言　苗

「アキヒトイ」命名されし魚一種　う

洗う新じゃが吾子に似るかも　代

経を読むように九九算繰り返す　ろ

陽炎燃える分校の庭　代

縺れてはまたほどけゆく花筏　苗

桑摘む人の忙し両の手　憲

平成二十三年一月九日首尾

（於・横浜市綱島　抱虚庵忠勝居）

第二三回青時雨忌追悼
正式俳諧興行俳諧連歌

歌仙『夏袴』

夏袴師の忌に集う大書院　和田忠勝捌
子亀睥睨親亀の背　和田忠勝
冷房の使用は今年控え目に　土屋実郎
少しゆとりの出たる家計簿　蛭海停雲子
良きものに月と虫とのコラボあり　松田憙明
露の雫をはじく七草　小林静司
宝(ウ)市利酒の席にぎわいて　赤田玖實子
我も我もとおかめひょっとこ　秋山よう子
秘めし恋何時の間にやら知れ渡り　廣野順子
頬寄せ合って開く育児書　佐藤喜仙
公開のパンダ無邪気に笹囓る　和久井八重
終相場は高値引けして　和田ひろ子
顔見世の楽を愉しみ月細く　澁谷八千代
舞妓と出会う祇園界隈　池田笑子
無一文ナップザックの旅続け　廣崎龍哉
砂塵巻き上げ急ぐトラック　速藤尹希子
炊き出しの鍋釜に花降りかかり　松村野慧
灌仏会には稚児の行列　藤沼和ヱ
かぎろえる富士をバックにカメラ据え　白井暎子
自販機で買う日本の水　小林しげと
何としても景気対策国あげて　松本華与
守り抜くべきものは愛の巣　高島幸子
宵宮に濡れにぞ濡れし路地の奥　紀本直幸
蜥蜴はきらと腹を光らせ　久良木憲
読みかけの推理小説手離せず　今村苗
忘れた頃に届くざる蕎麦　鈴木善春
賽子は出たとこ勝負運の付き　坂田武彦
撮影隊が捌く群衆　横山わこ
月の光(ゲ)歴史を偲ぶ野面積　浅沼小葦
墨絵に描かん瓢の姿を　臼杵游児
声(ナウ)明の低く流れる暮の秋　東條士郎
伝えの碑を刻む長老　本屋良子
甕底に蠢くものを夢とせん　前田明水
陰と陽との調和うれしき　伊藤哲子
喧騒をよそに都会の花堤　清水自朗
鶯来鳴く清らかな里　宗匠
執筆

平成二十三年六月十九日首尾
（於　浅草寺伝法院大書院）

宗匠　抱虚庵忠勝　花司　秋山よう子
脇宗匠　松濤軒静司　香元　和田柚香
知司　今村苗　配硯　藤沼和ヱ
執筆　鈴木善春　配硯　佐藤牧子
座配　坂田武彦　声明　関口真流

〈東京・都心連句会―その三〉

『明易し』

脇起歌仙　故久良木憲雅追悼

新橋の機関車広場明易し　和田忠勝捌
連衆集い風薫る街　釈慈憲
夏帽子「抜けられます」を抜けてゆき　土屋実郎
粘葉本（でっちょうぼん）を嬉しげに持つ　廣野順子
教え子と肩越しに見る窓の月　今村苗
木の実時雨の絶え間なき音　速藤尹希子
千代尼忌（ウ）にワインの栓を上手く開け　和田ひろ子
彼奴いつもの熱いまなざし　和田忠勝
惚れ込んで二世を契る間柄　池田笑子
狭い部屋でも広く感ずる　高島幸子
手料理の数は次第に減ってきて　坂田武彦
黒く光れるアンフォラの壷　松本華与
雪山を渡る繊月黙すまゝ　順
六根清浄五体しばれる　苗
復興の支援のゆるみ巻き戻し　郎
なでしこジャパン是非勝たせたい　ろ
万難を排してこそぞ花は咲け　尹
沖合はるか懸かる初虹　郎
ろ

漁船（ナオ）には三毛の仔猫の牡を乗せ　苗
ペールギュントを待ちわびる母　ろ
恋唄を辻音楽師流しゆく　苗
紆余曲折の男遍歴　尹
青葉闇七つ下りの雨の降り　順
空蝉しかと爪立てる垣　ろ
転んでも何か拾って物にする　郎
エイと賽振る出た目八丁　苗
放射能今日は何ミリシーベルト　尹
夢ではならぬ平和・安全　勝
十方の月光（ゲ）にあり座禅石　笑
右掌に重き錆鮎の腹　苗
初猟（ナウ）に鉄砲鍛冶の試し撃ち　彦
訪う人もまれな枯園　与
九牛の一毛だにもこだわらず　苗
四方は海の日本がんばれ　彦
聴きたきは彼岸の花の貴評釈　勝
百発百中聞茶たがわず　彦

平成二十三年七月十六日首尾
（於・港区生涯学習センター）

半歌仙　『冬　耕』

田浪富布捌

それぞれに青空を持ち冬耕す　田浪富布
　重ね着をして浮かぶ友垣　石倉夏生
ハーレーに跨がる古稀に齢もなく　伏木ケイ
　築百年の民家リフォーム　富田昌宏
発掘の無傷の壷に月の影　三井静怡
　小道具多き秋の狂言　笹川伊之助
練ウ緯に置く日本刀ひやひやと　静
　まぶしきまでに細き衿あし　昌ケ
中国の強壮剤は頼らずに　伊ケ
　歌麻呂の絵をお手本とする　〃
競売に億の高値の槌の音　静
　御曹司にはほんの小遣い　昌ケ
原爆のドームは眠り梅雨の月　夏ケ
　光を散らし揚羽とびくる　夏ケ
限定の酒をもらひて神棚に　昌ケ
　ひとり旅立つ立川談志　富ケ
うつうつと夢で乗りたる花筏
遠足の子等にぎやかに行く

（於・栃木カントリークラブ・会議室）平成二十三年十二月九日首尾

歌仙『蓮見』

田島竹四捌

和田容子　蓮見にはよき設ひの渡り殿
田島竹四　句会のあとはビール乾杯
若松歌子　朝散歩軽く口笛吹きもして
花輪芳子　ハイブリットの車さまざま
吉藤一郎　月天心残業終へし会社員
西岡美代女　もう着く頃かふるさとの柿
小森葆子　ウ文にある母校の杜に色鳥来
広波青　御木本幸吉英虞で名を成す
田島もり　贈りしは金銀珊瑚綾錦
木村ふう　城も傾くほどの惚れやう
竹四　若い衆ら熱し易くて冷めやすい
容子　不倫疑惑の日記果つなり
芳子　雪の畦曲り多くて月高く
歌子　野球人生決めるドラフト
美代女　赤い靴転んでは起つ芝の上
一郎　塀の陰からじっと野良猫
波青　風の意にすべてを任せ花ふぶき
葆子　遙かに仰ぐ淡き初虹
ナオ復興はまだまだですと遍路言ひ
ふう　パワーストーンに奇跡あるべし
もり　憧れの彼はゲームも強いんだ
竹四　好いてゐながら知らんふりする
芳子　一張羅夕立に遇ひしょ濡れに
容子　夢の如くに群るる蛍火
歌子　逝きし友数ふことあり爺と婆
一郎　日向ぼこして戻る話は
美代女　大陸へ世界遺産を巡る旅
波青　手品して見せ和む円卓
もり　弦月は去にしかぐやの横顔か
ふう　おわら祭で胡弓弾く役
容子　ナウ母さしつ山の端わたるかりがねを
竹四　絆大切みんな元気で
歌子　吟行の最後に買ひし宝くじ
芳子　春立つ街に福だるま笑み
もり　花盛りフリーマーケットさんざめき
ふう　遠足の子の列は駅まで

平成二十三年七月十八日首
平成二十三年八月十七日尾　（文音）

歌仙『鶏鳴』

近藤蕉肝捌

鶏鳴やこは龍の棲む花の谷　近藤　蕉肝
　バイリンガルで応える俤　狩野　びんや
美し野に牛と耕す農夫いて　林　ジョウ
　うつらうつらとバスは揺れつつ　梅田　實
上戸下戸かたみに笑う月の卓　峯田政志
　端渓硯銘は邯鄲ウ厨より夜食匂いて仮眠覚め　橋本圭好子
西瓜が出たらそれで終りよ　びんや
　髭面の武将駱駝で沙漠越え　加藤禮子
パオから漏れる馬頭琴の音　圭好子
唐十郎寺山修司李礼仙　政志
　天井桟敷で睦み合う仲　實
満月に蜘蛛の化身が通い来る　ジョウ
　横櫛小町裳ひらめく　蕉肝
じわり効く浪費借金顔の皺　びんや
　布袋様より福相が好し　政志
台北へ急ぐ高雄の春便り　圭好子
　黄沙も止みて囲む石鍋ナオふらここを蹴上ぐる果てに瑠璃の空　ジョウ
　国連の旗たなびかせたし　實
歳を経て圓山ホテル半世紀　蕉肝
　心をふたぐ王侯の奢侈　圭好子
秘蔵せる唐三彩に招かれて　政志
　ふっくらとした美女の移り香　實
赤坂のマダムもやがて板につき　ジョウ
　五七の科白についにほだされ　蕉肝
今も尚旅をともがらの数　びんや
　賑やかな町の灯乗せて月の舟　圭好子
バイク颯爽秋風を斬る　ジョウ
　彫りの冴え翡翠白菜虫二匹ナウ　實
トリプルルッツスケートの金　びんや
祝盃を重ねる宴も酣に　蕉肝
若き衛兵老いは見惚れる　圭好子
舞もどる故郷晴ればれと花万朶　政志
佳き思い出の尽きぬ永き日　ジョウ
　　實

平成二十三年三月五日首尾

（於・台湾機上内）

歌仙『西にデモ』

横山わこ捌

西にデモ南に地震や春嵐　中島好江
心の隅に燃ゆる山焼　峯田政志
雛の家男子もまじり遊ぶらん　武井敦子
プラモデル追う猫の眼差し　横山わこ
群青の天にま白く渡る月　山崎武正
雁金もまた湖にしずまる　林ジョウ
村芝居人気女形の悠然と　政志
巾着投げる婆の御捻り　敦子
野暮作り世間を忍ぶ細き縞　わこ
いたずらに過ぐ恋多き日々　武正
身二つにならんと行方くらまして　好江
性悪の風邪うつしたる夜　敦子
凍つる月分校の門ひっそりと　政志
トランペットが響く山里　ジョウ
夢を持ちこだわりもなく進む道　武正
ローマの酒を東京で酌む　好江
雅なる花の宴は盛上がり　政志
錦の法被おかげ参りに　敦子
先達（ナオ）は殿様蛙そろりそろ　梅田實
機械で造る伝統の菓子　武正
3Dアニメときたらお手の物　ジョウ
君の靴下ちょっと臭うわ　政志
なれそめは同伴喫茶時間切れ　敦子
ほどけぬ縁玉の汗かも　狩野びんや
江戸小町逢瀬裂かれて狂い文　武正
旅券の歳を頑に秘め　ジョウ
商は量販店のひとり勝　政志
ハローワークで募る運び屋　敦子
弓張りの月で占う世紀末　びんや
パンの耳にも秋風の吹く　政志
パレード（ナウ）が去って再び虫すだき　ジョウ
上ル下ルの筋や路地裏　福島鬼火
古民家と家具そのままでエコ暮し　敦子
毎朝励むラジオ体操　實
花の雲定かならざる国境　好江
海市の島に命長らう　鬼火

平成二十三年二月二十五日首尾
（於・九段生涯学習館）

歌仙『髭髪松』

大山　功捌

日を経れど色を変へざる髭髪松　大山　功
　沈むを惜しむ有明の月　奥山ゆい
瓜坊のころがるやうに飛び出して　各務恵紅
　地層に眠る化石いろいろ　〃
大部なる論文つひに完成し　藤田真木子
　噴水眺め憩ふコーヒー　赤尾千恵子
ッほほゑみに真珠涼しきネックレス　大野鵠士
　男女の区別曖昧　功
銭湯の暖簾のゆの字へらへらと　紅
　ラジオの演歌旅情たつぷり　堀部比呂美
しなだるる君に潰されたいけれど　紅
　麻薬のやうな肌のぬくもり　い
果てしなき夢の彼方の冬の月　恵
　不意に謀反を起こす細胞　士
一年に七つ転んで八つ起き　功
　土が大切有機農業　美
尨犬も楽しさうなる花の宴　い
身をも心も東風に預くる　紅
ナオ麗らかに連絡船の伊良湖へと　い
　手配写真はどれも色褪せ　紅
破れ鍋にふつふつ煮たる卵粥　〃
　ふたり揃ひて米寿迎へる　い
温泉の効能書きに美人の湯　紅
　障子に映る影のをかしさ　〃
豆撒きの豆ぱらぱらと零れ落ち　い
　真つ赤な顔で呷りたる酒　紅
消費税上げたき人は泥臭く　功
　アーケード街客もまばらに　い
老い猫の背ナを丸めて月さやか　紅
　白露生れ黄泉の口開く　功
ナウ空耳か誰が吹きゐたるひよんの笛　い
　昔むかしは野球少年　士
医学書の並ぶ書斎に去来抄　功
　ＮＰＯの名刺たくさん　い
旅立てる人を送らむ花の陰　士
　斜響ける春の山々　紅

平成二十三年十一月五日首
平成二十四年二月二十八日尾
（於・岐阜「日本海庄や」）

『キスミー（恋づくし）』

竹内　菊捌

卯の花やキスミーなどと言はれても　竹内　菊
　第一夫人むせる蚊遣火　西條裕子
肩幅の広きあなたに憧れて　大杉　幸
　夜学の電車心ときめく　三輪　和
望月により添ふ影の重なりぬ　早見敏子
　凛々しき牡鹿牝鹿追ひかけ　執筆
ウみ仏の四体柔和にしなやかに　裕子
　いとしき彼はサッカー選手　菊
燗酒は恋のゴールを決めてから　和
　惚れ薬には処方箋なし　幸
お花見の誘ひ頃よし気分よし　菊
　茶飲み友だち春ショールして　敏子

ナオぼろぼろになつて帰れる孕鳥　幸
　尽くす女に酷い天命　裕子
お別れは越路吹雪のせ・し・ほんを　敏子
　避難所癒す若きカップル　和
あつあつのなかに月兎も恥らうて　裕子
　怠け亭主はぶらり瓢箪　菊
ナウ妻に飽き家出の如く秋遍路　和
　君はいつでも僕のマドンナ　幸
懸想文みくじと共に結びあり　菊
　縺れ解れつ蝶の連れ舞　敏子
振り仰ぐ花の巨木に誓ふ愛　幸
　妖精たちは初虹に消ゆ　裕子

平成二十三年六月十二日首
平成二十二年七月十八日尾
（於・徳島県身障者交流プラザ）

歌仙『日に綺羅々々』

西田舟人捌

日に綺羅々々物の怪(け)はばむ枯尾花　藤本則子
　城下町には虎落笛吹き　西田秀花
トントンと朝餉のリズム香は味噌で　和田澄子
　食細くして薬で肥える　安部愛子
満月に手を透かし見る媼かな　則子
　秋簾巻く晴天の日に　澄子
糸とんぼ先のさきまでみな命　秀花
　心ときめく乙女の素足　則子
恋すれば痩せるわけありエストロゲン　西田舟人
　声に魅せられ魔法かけられ　澄子
料理茶屋器も景色魯山人　秀花
　酒に酔ふては多弁にもなり　愛子
潦(にはたづみ)夏月ゆらす小さき手で　澄子
　汗と一緒に噂も流し　愛子
ウィンドでチェックするのは猫背ぐせ　秀花
　見えないものを見せる風たち　愛子
花影に水琴の音や当麻寺　澄子
　蝶も道づれみちのくの旅　則子
朝市に食材光る春匂ふ　愛子
　マンション住まふ十人十色　秀花
畦に添ひ老い犬連れてよたくと　愛子
　ヒール闊歩のキャリアウーマン　澄子
異国の地愛拾ひけり舞踏会　則子
　君と着せ合ひ一陽来復　澄子
寒の紅あなた次第で濃く淡く　秀花
　手を引き合ひて金剛山(こんごうせん)に登り　澄子
落語寄席諷刺交へて盛り上がる　秀花
　念仏唱へ気持ち安らげ　愛子
さざ波に月が乗り来る橋を行く　秀花
　狭庭にぎやか金鈴の虫　則子
だんじり(ナウ)の秋灯揺らぐ里の閤　澄子
　幼き指でピアノソナタを　則子
TPP日本文化と農業は？　澄子
　野鳥観察もやの中にて　愛子
花吹雪くなか次々と列車着く　則子
　からくり人形高山祭り　秀花

平成二十三年十一月　十日首
平成二十三年十二月十五日尾
（於・大阪狭山市金剛）

歌仙『まぼろしの召集令状』

水野禾甫捌

まぼろしの召集令状終戦忌　　知
むかご飯炊く一家八人　　八千代
月点下地球儀くるり回りゐて　　祐子
曜日に疎し退職の椅子　　亀女
スピッツをやや持て余す散歩道　　一夫
着信音の響く北風　　禾甫
ポインセチア銀座に画廊数多あり　　吉野
幾たび恋を見たのライオン　　祐子
髪切って今宵告白するつもり　　亀女
るんるんで越す熱き子午線　　一夫
空海の立体曼荼羅小宇宙　　知
森のホールにシンフォニー湧く　　祐子
この国も砕けて散るか夏怒涛　　圭子
瓦礫の山を三伏の月　　一夫
尻はしょり雑巾がけの好きな娘が　　八千代
旬の野菜を卓に並べる　　禾甫
初花のゆかしき紅を秘めしまま　　執筆
姿見せねど春禽の声　　麗（ナオ）
古くは嘉永魚網商ふ　　亀女
対馬より遙かなるかな韓の国　　祐子
足柄越ゆる防人の太刀　　知
恋しくてテレビ電話の君の顔　　圭子
箱はみだしてはぐの手が伸ぶ　　亀女
かんかんと遮断機分かつ枯野原　　八千代
村の予算で造る炭窯　　知
シロコロのB級グルメ列ができ　　一夫
二本の杖で歩く二万歩　　祐子
影踏めば月夜のピエロわれもまた　　亀女
葡萄酒醸す教会の地下　　知
時差（ナウ）戻す時計の針の冬隣　　祐子
畑楽しむ母のごきげん　　圭子
本日の敢闘賞は逆上がり　　一夫
角のお店のスイーツが好き　　八千代
花吹雪のせてトロッコ天空へ　　禾甫
谷間の郷を包む陽炎　　執筆

平成二十三年八月二十二日首
平成二十三年九月二十七日尾
（於・神奈川県民サポートセンター）

『思ひ草』

半歌仙
沓冠

膝送り

みみるほどに思ひ草とは良き名なり　田川　知
　雀の群れに案山子負ける　堀尾一夫な
る留守番の爺様に月兎顕れて　加藤亀女
　日曜大工引く丸鉋　鈴木圭子な
ほ歩歩確か都市計画の進みたる　渡辺祐子
　夏雲を追ふ深き溜息　一夫き
どウドキュメント若者達は汗流し　水野禾甫
　対馬ぐるりとアンニョイハセヨ　祐子よ
に苦艾（にがよもぎ）傾国美女におぼれたる　亀女
　折れ線グラフぶれるα波　禾甫月
お沖遙か凍つる残滓繊き跡　祐子と
　マトリュウシカの消した足　知さ
も門に出て猫の帰りを待つ先生　亀女
　磁場なき里のけふの静けさ　祐子す
ひひのもとの千歳の花に乾杯ぐ　圭子ぐ
　安房の鼻毛で鳴く亀繁く　知さ

平成二十三年十月二十五日首尾
（於・神奈川県民サポートセンター）

歌仙『虫時雨』

平成二十三年　九月二十日首
平成二十三年十二月十三日尾
（於・富士見市みずほ台コミュニティセンター）

音はただ虫時雨のみ芭蕉庵　　田口清華捌
梢の先にかかる新月　　小池弥生
錦秋をハングライダー飛び立ちて　　柿沼喜美子
毎朝集うラジオ体操　　羽田野由紀
老犬の歩みはいつもゆっくりと　　弥生
遠くの山に初雪の降る　　喜美子
縁（ウ）側の障子に映る父の咳　　清華
放射線量高き世田谷　　喜美子
モナリザの微笑を見せる謎の女　　由紀
同窓会で熱い目くばせ　　弥生
着信のメールは絵文字ハート型　　清華
泡が決め手の洗顔石鹸　　由紀
風に乗り焼芋売りの声届き　　喜美子
秘湯に浮かぶ冬の月影　　荒井智恵子
旅好きは次のプランを練っており　　弥生
特産品で町おこしする　　清華
花片のくるくると舞う川の面　　弥生
蜆の汁は亡き母の味　　智恵子
日暮れまで家族総出の大掃除（ナオ）　　成田淑美
買ったジーンズ丈もぴったり　　弥生
化粧刷毛国民栄誉賞に添え　　喜美子
かけらを落とす人工衛星　　由紀
岸和田の祭は常に荒々し　　弥生
茶碗で冷酒ぐいと呑み干す　　清華
道ならぬ恋と知りつつ流されて　　由紀
北の岬のめくるめく夜　　淑美
陸奥に残る地震の爪の跡　　喜美子
「絆」と書けばまたも涙が　　智恵子
満月に狼男踊りだす　　喜美子
金木犀の香ただようだよう　　弥生
腰痛（ナウ）の辛さに堪えるそぞろ寒　　由紀
早寝早起腹八分目　　淑美
ガウディの聖堂いまだ未完成　　弥生
卒業式は無事に済みたり　　喜美子
故郷の空に連なる花万朶　　清華
行く春惜しむつまみ簪　　由紀

歌仙『水の星』

成田淑美捌

啄木鳥や刻々回る水の星　大堀春野
　切り絵の月に秋の気の満つ　坂本昌子
香も高き菊の枕を贈られて　成田淑美
　山のむこうの父母を訪う　中村ゆみ子
更衣して新装の地下街へ　品田富美子
　明易き夜のきらやかな夢　仲澤輝子
あれやこれ札束積んで意のままに　湯口昌彦
　口は重くて男振り佳し　富美子
釣られては餌ももらえぬ私です　昌子
　立ち直れないギリシャ経済　輝子
片肺でジャンボ機無事に帰還せり　昌彦
　海の青より青い硬玉　ゆみ子
月冴えて一本松は影を曳く　富美子
　雪合戦の陣地こんもり　淑美
彼の世まで煙届けと産着焚き　春野
　グランドピアノで「猫ふんじゃった」　ゆみ子
薦被り真ん中に据え花の宴　輝子
春の小川のうららかに行く　昌彦
寅（ナオ）さんの旅はぶらりと東風に乗り　昌子
　神も仏も悪戯が好き　淑美
旨すぎる饅頭を食べひと休み　冨美子
　なかなか取りを取れぬ噺家　淑美
夏場所の座布団運ぶアルバイト　輝子
　蛍の宵はいっしょに死のう　春野
するすると底の見えない恋の渕　加藤光樹
　目覚し時計不意に鳴りだす　大石寿美
韓流のブームいまだに衰えず　昌子
　ポスターにある昭和懐かし　昌彦
草深き終の棲み処を照らす月　ゆみ子
　調度なき部屋冷まじきほど　輝子
掻（ナウ）き分けるべったら市の人の波　春野
　病いの癒えし足の軽やか　昌子
あざなえる縄のごとくに禍と福と　淑美
　残る寒さをまとう尖塔　ゆみ子
花の雨翳りの色に石を染む　光樹
　あまた命の育つ弥生野　寿美

平成二十二年九月二十八日首
平成二十二年十月十四日尾
（於・上野・東京文化会館）

歌仙

『鶯といふ狂言』

両吟

鶯といふ狂言や日は長閑　内田さち子
春興不尽後生大切　鈴木アヤ
流し雛堰でくるりと向変へて　ち
電信柱にぽつり灯が点く　ヤ
三輪車子供が月に放心す　ち
夜仕事をする母を待ちたり　ヤ
ミシン目の一直線ぞちちろ虫　ち
落下傘縫ひいくさ敗れき　ヤ
いつの世も人それぞれの恋をして　ち
可愛いい婆がふと色ざんげ　ヤ
哀切の長唄流れ時とまる　ち
水屋に水の豊かなる国　〃
月涼し発電用ダムたのもしや　ヤ
働く男身じまひもよき　ち
青髭のインテリヤクザ弁護士さん　ヤ
国まで騙すやがて捕まる　ち
警視庁近くに配し花名所　ヤ
芽ぶき柳の降りやみて昼　ち
杉箸の先に透かして菜種河豚　ヤ
酔うてしまへばあとは知つたか　ち
父ちやんは可哀さうなん子はけなげ　ヤ
ノートの数字力入りぬる　ち
虎落笛円周率の果てもなし　ヤ
着信音に覚むる明け方　ち
ナニシテル？恋の始まり手探りで　ヤ
血液型で決まるだなんて　ち
お人好しポチよお前もBなのか　ヤ
隣家のヘクトー戦士かと見る　ち
角瓶はやはり似合はぬ月見酒　ヤ
競ひ鳴けりし虫弱る頃　ち
秋の陽に築地の崩れあからさま　ヤ
繰り畳ねたる袿冷えびえ　ち
絹の道いつか必ず辿る夢　ヤ
薬を飲んで今日はお休み　ち
里山に若木の花の初々し　ヤ
田螺ぷくりと泡一つ吹き　ち

平成二十三年二月二十七日首
平成二十三年七月二十五日尾（文音）

歌仙『とんぼ撮る』

北畠明子捌

とんぼ撮る連写モードの忍び足　北畠明子
　厚岸草の染まりゆく浜　市橋章子
栗名月十人十色の句を愛でて　静寿美子
　間綿裂で作る筆入れ　三輪慶子
硝子戸にゆらめく高き築地塀　章
　麦藁帽子駆け出して行く　明
ウ列をなしペットボトルで清水汲む　慶
　ミサンガを巻く逞しき腕　寿
来てみれば聞きしにまさる子沢山　章
　金婚記念豪華客船　章
遺言で遺産の全て飼猫に　寿
　いぶりがつこをかりりかりりと　明
月皓々冬田ことさら拡くなり　明
　スノータイヤの跡は途切れて　慶
欲声に応へ復活大ジャンプ　寿
　後援会費口座振替　明
国宝の仏塔を背に花万朶　慶
　小町の井戸に蝶の飛び交ふ　寿
ナオすつぽりと人包み込むしやぼん玉　慶
　貴重なレシピハーブ酒の美味　寿
年の差も魅力の内とプロポーズ　明
　抱かれてよりの淡き移り香　慶
地図を手にお化け煙突探し当て　寿
　若者票を集め当選　明
かはせみは目にも止まらぬ急降下　慶
　形見の着物広げ虫干し　寿
震災に負けぬ匠の心意気　明
　自分の名前そつと検索　慶
今更にピアノに凝りて月の窓　明
　富士の裾野で千振を引く　寿
ナウ正客とつもる話の風炉名残　慶
　携帯電話いつも忘れず　明
マネキンはパッチワークのスカートで　寿
　ふらりとのぞく古き道標　明
花吹雪川に沿ひたる屋敷町　慶
　平穏願ひ仰ぐ春天　寿

平成二十三年十月二十四日首尾
（於・東京ウィメンズプラザ）

歌仙『すだく虫』

衆議判

小原みどり
木村美猫
古井公代
中村吟子
岩田登美子

すだく虫終に姿は見えずとも　み
　月の峠を駆ける狩衣　猫
団栗のマロングラッセ作るらん　公
　堀り出し物の湯呑み縁欠けて　吟
さくさくと麦刈り進む昼下り　登
　少子化の世に手すき金魚屋　み
ウ演出の評価分かれる口説きの場　猫
　千人集ふ見合ひパーティー　公
想ひ込め赤いハートを爪に描く　吟
　しがらみを断つ最果ての海　登
ＴＰＰ行方も知れぬ最終便　吟
　仲間外れは猫を相手に　猫
フィヨルドに匿す金塊月凍てる　公
　鳳凰の舞ふ絹の緞帳　吟
深礼に執事の髪やや傾ぐ　登
　御家流にて書く裏帳簿　千
花ふぶき風鐸響く高麗の寺　吟
　大掃除終へ煙まつすぐ　猫
ナオおざなりの愛想に負ける四月馬鹿　公
　もの詰込んで開かぬファスナー　登
交番でなほもくだ巻く酔つ払ひ　千
　語るも涙笑ひこらへて　吟
かき氷玻璃の器を崩れ落ち　猫
　被災の民をいたわれる君　公
情熱のタンゴにまかせ惑ひ道　吟
　連理の枝もつひに朽ち果て　登
代々の田畑風評はね返す　吟
　憂国の士の血気はやれる　猫
望月の照らす波間を迎え船　吟
　がらくた飾り美術展とは　猫
ナウ祝宴の蒔絵の盆に焼秋刀魚　公
　すべて頼れる電子辞書かも　登
株券の束どつさりと古箪笥　吟
　雀と憩ふザビエルの像　猫
および腰吊橋渡る花の旅　公
　嬰あやす声春障子越し　登

平成二十三年　十月二十日首
平成二十三年十一月十七日尾
（於・小原みどり宅）

歌仙『水甘し』

品川鈴子捌

昼寝ざめ素焼の甕の水甘し　美邦
　一筆で画く絵扇の景　寿
新幹線北から南繋がりて　子
　魚つり昂じ島を買ひとり　美
ブーメラン月刺したるや帰らざる　邦
　名残りの茄子は袖の下とす　寿
単身（ウ）を支へる家族温め酒　美
　秘めたる旅は隣の町へ　美
情むすぶ女スパイと知りつつも　寿
　オランウータンが地団駄をふみ　邦
子供らの内緒話はつつぬけに　邦
　やっと出版漫画全集　寿
吸血鬼歯科へとかよふ月の道　美
　文人墓に手編みマフラー　美
癌の種電波時計は遅れぎみ　寿
　背負籠には信楽の皿　邦
おほかたは解凍ものか花弁当　邦
　太陽の塔燃ゆるかげろふ　美
撮影（ナオ）は賀茂の飛び石日永にて　邦
　学生ながら琴の宗匠　美
省エネにやれ節電と知恵くらべ　喜久子
　日のあるうちに五右衛門のふろ　純子
風鈴もうるさがられて部屋飾り　寿
　汗しとどなる髭の語り部　美
マドンナとおだてにのりて囲碁の会　純
　あらぬ噂はすぐに広がり　喜
横恋慕罪悪感を封じ込め　寿
　残高わびし老いの投資家　美
奉行所へ弓張の月男舞　純
　そぞろ寒座敷童が茶を運ぶ　喜
赤（ナウ）とんぼ法然像の肩先に　寿
　おしゃれに生きて七の倍数　美
御当地のB級グルメ宅急便　純
　衣桁に掛ける母の紬を　寿
そよ風に仲乗りさんと花筏　喜
　少し大きめ青き踏む靴　寿

平成二十三年五月十二日首
平成二十三年六月二十三日尾

（於・毎日連句教室）

歌仙『笥目』

品川鈴子捌

笥目の波に落葉の小舟かな　佳
　海へと去りし昨夜の木枯　久
平和賞ながら手渡すすべもなし　古川佳永子
　鏡に映る時計眺めて　細野恵久
己が影踏みゆく月の石畳　佳
　茸狩の籠徒に大きく　久
最終（ウ）のフェリー出港そぞろ寒　久
　暖簾引き込む角の居酒屋　佳
色街の烏は夜も鳴き交はし　佳
　隣のペアをちらりちらりと　久
吉兆の卓に淑女の迷ひ箸　美
　今ならきっと君を許せる　美
山に月野に干草の匂ひして　佳
　素麺流し葉擦れ聞きつつ　佳
幾億年身じろぎもせず琥珀の蚊　久
　洩れ放題の機密情報　木内美恵子
たこ焼きをくるりと花の通り抜け　佳
家出の猫が孕んで戻り　久
山笑ふ（ナオ）舞台の外の荒事に　久
　瞼の腫れは寝不足のため　美
葬儀社の見学会の賑々し　佳
　開け放たるるパンドラの箱　久
瓦礫など寄せ集めては焚火して　美
　お握り一つ悴める手に　久
木簡に嬉恋の歌薄れても　佳
　電話のベルの数を確かめ　美
ほめく身を彼のパジャマで包もうか　佳
　無人のピアノ月光に鳴り　美
藤村のゆかりの宿に秋惜しみ　久
　言ひ繕ひて余す蜂の子　佳
真金（ナウ）吹く吉備の稲田をディーゼル車　美
　錆を落して釜の占ひ　久
失敗はいつもだれかの所為にして　馬越幸子
　日課の散歩コース明かさず　久
二三輪咲かせ気分は花守に　佳
　先を競うて上る鮎の子　幸

平成二十三年一月二十日首
平成二十三年三月二十日尾

（於・KCC連句教室）

歌仙『髭文字の帆』

品川鈴子捌

施餓鬼舟髭文字の帆で進みけり　喜
うから集ひて弓張の月　繁　大倉まさや
豊作の柿選別の手をとめて　喜
犬のお使ひ財布くくられ　ま
道具屋の蝋のサラダはおいしさう　繁
レースカーテン吹きあぐる風　喜
置き忘れあるハンカチのイニシャル　ま
圧力鍋に愛の沸騰　繁
朱の箪笥晶子の詩集隙間より　喜
欲望詰るパンドラの箱　ま
節電に倦みて家中開け放つ　喜
安い切符で外国の旅　繁
ゴビ砂漠あやしきまでに月冴ゆる　ま
今川焼に膝のぬくもり　喜
泣く時は自然に涙名子役　繁
水琴窟のリズム正しく　ま
地震跡にやうやく花のほころびて　喜
雛の調度を数多ならべて　繁

（於・柿衛文庫）
平成二十三年八月二十六日首
平成二十三年九月二十三日尾

歌仙『物書の』

竹下昭子捌

物書の雛か右肩下がりなる　品川鈴子
　思ひがけなき窓の淡雪　竹下昭子
つくしんぼ見付け次第に摘みとりて　師岡洋子
　通学路行くちんどん屋さん　稲雅子
宵月夜ビルの谷間の狭き空　吉田光子
　じやんけんぽんと西瓜取り合ひ　昭
桐箱の新絹届く故郷より　光
　恋の予感に響くカリヨン　雅
二人乗り見えない君の笑ひ声　光
　震災支援のくじは高額　洋
ゆくゆくは市の囃場も閉すてふ　昭
　家賃払はぬ軒先の猫　昭
月照らす夜間プールのバタフライ　幸
　うづ巻形に残る蚊遣火　昭
若者の横文字俳句おもしろく　洋
　始末に負へぬ城の馬鹿殿　光
しだれたる花の根方に閼伽を汲む　雅
　隣町までだけの遠足　洋
古草をつけてふはりと熱気球（ナオ）　洋
　ムンクの叫び我もまねして　光
円高で財布やさしい気まま旅　雅
　万金丹を射的屋でうち　洋
厚揚げもこんにやくも好きおでん鍋　昭
　大縄飛びのちよつともつれて　雅
絆なる言葉あふれる列島に　光
　白髪ながらもまたもときめき　洋
追伸に「お待ちします」とさりげなく　昭
　傘寿の集ひ女ばかりで　光
月光の斜めに届くすべり台　洋
　鵙と鴉と棟をはさみて　昭
香煙（ナウ）に聖体行列しづしづと　幸
　いつの間にやら党首決められ　昭
刺抜きて血の滲みたる指の先　洋
　スカイツリーもやつと完成　光
花盛り酒をかこんでカルテット　雅
　春の火鉢は呉須のあつさり　洋

平成二十三年十二月二十五日首尾

（於・川西庵）

世吉『初山河』

衆議判

今は昔爺婆ありぬ初山河　宮崎鬼持
恵方詣に連れる乳飲み児　鈴木漠
記念樹の紅梅苑（その）に咲き出（いで）て　松本昌子
双つの蝶がジグザグに飛ぶ　服部恵美子
夕空に月と凧とが残りをり　漠
競艇果てて放（はふ）るすか札　鬼持
運不運気分切り換へ屋台酒　恵美子
トマトも茄子も同じナス科かと　昌子
駘蕩として税関の旗　鬼持
ウ汗垂りて捲（めく）るエンサイクロペディア　鬼持
愛用めがね度が進むらん　漠
朝帰りサンダル抱へ忍び足　昌子
菓婚迎へ川の字に寝る　恵美子
蓑虫は親を知らずに育つとか　漠
青（あを）北風（き）（た）の中我等デラシネ　鬼持
溜め息をつかせるほどに後の月　恵美子
B級グルメデパ地下で買ふ　昌子
ポーアイ*をゴールに冬のマラソンは　鬼持
人工潟で憩ふ鴨たち　漠
四阿（あづまや）で独り本読む安らけさ　昌子
ボトル傾け咽（のど）を潤す　恵美子
囀りに音階があり花の雲　漠

ナオ掌にのせし陶器の男雛見てござる　恵美子
売約済の札が貼られ昌子
老ゆらくの恋の伊達引ふと自嘲　鬼持
次の逢瀬も同じ喫茶と　漠
キッチンで鼻唄交りケ・セラ・セラ　昌子
涙流して刻む玉葱　恵美子
曝書とて並ぶ稀覯書第一版　漠
彫師盤研ぐ日も昏れぬれば　鬼持
まち興し和太鼓会へ仲間入り　恵美子
松茸飯の駅弁を購ふ　昌子
教授既に在さぬ旅舎の月明り　鬼持
鯊の新種がゼミの演題　漠
余生なほ探求心は衰へず　昌子
コーディネートの重ね着も良く　恵美子

ナウ両眉は備長炭の雪達磨　漠
幸や来む百度石道　鬼持
嫋やかな枝を餅穂に飾りつけ　恵美子
祝ふ雑煮の椀のよろしさ　昌子
茶舗の裔なればともあれ大服茶　鬼持
あはれ絵踏は既視感のごと　漠
オルガンの響き鎮もる花の雨　昌子
種蒔き楽し家庭菜園　恵美子

平成二十三年二月二十七日首
平成二十三年七月二十五日尾　（文音）

＊ボーアイ：神戸港に造成された人工島ポートアイランドの略称。詩人竹中郁は、インドでは放屁のことを「ボーアイ」と言う、と行政を批判したが、中国語で「博愛」の字を当てることも可能である。

歌仙『寒晴や』

二村文人捌

寒晴や市電の揺れに身をゆだね　密田妖子
　茶房の窓をつたう枯蔦　大村歌子
蔵書印残る詩集を譲られて　いぬじま正一
　小学生のぶかぶかな靴　二村文人
どら焼を両手に帰る月の道　朝木敏子
　砂城崩す波の冷やか　広瀬みき子
托鉢僧数珠掛鳩に話しかけ　一
　髪結いあげて切り金の櫛　妖
とりとめのなきことばかり初デート　歌
　人差し指でつつく横顔　一
くっきりと月現るる滝の上　妖
　蛇の衣が風に吹かれて　敏
バス停の運行時刻メモに取り　み
　硫黄の香り馴染む湯治場　歌
水彩の早くなくなる緑色　敏
　老いたる猫はご隠居の貌　妖
花万朶墓地の花屋は無休とか　一
　海市予報に握るハンドル　人
四阿（ナオ）に眠気催す揚雲雀　妖
　すぐには思い出せぬ草の名　一
雛壇の来賓数多宙にらみ　妖
　銀座で買いし絹のハンカチ　敏
酔えばまた御籤に託す明日の運　妖
　忘年会の余興たけなわ　歌
ストーブと彼の言葉に胸熱く　一
　妻のわたしをおばはんと呼び　人
漬物は勘が頼りの塩加減　一
　織部の皿に八寸を盛る　み
月今宵欄間の飛天笛を吹く　妖
　秋の遍路の近き結願　一
村芝居（ナウ）おやま碧眼よよと泣き　妖
　補聴器邪魔と外す見栄坊　み
直球で三者三振草野球　一
　カメラに残す子らの成長　敏
花莚友の消息はしなくも　み
　寮歌軍歌の尽きぬのどらか　人

平成二十四年一月二十二日首
平成二十四年二月十九日尾
（於・富山市星井町公民館）

歌仙『鈍行や』

瀧澤尚子捌

鈍行や稲架の形のお国ぶり　瀧澤　尚子
菊の膾を添へし弁当　北野　眞知子
望くだり話題の映画楽しみに　奥野　美友紀
二坪ほどの町家ギャラリー　宮村　千鶴子
交差点幼馴染にばつたりと　村戸　弥生
桶を覗けば鰻によろによろ　片原　真幾子
祭（ウ）笛あすの晴れ着を枕辺に　眞知子
気合いで飛ばすいささかの熱　美友紀
逢引のコースいつものハイボール　眞知子
干支占ひで決める相性　弥生
白壁のどこまで続く門構へ　尚子
ＡＫＢを流す有線　千鶴子
入閣の空約束に月は凍て　美友紀
誰も認めるモーグルの技　尚子
父の背は広く母の手柔らかく　眞知子
将来の夢語る学生　千鶴子
花の許古き羅漢の五百態　美友紀
初音聞かせる谷の鶯　千鶴子
アルプスの少女リーゼに風光る（ナオ）　眞知子
チーズケーキはシェフの特製　美友紀
水彩の輪郭淡き静物画　弥生
面白いほど解けるなぞなぞ　真幾子
コンビニのレシートゾロ目渡されて　美友紀
ボルゾイ犬が覗くバルコン　尚子
酔客の歌も和やか納涼舟　弥生
彼の好みにいつも合はせる　〃
良妻といふふた文字が枷となり　千鶴子
出待ち入り待ち楽屋裏口　眞知子
弦月にたちまち変る夜叉の面　千鶴子
おかまこほろぎ跳ねる東西　弥生
敦煌（ナウ）は窟多き街西瓜売る　尚子
黄衣の僧の鉢を奉げて　眞友子
スマートフォン三面記事を拾ひ読み　千鶴子
元気溌剌昇る階段　真幾子
咲き盈ちて地に触れなんと花しだれ　眞知子
うららの午後に弾む連弾　千鶴子

平成二十三年十一月　六日首
平成二十三年十二月十八日尾
（於・富山市星井町公民館）

『純なる音色』

ダブルソネット（抱擁韻）

狩野康子捌

筆談は純なる音色青葡萄　狩野康子
　丘いちめんを包む夏霧　松ノ井洋子
新社屋社長の挨拶型破り　秋田てる子
　伽羅沈香を聞く御家流　谷田部弓子

道化師のティアドロップに触れてみる　熊坂昌子
　今日のひと日は君の寄港地　泰子
恋敵ひらりとかわす月の太刀　洋子
　万聖節にアイビースタイル　てる子

次々と気球の揚がる休耕田　弓子
　石焼芋のピーと呼び込む　昌子
修復の冬の絵に入る白昼夢　泰子

　億兆京を「京」で計算　洋子
探査機を軌道に戻す人の花　てる子
　羽化はじまりし蝶が閼伽棚　弓子

二連ブータンの若き国王囲む子ら　昌子
　初鏡には龍の現る　康子
雅なる投扇興に飾り樽　洋子
　いまだ熟さぬ兄とアセロラ　てる子

ふつふつと悔悛の情重着す　弓子
　上九一色村は雪暗れ　昌子
人偏に手偏雁垂病垂　康子
　ブランドフェチに嬉しドル安　洋子

ゴルフではビギナーズラック月涼し　てる子
　強心剤にきつねのてぶくろ　弓子
喝采にゆっくり浸る楽屋風呂　昌子

荷車へ積む天の浮橋　康子
乳鋲の門までの坂花ざかり　洋子
枝から枝へ誘う親鳥　てる子

平成二十三年　十月十日首
平成二十三年十二月六日尾
（於・北仙台コミュニティセンター）

歌仙『忘れ雪』

狩野康子捌

跡形もなき囀の松林　狩野康子
　鎮もる海に忘れ雪舞ふ　佐藤千枝子
瓦礫分け咲く水仙の花愛でて　鈴木良子
　ボランティアから笑顔いただく　佐々木嘉宇
避難所の体育館に真夜の月　高橋玻斗子
　飛ぶをためらふ窓の溢蚊　〃
盲(ウ)縞着て地芝居の客となり　康
　白化粧した忠次見得きる　宇
リムジンと義理が行手を遮りぬ　枝
　美しすぎる君が心配　玻
異国語の甘ひ響きに夢を乗せ　良
　正ハリストス教会の塔　枝
氷柱には昨夜の月光籠るらむ　玻
　咳押し殺す仮面ライダー　宇
鉛筆をくるりくるりと回す技　康
　おやぢバンドがCDを出す　玻
花万朶希望叶ふと高らかに　枝
　目刺干さるる杣の軒下　良
葱坊主急行列車に総立ちす　玻
　鏡で姿追ふ病みし母　枝
思い出の転がるドロップ缶振れば　良
　大首絵なら写楽歌麿　宇
幻の魚得て今日の菖蒲酒　康
　強力ひとり雲海を抜け　玻
灯を点し盲導犬と妻を待つ　玻
　身重となれば乳房豊かに　枝
教師力ためされてゐる通知票　〃
　旧街道を塞き止める石　浜田則子
太鼓打つからくり時計月の出に　良
　赤い羽根売るボーイスカウト　菅原泰子
福(ナウ)島の腕がれず残る次郎柿　宇
　小学唱歌口遊みゐる　枝
無為徒食芥川賞とるまでは　玻
　反射シートの効果覿面　宇
金糸もて縫ひの寿花の袖　康
　ツレうららかに橋掛りから　玻

平成二十三年七月十二日首
平成二十三年九月十三日尾

（於・仙台文学館）

歌仙『夕立に』

夕立に濡れてはしゃいだ幼き日　大久保風子捌
甲羅干ししした亀の子の足　森脇甘蘭
屋根職人茶も弁当もコンベアに　岡村糸子
入門検査身長は足り　大久保風子
屏風絵の中に陣取る銀の月　宮沢うか
竹の垣根にぶらり瓢箪　鈴木山波
おわら節男踊りのきびきびと（ウ）　竹崎梨野
勝負服なのこれが決め色　和田忠勝
未亡人と云う響きの艶めいて　平良木遊虹
愛の形見は砂に埋もれ　和田ひろ子
思い切り海沿いの道ペタル踏み　甘蘭
越冬燕のくぐる軒先　糸子
玉砂利を月の導く初詣　風子
餌はこっそり路地裏の猫　うか
駄菓子屋の昭和レトロな店構え　山波
作務衣の亭主長い前掛　梨野
花吹雪舞って舞っては我包む　忠勝
卒業たたえ賛歌高らか　遊虹
セシウムの表土入れ替え春時雨（ナオ）　ひろ子
ネットで買ったアルプスの水　甘蘭
和太鼓のクラブ腕立て伏せばかり　糸子
牛若丸はひらり欄干　風子
鴨川も氾濫せしかいにしえに　うか
夜店の親爺見たように言い　山波
アリバイは諸刃の刃忍ぶ恋　梨野
少し欲しいが全部欲しいに　忠勝
イソップの童話児童に読み聞かせ　風子
ピタリ動かぬ腰痛の犬　ひろ子
望の月故郷の山照らし出し　甘蘭
秋刀魚で一献差しつ差されつ　糸子
持ち出しの椅子が並んで村芝居（ナウ）　遊虹
助けはいらぬ杖を握れば　うか
エアKの技をエアーで真似をして　山波
かぎろいの中逝きし噺家　梨野
初花をつけし若木ののびのびと　ひろ子
蝶々ゆき交う幻の門　忠勝
　　執筆

平成二十三年　七月　十四日首
平成二十三年十一月二十九日尾

（文音）

半歌仙　『陸前の』

大久保風子捌

陸前の海にまた吹く北の風　森脇甘蘭
　絆と声を掛ける年の瀬　大久保風子
野良猫の親子三匹抱きしめて　竹崎梨野
　絹のはぎれで作るお手玉　岡村糸子
月まどか浅葱の空を上りゆく　和田忠勝
　香りも色も大切な古酒　宮澤うか
ウ世を離れ独り歩むか秋遍路　平良末遊虹
　胸のうずきを押さえ押さえて　鈴木山波
街娼は兵士の腕にぶらさがり　和田ひろ子
　小屋をたたんで地方巡業　風子
無国籍料理人気の行列に　甘蘭
　青山通り襲う夕立　梨野
のっそりと進むでで虫月明かり　糸子
　ショパンの曲をなぞる鼻歌　忠勝
ポジティブにカリグラフィを大写し　うか
　ここは当たると籤の窓口　遊虹
夫と会い共に買い物養花天　山波
耕し済みし山裾の畑　ひろ子

平成二十三年十二月二十八日首
平成二十四年十二月十五日尾

（文音）

歌仙『落人の』

落人の村際立たし山めぐり　康子
だるまストーブ残る分校　游子
郵便夫太き指まで描かれて　丹
懐具合それとなく知る　康子
月光に滋味を深めん真珠筏　永渕　丹捌
流れ消えゆく梶の葉の文字　佐々木游子
熊架を定点カメラ写しだし　狩野康子
婚礼の荷に守り刀を　中村記康
Yシャツの君が匂いを深く吸い　筏　游子
試験管には赤ちゃんの芽が　丹
雲に問う煙の行方を登り窯　康子
右から左噂筒抜け　游子
くどくどと賭場の掟を言う古老　丹
沢の水汲み初の峰入　康子
歯をたてし焼きはんぺんに夏の月　游子
復興庁の窓放たれる　丹
ポトマック今を盛りと花便り　康子
露天風呂から虻に追われて　游子
忘れ霜遺愛の琴をかき鳴らす　丹
エアードームに自動センサー　康子
神棚にチャンピオンベルト黄金色　游子
草間弥生といえば水玉　丹
立ち話盗み聞くよに雪蛍　康子
某家秘伝の卵酒出し　游子
入籍をすっとこどっこい引き延ばす　丹
玉の輿とて二つ返事で　康子
ぷいと横知らぬ顔決め澄ます猫　游子
弓張月のかかる国境　丹
潮目よし戻り鰹を釣り上げる　康子
店たたむとき断腸花咲き　記康
村芝居炭で隈取り傘寿翁　阿部堅市
きれいなお辞儀したる幼子　游子
真昼間の棒高跳びのバー高し　丹
昭和の道具はやも骨董　康子
分け入れば万物はみな花となれ　游子
春の匂いを乗せてバス行く　記康
　　堅市

平成二十三年十一月三十日首
平成二十三年十二月十五日尾

（於・仙台文学館）

半歌仙　『どくだみの』

中村伊都夫捌

どくだみのかたまり雨に打たれけり　中村伊都夫
　でで虫登る垣根天辺　小西澄子
幼子の母と遊べる声のして　藤岡よし子
　泣いた笑ったシャッターチャンス　よ
望月に川の小波輝きぬ　澄
　秋の団扇の残る小座敷　伊
久々に松茸飯をもてなされ　澄
　みちのく目指しボランティアバス　〃
アーティストギター片手に犬もつれ　よ
　似顔絵入りの名刺もらひし　〃
風も又ここに別れる道しるべ　澄
　大慈大悲の観音の段　伊
寒鴉我を見ぬ振り我も又　澄
　下駄音高く冴ゆる月影　伊
大奮闘なでしこジャパン世界一　よ
　少年少女に与えたる夢　澄
花の山神はいづこに在はすらん　〃
　田打終はりてねぎらひの酒　よ

平成二十三年七月十四日首
平成二十三年七月二十八日尾
（於・伊勢市立図書館）

《東京・「窓」連句会》

脇起半歌仙

『夕顔に』

倉橋澄子捌

夕顔に干瓢むいて遊けり　松尾芭蕉
続く暑さをかこつ老たち　倉橋澄子
船もどる大漁旗をなびかせて　野口敏子
今日も留守番ふて寝する猫　中井淑子
想定外転勤内示月見酒　菅野陽子
ハモニカを吹く次男爽か　佐藤和子
ウ秋うらら掃除ロボット忙ハしげに　杉浦喜久代
彼の言ふまま紅強く引き　淑
恋ひとつ捨て雑踏の街を行く　陽
電光ニュース原子炉の文字　鈴木アヤ
ゆるやかにオランダ風車時刻む　高月三世子
永住権をやっと手に入れ　和
植木鉢のければ守宮冬眠中　〃
大晦日の鐘楼に月　内田さち子
料亭の露地出汁の香のただよひて　敏
クラス会にはシスターも居り　ち
花のころ蔵王連山喜寿の旅　世
待つことありて春惜しむ日々　澄

平成二十三年六月十一日首
平成二十三年七月九日尾
（於・東京女子大学同窓会館）

歌仙『幼子に』

長澤矢麻女捌

幼子に声かけらるる春の園　長澤矢麻女
　ジョギングをするこち風の中　岩下秋月
砂抜きの浅蜊があまた届くらん　上条洲紅
　手捻りという壺は古拙に　高木遥子
月の宿亭主認むお品書　後藤算子
　迷いこんだるちちろ鳴きおり　矢
ウそ寒くもののふの像立つ湖畔　秋
　大河ドラマのロケは順調　洲
くちづけは白きワインの香りして　遥
　僕の奥さん宇宙人かも　算
支持率の急降下せし民主党　矢
　あぶらげ狙い鳶輪を描く　秋
汗拭きつめぐる遺構に月の光ヶ　遥
　竪琴を弾く薄衣の僧　洲
憎しみは伏流水となって消え　矢
　お化けの話だいすきな子等　算
記念樹の花を囲んでクラス会　遥
　弥生の空にハングライダー　洲
ナオもう既に母の顔して孕み猫　遥
　みんな優しき出湯の里人　算
ゆるやかな坂をのぼれば夢二館　矢
　おなかの虫がぎゅと泣き出す　秋
和やかに家族で囲む鮟鱇鍋　洲
　電光ニュース寒く帯なす　遙
降りたてばアテネ空港閑散と　算
　逃避行らしひしと寄り添い　矢
あの頃の柳の腰が今は鱚　秋
　雲を従え月の悠々　遥
軒先にずらり並びし吊し柿　洲
　書院でひとり濁り酒酌む　算
ナウ見るたびに高くなりたるスカイツリー　矢
　風呂屋の煙突シャイに構える　秋
風の向き変わりて明日は雨らしき　遥
　休むことなく自転車をこぐ　洲
霊山の裾野を飾る花錦　矢
　昔を今に覆む城跡　算

平成二十三年四月　十四日首
平成二十三年七月二十八日尾

（文音）

歌仙『冬桜』

泰然と虚空支へる冬桜　土屋実郎捌
袴着の子の駆ける坂道　土屋実郎
ひたすらに漢字練習励みゐて　高山鄭和
最中二つをお抹茶に添へ　生田目常義
酔醒の仮の住処に月を友　伊藤則子
潮騒遠く渡る雁　山本ゆう
紫苑(ウ)咲く古き漁港に向ふバス　郎
黒髪ゆたか手を挙げる人　義子
長靴履きペアールックに肩組んで　和和
遊仙窟に艶夢結べる　義子
笑顔して宇宙飛行士無事帰還　郎
光琳忌とて円(まろ)やかに月　うう
木のベンチソフトクリームぺろりんと　郎
噴水広場鳩も寄りくる　和和
大聖堂イコン集めしツァーリゐて　郎
記念写真にVサイン皆　子子
雑木山ただひともとの花万朶　義義
画架を過ぎりて軟東風の吹く　子子
目借時主演俳優髭撫でて　郎
記者会見に車椅子乗り　和和
どうやって超光速を測るのか　義義
鳶が輪をかく海原の上　子子
家中で稲村ヶ崎ピクニック　和和
ばったり出逢ふもとの恋人　郎郎
付下げに髪結い上げて初詣　子子
少し酔ふたり女正月　義義
御当所の新横綱の土俵入り　郎郎
黄綬褒章準備万端　和和
いざよいの下にうなりてコンバイン　義義
地平線まで秋の虹追ふ　子子
雨(ナウ)あがり椎茸鍋を囲む仲　和和
話半分弾むお雑談　郎郎
映像の秘湯めぐりを楽しめる　子子
吊り橋揺るる薄闇の川　義義
打ち連れて根尾の巨木の花尋ね　郎郎
筆竜胆を探す山裾　和和

平成二十三年十二月二十五日首尾

（於・実郎居）

歌仙『初御空』

狩野康子捌

杉の秀に玉兎いただく初御空　狩野康子
　参賀の波へ大太鼓鳴る　松ノ井洋子
織り出す模様は宝尽しにて　秋田てる子
　何はともあれみどり児の笑み　谷田部弓子
一族の声新涼の風に乗り　熊坂昌子
　鶴渡り来る故郷の河　中村孝史
ゥおどろかしブランドもののお古着せ　横山浜江
　太極拳を舞う君眩し　木田真智子
手を組んで芝居観る日の宙に浮き　菅沼邦夫
　戦火のなかで過ごす蜜月　佐崎游子
世紀末赤い風車のぐらり揺れ　永渕丹
　銀輪を駆る潟添いの道　中村記康
夏痩せて月光に髪なびかせる　佐佐木らん
　鵺鳴く夜は息をひそめて　山崎博司
祇園会に抹茶の泡のふっくらと　山田史子
　民族衣装普及協会　阿部堅市
どっこいしょ爺立ち上がる花明り　北村多喜男
朝採りレタスシャキシャキと食む　佐藤千枝子
ナォ霾晦遠くを見つむ磨崖佛　高橋玻斗子
　いましも銅鑼が出港のとき　鈴木良子
口中のドロップすぐにかじる癖　佐々木嘉宇
　思いを込めてケルン積み上げ　早坂利子
葉ほたんは知ってる鍵の隠し場所　浜田則子
　両家集まり厄払いする　葛とく子
酔うたふりせねば告白できぬ彼　田中裕子
　夫婦茶碗は手びねりが良し　小岩秀子
愛蔵の三冊子をば賜りて　高山達雄
　鈴鹿の関を示す礎　久保田千代
腹話術月下の人形生けるごと　伊藤航
　ごくりと咽を新走り過ぎ　菅原泰子
ナゥ美し田の今は薄野嘆く老い　鈴木文男
　余生はよせと友に告げたり　川村紀子
鮮明に地球の果てをハイビジョン　荒川由美子
　泥鰌というはなんと悪食　筒井草平
満開の花が覆いし天守閣　小野寺妙子
　逃水追って夢の国まで　笹川圭子

平成二十三年七月五日首
平成二十三年十一月十一日尾（文音）

歌仙『宍道湖』

宍道湖の水面を繋ぐ西日かな　岡本遊凪捌
　土用蜆の沈みたる桶　岡本遊　凪
待合に女将飾れる伎楽彫　新谷十　音
　昇進祝ひまづは乾杯　新井　樽
改札を出て名月に迎へられ　高島すかんぽ
　街に流るる爽やかなジャズ　音
ウベネチアングラス見る眼に秋深し　凪
　市松模様おそろひの柄　凪
お忍びの温泉宿の夫婦風呂　ぽ
　転んで足をくじく山坂　樽
湧くやうに金剛峰寺の四智梵語　樽
　壁に舟漕ぐ校長先生　凪
時雨月をも懐かしみ夢をみる　樽
　古木の洞に住まふ梟　音
おでかけは紫色のウイッグで　音
　いたづら好きのアインシュタイン　音
初花の便り絵葉書にて届き　凪
　種を浸して空をうかがふ　凪
林葬ののどかにすすむ桃源郷（ナオ）　樽
　閘を縫ひゆくツーリングの灯　ぽ
悪相をかくも写せる法廷画　音
　嘘の立言聞いて呆れる　凪
願望の跡継ぎ産まれ鯉幟　ぽ
　祭太鼓のひびくふるさと　樽
勾玉の秘めたる綾に魅せられて　樽
　もうそろそろの象牙婚式　凪
華清池の貴妃のはだへを思ひける　凪
　特売で買ふハンドクリーム　音
ビル間よりいま控へ目な小望月　樽
　黄落の下泥鰌隠るる　凪
運動会（ナウ）全員体操地震の如　樽
　晴れがましくも優勝旗受く　ぽ
利き酒の有資格者の認定証　凪
　座敷わらしの覗く一部屋　凪
琴瑟の花ぞ昔とうたふべく　音
　背に靡かす春のスカーフ　樽
ぽ

平成二十三年九月　十一日首
平成二十三年十月二十五日尾　（文音）

歌仙『薔薇盛り』

小森葆子捌

車椅子目線の薔薇は今盛り　葆子
　ほのかな香りはこぶ涼風　和田容子
朝礼を待つ校庭のざわめきて　若松歌子
　ネットで知れる世界情勢　花輪芳子
月仰ぎ「ふるさと」の唄くちずさむ　片山瑛子
　七夕の竹祖父が切り出し　葆子
出しものは大岡裁き村芝居　容子
　引っ張りだこで回し読む本　歌子
歳かくしフランス人形めく化粧　芳子
　カクテルに酔ひ熱く語らふ　瑛子
つぎつぎと親類縁者けちをつけ　葆子
　反旗を振るも空振りとなる　容子
騒がせの熊もどうやら冬眠中　歌子
　雪原照らす中天の月　芳子
郵便夫町の出来事聞かせくれ　葆子
　社殿新築氏子らの寄付　容子
瀬を越えて淵を越え行く花筏　歌子
　隅田に来れば桜餅買ふ　瑛子
散歩好き嵩じて遠出春の野辺　容子
　探鳥会の人にぎわったり　葆子
山林王御殿のやうな家に住み　芳子
　過疎の村には若者を見ず　歌子
釣り上げし数多の鮎をおすそわけ　葆子
　親子揃ひの浴衣新調　容子
縁結びみくじ結ふ時目が合ひぬ　歌子
　なに言はれても進む決心　芳子
別姓が今風ならば籍入れず　容子
　仕事の後のやすらぎのとき　葆子
月の宴尺八の音の冴えわたる　芳子
　稲刈り進み豊年満作　歌子
駅伝の箱根の山は霧深し　容子
　女人にきびし関所役人　葆子
互角なるペナントレース龍が勝ち　歌子
　行方定めぬ旅に出てみむ　容子
爛漫の日本列島花の色　瑛子
　蝶は乱舞し丘をめざして　容子

平成二十三年十一月十日首
平成二十三年十二月七日尾　（文音）

歌仙『料峭』

土屋実郎捌

料峭や大川はさみ塔ふたつ　猪狩鳳保
　卒業近し燥ぎあう子等　山口武雄
喧嘩してすぐに笑って草摘んで　小張昭一
　舟脚浅く渡し着く岸　土屋実郎
月白し蹲踞水の溢れつつ　小張志げ
　挨拶交わす声の爽やか　太田はつみ
新走り酌むも目出度き宵の膳　雄
　ルビーの指輪質を受け出し　保
格式を楯に足入れ押し通す　郎
　嫁取る掟先祖代代　一
吉原を守る剣豪今佳境　みげ
　芥川賞異趣のものかき　雄
枯野行く河童を濡らす月明り　保
　雪降る中を汚職もみ消す　郎
大義とは人種差別をなくすこと　一
　瓢箪鯰逃げるつるりと　みげ
花莚くるっと巻いて万華鏡　雄
　露天風呂吹く春風ぞよき　保
霞立つ古き社に額衝いて　雄
　卑弥呼の墓を探す一団　保
出初式鯱立っていい眺め　郎
　江戸に名残の四十七組　一
会釈して襟かき合せ別れたる　みげ
　すぐ投函の端紅の文　雄
溜息と涙とルージュ貼る切手　保
　八百長騒ぎ幟降ろして　雄
汐入りの池が自慢の苑のこり　一
　秋草愛でて歌碑に気付かず　げ
学生に月の異名を数え上げ　郎
　蘆原に佇ち考える葦　み
金風の河べり空巣うろついて　雄
　小銭落としてて音に驚く　保
なかなかにゴミの分別やかましく　郎
　どうでもよかと麗かな午後　一
ジーパンもホットパンツも花衣　み
　東踊を囃す嬌声　げ

平成二十三年二月八日首尾
（於・新大橋アインスリバーサイド昭一居）

《横浜・ヨーク連句会》

歌仙　『ぼたん雪』

土屋実郎捌

傘にのり色失せにけりぼたん雪　杉浦芳子
紅梅見上げ足止むる坂　生田目常義
胸中に受験子期するものありて　土屋実郎
しゃぶる飴玉頬にまあるく　高山鄭和
月明かり拡げる地図は宝島　増井智子
葡萄酒醸す乾杯のとき　藤井弘美
筆（ウ）荒び独り居に慣れ冬隣　大津博山
突然に鳴るレトロ携帯　和
フェイシャルとネイルアートで日が暮れて　石井文子
瞳輝く西班牙の姫　和
決闘で決着つけん熱き笑み　弘
砂漠の起伏炎ゆる月影　郎
びいどろの青きを湛ふ大器（おおうつわ）　和
遠くに聞ゆ渡し呼ぶ声　弘
縁先に爺は児集め噺して　義
ヨガの稽古は週に二度行く　吉田酔山
避難所の卒業式に花一枝　文
肩組み合ってかぎろいの中　酔

ポケット（ナオ）に猫の子入れて散歩する　弘
新公園が川添いに出来　智
高層のビルのひと群れ鳥居越し　弘
婆の番する角の雑貨屋　義
どさくさに煙草再び値上案　和
マンション暮し霜柱見ず　文
酉の市きっと二人で約束よ　弘
おてんばが編む長い襟巻　横橋利夫
あちこちにユーキャンドウの店殖えて　郎
テーブルになる松の切株　和
望の月みちのくの海懐しく　芳
コスモスの咲く秋を惜しみて　文
爽（ナウ）涼を遍路ひたすら歩みをり　和
老若男女和気は藹藹　利
大盛りのカレーライスに紅生姜　義
牛咀嚼する春の灯の下　芳
花万朶長堤の道どこまでも　弘
自分史成って高き囀り　郎

平成二十三年二月十二日首
平成二十三年五月十四日尾
（於・横浜市上永谷ヨークカルチャーセンター）

歌仙　『生きてる証拠』

春暁や生きてる証拠髭を剃る　土屋実郎捌
　牛の背中に止まる初蝶　吉田酔山
アシタバの若芽つぎつぎ伸びてきて　秋山よう子
　朱色の椀にそそぐ味噌汁　土屋実郎
障子開け盃を重ねる大月夜　伊藤則子
　いたづらっ児も膝そろふ秋　生田目常義
古(ウ)民家で異国の人が菊作り　高嶋幸子
　紅葉はやはり京の高尾ね　山郎
杣道で手をつながむとすり寄りて　吉田酔山
　烏天狗がやきもちを焼く　秋山よう子
絶対に見えないけれど赤い糸　土屋実郎
　頑なながら金継ぎの冴え　生田目常義
総裁がマネーサプライ九兆円　伊藤則子
　月吹き上げて止まる噴水　高嶋幸子
愛蔵のドン・ホーアロハ着用し　山郎
　ぶらり漫歩の銀座八丁　吉田酔山
花吹雪宴の始末てきぱきと　秋山よう子
　へうたん池に浮かぶ引き鴨　土屋実郎
瞑(ナオ)想の座禅の縁に鐘霞む　伊藤則子
　頭陀袋には貯まる質札　高嶋幸子
おふくろに負はれて潜る紺のれん　山郎
　鼠小僧が土蔵破って　吉田酔山
屋根の上見栄を切りたる頬被り　秋山よう子
　多士済々の戌吉思汗鍋　土屋実郎
弁護士に検事判事も同窓で　伊藤則子
　書棚に隠す古き恋文　生田目常義
こみ上げる想ひ受けてとキスマーク　秋山よう子
　獅子座の性は変らざるてふ　土屋実郎
驟雨去り月を泳がす水たまり　生田目常義
　色なき風に神の鈴振る　山郎
煙(ナウ)まで故郷に向かふ芦火焚く　吉田酔山
　安全宣言揺らぐ原発　伊藤則子
紙ばかり収納都心本社ビル　高嶋幸子
　バイクで回る下町の路地　山郎
輪になって花を見上げる車椅子　吉田酔山
　がんばれ日本世界あたたか　秋山よう子
平成二十三年三月二十三日首尾　土屋実郎
（於・横浜技能文化会館）

歌仙『初蛍』

鈴木美奈子捌

瓦礫より翔びて群るるや初蛍　鈴木美奈子
幻と聴く早乙女の唄　秋山よう子
アナログのレコード再録デジタルに　生田目常義
黄表紙探し通ふ図書館　高山鄭和
待つ間にも雨月となりて独り酌む　伊藤則子
葉先にきらりこぼす上露　高嶋幸子
銀杏散る廻り地蔵の担がれて　う
差し出す銭のみなぬくもれり　義
六本木ヒルズ族にはウインクを　和
ぼってり唇這す首筋　則
どすこいと囃す甚句は本調子　幸
雁木洩れくる丁半の声　う
凍蜂のうづくまりゐる月の窓　義
フェルメール描くモデル着流し　和
渋滞の凱旋門をやっと抜け　則
革命秘話をせつせつと説く　幸
古傷に降りつむ花の優しさよ　う
親子で励む山の畑打　義
大船渡胡沙くる頃に訪ねんと　和
ジャズピアニスト即興で弾き　則
アラフォーの姉妹の会話とめどなく　幸
膝から膝へ渡すどら猫　う
青梅がこんと屋根打つ闇の夜　義
明日の備へにあまご干す妻　和
食材はレシピ通りに冷蔵庫　則
畳のベッド彼の好みよ　幸
アポロンと見紛ふ裸身に衝たれたる　う
砂丘を掘れば石の城門　義
望月の海に眠れる夢甘き　和
どこの党派もしのぐうそ寒　則
秋時雨お七吉三の塚濡るる　幸
香煙のぼる街騒の中　う
アルバイト終るやケータイまた鳴りて　義
絵文字で返す約束の場所　和
枝かざし花の翁の酔ふて候　幸
ちらし寿司にと刻む春の菜　則

平成二十三年六月十五日首尾

（於・磯子杉田劇場）

歌仙『小賀玉の実』

本屋良子捌

ひは色の小賀玉の実を拾ひけり　本屋良子
　秋を寿ぐ稲負鳥　服部秋扇
大海をくまなく照らす月出でて　浅沼小葦
　アイフォンを手にはしゃぐ少年　古川直
ぐいぐいと犬に曳かれて帰る道　永島菫玉
　厳頭凍ててしばし佇む　高田明日伽
ウ郷土館ガラスケースの雪合羽　横山わこ
　家苞にするぬれ甘納豆　高橋賢
三浪の身で覚えたる酒煙草　小泉桂
　笑窪にかくす黒い企み　葦扇
革命の志よりけふの恋　わこ
　悦楽快感ゲバラ昇天　玉
月の夜さほてんの蕾ふくらみて　直
　夏の座敷に能楽の舞　わこ
いにしへの雅び言葉の満ちあふれ　伽
　たらちねの母いかが在すや　扇
骨粗鬆症の人に進める花鰹　桂
注射の針を祀る看護士　葦
ナオビル街に木の芽起しの雨烟る　扇
　大阪場所の切符売切　伽
眉つばの投機話に群がりて　賢
　支離滅裂な大臣の弁　葦
知らぬ間に振りまかれたる放射能　直
　良き魚を選る知恵のある鷹　玉
蒟蒻と干菜で腰をくびれさせ　葦
　なぜか気になる髭の男性　扇
婚約のふたりは俄クリスチャン　伽
　つくつく法師経を唱へず　玉
ヒマラヤの嶺押し上げる望の月　桂
　囲炉裏欲しいと老人ホーム　こ
ナウはなむけにひと節の笛ぬくめ酒　葦
　まだ見ぬ国に夢を預けて　直
精魂をこめ龍を画く若き画家　賢
　税関抜ける丸きスタンプ　こ
花の雲旅の友にと漫ろ神　良
　嬉歌の森はいまや朧に　桂

平成二十三年十月十四日首尾
（於・京橋プラザ）

歌仙『北の春』

地が震え水襲い来る北の春　武藤美恵子捌
三月半ば結ぶおにぎり　森田美耶子
木蓮の綿毛はつんと上向きに　板倉　合
私のあくびと猫のあくびと　塚本益美
編集長パソコン閉じる良夜なり　近藤とみ子
遮断機の音風はさわやかに　長塚節子
柿(ウ)吊るす祖母の教えは宝物　と　益
長い黒髪シュシュでまとめる　〃
露天風呂湯気にかすんだうすい肩　松井文子
そっと触ればふわりくずれて　宇井　希
砂山の小さなシャベル真新し　と　節
シュークリームの甘さほどよく　節　恵
やさし気に月の見下ろす草蛍　合　節
竹床几では烏賊の争い　と　希
吉凶を水晶玉にのぞく魔女　と　益
不明の年金知っていますか　〃
断崖の臼杵大仏花吹雪　松井文子
鱒の弁当バスで配られ　宇井　希
陶工(ナオ)の四方山話うららかに　と　文
前へ前へと進む人生　耶　文
耐えている病の犬の潔さ　耶　希
ピアノソナタのもれる薔薇窓　合　益
こっそりとビンテージワイン買いこんで　と　益
古希の先生羽織る半纏　合　〃
ストーブの給油ランプが点滅し　と　松井文子
二人で降りた単線の駅　文　宇井　希
別れるか死ぬか他には道もなく　稲垣渥子　文
ぽっかり浮かぶまんまるの月　と　節
秋鯖の煙吐き出す換気扇　耶　恵
ひょんの実脇に夢を語らう　益　合
運動会(ナウ)地区別リレーで盛り上がり　文　節
ダムの水門閉ざされたまま　と　節
省エネで豊かに暮らす人の知恵　合　恵
雛のあられを焙烙で炒る　渥　合
旅の宿今年限りの花を見て　益　節
雉の隠れる土手の草むら　恵　と　希

平成二十三年三月十七日首
平成二十三年四月二十一日尾

（於・水源クラブ）

歌仙『紫陽花や』

紫陽花や老いてもたまに宝塚　土屋実郎捌
　遠見の科（しな）にかざす絵扇　原田子楓
世は進み早乙女を見ることもなし　土屋実郎
　海原青く車雑踏　萩本勝夫
出航のフェリー甲板月照らす　佐々木秀夫
　友と語らひ濁り酒酌む　村井昭三
ネクタイのごと溜まりたる秋の蝶　勝英
　原始の世界化石復元　三郎
カトレアを咲かす路地裏ひと恋し　勝英
　不倫をあばく女探偵　三郎
流行語孫から聞いて古語教へ　勝英
　老の一徹源氏読了　三郎
冬麗余生満喫気合入れ　勝英
　スカイツリーに月冴ゆる街　三郎
宿無しの住処（すみか）は隅田川堤　勝英
　誉をかけて短艇（カッター）を漕ぐ　三郎
投入れの花玄関を引立てて　勝英
　靖国祭期友昇殿　三郎
風光る何かよきことありそうな（ナオ）　勝英
　黄金文化世界遺産に　三郎
改めて平和かみしめ前進を　勝英
　このごろいつも妻が先立ち　郎
草食の男（お）の子を叱咤エスコート　三郎
　喧嘩のあとの愛はこまやか　勝英
手造りの正月飾ほめられて　郎
　家内安全初御籤ひく　三郎
わが余生太く短くゆくもよし　勝英
　白き渚に続く松原　郎
月浴びて合宿の猛者走り行き　英
　秋の七草子規庵を訪（と）ふ　三
そぞろ寒揣摩（しま）憶測（おくそく）の放射能　勝
　口を拭って証拠隠滅　郎
現内閣知らぬふりしていつまでも　英
　国の行方をいかが定めん　三
人の花世界は一つ手を繋ぎ　勝
　巣立ちの鳥のこもごもに翔ぶ　英

平成二十三年六月二十二日首
平成二十三年七月二十八日尾
（於・横浜柳川ビル士官室）

歌仙『隠沼は』

狩野康子捌

隠沼は秋風見たと波打てり　狩野康子
　葦の穂絮にきらと月光　田中裕子
今年米搗けばほのかに匂いたち　中村孝史
　街はいま頃ジャズフェスティバル　木田真智子
カンカン帽あみだに被り老紳士　菅原邦夫
　買ったばかりの捕虫網提げ　横山浜江
ウ赤青黄窓全開のバンガロー　小岩秀子
　渋味を増してワイン熟成　康子
鳩尾に熱きまなざし灼きつきぬ　孝史
　再々婚も処女のごとくに　鳩尾
一生を無神論者のはずだった　真智子
　杣の暮しに野兎を追う　浜江
まろき月はしゃいで滑る結氷期　秀子
　トリプルサルコ今や常識　康子
高速道罹災証明幅効かし　邦夫
　救援部隊泊る名湯　浜江
花吹雪空似の人と出会いたる　孝史
　弥生の空にはらみたる夢　真知子
ナオ休日を休日らしく汐干狩　秀子
　祖母の笑顔がビデオ便りに　康子
アシモ君走って歌って鼻かいて　邦夫
　世界遺産となる金色堂　浜江
夏草やスイーツ好むつわもの等　秀子
　外反拇趾にいぼがえる跳ぶ　裕子
寄り添えば方向音痴のふたりです　真智子
　経験大事とブータンの王　裕子
会長さんお礼はティッシュでありません　孝史
　遺失物課は奥のまた奥　康子
月仄とまといて来たる塾帰り　孝史
　猫の土産はねこじゃらしとか　邦夫
ナウ全山の僧うち揃う魂祭　秀子
　骨董品に混じる贋物　浜江
羽根ペンでひらひらと書く飾り文字　真智子
　心の雲の晴れ渡りたる　邦夫
パーティーの紳士淑女の花姿　秀子
　春大根の列行儀よし　邦夫

平成二十三年九月二十二日首
平成二十三年十一月十日尾
（於・タイハックル中央市民センター）

歌仙『神無月』

信濃への旅にまた越せ神無月　金枝　純捌
諏訪湖さざ波吹くや凩　辻　幸雄
ギター弾く散歩に行けと犬吠えて　金枝　純
あちらこちらにスケッチの人　坂田武彦
空碧く地平に細き二日月　馬場英子
葡萄酒醸す高屋根の蔵　彦
酔ウ拳は散るもみじ葉にたたら踏み　純
キスを迫るも平手打ち喰う　幸
柔肌の火照りを強く抱き締めて　英
八百八町焦がす一念　彦
何時の世も十六歳の無分別　幸
新聞見出し談志が死んだ　純
毒針を豪気に立てて蠍這う　彦
お化け屋敷を抜けて昼月　英
尋ねゆく千住煙突友ひとり　純
旅のかどでを鳥と見送る　幸
山越えのウオノメに泣き花吹雪　彦
峠に嬉し蓬餅食う　英
駐ナオ在所春手袋の忘れ物　彦
横目に過ぎる自転車泥棒　純
プロレスを真似て首筋寝違える　幸
絆が強く、結ばれていて　彦
熱燗で焼け棒杭の雪見酒　英
追儺の夜に君去り行きし　純
宝石のようにきらきら千の風　彦
ご覧翼よあれがパリの灯　英
古写真これがお前のお父さん　幸
ころり駒下駄露地の思い出　純
蓑虫の声の幽かに月上る　英
桑括り終え家路への橋　彦
姉ナヲさんの髪にひと挿し小紫　純
十五も違う弟がいて　幸
村に来たジンタとメリーゴーランド　英
チンドン太鼓に跳ねるはピエロ　純
花の杜出世階段仰ぎ見る　彦
袷の背を春風が押す　幸

平成二十三年十一月　十五日首
平成二十三年十二月三十一日尾

（文音）

歌仙

『鵙なくや』

小野寺妙子捌

鵙なくや雲行くのみの津波跡　中村記康
一本の松遺る白秋　小野寺妙子
外ツ国の駅舎に昇る月を見て　奈良榮夫
歩き続けた靴下の穴　鈴木文男
立ち読みに耽る社員の昼休み　小野寺信一郎
明日にしようか日記買うのは　康
蕭(ウ)条と枯葦原の郷遙か　子
鏡開けば母に似し顔　夫
丸文字が借りたノートに愛告げし　男
髪そよがせてメリーゴーランド　郎
絢爛の内陣囲む太柱　康
修学旅行のガイド旗持つ　夫
月天心ビアガーデンに客あふれ　男
放映で知る伊勢のお田植　子
地場産の野菜両手に道の端　郎
不揃いもありぬくもりもあり　康
東北線速度ゆるめし花堤　子
淡雪ひかる著き山なみ　夫

雅(ナオ)なる曲水の宴取材班　男
草稿届き朱筆入れたる　郎
マラソンのトラック勝負で決着し　康
今宵の酒は友の慰め　子
雑踏の托鉢僧の夏衣　夫
扇風機付き傘を売る店　男
同姓の表札多き離れ島　郎
幼き弟嫁ぐなと泣き　康
小説のテーマは「しのぶ恋」なりし　子
片肌脱いで測る血圧　夫
古民家の居久根に掛る十三夜　郎
冬待つ朝のチラシずっしり　男
罪(ナウ)晴れて紅葉かつ散る表門　康
志いま尊徳の像　子
起き上がりこぼしと遊ぶ児の瞳　夫
其処退けメタボ猫の御通り　男
前線のまにまに訪ぬ花の宿　康
霞たなびく金の鯱　郎

平成二十三年九月十一日首
平成二十三年十二月二十五日尾（文音）

脇起　故久良木憲雅追悼
歌仙　『梅雨の雷』

和田忠勝・ひろ子捌

梅雨の雷あと一章を残しおり　釈慈憲仏
源氏蛍のひそむ草陰　和田忠勝
谿奔る桧の育つ山裾に　和田ひろ子
背戸口押して訪いの声　松本華与
白玉の酒身にしみる月の宴　秋山よう子
五穀豊穣満杯の蔵　下田博
ヴ鳥渡る太平洋を叉に掛け　速藤尹希子
連句の句座に滞つくしたる　高島幸子
昨日の娘なんてったって瞳がすてき　大駒誠一
電車の中で化粧念入り　佐藤玻瑠
味噌汁の上手な君に惚れ込んで　藤井恵美子
未だに目処のたたぬ被災地　山本恵子
熱こもる座談は続き月凍てる　木谷英子
聖夜のキャロル聞こえ来る窓　岡本貞子
子供等はきょうの出来事ママにつげ　土肥暢子
ついてゆけない英語しりとり　内海鉄弥
大道芸上野の森は花盛　玉生うめ子
風やわらかき芝に寝ころぶ　海津桂子
ナオそこかしこ園丁拾う忘れ角　辻賢次郎
鳥居の影が長く尾をひき　宮坂和之
密会の斎宮は静まれる　大橋敏子
慈愛に満ちた彼の眼差し　小川里江子
来世でも教え子達に囲まれて　中井啓輔
歩を進め行く思い出の道　坂井啓児
ほんのりと白檀香る扇子手に　下田幸枝
川床の料理に鱧と生湯葉　宮下瑩子
欄干の擬宝珠撫でる建築家　宮脇昌子
孫はゆっくり車椅子押す　和田晶子
残月をかすめてラストシャトル着く　辻松雄
SPレコードド澄めるカデンツ　木谷藍
ナウ黄落のウィーンへと発つ旅衣　諫武雪谿
牧師と僧侶はずむ夜話　佐藤たまき
復興の街へ大きなプレゼント　中柴たま
なでしこジャパン夢を現に　春日久子
花満ちて訪ねし歌碑を覆うごと　中井淑子
久良木公園陽炎の中　執筆

平成二十三年七月二十三日満尾（一部文音）
（於・大倉山ヒルタウン）

歌仙『雁渡る』

東北の空深みたり雁渡る　和田忠勝捌
　山脈照らす天心の月　和田ひろ子
氷頭膾頃合良しと食膳に　中井淑子
　つい〳〵過ごす辛口の酒　辻賢次郎
マイカーを手放す人の増え始め　秋山よう子
　困の中ジョギングの影　和田忠勝
ッ通夜の家椙の火だけが明かりにて　大駒誠一
　籍入れぬまま尽くす半生　辻松雄
ぶきっちょな楽天観で子だくさん　ろ
　金庫任され老舗経営　淑子
軽々と鼠小僧は塀を越え　郎
　八坂の街を巡る山鉾　う
驟雨去り洗われた月すっきりと　勝
　脱原発へ路線新たに　一
次世代へ愛しき故郷守りたし　雄
　あてこ手作り六地蔵尊　ろ
病室の窓を閉め切る花の冷え　淑子
　香りを放つネーブルの籠　郎
サ(ナオ)かのぼる記憶のはじめ染卵　う
　パレード襲う春疾風憂し　勝
妖怪も棲んでいそうな老館　一
　黒猫を抱き佳人佇む　雄
秘境の地焦れ焦れて嫁ぐ旅　ろ
　夫の手を借り毛糸玉巻く　淑子
汽水湖の舟に満載寒しじみ　郎
　青年部会地産推奨　う
総会にようやく足りた委任状　勝
　観客まばら暗い先行き　一
塔と月並びし町の情厚く　雄
　アルハンブラは変奏曲爽籟の中　ろ
ナウ秋の蝶見果てぬ夢を追って飛ぶ　淑子
　この木何の木登りたいなあ　郎
満を持し手拍子入れてフラガール　う
　同窓会は校歌不可欠　勝
花の下悲喜こもごもの時流れ　一
　平和の鐘の響きうららか　雄

平成二十三年九月十二日期首
平成二十三年十一月十日満尾　（文音）　執筆

歌仙『フクシマ』

和田ひろ子捌

福島がフクシマになり原爆忌　諫武雪　谿
　蝉鳴き出だす愛しき山河　速藤尹希子
遠来の友へ野草を天麩羅に　山本恵　子
　刻を忘れて句座のなごやか　宮脇昌　子
何とまあ丸あるきことか望の月　宮下螢　子
　稲は黄金に粂山子傾く　藤井恵美子
神嘗祭神酒と神饌とが供えられ　岡本貞　子
　海鳥舞える伊勢の浜辺へ　大橋敏　子
ラジオから聞こえる歌詞は「ビューティフル」　木谷藍
　ウェディングドレス馬車にゆられて　小川里江子
好きな人あきらめ親の意のままに　佐藤たまき
　議員バッジを胸に雛壇　和田忠勝
増税の紫煙吸い込む雪月夜　海津桂子
　ふぐ鍋囲む同窓の旅　玉生うめ子
副作用味覚障害未だ癒えず　春日久子
　地蔵菩薩に絶えぬ線香　和田ひろ子
花万朶お顔にお手に衣にも　木谷英子
ボートレースに応援の声　谿

平成二十三年　九月九日期首
平成二十三年十一月三十日満尾　（文音）

執筆　尹恵　昌螢　美貞　里藍　敏き　勝尹　桂恵　めろ

歌仙『夜深む』

和田忠勝捌

高島幸子　すだきいる虫の一途や夜深む
和田ひろ子　盃交わす観月の茶事
辻賢次郎　松茸の場所は誰にも秘密にて
内海鉄弥　宝島へと海図なき旅
下田博　万歩計散歩族には手放せず
松本華与　山鳩せせるベランダの隅
大駒誠一　おじぎ草(ウ)くたびれるまでお辞儀させ
佐藤玻瑠　あの日のままの君に再会
宮坂和之　うらやまし年の差婚で老い謳歌
下田幸枝　トイプードルが今の流行
和田晶子　五往復覚悟を決めたルイ・ヴィトン
中井淑子　Uターンして興す農業
秋山よう子　月中天秩父祭を見下ろして
坂井啓児　歓声しきり白き息吐く
土肥暢子　次々と人文字変えて応援し
中井啓輔　我が胸にある古代地上絵
辻松雄　花万朶辺りを払う孤高ぶり
和田忠勝　法然遠忌霞たなびき

門(ナオ)前の本屋の主春惜しむ
黙ってワイン用意する妻
堕天使の誘いを拒み風車たて
ひとつ貰って三つ目小僧に
はからずも惚れてしまったバックシャン
浜辺の砂に好きと記して
ハッカーが忍び込んだか日雷
妙にはしゃいだ蚊帳吊った晩
毒舌も古典もうまき談志逝く
嫡子のお練り弾む紋付
連峰の稜線照らす月静か
見渡すかぎり咲けるそばむぎ
難(ナウ)かしき京都議定書そぞろ寒
モミの純林酸性雨降る
理科室のブンゼン灯が懐かしい
校舎に沿ってつる草の苗
花弁をつついて遊ぶ鯉の群
試歩少し伸ぶ丘の初虹

平成二十三年九月　九日期首
平成二十三年十二月三十日満尾　（文音）

脇起百韻　『君子蘭』

付廻し

初オ 君子蘭孫花咲きてめでたけれ　阿片瓢郎　房
　春の息吹の透明にあり　小林梁　古
　鳥帰る点となりゆく北の空　飯沼三千古　梁
　かすかな余震続く食卓　山本房子　房
　天譴か大和島根に深き傷　梁
　手をつなぎあふ心ひとつに　古
　潮騒の浜に涙の月昇る　房
　そぞろに寒き金銀の鞍　梁
初ウ 別れ蚊帳あの頃のことはるばると　古
　袴に沓の少女過ぎゆき　房
　そのかみに片思ひせるひとの影　梁
　池をめぐりて幻を追ふ　古
　授かりし愛児抱く日を楽しみに　房
　無窮のいのち永久に続かむ　梁
　名工の末裔として一筋に　古
　絶やすことなき窯の火の色　房
　土くれに生命賭けし寒の月　梁
　鍬にかかりし冬眠の蛇　房
　校庭に笑ひはじけて輪の崩れ　梁
二オ ルネサンス春恋ふこころいや増さり　梁
　モジリアーニの女にも似て　古
　ふと触れる黒髪の背に気をとられ　房
　足の運びの確かともせず　梁
　僧侶とて酔ひに托して本音吐く　古
　ＩＴ企業へ進む長男　梁
　世は替るノロマいつしかトップなり　房
　夢の枕の昼寝より覚め　古
　念願の大雪渓を渡りきり　房
　老兵あへぎ這松による　梁
　北海の渚に遠き故郷を恋ふ　古
　懐しきかなな少年の日々　房
　衛星も三千里外唐の月　梁
　七賢集ふ竹の春なる　古
二ウ 衣被つるりとむけるおもしろさ　房
　かはいらしさの残る口もと　梁
　絵蝋燭愛の灯しのほのかにも　古
　ポニーテールのリボンあざやか　房
　校庭に笑ひはじけて輪の崩れ　梁

組体操のころげ落ちたる　古
かづら橋渡りし向ふ道祖神　房
旅ころもとて軽くほころび　梁
小謡の一ふし謡ふふところ手　古
がさと音して朴葉散りたる　房
長雨に連作の藍いや青く　梁
卯建を上げし豪商の裔　古
桜舞ふ金色堂を背とす　梁
霞の奥に浄土かがよふ　房
三オ軒深く春の障子を廻らせる　房
裾の乱れをふと垣間見し　梁
ゼンマイのゆるむ音鈍く汝を想ふ　古
映画のやうなシーン期待し　梁
逢へば又別るる定めやるせなく　古
浮世の義理に流さるるまま　房
冬岬ただ打ちかへす波ばかり　梁
なだれて白き崖の水仙　房
落武者の一人小道をあやまたず　梁
史跡に埋まる関が原町　古
金文字の伊吹もぐさの古看板　房
人に知られで来る由もなく　梁
気がつけば三日月もよきビルの街　古
酒場の隅に挿せるなでしこ　房
三ウまれびとのお能拝見秋深み　梁
並ぶ座席は美女ばかりにて　房
洒脱なる整形外科医もてもてに　古
そり跡青き男なりけり　梁
志願してアフリカの地に派遣され　房
病児の瞳澄めるあはれさ　梁
赤道に死す人ありて世紀行く　古
いづこともなくバッハ流れ来　梁
巴里祭の窓にさし入る月の精　房
シャンゼリゼに日傘傾け　古
宝塚熱狂してる友若き　梁
阪急電車はなやぎを乗せ　房
遅ざくら遠きにありて偲ぶ頃　梁
啼声久し揚雲雀聞く　古
ナオ麦踏みの背中合はせは夫婦らし　房
しぐさに見ゆるいたはりの情　梁
曾祖父に早や跡継ぎを期待され　房
御成の門は鎖されしまま　古
側室はいづれを見ても姫孕み　梁
敢へて次代を生まぬ選択　房
やりくりの貧乏世帯夏やつれ　古
回転わざに汗も引き込む　梁
妬ましい程柔らかき四肢にして　房

ヨガにエステに通ひづめなる
磨きあげきたへあげたる健康美
買手のいない東北の牛
寝苦しき仮設に仰ぐ夜半の月
そっとぬけ出す虫の音の方
ナウ後の雛まつる港の考古館
白き伊万里にイクラ盛りたる
何事も忘れし如く鮨つまむ
被害の紙面伏せられしまま
民おろか為政者思ふほどでなし
任せておけぬ自ら起つ
酔ほろと桜一枝をかざし舞ふ
春光満つる大江戸の朝

執
筆　古房　梁　古房　梁　古房　古房　梁　古

平成二十三年四月二十九日首
平成二十三年八月二十七日尾

（文音）

半歌仙　『冬　構』

伊藤　航捌

年金で求めし脚立冬構　伊藤　航
見上げる空に初鶴の声　笹川圭子
サイフォンの沸きたつ香り広がりて　笹本美恵子
就職祝ヴィトンバッグを　井上せつ子
十五夜の団子は高く三方に　圭子
水琴窟に紅葉かつ散る　せ
赤い羽根かわい呼びかけ響く街ウ　航
割賦払うにネクタイを締め　美
ウィーンにてコンサート聞く旅もあり　せ
彼の隣席飲んでからんで　〃
人知れず枕ぬらした若き日々　せ
なでしこジャパンオリンピックに　圭
雨あがり月を慕うか蟇の鳴く　圭
西瓜を冷やす古里の井戸　美
腹の傷隠して入る大部屋へ　小野寺妙子
掃除当番避難所の朝　安斎厚子
花片のひとひらとなり海へ出る　圭子
仔犬駆けゆく甘茶賑わい　今野福子

（於・仙台市中央市民センター創作室②）
平成二十三年十一月二十五日首尾

連句年鑑　平成二十四年版

「私の好きな一巻」大募集

多くの作品をよむことは、連句への理解を深めることになり、連句作品への理解が深まることは、よりよい作品を生み出す創造力を培うことにつながります。

連句年鑑編集部ではこの度、「私の好きな一巻」賞を設け、たくさんの作品の中から自分の好きな作品を会員の皆さんに選んでいただくことを企画しました。

どうぞ奮ってご投票ください。投票数の多い上位三巻の作品を、平成二十五年版連句年鑑誌上で発表します。

○この年鑑掲載の作品の中から、あなたのお好きな一巻を選び、とじ込みの投票用はがきでご投票ください。（とじ込みはがき以外は無効）。

○投票は「作品名」、「捌名」、「結社或いはグループ名」、「掲載ページ」を楷書でご記入ください。

○投票には「住所」、「氏名（ふりがな）」、「電話番号」を必ずお書きください。

○匿名での投票は無効といたします。

○投票締め切りは平成二十五年二月末日厳守。（当日消印有効）。

山梨県連句協会

会　長　後藤臣彦

副会長　功刀太郎・後藤はるよ

事務局　後藤臣彦

〒400-0814 甲府市上阿原町1258

(055-235-1653)

福岡県連句協会

会　長　八木紫暁
副会長　守口　薫
事務局　八木紫暁
〒816-0931 大野城市筒井3-13-12
(092-593-2575)

大分県連句協会

会　長　中森順和
事務局　南雲玉江
〒874-0902 別府市青山町8-72
佐々木方
(0977-26-9407)

連句協会広島県支部

支部長　高橋昭三
事務局　同　上
〒731-0223 広島市安佐北区可部南
4-5-47
(082-815-1914)

宮城県連句協会

会　長　狩野康子
副会長　中村孝史・中村記康
事務局　狩野康子
〒981-0924 仙台市青葉区双葉ケ丘
2-5-12
(022-271-0005)

鳥取県連句協会

会　長　音田靛治
副会長　新田幸子・永江重昭
高野重子・山崎君子
事務局　田中史郎
〒682-0402 鳥取県東伯郡関金町大鳥
居　関金町教育委員会内
(0858-45-2111・FAX3961)

岡山県連句協会

会　長　米林　真
副会長　花房八映
事務局　米林　真
〒700-0904 岡山市柳町2-2-1
(086-222-6176)

山形県連句協会

会　長　内田素舟
副会長　浅沼葛子・三浦和枝
安部英子倍
事務局　内田素舟
〒996-0035 新庄市鉄砲町3-71
(0233-22-1285)

連句協会群馬県支部

支部長　伊藤稜志
事務局　同　上
〒371-0811 前橋市朝倉町3-5-37
(0272-61-2297)

茨城県連句協会

会　長　堀江信男
副会長　西　幾多・城　依子
事務局　根本美茄子
〒319-1225 日立市石名坂町1-31-9
(0294-53-6635)

やまぐち連句会

会　長　諏訪欣二
事務局　中本蒼水
〒746-0025 周南市古市2-3-43
(0834-62-1400)

静岡県連句協会

顧　問　石渡蒼水・中根明美
会　長　宮沢次男
副会長　久保田静男・飯田紫苑
事務局　久保田静男
〒410-0822 沼津市下香貫280-1
(055-931-7219)

徳島県連句協会

会　長　東條士郎
副会長　竹内菊世・梅村光明
事務局　東條士郎
〒770-8051 徳島市沖浜町東畑589-1
(088-622-3745)

地方連句組織

愛媛県連句連盟

会　長　井上雨道
副会長　岡本　眸・戒能多喜
　　名本敦子
事務局長　山口博三
〒791-0311 松山市白水台1-1-9
(089-927-3231)

連句協会千葉県支部

顧　問　上田渓水・下鉢清子
　　浅野黍穂・斉藤一灯
支部長　東浦佳子
副支部長　伊藤貴子
幹事長兼事務局長　伊藤貴子
〒264-0006 千葉市若葉区小倉台1-12-3
(043-233-3555)

連句協会石川県支部

支部長　藤江紫虹
事務局　宮嶋　茂
〒929-0327 石川県河北郡津幡町字
　　庄チ65
(076-289-4214)

連句協会岩手県支部

支部長　小原啄葉
副支部長　志和正巳　菅原多つを
事務局　沼田和子
〒020-0875 盛岡市清水町1-33
(0197-622-7907)

連句協会三重県支部

支部長　西田青沙
事務局　同　上
〒512-0921 四日市市尾平町3768-188
(0593-32-8931)

連句協会栃木県支部

支部長　中尾碧苦
副支部長　高井利夫・田中きみ
　　田浪富布
事務局長　富田昌宏
〒329-4406 栃木県下都賀郡大平町
　　下皆川721
(0282-43-2664)

埼玉県連句協会

顧　問　金子兜太・宇咲冬男
会　長　磯　直道
副会長　白根順子・福田太ろを
事務局長　石川光男
〒369-1203 埼玉県大里郡寄居町
　　寄居535
(048-581-5943)

富山県連句協会

会　長　山本秀夫
副会長　大西紀夫・藤縄慶昭
事務局長　野島清治
〒930-0114 富山市茶屋町59-61
(076-436-0677)

岐阜県連句協会

顧　問　伊藤百雲
会　長　大野鵠士
副会長　瀬尾千草
理事長　清水貴久彦
事務局　松尾一歩
〒500-8415 岐阜市加納中広江町68
　　横山ビル
(058-274-9479)

香川県連句協会

会　長　鎌田孝義
副会長　植松晴子・広谷高士
　　西岡恭平・今井　盈
事務局　鎌田孝義
〒763-0013 丸亀市城東町1-3-26

1. 事業計画および収支予算についての事項
2. 事業報告および収支決算についての事項
3. 役員の選任
4. その他この会の業務に関する重要事項で理事会において必要と認めた事項

（総会の議決方法）

第22条　総会の議事は会員である出席者の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

第7章　会　　計

（会計の種類）

第23条　この会の会計は次のとおりとする。

1. 経常会計
2. 特別会計

（経常会計）

第24条　経常会計の収入は会費、協力金その他とし、これによってこの会の経常的運営の支出にあてる。

（特別会計）

第25条　特別会計の収入は連句グループ、会員、関係団体等よりの寄付金とし、これを基金として積み立てるものとする。

（経常会計の剰余金）

第26条　経常会計に剰余金があるときは、理事会の議決および総会の承認を経て、その一部もしくは全部を特別会計の基金へ繰り入れることができる。

（会計年度）

第27条　この会の会計年度は、毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

第8章　規約の変更

（規約の変更）

第28条　この規約は理事会において理事現在数の4分の3以上の議決を経、かつ総会において出席者の4分の3以上の議決を経なければ変更することができない。

第9章　解　　散

（解散）

第29条　この会の解散については前条に定める手続きを準用する。

この規約の制定、施行は昭和63年10月1日とする。

平成2年9月1日　一部改訂。
平成8年6月23日　一部改訂。
平成16年4月18日　一部改訂。
平成18年3月19日　一部改訂。

『連句協会』顧問・役員名簿

（顧　　問）　宇咲冬男・土屋実郎・上田渓水・小林しげと・磯　直道・宮下太郎

（役　　員）

会　　長　臼杵游児

副 会 長　青木秀樹・伊藤稜志・品川鈴子・中尾青宵

理 事 長　和田忠勝

常任理事　井上雨道・今村　苗・小川廣男・狩野康子・近藤蕉肝・島村暁巳・白根順子・高尾秀四郎・二村文人

理　　事　伊藤貴子・梅村光明・大久保風子・大山とし・岡本　眸・小池正博・高橋昭三・竹下昭子・東條士郎・富田昌宏・福田太ろを・松尾博雄・宮澤次男・森川淳子・八木紫暁・矢崎　藍

会　　計　高尾秀四郎（兼）・島村暁巳（兼）

監　　事　石川光男・東浦佳子

『連句協会』規約

第1章　総　　則

（名称）

第1条　この会は連句協会という。

（事務所）

第2条　この会の事務所は会長の指定する場所に置く。

（支部）

第3条　この会は理事会の議決を経て必要の地に支部を置くことができる。

第2章　目的および事業

（目的）

第4条　この会は連句文芸の創造的発展とその普及ならびに連句実作者、連句愛好者の交流を図り、連句文芸の興隆に寄与することを目的とする。

（事業）

第5条　この会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 全国大会および地方大会の開催
2. 会報（隔月）の発行
3. 連句年鑑の出版
4. ホームページの運営
5. 国民文化祭への後援と参加
6. その他前条の目的を達成するために必要な事業

第3章　会　　員

（種別）

第6条　この会の会員は次のとおりとする。

1. 正会員

（入会）

第7条　正会員になろうとする者は、入会金2千円と所定の会費を納入することにより入会できるものとする。

（会費）

第8条　この会の会費は次のとおりとする。

1. 正会員　　年額3千円

但し1月から12月まで

（資格の喪失）

第9条　会員は次の事由によってその資格を喪失する。

1. 退会したとき
2. 理由なくして会費を2年以上滞納したとき

（退会）

第10条　会員が退会しようとするときは退会届を会長に提出しなければならない。

第4章　役　　員

（種別）

第11条　この会には次の役員を置く。

1. 理事　35名以内（うち会長1名、副会長5名以内、理事長1名、常任理事若干名）
2. 監事2名

（役員の選任）

第12条　理事および監事は会員のなかから総会でこれを選任する。会長、副会長、理事長および常任理事は理事会の互選でこれを定める。

（理事の職務）

第13条

1. 会長はこの会の業務を総理しこの会を代表する。
2. 副会長は会長を補佐し会長に事故あるときは、あらかじめ会長が指名した順序でその職務を代行する。
3. 理事長は会長、副会長を補佐してこの会の業務を掌理する。
4. 常任理事は会長、副会長および理事長を補佐し理事会の議決に基づき業務に従事する。
5. 理事は理事会を組織して業務を行う。

（監事の職務）

第14条　監事は会の会計を監査する。

（役員の任期）

第15条　この会の役員の任期は2年とする。但し、再任を妨げない。

第5章　顧　　問

（顧問）

第16条　この会に顧問を置くことができる。顧問は理事会の議決を経て会長が委嘱する。顧問はこの会の業務について意見を述べ、また会長の諮問に応じる。顧問は会費を納めることを要しない。

第6章　会　　議

（理事会）

第17条　理事会は原則として年3回会長が招集する。理事会の議長は会長とする。理事会の運営については別に定めるところによる。

（常任理事会）

第18条　常任理事会は原則として隔月に会長が招集する。常任理事会の運営については別に定めるところによる。

（総会）

第19条　総会は毎年1回会長が招集する。また必要と認めたとき会長は臨時に総会を招集することができる。

（総会の議長）

第20条　総会の議長は会長がこれを務める。

（総会の議決事項）

第21条　総会は次の事項を議決する。

連句協会規約

連絡先690-0823松江市西川津町1060島根大学文学部内　下房桃庵(0852-32-6206)会員６名

弥　生　会

林　　道子

師系・岡本春人・岡本星女　連絡先563-0341大阪府豊能郡能勢町宿野1507林　道子(0727-34-0023)会員５名

悠　の　会

花輪　芳子

連絡先113-0032文京区弥生2-4-12花輪芳子(03-3815-9737)会員４名

夢々連句

靜　壽美子

連絡先166-0003杉並区高円寺南5-15-8靜　壽美子(03-6313-6791)会員４名

ヨーク連句会

土屋　実郎

連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)　会員８名

瑤沙連句会

土屋　実郎

師系・清水瓢左　連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員15名

葉門連句会

福島　時子

師系・宇田零雨・木村葉山　連絡先155-0033世田谷区代田2-9-1福島時子(03-3414-8426)会員11名

よみうり文化センター川口

磯　　直道

師系・宇田零雨　連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯　直道(048-251-3033)

横浜ベイサイド連句会

生田目常義

連絡先234-0055横浜市港南区日野南5-53-15生田目常義(045-891-3362)会員15名

ラピロス連句会

本屋　良子

師系・東　明雅・國島十雨　連絡先248-0008逗子市小坪2-12-6本屋良子TEL&FAX(0467-25-5139)

落柿舎連句会

奥西　　保

連絡先616-8395京都市右京区嵯峨小倉山落柿舎　奥西　保(075-881-1953)会員９名

竜神連句会

武藤美恵子

連絡先473-0908豊田市宝町十三塚94-2森田美耶子(0565-26-4482)会員10名

連句ななの会

土屋　実郎

連絡先223-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)

鈴峰連句会

北川　英昭

連絡先513-0012鈴鹿市石薬師町35-1北川英昭(059-374-1784)会員７名

連句会ひらめき

狩野　康子

連絡先981-0924仙台市青葉区双葉ヶ丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)会員８名

連句会未恋座

金枝　　純

連絡先459-8004名古屋市緑区有松南501-E-102金枝　純(052-624-5149)会員４名

連句会遊子座

和田　忠勝

師系・清水瓢左　連絡先223-0052横浜市港北区綱島東5-22-4和田忠勝(045-531-7174)会員30名

連句会「遊」

中村　記康

連絡先982-0003仙台市太白区郡山6-3-33中村記康(022-248-6071)会員５名

連句倶楽部

城　　依子

師系・宇咲冬男　連絡先300-1636茨城県北相馬郡利根町羽根野800-55城　依子(0297-68-4424)会員10名

連句「笹」

伊藤　敬子

連絡先465-0083名古屋市名東区神丘町2-51-1伊藤敬子(052-701-5050)会員７名

連句研究会

小林　　梁

師系・松根東洋城・野村喜舟　連絡先214-0012川崎市多摩区中野島4-23-14小林　梁(044-922-7868)

連句パワー

浅沼　　璞

師系・眞鍋天魚　連絡先241-0825横浜市旭区中希望ヶ丘97-14浅沼　璞(045-362-2717)

鹿　吟　舎

池　　央耿

連絡先216-0006川崎市宮前区宮前平2-16-2-502池　央耿(044-855-8546)

若泉連句会

川田　章夫

師系・宇咲冬男　連絡先372-0842伊勢崎市馬見塚町1121-4川田章夫(0270-32-8410)会員８名

和光大学

深沢　眞二

連絡先195-0071町田市金井町2160和光大学　深沢眞二(044-989-1431)

若笹連句会

笹川　圭子

連絡先984-0825仙台市若林区古城1-2-1-704笹川圭子(022-294-7498)会員８名

連絡先650-0046神戸市中央区港島中町6-2-1-2-912松本昌子(078-303-0780)会員4名

風狂連句会

二村　文人
連絡先839-8783富山市西中野本町5-14いぬじま正一(076-421-3494)会員17名

風蘭連句会

岡田　陽邨
連絡先514-0058津市安東町1941岡田陽邨(059-228-0962)会員4名

富士裾野連句会

中村　雄爾
連絡先410-1126裾野市桃園154中村雄爾(055-992-0264)会員16名

葡萄連句会

内藤　芳生
連絡先184-0011小金井市東町1-10-16内藤芳生(042-384-8626)会員5名

ふらくたる

藤井　清
連絡先655-0007神戸市垂水区多聞台5-3-34藤井　清(078-781-7766)

フェリシモ連句会

鈴木　漠
連絡先650-0035神戸市中央区浪花町59(株)フェリシモ東めぐみ(078-325-5770f)会員7名

紅の会

神山　愛子
連絡先502-0017岐阜市長良雄総195-2神山愛子　会員5名

ほほほ連

大久保風子
連絡先330-0053さいたま市浦和区前地2-9-21大久保風子(048-881-2756)会員11名

ほれぼれ座

永渕　丹
師系・狩野康子　連絡先981-0952仙台市青葉区中山7-4-14永渕　丹(022-278-7387)会員6名

北杜連句塾

狩野　康子
連絡先981-0924仙台市青葉区双葉が丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)会員15名

勾玉連句会

中村伊都夫
連絡先516-0008伊勢市船江1-2-46-1203中村伊都夫(0596-22-8801)会員5名

松山連句協会

大西　素之
連絡先791-0113松山市白水台4-12-11大西素之(086-923-3993)会員10名

松山連句教室

井上　弥生
師系・宇田零雨　連絡先790-0045松山市余戸中2-13-19井上弥生(089-973-6055)

摩天楼連句会

星野　石雀
師系・野村牛耳　連絡先262-0046千葉市花見川区花見川2-6-105星野石雀(043-286-0725)会員6名

窓連句会

高月三世子
師系・名古則子　連絡先167-0041杉並区善福寺1-21-26高月三世子(03-3390-4567)会員11名

丸亀連句会

今井　水映
連絡先763-8619丸亀市土器町1-18平和写真印刷㈱気付　今井水映(0877-23-1300)会員6名

三重県連句協会

西田　青沙
連絡先512-0921四日市市尾平町3768-188西田青沙(0593-32-8931)

宮城県連句協会

狩野　康子
連絡先981-0924仙台市青葉区双葉ヶ丘2-5-12狩野康子(022-271-0005)

三河連句会

斉藤　吾朗
師系・宮下太郎　連絡先445-0806西尾市伊藤町伊藤前15-1斉藤吾朗(0563-57-8332)会員12名

三豊連句会

植松　晴子
連絡先769-1613香川県三豊郡大野原町花稲907植松晴子(0875-52-2137)

水無月連句会

根本美茄子
連絡先319-1225日立市石名坂町1-31-9根本美茄子(0294-53-6635)会員12名

美晴連句会

土屋　実郎
連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-943-8059・FAX846-1526)会員6名

未来図連句会

鍵和田秞子
連絡先108-0074港区高輪2-1-51-302鍵和田秞子　会員13名

メヌエット若い現代連句の会

川端　秀夫
連絡先152-0035目黒区自由が丘2-15-9-302メヌエットの会事務局(03-3724-4263)会員3名

メロウ連句塾

新井　樽
師系・筌民　伸　連絡先244-0801横浜市戸塚区品濃町564-1-6-1205新井みちを(045-824-3443)会員7名

「もん」の会

川野　蓼艸
連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼艸(042-485-5480)

八千草連句会

山元志津香
師系・宇咲冬男　連絡先215-0006川崎市麻生区金程4-9-8山元志津香(044-955-9886・FAX9882)会員30名

耶馬渓連句会

三宅　繁代
連絡先871-0202中津市本耶馬渓町曽木1978-1(0979-52-2422)会員15名

山利喜会

粒針　修
連絡先364-0014北本市二ツ家2-51粒針　修(048-592-8957)会員8名

やみつくば会

下房　桃庵

市村美就夫
連絡先150-0012渋谷区広尾3-17-4-205中島まさし(03-3407-5368)会員20名

猫　蓑　会
青木　秀樹
師系・東　明雅・根津芦丈　連絡先182-0003調布市若葉町2-21-16青木秀樹(03-3309-0953)会員170名

拈華連句会
近藤　蕉肝
連絡先102-0074千代田区九段南3-3-3横山わこ(03-3261-4425)

俳諧田園（協会主催）
中尾　青宵
連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵

俳諧文芸考究会
中尾　青宵
連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)

白水台連句会
大西　素之
師系・宇田零雨・寺岡情雨　連絡先791-0113松山市白水台4-12-12大西素之(089-923-3993)会員７名

白塔歌仙会
佐藤俊一郎
連絡先350-0275坂戸市伊豆の山町17-30佐藤俊一郎　会員11名

芭蕉記念館連句会
宇咲　冬男
師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先135-0003江東区猿江1-2-2-501松澤晴美(03-3634-4094)会員20名

巴世里連句会
各務　恵紅
師系・東　明雅・國島十雨　連絡先500-8367岐阜市宇佐南1-2-5各務恵紅(058-273-0539)会員20名

八戸俳諧倶楽部
名久井白好
連絡先039-1114八戸市北白山台3-6-8森　きよし(0178-27-0311)

はつこゑ連句会
澁谷　盛興
連絡先339-0926さいたま市緑区東浦和7-8-2-211澁谷盛興(048-875-1909)会員12名

花音連句会
西條　裕子
連絡先776-0031吉野川市鴨島町敷地178-4西條裕子(0883-24-2993)会員20名

花野連句会
小出きよみ
師系・根津芦丈・東　明雅　連絡先390-0821松本市筑摩東2419小出きよみ(0263-25-5436)会員11名

はねだ連句会
内海　良太
師系・名古則子　連絡先216-0001川崎市宮前区野川3138-17山口和義(044-777-2460)会員16名

羽曳野連句会
西田　舟人
連絡先583-0864羽曳野市羽曳が丘3-16-9西田舟人(0729-56-3576)

浜　　風
城倉　吉野
師系・加藤亀女　連絡先241-0831横浜市旭区今宿2666-1城倉吉野(045-391-2362)会員15名

B　　面
内田さち子
師系・名古則子　連絡先176-0023練馬区中村北4-23-4内田さち子(03-3970-2468)会員５名

燧連句会
植松　晴子
師系・鈴木春山洞　連絡先769-1613香川県三豊郡大野原町花稲907植松晴子(0875-52-2137)

菱の実会
巌　　涼江
師系・中尾青宵　連絡先210-0824川崎市川崎区日ノ出1-15-11-202巌　涼江(044-277-5143)

美々っと連句会
成田　淑美
師系・宇咲冬男　連絡先354-0018富士見市西みずほ台3-6-1-402成田淑美(049-252-6318)会員15名

ひよどり連句会
品川　鈴子
師系・橋　閒石　連絡先651-1123神戸市北区ひよどり台1-17-1品川鈴子(078-741-4472)会員74名

ひよどり連句会茜
陶山　泰子
師系・品川鈴子　連絡先769-1601観音寺市豊浜町姫浜1358-1陶山泰子(0875-52-5131)会員15名

ひよどり連句会柿衞
品川　鈴子
連絡先546-0042大阪市東住吉区西今川4-34-5野口喜久子(06-6702-7875)会員12名

ひよどり連句会 KCC
品川　鈴子
連絡先594-1111和泉市公明台3-9-1竹下昭子(0725-56-3603)会員12名

ひよどり連句会産経
品川　鈴子
連絡先569-0074高槻市本町15-5岡本幸枝(0726-75-4307)会員９名

ひよどり連句会鈴の会
木村　美猫
連絡先655-0827宝塚市小浜3-6-23-602木村美猫(0797-86-1872)会員６名

ひよどり連句会東京
靜　壽美子
連絡先166-0003杉並区高円寺南5-15-8靜　壽美子(03-6313-6791)会員８名

ひよどり連句会縹
花房　八映
連絡先702-8006岡山市藤崎77花房八映(086-277-7511)

ひよどり連句会毎日
品川　鈴子
連絡先549-0041和泉市いぶき野3-5-13-801中田寿子(0725-55-5162)会員10名

ひょんの会
松本　昌子

武生連句の会

水上　潤子

連絡先915-0824越前市武生柳町4-38水上潤子(0778-22-5115)会員22名

館林連句会

笠原　壷中

師系・伊藤稜志　連絡先374-0005館林市花山町3315笠原壷中(0276-73-5492)会員10名

多摩連句会

宮下　太郎

連絡先206-0034多摩市鶴牧2-26-1-112宮下太郎(042-374-7002)

遅刻坂連句会

大久保風子

連絡先330-0053さいたま市浦和区前地2-9-21大久保風子(048-881-2756)会員20名

中央連句会（協会主催）

連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)

千代の会

奥村富久女

連絡先606-8433京都市左京区永観堂西町20奥村富久女(075-771-0767)

土筆・有楽帖三吟会

遠藤　嘉章

連絡先214-0039川崎市多摩区栗谷1-14-16遠藤嘉章

筑波・東京連句会

朝倉　和子

師系・今泉宇涯・引地冬樹　連絡先145-0074大田区東嶺町38-10朝倉和子(03-3750-0671)会員12名

筑波・津幡連句会

二羽　智子

師系・今泉宇涯・引地冬樹　連絡先929-0343石川県津幡町南中條ト-154-2二羽智子(076-289-3656)会員８名

つばさ連句会

八尾暁吉女

師系・磯　直道・矢崎硯水　連絡先678-0232赤穂市中広841八尾暁吉女(0791-43-6117)

津幡連句クラブ

藤江　紫虹

師系・今泉宇涯　連絡先929-0327石川県河北郡津幡町字庄チ65宮嶋　茂(076-289-4214)会員26名

天神連句会

八木　紫暁

連絡先816-0931大野城市筒井3-13-12八木紫暁(092-593-2575)

東京義仲寺連句会馬山人記念会

師系・野村牛耳・高藤馬山人
連絡先182-0035調布市上石原2-27-9川野蓼艸(0424-85-5480)会員10名

桃　雅　会

杉山　壽子

師系・東　明雅・武田和子　連絡先464-0032名古屋市千種区猫洞通1-5-1-409杉山壽子(052-782-3751)会員15名

道後連句会

井上　雨道

師系・宇田零雨・松永静雨　連絡先799-3111伊予市下吾川1783-41鎌田清隆(089-983-5468)会員８名

刀水の宴連句会

田島　正夫

連絡先108-0074港区高輪1-1-11-1103田島正夫(03-3473-3160)

稲門連句会俳諧西北の風

伊藤　哲子

連絡先136-0072江東区大島3-26-1-911伊藤哲子(03-3637-8990)会員40名

桃夭樹唫聚

赤田玖實子

師系・根津芦丈・清水瓢左　連絡先228-0818相模原市上鶴間本町8-3-6赤田玖實子

徳島県連句協会

東條　士郎

連絡先770-8051徳島市沖浜町東畑589-1東條士郎(088-622-3745)会員30名

都心連句会

和田　忠勝

師系・清水瓢左・大林柚平・土屋実郎　連絡先223-0052横浜市港北区綱島東5-22-4和田忠勝(045-531-7174)会員30名

栃木県連句協会

中尾　硫菁

連絡先329-4406栃木県下都賀郡大平町下皆川721富田昌宏(0282-43-2664)

富山県連句協会

山本　秀夫

連絡先930-0114富山市茶屋町59-61野島清治(076-436-0677)会員40名

とよあけ連句会

荒川　道子

連絡先470-1114豊明市新田町広長13-8荒川道子(0562-92-4418)会員18名

なぎさ連句会

松井　青堂

連絡先134-0085江戸川区南葛西7-1-6-20松井青堂(03-3680-0053)

なでしこ連句会

村橋　公子

連絡先874-0902別府市青山町8-13村橋公子(0977-23-6526)

長尾連句会

砂井斗志男

師系・渡邉陽行　連絡先769-2302香川県大川郡長尾町西683-10砂井斗志男(0879-52-4391)会員10名

渚　の　会

西岡　恭平

師系・長谷川ひさを　連絡先760-0011高松市浜ノ町60-25-705西岡恭平(087-851-9006)会員９名

南草連句会

田島　竹四

連絡先517-0506志摩市阿児町国府1120-69田島竹四(0599-43-1846)会員９名

にほんご連句会

岡本　康子

連絡先182-0006調布市西つつじが丘2-5-2岡本康子(03-3326-0496)会員10名

日本作家クラブ連句会

湘南吟社

小林　静司

師系・根津芦丈・清水瓢左　連絡先141-0031品川区西五反田6-23-8小林静司(03-3492-2983)会員10名

正　　風

藤野　鶴山

師系・寺崎方堂　連絡先520-0822大津市秋葉台35－9正風発行所　藤野鶴山(0775-25-9159)会員100名

正風大府支部

久野　渓流

師系・寺崎方堂　連絡先470-1143豊明市阿野町上納91-6鈴置一花(0562-92-4521)会員25名

正風和気支部

桐山　北天

師系・寺崎方堂　連絡先709-0441岡山県和気郡和気町衣笠171桐山北天(0869-92-0807)会員10名

上毛連句会

伊藤　稜志

師系・宮下太郎　連絡先371-0811前橋市朝倉町3-5-37伊藤稜志(027-261-2297)会員15名

白河連句会

荒井美三雄

連絡先330-0841さいたま市大宮区東町2-203-1-502荒井美三雄(048-644-6446)会員5名

しらさぎ連句会

武田　　健

師系・寺岡情雨　連絡先799-1302西条市楠1506武田　健(0898-66-2212)会員3名

白魚連句会

岡本　耕史

連絡先511-1112桑名市長島町大倉1-450岡本耕史(0594-42-1469)会員3名

泗楽連句会

西田　青沙

連絡先512-0921四日市市尾平町3768-188西田青沙(0593-32-8931)会員9名

城

瀬尾喜代子

師系・名古則子　連絡先514-2317津市安濃町前野24瀬尾喜代子(059-268-0267)会員5名

尋牛会

連絡先460-8445名古屋市中区栄4-16-36㈱電通中部支社内(052-263-8324)会員8名

信州大学連句会

宮坂　静生

師系・根津芦丈・東　明雅　連絡先399-0025松本市寿台4-5-3宮坂静生(0263-57-2461)会員40名

新庄・氷室の会

永沢　安栄

師系・笹　白州　連絡先996-0082新庄市北町5-19永沢安栄会員6名

新庄北陽社

井上　玲虹

師系・春秋庵幹雄　連絡先999-4605山形県最上郡舟形町長沢300-1井上玲虹(0233-33-2631)

深大寺連句会

吉成　正夫

連絡先179-0085練馬区早宮3-34-22吉成正夫(03-3994-8055)会員20名

篠

岡田　史乃

連絡先107-0052港区赤坂6-9-4-301岡田史乃(03-3582-0081)

裾野連句会

宮原うた子

連絡先410-1127裾野市平松611-1宮原うた子(055-992-2932)会員8名

成城連句会

臼杵　游児

連絡先227-0047横浜市青葉区みたけ台2-22臼杵游児(045-971-3293)会員6名

青　　波

黒田　耕三

連絡先790-0056松山市土居田町622-10二宮一知(080-5665-5709)会員9名

清流連句会

戒能　多喜

師系・宇田零雨・松永静雨　連絡先791-0312東温市則之内乙2590-3戒能多喜(0899-66-3096)会員7名

浅春連句会

谷敷　　寛

連絡先112-0003文京区春日2-25-2谷敷　寛(03-3811-8519)会員9名

せんだい座

伊藤　直子

連絡先981-8003仙台市泉区南光台3-3-9伊藤直子(022-233-7732)会員9名

宗祇法師研究会

林　　茂樹

師系・金子金治郎　連絡先521-1200滋賀県神崎郡能登川町泉台215-24林　茂樹(0748-42-2037)会員8名

草門会

川野　蓼艸

師系・野村牛耳　連絡先112-0006文京区小日向1-1-8-505村松定史(03-3943-6494)会員10名

啐啄会

柏原　和宏

師系・石沢無腸・森　三郎　連絡先369-1203埼玉県大里郡寄居町寄居958-2柏原和宏(048-581-0087)会員11名

染井の会

蒲　　幾美

師系・中村俊定　連絡先215-0013川崎市麻生区王禅寺767-36蒲　幾美(044-955-8726)

大智院連句会

岡本　耕史

師系・名古則子　連絡先511-1112三重県桑名郡長島町大倉1-450岡本耕史(0594-42-1469)会員6名

第六天連句会

浅野　黍穂

師系・土甲平谷・清水瓢左　連絡先272-0836市川市北国分1-2-19星野恵則(047-372-6448)会員30名

高田馬場連句会

佐伯　俊介

連絡先273-0005船橋市本町6-16-9佐伯俊介(0474-22-5782)

0010高知県高岡郡窪川町窪川1145-5山崎　曙(08802-2-2097)会員15名

神戸の風・海岸通連句会

内田　美子
連絡先650-0024神戸市中央区海岸通6-2-14-2305内田美子(078-958-8278)会員７名

小瀬川連句会

永野　　薫
連絡先739-0646大竹市栗谷町大栗 林739永 野　薫(08275-6-0344)

ころも連句会

矢崎　　藍
師系・東　明雅　連絡先448-0803刈谷市野田町東屋敷112稲垣渥子(0566-21-6316)会員22名

柴　　庵

中尾　青宵
連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)

栄連句サロン

間瀬　芙美
連絡先471-0066豊田市栄町6-6-10間瀬芙美　会員15名

佐久良連句会

井門可奈女
師系・栗田楞堂・富田狸通　連絡先790-0853松山市道後上市2-6-9-101井門可奈女(089-904-4040)会員２名

さくら連句会

中世古正郎
連絡先519-0601伊勢市二見町松下2085中世古正郎(0596-43-3177)会員４名

さくら草連句会

小林しげと
連絡先334-0001川口市桜町4-4-4-301小林しげと(048-281-8161)

サ　ザ　ン

岡村　糸子
連絡先251-0031藤沢市鵠沼藤が谷3-6-18岡村糸子(0466-26-8468)会員10名

さつき会

中森　順和
連絡先874-0902別府市青山町8-72南雲玉江(0977-26-9407)

里　の　会

菅谷　有里
師系・清水瓢左　連絡先248-0017鎌倉市佐助1-14-9菅谷有里

清　の　會

下鉢　清子
連絡先277-0052柏市増尾台2-13-5下鉢清子(04-7172-7549)会員30名

清の會なでしこ

松島アンズ
連絡先271-0064松戸市上本郷2810-3松島アンズ(047-362-0081)

三川連句会

磯部　摂子
連絡先501-6242羽島市竹鼻町錦町35磯部摂子(058-391-2288)会員23名

鹿　の　会

宮下　太郎
師系・松根東洋城・野村喜舟
連絡先206-0034多摩市鶴牧2-26-1-112宮下太郎(042-374-7002)

慈　眼　舎

赤田玖實子
師系・清水瓢左・三好龍肝　連絡先228-0818相模原市上鶴間本町8-3-6赤田玖實子(0427-45-0407)会員７名

獅　子　門

大野　鵠士
師系・各務支考　連絡先503-2216大垣市昼飯町377-101堀内洋子(0584-71-0654)会員100名

獅子門又玄社

成瀬　貞子
師系・國島十雨　連絡先501-1159岐阜市西改田松の木157成瀬貞子TEL&FAX(058-239-1762)会員10名

獅子門源氏連句会

船渡　文子
師系・國島十雨　連絡先502-0817岐阜市長良福光2521-12船渡文子(058-231-1716)会員８名

獅子門花わさび

森川　淳子
師系・國島十雨　連絡先509-7205恵那市長島町中野829-3森川淳子(0573-25-4864)会員11名

獅子門蓼杖社

瀬尾　千草
師系・國島十雨　連絡先502-0857岐阜市正木1979-25瀬尾千草(058-231-2400)会員23名

獅子門麗水社

名和よちゑ
師系・國島十雨　連絡先503-0962大垣市入方2-101-3名和よちゑ(0584-89-6435)会員19名

獅子門友楽社

矢崎　初美
師系・國島十雨　連絡先503-2213大垣市赤坂町2072-2矢崎初美(0584-71-0298)会員８名

静岡県連句協会

宮沢　次男
連絡先410-0822沼津市下香貫280-1久保田静男(055-931-7219)会員25名

下町連句会

伊藤　哲子
連絡先136-0072江東区大島3-26-1-911伊藤哲子(03-3637-8990)会員10名

紫薇の会

澁谷　　道
師系・橋　閒石　連絡先558-0002大阪市住吉区長居西1-9-2渋谷　道(06-6691-1395)会員８名

四　宮　会

式田　恭子
師系・東　明雅・式田和子　連絡先167-0034杉並区桃井2-14-5武田恭子(03-3390-4446)会員10名

朱　の　会

柴田　由乃
連絡先503-0937大垣市釜笛1-177-2柴田由乃(058-273-4499)会員９名

樹氷連句会

いぬじま正一
連絡先939-8083富山市西中野本町5-14いぬじま正一(0764-21-3494)会員６名

兜　の　会

山下七志郎
連絡先923-0938小松市芦田町2-2松下京子(0761-21-3464)会員18名

からむし庵連句会

根津　芙紗
師系・根津芦丈・東　明雅　連絡先396-0000伊那市山寺区山本町3185根津芙紗(0265-78-4723)会員18名

歌林連句会

坂手　手留
連絡先185-0011国分寺市本多1-11-13小向敏江(042-321-0825)会員20名

カルテット

永田　吉文
連絡先194-0013町田市原町田2-11-20永田吉文(042-722-3809)会員４名

歌留蓑連句会

金子　鳴陣
連絡先220-0061横浜市西区久保町46-26-203金子鳴陣　会員18名

神田川連句会

岡部桂一郎
連絡先134-0085江戸川区南葛西7-1-6-201松井青堂(03-3680-0053)

観音寺連句会

野口　雅澄
連絡先768-0040観音寺市柞田町油井　野口雅澄(0875-25-0979)会員８名

願成寺歌仙の会

田中　雅子
連絡先969-6411福島県大沼郡会津美里町立石田上台甲457田中雅子(0242-78-3212)会員７名

神田分教場連句会

川名　将義
連絡先232-0076横浜市南区永田台48-16川名将義(045-713-1388)

きさらぎ連句会

小池　正博
連絡先594-0041和泉市いぶき野2-20-8小池正博(0725-56-2895)会員10名

其　角　座

土屋　実郎
連絡先233-0012横浜市港南区上永谷3-20-34土屋実郎(045-843-8059)会員13名

義仲寺横浜戸塚連句会

八木　荘一
連絡先245-0067横浜市戸塚区深谷町671八木荘一(045-851-1655)会員17名

義仲寺連句協会

師系・斉藤石叟　連絡先520-0802大津市馬場1-5-12義仲寺(0775-23-2811)会員15名

岐阜県連句協会

大野　鵠士
師系・各務支考　連絡先500-8415岐阜市加納中広江町68松尾一歩(058-274-9479)

錦　心　会

渡部　伸居
師系・野村喜舟　連絡先791-0241松山市小野町15渡部伸居(0899-75-1532)会員10名

句華苑吟社

吉本　世紀
連絡先328-0036栃木市室町1-13吉本画廊内吉本世紀(0282-23-3665)

くさくき

磯　　直道
師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯　直道(048-251-3033)会員240名

くさくき川口支部

磯　　直道
師系・宇田零雨　連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯　直道(048-251-3033)会員25名

くさくき北九州支部

守口　　薫
師系・宇田零雨　連絡先871-0811福岡県築上郡吉富町大字広津915守口　薫(0979-23-3145)会員25名

くさくき松山支部

吉金　白水
師系・宇田零雨　連絡先791-0101松山市溝辺町720-1吉金白水(089-977-1722)会員10名

くさくき堺支部

中沢　昌重
師系・磯　直道　連絡先590-0113堺市南区晴美台2-1-9中沢昌重(072-292-2383)会員12名

草笛連句会

名本　敦子
師系・大西素之　連絡先791-1114松山市井門町40-1立花千代満(089-957-8538)会員８名

郡上みよし野連句会

天野　收一
連絡先501-4216岐阜県郡上郡八幡町本町　天野收一(0575-65-1591)

くすのき連句会

牧野　正弘
連絡先158-0098世田谷区上用賀6-3-8-103牧野正弘(03-3426-4698)会員８名

くのいち連句会

内山　秀子
師系・暉峻桐雨　連絡先101-0047千代田区内神田2-12-5内山回漕店方　内山秀子(03-3252-2941)会員８名

熊谷梶の葉連句会

山司　英子
師系・宇咲冬男　連絡先364-0035北本市西高尾7-83川岸冨貴(048-591-5208)会員20名

兼載忌記念連句会

田中　雅子
連絡先969-6411福島県大沼郡会津美里町立石田上台甲457田中雅子(0242-78-3212)会員15名

耕

加藤　耕子
連絡先467-0067名古屋市瑞穂区石田町1-36加藤耕子(052-841-5054)

興聖寺連句会

岡本　　眸
師系・宇田零雨・松永静雨　連絡先790-0856松山市南町1-5-21-604川嶋七重(089-945-1308)

高知癒しの連句桜蓼会

山崎　　曙
師系・寺田寅彦　連絡先780-

五十鈴吟社

山口　圭子

師系・清水瓢左・名古則子　連絡先519-0502伊勢市小俣町相合605山口圭子(0596-22-2877)会員3名

いさよひの会

鈴木美智子

連絡先177-0032練馬区谷原5-20-14鈴木美智子(03-3925-5930)会員4名

石手寺連句会

岡本　眸

師系・宇田零雨・松永静雨　連絡先790-0053松山市竹原3-5-26紀伊郁子(089-973-2663)会員8名

伊豆芭蕉堂連句会

石渡　蒼水

師系・斉藤石叟　連絡先414-0014伊東市弥生町3-2石渡蒼水(0557-37-1831)会員10名

市川俳諧教室

伊藤　貴子

師系・宇田零雨・今泉宇涯　連絡先264-0006千葉市若葉区小倉台1-12-3伊藤貴子(043-233-3555)

いなみ連句の会

山本　秀夫

師系・東　明雅・二村文人　連絡先932-0211南砺市井波2077-1山本秀夫TEL&FAX(0763-82-0270)会員31名

茨城県連句協会

堀江　信男

連絡先319-1225日立市石名坂町1-31-9根本美茄子(0294-53-6635)

いわき文音連句の会

林　義雄

連絡先185-0014国分寺市東恋ヶ窪2-29-3林　義雄(042-324-1831)会員4名

岩手県連句協会

小原　啄葉

連絡先020-0875盛岡市清水町1-33沼田和子(019-622-7907)

Web BBS めぎつね座

雨乞小町

連絡先471-0822豊田市水源町4-1-16矢崎　藍(0565-26-9324)会員不特定数

ＮＨＫ文化センター青山

和田　忠勝

連絡先223-0052横浜市港北区綱島東5-22-4和田忠勝(045-531-7174)会員12名

大分県連句協会

中森　順和

連絡先847-0902別府市青山町8-72事務局南雲玉江

大住連句会

竹村　左京

連絡先257-0024秦野市名古木111-16竹村左京(0463-83-2208)会員15名

桜花学園大学連句研究会

矢崎　藍

連絡先471-0822豊田市水源町4-1-16矢崎　藍(0565-26-9324)

桶川連句会

福田太ろを

連絡先363-0028桶川市下日出谷西2-6-4福田太ろを(048-787-4477)会員10名

丘の上連句会

中尾　青宵

連絡先206-0031多摩市豊ヶ丘1-40-2-203塙　於玉(042-375-2543)会員15名

小郡連句会

河野　玄磨

師系・松根東洋城・阿片瓢郎　連絡先754-0000山口県吉敷郡小郡町津市上　河野玄磨(08397-2-0599)会員5名

おたくさ(OTAKSA)の会

鈴木　漠

連絡先650-0045神戸市中央区港島中町3-1-47-202鈴木　漠(078-302-2230)会員8名

小野連句会

渡部　伸居

師系・松根東洋城・阿片瓢郎　連絡先791-0243松山市平井町1319-1渡辺就子(089-975-8569)

海市の会

鈴木　漠

連絡先650-0046神戸市中央区港島中町3-1-47-202鈴木　漠(078-302-2230)会員4名

解　纜

別所真紀子

師系・野村牛耳・林　空花　連絡先166-0003杉並区高円寺南5-23-8服部秋扇(03-3314-0655)

蛙の会

中尾　青宵

連絡先227-0043横浜市青葉区藤が丘2-25-2中尾青宵(045-973-1760)

香川連句会

鎌田　孝義

連絡先763-0013丸亀市城東町1-3-26鎌田孝義　会員20名

雅秀会

小川　邦昭

連絡先999-5201山形県最上郡鮭川村京塚3430小川邦昭(0233-55-2401)

風の香連句会

三浦　和枝

師系・澁谷　道　連絡先996-0082新庄市北町4-6三浦和枝(0233-22-2280)　会員6名

河童連句会

矢崎　硯水

師系・宇田零雨　連絡先392-0004諏訪市諏訪2-10-22矢崎硯水(0266-52-0251)会員15名

花扇会

宮　県人

連絡先344-0116埼玉県北葛飾郡庄和町大衾600-4二宮方　宮県人(0487-46-1443)会員5名

桂の会

臼杵　游児

連絡先227-0047横浜市青葉区みたけ台2-22臼杵游児(045-971-3293)会員16名

金石公民館俳諧研究会

松本　苔花

連絡先920-0337金沢市金石西4-5-32松本苔花(0762-67-1045)

かびれ連句会

大竹多可志

師系・大竹孤悠　連絡先116-0011荒川区西尾久8-30-1-1416大竹多可志(03-3819-1459)

全国連句グループ概況

①グループ名　②代表者氏名　③師系
④連絡先（住所・電話番号）⑤会員数

（五十音順）

亜　の　会

姫野　恭子

連絡先834-0004八女市納楚字寺田316姫野恭子(0943-23-3296)会員15名

あ あ の 会

市川　千年

師系・野村牛耳　連絡先180-0003武蔵野市吉祥寺南町4-21-25市川千年(0422-79-3048)

会津の会（超結社）

磯　　直道

連絡先332-0023川口市飯塚4-4-7磯　直道(048-251-3033)

青葉連句会

八島美枝子

師系・宇田零雨　連絡先145-0061大田区石川町2-32-8八島美枝子(03-3728-0712)会員９名

赤のままの会

本屋　良子

連絡先166-0003杉並区高円寺南5-23-8服部まさ子(秋扇)(03-3314-0655)

茜（あこね）連句会

竹内　茂翁

連絡先516-0036伊勢市勢多町915-31富田方　竹内茂翁(0596-24-7673)会員３名

紫　　陽

藤田　　明

連絡先514-0114津市一身田町285藤田　明(0592-32-6438)会員６名

あした連句会

宇咲　冬男

師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先164-0012中野区本町2-34-4次山和子(03-3374-4808)会員50名

あした日比谷連句会

宇咲　冬男

師系・藤井紫影・宇田零雨　連絡先225-0024横浜市青葉区市ヶ尾1154-2-808宮脇美智子(045-971-7313)会員15名

あしべ俳諧塾

東條　士郎

師系・吉岡梅游・片山多迦夫　連絡先633-0077桜井市大西834森　智子(0744-42-5248)会員11名

梓川連句会

金井　教子

師系・根津芦丈・宮坂静生　連絡先390-1700長野県南安曇郡梓川村杏　金井教子(026378-3808)会員25名

天の川連句会東京支部

大谷似智子

師系・三好龍肝・福田眞久　連絡先242-0001大和市下鶴間4266大谷似智子(046-274-3420)会員13名

天の川連句会新宿西塾

岸田　恵子

師系・三好龍肝・福田眞久　連絡先330-0015さいたま市見沼区蓮沼873-17岸田恵子(048-686-6549)会員10名

彩 連 句 会

鈴木美由紀

師系・磯　直道　連絡先330-0052さいたま市浦和区本太5-17-10鈴木美由紀(048-813-7477)会員７名

鮎可部連句会

久保　俊子

連絡先731-0202広島市安佐北区大林町315久保俊子(082-818-2719)

鮎倉橋島連句会

奥田恵以子

連絡先737-1314広島県安芸郡倉橋町鹿老渡　奥田恵以子(0823-54-1296)

鮎須川連句会

藤本　幸子

連絡先737-2100広島県安芸郡倉橋町須川　藤本幸子(0823-53-1255)

鮎連句同好会

高橋　昭三

連絡先731-0223広島市安佐北区可部南4-5-47高橋昭三(082-815-1914)会員35名

あらくさ連句会

連絡先294-0006逗子市逗子2-4-5北沢義弘(0468-71-5393)会員限定

あるふあ会

高津明生子

連絡先241-0833横浜市旭区南本宿町72-14高津明生子

阿 吽 の 会

梅村　光明

連絡先770-0868徳島市福島1-10-16梅村光明(088-652-1989)会員６名

安津濃連句会

湯浅　重好

連絡先514-0823津市半田934-47湯浅重好(059-225-3094)会員３名

飯田連句会

吉池　保男

師系・東　明雅　連絡先395-0806飯田市鼎上山3181-1吉池保男(0265-23-1484)会員10名

伊賀連句会

山村　俊夫

師系・清水瓢左・名古則子　連絡先518-0878伊賀市上野西大手町3687-9山村俊夫(0595-21-5068)会員12名

伊勢原連句会

近藤　蕉肝

連絡先259-1141伊勢原市上粕屋1766大津博山(0463-94-3402)会員13名

全国連句グループ概況

年鑑担当

○編　集

〒330―0053 さいたま市浦和区前地二―九―二二
（電話・ＦＡＸ　〇四八―八八一―一七五六）
大久保風子

○購入申込・発送

〒157―0071 世田谷区千歳台四―二六―二―一〇五
（電話　〇三―三四八二―〇二三五）
小川　廣男

○会計・送金先

〒363―0028 桶川市下日出谷西二―六―四
（電話・ＦＡＸ　〇四八―七八七―四四七七）
郵便振替　〇〇一三〇―二―四六二〇七九
加入者名　福田　太郎
福田太ろを

○連句協会会員名簿担当

〒223―0052 横浜市港北区綱島東五―二三―四
（電話・ＦＡＸ　〇四五―五三一―七一七四）
和田　忠勝

■編集後記■

＊今年から六月発行を目指し、御原稿締切を二月に致しましたが、「現代連句集Ⅲ」との同時発行を避け、従来通り九月発行となりました。お知らせ通りの進行に至りませんでしたことをお詫び申し上げます。

＊評論とエッセイは期せずして「江戸時代」のことがテーマになっておりました。登場人物が身近に感じられる印象深い読物を書き下ろして頂きました。

＊作品は一七五巻の投稿でした。形式は歌仙が一三一巻で75％を占めています。二ページ構成の世吉等は見開きになるよう工夫しました。（大久保風子）

＊現代連句の評価の仕方はいろいろあると思いますが、今度の新企画「私の好きな一巻」賞は上手、下手ではなく文字どおり好きな一巻を投票するものです。連句年鑑には毎年多くの作品が掲載されますが、多くの読者は一回読んだら汚さないように本棚に飾って置くのではないでしょうか。また別の読者は関心のあるところだけ読んでおしまいにするかもしれません。いろいろな読み方があって当然でしょう。連句作品の評価は上手、下手を決めるだけでないはずで、いい点を取ったから良い作品だと決めてしまっては物足りなくはありませんか。欠点が少なくてまあまあだが、自分にとっては面白くはなかったという鑑賞法もあってはいいはずですし、全体は未熟かもしれないが面白い付け合いがあってなかなか良かった、気にいったということもあると思います。

好きな一巻に投票して下さることで、会員同士の話がはずめば連句界は一層活気が出ると思います。作品の良い悪いではなく面白いところで選んで下さい。連句はたくさんの作品を読むことで観賞力が高まりますし、創造力も表現力も培われます。この度の「私の好きな一巻」募集がきっかけとなって賑やかな会話が広がることを期待しております。（今村　苗）

＊ここ熊谷の暑い七月、例年通り『連句年鑑』の分厚い初校ゲラが届きました。どのグループの作品も独自の雰囲気があって、活字にされると一段と立派になっているようです。私は素読みで校正を担当しているのですが、初めてお目にかかるといった文字や、どこか違っているぞと思える字体に出会します。辞書を繰り、納得。何かの折に使ってみようかとノートに書き取っているのですが書いたことさえ忘れている自分にあきれ果てております。（白根順子）

平成二十四年九月一日　印刷
平成二十四年九月十五日　発行

平成二十四年版　連句年鑑

定価　二、五〇〇円

編集人代表　大久保　風　子

発行所　〒223－0052 横浜市港北区綱島東五－二二－四
和田方
連　句　協　会
電　話〇四五－五三一－七一七四

印刷所　〒114－0003 東京都北区豊島四ノ二ノ四
株式会社　朝陽会
電　話〇三－三九一三－五五二八
FAX〇三－三九一三－五五三〇